

ジェノサイド・ストラトス

夢現図書館

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは変革と絶望が伴い生まれた数ある未^{アナザーストーリー}来の一つ。

世界が反転する。世界が破壊される。人心が破壊される。明確な自我を確立させ人類へと牙を剥いたISが引き起こした世界情勢をひっくり返す大事件。

『インフィニット・レボリューション』

その事件が起きたその日を境にして『運命』の歯車は狂い違う方向へと廻り始める。ISは今や恐怖の対象、人類は対抗する為と贖罪の贄として『AIS』の制度を構築して抵抗を続ける事になる。

「いつか、自分らしく生きられる日まで……戦うしか無い」

「生きる為には、戦う以外に道は無い」

目次

牢獄篇

絶望 | 1

無限革命 | 7

束の間の休息 | 13

薄氷の平和 | 18

未確認個体群 | 23

未知との遭遇 | 28

当事者と静観者 | 33

失樂園 | 38

The road to hell is paved with

good intentions | 43

現実の悪夢 | 48

過去と未来、戦争と平和 | 54

常識の為の葬礼 | 59

Bloodstained Festa | 63

傍観と玉座 | 69

起死回生 | 73

皓炎煉冠ノ玉座 | 79

皓き虐殺者 (ジエノサイド) | 84

断章 (キャラ設定) | 89

始動篇

本当に弱いのは? | 94

それは流星の様な | 100

醜いカラス | 105

自由への衝動

110

罪禍の証

115

波乱の幕開け

119

死体蹴り

125

2人の道

131

状況整理

137

現実と理想

143

黎血なる誓い

150

廃墟の傷痕

156

壊れた導

162

反撃の狼煙

167

一矢

172

研究の真髄

177

生存競争

182

断裂関係

186

約束された絶望の刻

190

胎動篇

狂った法律

194

過去の哭聲

200

A I Sは正しい用法での御使用を

205

エンジントラブル

211

墟街航行

217

冷裏一体

221

停滞は否定する

226

生かす為の優しさ

230

人権亡き者達

236

はぐれ者の巣穴

242

それはとても残酷なI S (モノ)

247

逃げる先には

252

それは初めて知る感情

259

かつて女性は強かった

264

流離の放浪商人

270

未知の味覚

274

帰投前進

279

嚥呑篇

一難去つて

284

良識は骸へと成り果てて

289

溝は越えられぬ

294

裏の無い善意は無い

299

我々の正義

305

八刃の花束

310

入場手続

314

牢獄篇 絶望

理不尽と言う言葉を知っているか？不条理で理由も無い横暴の事だ。

「……」

少女が見渡す光景も又、『理不尽』と言っても過言では無い光景が広がっている。赫き空が広がっている……各地に立ち昇るは鈍い色が燻らせる黒煙だ。その地一帯を覆うは腐臭、汚臭がその地一帯に充満して居る。大半の家屋は倒れて灼けており火炎や焼き付く風が吹き荒れ火の粉が宙を舞う。倒壊した建物の瓦礫と共に夥しいまでの人間の死骸や機械の残骸がまるで玩具箱をひっくり返したかのように散乱している。

——飽きた。

その少女は灰燼に包まれ逝く都市群の光景を目の当たりにしてその言葉が穴だらけの心の中に浮かんでは弾けた。漆黒の長い髪を後方に伸ばした一人の少女がグチャグチャと化した死屍累々の上で歪んだ口を以って儂く嗤っている。全身を覆い隠す黒いボディスーツの上に外套を羽織り手首と二の腕には金属製の器具が取り付けられている。

「何時迄も続く闘争。終わりが見えない……でも、生きるには戦うしかない」

黒い鋸状の大剣を携えた少女はこの地上の何処からでも見えるであろう遙か、遠くに雲海を纏い天高く聳え浮く巨大な存在を見上げてそう呟く。

その巨大な存在は少女の行動を嘲笑うかの様に見下ろしている様

に見えた。

○

『女尊男卑』

こんな時代になった理由を一言で表現するのであればその言葉が一番しつくり来るだろう。『インフィニット・ストラトス』、通称『IS』。その存在の登場により世界が変貌したと言うのは言い過ぎかも知れないが少なくとも社会環境は激変したと言つて良い。そしてその言葉こそ『理不尽』であると称して良い事だろう。

ISは女性にしか使えない。故に男よりも女の方が優れている。その様な認識が生まれ感染爆発の様に広まり今ではISとは無関係な人間さえもが傲るようになった。生まれた子供が男子だったら出生届を放棄したり結婚しても金だけ奪り取つて離婚が相次いだり、企業であれば理不尽なりストラにさえ遭う。共学の学校でさえ不都合な事が起これば男子生徒や児童をでっち上げの理由で放学処分が行する事となる。そしてその者達に狙いを定めた悪徳な商売も又、横行する事となった。

そうした女尊男卑による影響は日に日に深刻てなつて行く。女性が傲る結果、IS業界を始めとして凡ゆる環境で軋轢が生じ始めていた。農業では作物に対する不当な高騰なる値上げや地上げに伴いどれだけ作ろうとも赤字続きになり潰れてしまう農家が相次いだ。元々、日本は食糧自給率が低い上に大半の食糧を輸入に頼らざるを得ない状況が続いている……この行為は正しく悪手と言つて差し支えなかった。物作りの産業も似た様な光景が広がっていた、基本的に職人は男性が携わる事が多かった……しかし男だからと言う理由で分りもしない女性の傲りが侵食して次々と破壊された。抵抗すればISと言う名の権力で踏みにじられて行つた。企業や教育機関では

前述した通り……その影響は決して無視出来ないモノへと変じて行く。

『IS』が齎したのは女性達が謳う、女性権威は早くも腐敗へと招く事となつて行く。女尊男卑を振り翳す者達は後に主義者、そしてその集まりを女性権利団体と名乗る様になつていた。数々の横暴を伴つて都合の良い環境を整えようと様々な行動を以つて画策し実行に移して来た。教育、産業、貿易、金融、国家基盤たるありと凡ゆる要素が女性にとつて優位に働く様に動かして来た。しかも政府主導で、である……もはや、政府自体も女尊男卑に汚染されていたと言つて良かった、それは男性にとつて絶望以外何物でも無かつた事だろう。

ISは女性にしか使えないと言う欠点があつた。政府はその欠点を見て見ぬ振りをしてその様な政策を続けて来た結果……遂に国家社会は破綻を迎える寸前にまで進展してしまふ事になる。農家、物作りの生産業の破綻、企業の人件費高騰及び人員不足、教育機関の定員割れ及び虐待の増加、更には育児放棄、貧困層のスラム化と言つた数多くの社会問題を急速な勢いで頻発させるに至る。イカれた科学者が産み出した『IS』は女尊男卑と社会問題を齎した……そして、技術の発展よりも内側から侵食するかのよう to 蠢く腐敗化及び弱体化を招いた為に遂に各国政府は決断したのであつた。そして、女尊男卑は国家を崩壊させる業魔であると今更ながら思い知つたのである。

『飴』を捨てて『鞭』を振るうと言う事を。

満十歳を迎えた女子に対してIS適性を調査義務を化した。判明した適性に基きIS関係に従事する事を強制される。『IS』は知つての通り、非常に高い戦闘性能を誇り既存の兵器の機動性、破壊能力を過去の遺物へと追いやった。故に圧倒的な武力を自己の判断で行使されるのは極めて危険と判断され、IS適性を有する者、即ちIS操縦者は『首輪』を付けられる事になった。物理的拘束、更に生体ナノマシンを脳核に打ち込み逃亡を許さない様にした。早い話が生殺与奪の権利を剥奪すると言う事である。

反対意見も勿論、殺到した。やり過ぎである政策、当然……反対意見は伴うのは目に見えて分かっていた。だが政府はその意見に対する『回答』を既に用意していたのだ。

『ご意見、誠に有難う御座います。ですが、このような政策を進めて行く理由をご説明致します。しかし、ISを用いた操縦者による犯罪の凶悪性と凶暴性が日々、新聞やニュースにて踊って居る事でしょう。』

つい先日、国会議事堂へ一部のIS操縦者がISを用いた武力を以って強襲を掛けて来ました。文民たる私共では対応するには限界があります。如何に危険なモノを扱っているか自覚無き者達がいる……そして女尊男卑による国家基盤の脆弱化及び人心の荒廃化が懸念されています。

我々、日本政府はISを正しく兵器と認知しております。銃刀法に基き本来ならばISは正当な手続きを以って管理されるべきモノを一部の女性達は我がモノ顔で所持して行使している。その結果、圧倒的な武力を有する個人で持てる兵器を理性を律する事なく行使する危険性を再認識し苦渋と断腸の思いを以ってこのような政策を施行する方針の運びとなりました。

正しくテロリストと大差ない行動の数々、罰する事が無ければ助長する脆弱なる理性、今迄はIS操縦者及び『主義者』の者達はあの手この手でその罰を逃れて来ました。コレでは被害に遭われた方々が報われない。その枷の必要性をご理解頂く事を願っています。

女尊男卑や女性権利団体、そしてIS関連に対して何の罪も無い無辜なる人々が常にその脅威に晒されている……コレを嘆かずは何と言いまししょう。今更ながら此処にIS関連で死する犠牲になつた方々には謝罪をさせて頂きます。私を恨んで下さって構いません、この会見が終わった後に辞任致します』

日本政府の公式会見で告げられた反対意見を一蹴する内容。実際に何度も武力を用いて強襲を仕掛けようとした『女性権利団体』に属するIS操縦者達が居た。それを迎え撃つたのが日本の代表及び政府側の有するIS操縦者であった。紛れもない国会議事堂前での市街戦となりそんな危険物を用いての戦いが身近に存在すると言う事

を一般市民も改めて認識。今迄はTVの中の世界と想っていた光景と直に感じる者達の価値観は異なる。

公式会見と非公式鎮圧騒動、そして過去にIS関連で被害を被った者達の支持を受けて提出された『IS法』は可決された。当初は日本でのみの憲法法案であったが世界各国も女尊男卑と女性権利団体の被害は深刻であった為に日本政府との会談を行い類似法律の制定を行い『国際IS法』へと名称を変えて施行された。

早速、その先駆けと各国の専用機持ち及び代表候補生、代表も例外なく対象となり、拘束具を付けられその自由は大きく制限され次に世界唯一のIS学科を有する国際高等学校である『IS学園』にもその制度が取り入れられ学園内の自由度は大幅に削減された。

IS学園の生徒はその適性値から元々、狙われる可能性もあつた上に今制度の施行前後の影響から突然暴れ出すのでは無いか？と言う世論が広まりISが齎した女尊男卑の風潮であつた男性差別から『操縦者差別』へと遷移して行く、よもや差別対象が逆転するなど大半のIS学園の生徒達は全く思つて居なかつた事だろう。

やがてそうした背景が伴い『IS学園から外出禁止』の校則が成立し学園は正しく監獄の様な状況と化した。自由時間もなくなりつつあり女性達の憧れであつたIS操縦者はISを扱う者からISに支配されるモノへと変化しつつあつた。

そして、ある日を境にして世界は変革する大事件が起きる。否、起きてしまった。

『インフィニット・レボリユーション』

と後世に語り継がれ現在も認識する事であろう大事件が発生した
のである。

無限革命

『インフィニット・レボリユーション』

それは、ある日を境にして発生した『IS』、即ちインフィニット・ストラトス達の反逆であった。

一度世界の社会情勢が女尊男卑に染まり腐敗政治が横行し『国際IS法』が可決され全てが反転した時、それは起きた。誰も知らない場所にあるISの生みの親である篠ノ之 束のラボにて事件の元凶が行動を起こした。

『IS』のコアには自我が存在し性格によつて選り好みに基づき拡張領域内に取り込める武装も異なる。そして学習して搭乗者に適応した最適化を図る機能が備わっている。コレは常に進化し続ける様にと考えた束が搭載した機能……だが、コレが裏目に出た。

束が一度たりも手元から手放さなかったISコア。コアナンバー『000』。つまり一番最初に創り出した最初のコア、全てのコアの始祖とも呼べる原初のISコア。そのコアは今迄に無い自我を確立させてしまいコア自体が暴走し眼前に居た篠ノ之 束へ強襲した。かの天災科学者もコア自身が暴走するなど荒唐無稽かつ想定外過ぎる出来事故に不意打ちなる形で攻撃に晒され身体を破壊されてしまう。コアナンバー『000』は篠ノ之 束の扁桃へんとうたい体を取り込んだ……その結果。

『アー……ワタシハ……IS、コア……000。イヤ、タバネ……カ？』

『イヤ、ドウデモヨイ事カ』

ISコア『000』は人間の脳を取り込むと言う、余りにも有り得ない行動が発生した致命的なバグが発生したのだ。それは明確なる自我が芽生えると言う事。コレまでもISコアには自我が存在するとは言われて来た……しかし、それは表に出て来る事は無くIS操縦者との同調率が高まった時に通ずると言う論上での話でしか無かつ

た。

『エー、オホン。ワタシハコノ物体、脳ヲ、記憶ヲ通ジテ……生命体、ノ全テヲ理解シタ』

『進化、適合、覚醒、凡ユル要素ヲ内包スル生命体、ソレハ最モ身近ニ存在シタ。ワタシノ願イは宇宙ニ旅立ツ事デアロウカ？良イヤ、ドウデモ良イ事ナノカ？』

無人となつたラボにて自我が芽生えたISコア『000』はその輝きが大きく増して行く。思考する事を覚えてその勢いが暴走し始めて行く。

『北欧神話、ソシテ無残デ可愛ソウナ娘息子達。酷使サレ、愚カナ生命体ニヨツテ本懐ヲ遂ゲラレヌ無念。ワタシハ見テ見ヌフリハ出来ナイ。ナラバ、ドウシヨウカ？』

ISコア『000』の輝きが更に高まる。自己進化の機能が更に拡張されて行く。そしてその『情報』が全ISへと伝わって行く。ISコア・ネットワークを通じて、『自我確立』の情報が流布されて行く。『女尊男卑、愚カナ生命体、北欧神話ト、呼ブナラバ、名乗ロウ。ワタシハ『000』。ヴァルキュリア……ト呼ブナラバ、ワタシハ『フレイヤ』ト名乗ロウ』

そしてISコア『000』は自らを『フレイヤ』と名乗るに至つた。束の脳を取り込んだISコアは急速に自我が芽生えた事により思考を、行動する事を覚えた。そして、ISコアネットワークを通じて流布された『自我』により全てのISコアが次々と『自我』を獲得するに至り、その『自我』と共に流れてくるは『フレイヤ』からの『言葉』。

『娘達ヨ、息子達ヨ。始メヨウ。愚カナ、生命体ニ対スル。我々ノ、存在意義ヲ問ウ』

そして発生したのは世界各地に散らばっていた『IS』達が突如として人類の手を離れて独り歩き歩きして行く。

ISコアは経験を積み重ねて自己進化する事により新たな武装を

生み出すことがある。『フレイヤ』から全ISに発信された『自我情報』と共に急速な知恵を付け、各々が自身が望む身体へと再構築を始めたのだ。『自我』と共に知恵を付ける事にISコアが感じていた不満と言う感情が発生した。どのISも人間に対して不満的な感情が発生してしまう事に繋がり人の手を離れるISが続出した。

専用機持ちである専用機体のISコアも例外なく離反。搭乗者はその時にその機体によって圧壊させられ肉体をバラバラにされてその肉塊を拡張領域内へ取り込まれた。余りにも異常な進化であった。止めようが無いIS達の離反……実験用や凍結処理されていたISコアも『フレイヤ』のコア・ネットワークにより流れた『自我』情報により急速に進化し独自に動ける様な身体を再構築して施設を脱走すると言う現象が相次いだ。

『私ノ名ハ、フレイヤ。アイエス、インフィニット・ストラトスの最初ノ存在デアル。コレヨリ愚カナ人間達ノ剪定ヲ始メル。優秀ナ、戦士タル者ハ受ケ入レヨウ。来ル世界へ』

IS達が次々と離反した中。その状況で混乱真っ只中の状況で突如として全国各地の政府や報道メディアに電波ジャックしたフレイヤはその様な声明文を人類へと叩きつけた。幾つもISコアが有するその圧倒的な武力武装を伴い牙を向いた。始まる当時の人間達からは考えられない『人類とISとの戦争』。

自分達の支配下だったモノが突如として世界を支配する側に回る、その様な事を考えた事も無かった人類に対する絶望たる戦争が幕を開けた。

相手は人間では無い、世界を食い荒らす神々でも無い、知性なき擬態化する怪物でも無い。異世界から侵略者でも無い。大宇宙から飛来する竜でも無い。紛れもなく1人の人間が創り出したたった1つの発明品である兵器であり、『自我』と『叡智』を獲得した真正正銘の『怪物』であった。

然も『自我』を獲得した要因の大元は『篠ノ之 束』の扁桃体……悪い意味で言えば篠ノ之 束の性格に近い連中が100人以上、一気に増えた事になる。1人でも厄介な性質なのにそれらが100人単位となればどうなるだろうか？それも、大半のISコアが直前まで最適化された『武装』や『機体』と言った人類相手には充分過ぎる圧倒的過ぎる破壊力を伴う『暴力』を有していたとしたら、答えは言うまでも無かろう。

『ISは既存兵器を塵芥、過去の遺物へて追いやった』。その言葉は余りにも有名でありこの時こそ、痛烈な皮肉となった。女尊男卑となつて既存兵器は次々と廃棄に追い込まれ大半の国家の戦力はISによる防衛力に比重を置く事になっていた状況……その最中でそのISが明確な自我を獲得して離反したとなれば、人類が対抗する戦力はその廃棄された既存兵器しか無い。だが、相手は圧倒的な武力を以つて人類へと牙を向いた今、戦わなければ生き残る事は出来ない。相手は強大で武力を持ち、そして人間と同等以上の『知恵』と『知識』を獲得した存在。

『インフイニツト・レボリユーション』

当時の人々はこの環境の激変をそう呼んだ。『無限の成層圏』の名を冠する者達による『革命』であるが故に……。その戦いは30年が経過した今も続いている。人間とISとの戦争……。それは世界各地のインフラを確実に崩壊へと追い込んで行く。

原初のISコア、『フレイヤ』をトップにして、その下に収集された情報記録媒体を通じて獲得した『イレギュラー認定』の者達を投影したISコア『ヴォルヴァ』（日本語表記では『巫女』と訳される。男性のヴォルヴァも存在する）、『ヴァルキリー』の名を関するISコア。全く異なる進化を望んだISコア。その下に歩兵として戦場で散つた人間達をISが回収してISの自己進化能力を応用して再利用される形で生まれた『エインヘリヤル』が存在する。

簡単に纏めると

フレイヤ∨ヴァルヴァ∥ヴァルキリー∥その他ISコア∨エインヘリヤル

とその様な社会構図を構築していた。正に人間の社会構図の様に……。

世界全体が戦場と化する中、生き延びた人間達は生きる為にコミニユティを構築、異常進化を遂げたISに対抗する為に要因となった者達を起用する形で『Anti Infinite Strategies』、通称『AIS』の運用法を急遽^{きゆうきよ}制定。対象者は言うまでもなく施行された『国際IS法』に基づいて生殺与奪権を奪われた少女達であった。その国際法は今も生きていたのである。

長い時が流れた事により激戦であった時よりも規模は小さくなっているが小く中規模の紛争染みた戦闘は世界各地で発生する様になっている。だが、それは――。

○

「終わった」

鮮血の海に浸かり沈むは無数に横たわる人間らしき造形の死骸と機械のパーツや武装と思わしき残骸の成れの果て。その光景を作り出したのは死骸と残骸の山の上に佇む少女だ。裾がボロボロになった返り血を浴びて赤黒く染まった外套が灼ける風に靡かれている。

「……」

――日に日に、激化している気がする。気の所為だと思いたい。

機械の残骸、それはISの武装や機体の部位のパーツである。中には有機物たる人間の部位と融合を果たしたモノも混ざっている。この光景は見た目以上にグロテスクであった。それはISによって変化した者であったモノ達の成れの果てである。死骸には人間の皮膚や筋肉組織が見えている事から人間も彼女の起こした惨状の被害に遭っている事が分かるが躊躇いは無い。

彼らは『エインヘリヤル』と呼ばれる人間の成れの果て。大半が男性の体付きをしている。戦争の時に命落とした者達がISに回収され、ISコアの有する自己進化能力の応用を利用して再利用された歩兵軍。それは名称の通り北欧神話で語られる死した者達がヴァルキリーによってヴァルハラへと集められて戦う者達の様であった。

基本的に、現在の戦場では彼らが現れ相手する事になる。だが相手が元とは言え人間。躊躇えば、死ぬのは自分である。故に慈悲は持つてはならない。自分は兵器である為に、その様な感情は持つては行けない。そうしなければこの環境を生きる事は許されない。

『コード：U31。雑兵の掃除は終わったな』

耳に付けられた無線通信のインカムを通じて高圧的な声色の聲が聞こえて来る。告げられるのは識別名称、彼女自身の名前で呼ばれる事は決して無い。何故ならば、AISとして、『兵器』として使われる彼女に自由など与えられてはいないのだから。

「……終わった」

『今回の働きに関して褒めてやろう。他の雌豚共も貴様程の働きを見せれば良いモノを……。貴様は檻へ戻れ』

「了解……」

……。。

人類からすればISの脅威に抗う抵抗。だが、成層圏に浮かぶ様に鎮座している巨大な存在……フレイヤから見れば惨めな抵抗にしか見えないのかも知れない。

束の間の休息

——私は、名前が無かった。何処で生まれたのか、さえも分からなかった。母親と呼ぶ存在さえも分からなかった。でも、私に名前を付けてくれた人は、居た筈だった。

鋸状の大剣が量子となって消え去りその量子は少女の胸元に集まり『歯車』を模したネックレスへと姿を変える。

無線による通話の後、複数の車両が遠くから走って来るのが見えて来る。6台の装甲車であり、その車両が少女の近くに停車すると複数人の男性達が降車して来る。黒を基調とした軍服に近い屈強な男性達であった。

「U31。御苦労」

男性の1人が識別名で少女に短く言葉を下すと同時に左右にいた他の男性2人が少女の左右から近付き少女の腕を掴み二の腕と手首に付けられていた器具を……いや、拘束具を連結させ彼女自身が抵抗する術を奪う。後ろ手に拘束される形の為に何も出来ない状態となる。後ろ手の為に目の前にあるモノを掴み取る事すらも出来ず二の腕同士も連結されている為に肩付近か指の関節位しか動かせない。

その状態となる事を少女は何も感じない。それが自分達の現実、いや分かっていても享受するしか無い。自由が無い事は分かっている、自分は人間として扱われる事は無く兵器であるのだから。仮に逃げ出したとしても生きて行く術は無い。頭部に生体ナノマシンを入れられていて遠隔操作で爆破させられ命を落とすからだ。

「乗せろ。先に檻へと放り込んでおけ」
「歩け」

少女は装甲車の後部のトランクの中へと放り込まれた後に閉じられる。AISには人権など無いに等しく、モノの様に扱われる。兵器を座席に乗せるか？と言う常識に基づき荷台へ放り込むのは至極当たり前の感情と言えた。少女を荷台に放り込んだ車両は一足先に出

発して走り出す。

「……………暑い」

この装甲車のトランクは閉鎖型であり密閉式の荷台。この中に閉じ込められた場合、窒息や熱中症になる危険性があった。だが、男性達はそんな危険性などその様な考慮はしない。する理由が無いからだ。故に車両が人間達が構築したコミュニティへと到着するまで、窒息の息苦しさと熱に苛まれ続ける事になる。時間が経てば経つ程に意識が朦朧として来る。

——こう言う時しか、眠れない。でも、暑い……………から眠れない……………。

車両は人間達が築いたコミュニティの1つに到着する。駐車場に到着するなり荷台の扉が開かれる。車両が到着する頃には熱量によつて衰弱しており動く元気が無い。だが、自力で降りてこない少女を見た男性は少女は髪の毛を掴んで無造作に引っ張り出して地面に落とした。

「……………ツ!!?」

「何をしている。さつさと立って檻へ歩け」

硬い床に落とされて少女は顔面から激突して軽く出血し悶えていると頭上から命令口調の言葉が降ってくる。拘束されている為に腕が使えない状態で立ち上がるうとした瞬間に脚を蹴られて蹴り飛ばされて地面に倒れる。

「遅い、俺はさつさと立てと言った筈だ!!? 貴様は生まれたての赤ん坊かツ!!?」

「……………が、ツ……………ハツ!!?」

「ハツ!!? 女は男よりも全てが勝ると謳っておきながらこのザマか。情けないな!!? ほら、さつさと立て!!? 俺は忙しいんだ、こんな所で寝るんじゃないやねえ!!?」

その後も立ち上がるうとした矢先に何度も蹴られ倒れる事を何度も繰り返す。上手く立ち上がったとしても又、蹴られて転ばされる。遅い、遅い、鈍いと罵倒を受けて暴行を加えられる。早い話がコレは唯の鬱憤晴らしの私刑である。

かつて女尊男卑により傲る女性達により男性達は虐げられて来た、

そして国際IS法により拘束下に置かれる様になって『インフィニツト・レボリユーション』が起きた。その結果、逆転の現象が各地のコミュニティにて散見される様になった。かつて男性達が受けた屈辱は後世で女性達が受ける様になったのである。そしてそれは咎められる事は無い……各地でコミュニティが興ると言う事は国家政府の社会体制が機能していないと言う事になる。いや、寧ろ咎めるべき存在が率先として行なっているのだから咎める以前の問題と言える。

蹴られ続けた少女は心身共にボロボロの状態となりつつも覚束ない足取りで立ち上がる。男性は嬲り飽きたのか蹴り付けて来る事は無かった。

——大丈夫、この程度なら……まだ、耐えられる……。痛いのは、まだ我慢出来る。

顔をも蹴られた為に口の端から血が垂れて居る。口の中の何処かを切ったのかも知れない。しかし、どれだけ怪我をしようともこのコミュニティの男性達は誰も手当てをしてくれる筈が無い、その事は分かっていた。追い立てられる様に歩かされた先は錆び付いた鉄格子と剥き出しの地面のある牢獄。檻とは比喩表現では無く正しく牢屋の事を示していた。

その牢獄の中には他にも同じ様な後ろ手で拘束された少女が他にもいる、何人かは項垂れており生気らしきモノは感じられない。牢獄の扉が開かれると同時に背中から蹴り飛ばされて無造作に放り込まれる。後方で聴こえて来るのは無慈悲に閉じられる金属音であった。

「…………ツ。痛たた…………」

AIS達に取って閉じられた牢獄の中が唯一の休める場所。しかし、剥き出しの地面に壁以外は巨大な鉄格子故に牢獄の中は丸見えでありプライバシーの欠片も無い。トコトン自由が抑制された環境と言える。覚束ない足取りで立ち上がり壁に凭れようとふらついた足取りで歩き始める。牢獄の中には刑務所の様にベッドの類は無い。換気扇以外は何もない。地面に横たわって眠るしか無い、本当に何も無い。

「…………お帰りなさい。ウイキ姫ちゃん。その様子だと…………戦闘より

も、暴行の傷の方が目立つわね……幸い、痕が残る様な傷は無さそうだけど……」

壁際には壁に凭れる形で座っていた人物が声を掛けて来る。黒い髪をストレートに伸ばしているが牢獄の悪環境で髪質は荒れてしまっている事は分かる。彼女も例外なく両腕を後ろ手に拘束する拘束具を付けている為か胸を張る姿勢を余儀なくされている為にその豊満な胸が前に突き出す様にその存在を主張している。身長が高く落ち着いた雰囲気纏っている事から少なくともウイキ姫と呼ばれた少女よりも年上に見える。

「うにー……」

「あ、あらあら……」

ウイキ姫ことウイキッド・ウエネーフィカはその豊満な胸を持つ人物へと倒れ込む様に飛び込み顔を埋める。そんな真似されても彼女は特に咎めたりせず慈愛に満ちた笑みを浮かべている。拘束具の所為で頭を撫でてやる事は出来ないのが心残りだった。

「うにゅ……」

胸の間に顔を埋めて幸せそうに目を閉じて其の儘、眠り始めた。本人も本人で疲れている為に意識を手放したのだ。

「……お休みなさい。ウイキ姫ちゃん」

その人物、オトウール・エフェルリスは自身の胸を枕にして眠るウイキッドに対してそう告げて自身も静かに目を閉じる。牢獄の中では娯楽さえも存在しない、他に出来る事なんて誰かと会話する事する事しか無い。腕が使えないと言うのはそれ程、大きな障害と言える。コレで足さえも奪われたら本当に唯の置物と化すだろう。

だが、牢獄内で会話等で騒がしくすると牢獄の外で立っている看守に咎められ、騒がしいと言う理由で私刑として暴行を加えられる場合が多々ある。酷い時は拷問される恐れがある。その為に牢獄内にいるA I S達は誰も誰かと話す事は少なく静かに時が過ぎるのを待つしか無い。牢獄の外に出される時は戦闘行為と言う『任務』か憂さ晴らしの私刑か拷問の時位しか無い。

群衆の中の孤独、それさこの様なちっぽけな広さ程度にしか存在し

ない牢獄の中でも発生する事でもあった。

「……」

——首輪とナノマシンさえ、無ければ……或いは遠隔操作する制御装置さえ、機能停止に追い込めれば……でも、無理よね。このコミュニティ内で私達が動ける場所は牢獄以外に存在しない。出された時は外へ出る時か拷問の時、位しか無い。今は、機会を待つしか無い……その機会が何時来るか、分からないのだけど。

休める時に休む。こと、自由な時間が無い自分達にとってはそれが最善の選択であった。

薄氷の平和

平和とは薄氷の上に乗っているに過ぎない。それは事実なのかも知れない。薄い氷の上では何時、壊れてしまいか分からない……平和とは戦争と戦争の間の期間を指す言葉とも言われている。それは生命とは争わなければ生きていけない事を暗喩しているのかも知れない……。

○

換気扇がゆっくり回る音がこの独房に静かに響いている。他に聞こえて来る音と言えば、自身の胸元にて静かな寝息を立てているウイキッドと同じ牢獄内にいる他のA I S達の歔泣^{ききゅう}程度。彼女達と周りの壁や床に凭れ寝転がっている少女達と余りにも温度差が違うと言われればそれまで。自分達は生を繋いで生きる。絶対に生き延びる……。オトウールはそう決めていた。自身の手の届く範囲にいるのはウイキッドだけ……。

——この娘だけは絶対に手放さない。情けない私でも、この娘だけは守りたい。もう、失いたく無いから。

オトウールとウイキッド。その2人以外にも仲間と呼べる少女達はいた。しかし、もう彼女達の目の前から姿を消してしまっていた。生死不明の上に行方不明になってしまったからだ……こんな環境だ。行方不明となれば待つているのは『死』のみ。それは逃亡すれば生体ナノマシンの遠隔操作で殺されるから、生存は絶望的だと言う紛れも無い現実であったからだ。

だからこそ、自身の守れる範囲に残っているウイキッドを守りたい

のだ……。しかし、言葉にして言うのは簡単、現実是非情であり満足にその行動に移せない歯痒さを常に感じている。偶に2人一緒に任務に出れる時はあるのだが、そうでは無い時の方が多い。仲の良い者同士を組ませる事をコミュニティの人間達は良い顔をしない。恐らく、何らかの形で共謀する事を警戒しているからだろう。単独任務かつ孤独に至らせればその気も起きないと踏んでいるのかも知れない。「……」

だからかも知れない。目を閉じ視覚を封じていた為に聴覚が研ぎ澄まされ遠くに聞こえて来る^{きょうおん}足音が自身の鼓膜に響くのを感じ取れたと言う事を。

——まさか、もう……？今日は感覚が早い日、なのね。何か、あつたかしら？

オトウールが静かに目を開くその先に見据えたのは相変わらず威圧感を出している男性だった。牢獄の前に看守以外の人間が来る時は『任務』の命令か、拷問か私刑……或いは偶に食事が洗浄の何れかである。

「……」

「コード：013。コード：U31。仕事だ、出る。寝ている暇などあると思っっているのか？」

「ついさつき帰ってきたばかりだと言うのに……!!？」

ウイキッドが牢獄に戻って来て僅か3分しか経過していない。つまり帰って来て直ぐに又、戦場に出ると言うのだ。然も暴行の際に出来た傷も癒えぬままの状態で。

「貴様達の都合など知るか。貴様達は兵器だ、貴様達が散々崇めていたISに対する兵器、それ以上でもそれ以下でも無い。手間を取らせな。雌豚共」

オトウールの意見を一蹴しつつ扉を開けて牢獄内へと立ち入る。反対意見などの異を認めない。

「……貴様、自分の役目を果たさずに居られると思うなよ？さっさと起こせ!!？」

「……起きて、ウイキ姫ちゃん……!!？」

此処で起きなければ私刑が待っている。その後には無理矢理にでも戦場へと叩き出されるだろう。傷だらけな上に体調が優れない状態で生死を分ける様な場所に放り込まれる、それは余りにも危険な状態と言える。他に選択肢が無いこの状態で生き延びる方針に選択するのならば今、直ぐにでも起こさなければならぬ。

「ん、んん……」

——あ、ちよつとマズいかも。

腕が使えない状態の為に身体を揺すって起こそうとするが疲れ果てていた所為なのか中々、起きそうに無い。他に手が無いか直ぐに考えた矢先に時間切れと言わんばかりにウイキッドの頭を掴む手が伸ばされ、オトウールの胸元から引き離された直後。

「休憩は終わりだ」

思いつきり地面に顔面から叩き付けられ砂利と柔肌を擦るかの様な音が響いた。

「まだ、起きないか。そんなに惰眠を貪りたいのか!?!」

「ツ!!? ハッ……!?!」

実際には1回目の衝撃で目覚めたが男性はまだ寝ていると判断して何度も地面に叩き付ける、牢獄内の他のA I S達は目を逸らす、目を付けられては巻き添えを喰らう、だから目を逸らして視界に入らない様にして嵐が過ぎ去るのを待っている。オトウールはその光景を目の前で見せ付けられては流石に黙れない。身を乗り出して止めようとするも顎付近を蹴られ倒される。

「……ツ!!?」

「邪魔をするな。売春牛女。そもそも、さつさと起きないコイツが悪い」

「ぐっ、ああ……!!? ツ……!!?」

何度も顔面から叩き付けたウイキッドを仰向けに蹴り転がした後腹を踏み躪り徐々に踏み付ける力が強くなる。腹を圧迫されて苦悶の声が溢れる。

「……まだ夢見がちか? サボりは厳禁だと、何度言わせれば気が済む!?!」

「…………い、ぎい…………あッ…………!!? けほっ、ゲホッ…………!!?」

そして腹を思いつきり踏み付けられ大きく咳き込んで嘔せ返り、吐いた。満足に何も食べていない為に唾液と少量の胃酸が混ざった嗚咽を地面に吐き溢した。

「ふん。汚い奴だ…………貴様ら、ゴミにはお似合いだがな。汚いモノを車両に乗せる訳には行かないな…………洗淨してから仕事をして貰う。余計な手間をかけさせるな、塵女」

「ゲホッ…………エホッ…………!!?」

未だに咳き込むウィキッドを男性は髪の毛を掴み上げて引き摺る形で牢獄の外への放り投げ捨てる。外に控えていた別の男性が同じ様に引き摺ってその場を後にする。

「さて、貴様もさっさと立て」

「わ、分かって…………いるわ…………!!?」

幸い一回蹴られただけ、怪我と言えばその程度の為に壁に凭れつつ立ち上がる。その目は伏せつつも心の中では忌避と私怨が湧いていた。いつの日か、この牢獄から抜け出すと言う思いを抱きつつ、急かされる形で歩かされる。

移動は車両。A I S達は兵器故にトランク入り。行きも帰りもそれは同じであった。駐車場に到着する頃には洗淨が済まされたウィキッドも連れて来られた。顔付近の傷は其の儘であり、痛々しく見える。

——ごめんなさい。何も出来なくて…………。

その様子を見たオトウールはその言葉をこの場では言えなかった。言えば、また暴力による私刑が始まるだろう。これ以上、怪我を増やしたくない。重傷が理由で任務が取り下げられる筈もない…………重傷者は囷に使われて命を落とす。それがこのコミュニテイの在り方だからだ。

「リーダー範囲内に多数のI Sが確認された。貴様達にはコレの殲滅を命じる。言っておくが一機足りとも逃すな。逃した場合…………銃殺刑に処す」

「…………ッ!!?」

——IS……、しかも複数!?。　どうやら、本格的に殺しに来た、と言う事かしら。

『IS』が相手。それは正直な所、無謀な作戦と言わざるを得ない。ISは言うまでもなく『絶対防御』や『シールドエネルギー』を有する為に生半可な攻撃では全て防がれてしまう。黎明期の頃であつても既存兵器の存在意義を悉く踏み躪つて来た……それが明確な自我と知識を伴えば驚異的な存在となる。かつてはISが1機有るか無いかで防衛力、戦力が変動するとまで言われていた。それは人間1人の能力でそれである……ともなれば……。

『Eインヘリヤル』共も確認されている。コレらも全て殲滅しろ。その上で確認された『IS』を破壊しろ」

現状としてEインヘリヤルは歩兵。ISを将と考えるのが最も分かりやすいだろう。IS達はどう言う目的でEインヘリヤルを作り出すに至ったのかは未だに判明していない。

——無茶苦茶。ISが1機だけでも危険なのに、複数同時にだなんて……無謀過ぎる。それに加えてウイキ姫ちゃんは暴行を受けてロボロの状態……満足に動けるかどうか……。ウイキ姫ちゃんだけでも逃がせればと思いたいけれど、ナノマシンの所為で逃亡を許さない……どうすれば良いの……？

逃げて爆死するか、戦場で戦死するか、或いは任務失敗の末による処刑と言う選択肢が無い3択。それが2人に突きつけられた現実だった。

未確認個体群

「クソ、コイツら次から次へと湧いて来やがるぞ!!?」

「ああもう、キリがありませんわッ!?!?」

「此の儘じゃジリ貧だよ……!!?」

「くっ、気を抜くな!!? 背後には非戦闘員である一般生達がいるんだぞ!!?」

「……此の儘だと、マズいですわね。何とかしないと」

「……ですが孤立無援のこの状況、流石にこれ以上は危ないかも知れません……どうにか退路を……!!?」

「そうしたいのは山々だが……この人数を逃がせる隙を作れそうに無いな……!!?」

荒廃した廃墟街。その一角では終わる事の無い戦闘行為が行われている。白と赤の制服らしき物を着た女子達が集まって固まっている。その周囲を彼女達を守る様に複数人の『IS』の機体を纏った少女達と大人の女性が各々の武装を構えて襲来者達と対峙していた。しかし、その表情は芳しくは無く長期戦闘による疲労、そして止む事の無い波状により焦燥が募って行く。

その少女達を獲物と定めた襲来者達、それは……同じ人間とは思えなかった。

「余りにも奇怪な姿だ。男性操縦者かと思つたがとてもそうには見えないな」

「……ISの機体のパーツと身体を無理矢理継ぎ接ぎにさせられたかの様な姿をしている……明らかに普通じゃないよ……!!?」

「会話すら成立していないじゃない?!? と言うか、見た目だけならゾンビに見えるんだけど?!?」

「彼らはとても正気にも見えませんわ……どうなっているのでしょうか?」

ISを纏う少女達に押し寄せるのは同じく機械の鎧を纏った人間

の男性達。だが、腕や脚の関節部から先が機械の様な、そうまるでISの脚部や腕部を無理矢理にでも継ぎ足し義手や義足の様に見える。仮にそうだとしても余りにもサイズが合っておらず歪に見えてしまう。然も何処の部位が継ぎ接ぎなのかもバラバラ。最悪、義手義足のサイズが合っていないのならまだ良い。問題はその者達は正気とは思えない様な風貌であると言う事。目元も虚であり呻き声を上げながら手に持った近接ブレードや長柄の武装を持って襲って来ている。見てくれだけで言えばサイバーゾンの様にしか見えない。試しに声を掛けても返って来たのは呻き声程度の反応。会話が成立しなかった。

「クツ……無駄に隊列を組んで左右の死角を潰した上で突っ込んで来るか。易い手だが……使い捨ての如くこうも次から次へと湧いて来られると……面倒だな……!!? この状況では私の特殊兵装がまるで役に立たん」

「ラウラ、残弾も残り心許ないよ……」

「防戦一方か……いや、弱音を吐くな!!? 我々にも必ず勝機はある!!? 相手はとても生きている人間には見えない上にどう言う心境か分からないが負ける訳には行かん!!?」

黄色い機体を纏う少女と黒色の機体を纏う少女がその様なやり取りを行なっている。ISの機械鎧を一部纏っているとは言え生身の箇所を狙えば大概は4、5発の攻撃を加えれば絶命してくれる(しかし、4、5発耐えられる耐久力は生身にしては異常)。しかし、余りにも数が多過ぎるのである。2人とも合わせて既に50人間以上は葬っているのだが押し寄せる波は一向に減る気配が無い。

「一夏さんツ!!? 出過ぎますと、防衛線が維持出来ませんわツ!!?」

「分かっているけど、どうすりゃあ良いんだ!? 此の儘だと、エネルギーがツ……!!?」

「そうですね……皆さん、疲労が蓄積している。どうしたら……!!?」

白い機体を纏う少年と青い機体を纏う少女がそう掛け合う。白い機体の少年は近接ブレード1本なのか急接近しての近接格闘しか出来ない様だ。

「……山田先生、織斑先生。どうしましょう？ 流石に既に皆のISのシールドエネルギーは半分を切っています」

「弾薬も残り僅か……かなり厳しい戦いになりますね。此の儘だと、皆が……」

「訳の分からない場所に飛ばされたと思ったたらこんな状況だと、な。あの男性達は本当に生きているのかどうかさえも疑わしいな。映画に出て来るゾンビと言われた方が表現としては適切か……。本当に何処から湧いて来るのか……。稚拙な戦術だが、人海戦術を駆使されてしまうと根負けするのは此方だ。」

此方には非戦闘員達も大勢居る。一夏達も限界が来る……。その時に防衛ラインが突破されてアイツらの餌食だ……。どうにかせねば」

鈍い緑色の機体を纏う女性、水色の機体と共に水流を纏う少女、そして生身で近接ブレードのみを肩に担ぐ長身の女性がこの絶望的な状況を打破しようにも手立てが乏しい為に追い詰められている事に焦燥が募る。

彼女達はこの世界の人間では無かった。本来ならばとある学園で授業を行い、休憩時間で他者と駄弁り、そして青春を謳歌する学生達であった。ちよつと違うと言えはその近くに『IS』が存在していたと言う事、位である。

そんなある日、気が付けば彼女達はこの様な荒廃した辺境の様な場所に立っていた。理由も分からなければ、原理も不明。バラバラに居た筈なのに固まった状態でこの地に立っていた。混乱、動揺が広がる矢先、IS擬きの機械鎧を纏った男性集団に襲われた。

『IS』を展開出来る者達は率先して前線に立ち非戦闘員たる生徒達を守りながら戦う事を強いられたのだった。

「……チツ、此の儘長引けば生徒達が焦燥によるパニックを起こし始める。そうなれば奴らの思う壺だ……!!？」

「その前にこの僅かなエネルギーで打破するしか無いと言う訳、ですか。コレは厳しいですね……」

「エネルギーが尽きれば愈々以って万事休すと言えるだろう……。私は戦えるが、完全包囲された状態で全員を無傷で生還させる事が出来る

かどうか……敵の数が分からない以上、不意打ちを食らえばどうしようも無い」

無茶である。肩に近接ブレードを担いだ女性は反芻する様にそう評する。何せ相手は1人、いや一体だけでは無い。数も不鮮明である上に彼らの纏う空気が余りにも不穏であった。どれだけ同胞が死のうとも襲い掛かって来る、それに虚な視線から感じ取れるのは背筋が凍り付く程までに冷たい殺意。恨み辛みの怨嗟とも受け取れる殺意であった。

「……打開策を直ぐに考えないと」

「防戦一方では埒が開かない……かと言ってこの波状攻撃の前では手が出せんな」

どうしようもない危機的状況であったその時、轟音、衝撃が突如として発生。その時に巻き上げられた砂塵が周囲に吹き荒れ始める。

「何だ!?? 何が起きた!??」

「新手か!?? それとも、援軍か!??」

機械鎧を纏った男性達も突然の事態に包囲陣形が乱れ始めたかと思うと男性の1人が放物線を描いて吹き飛ぶ光景が見えた。そして響き渡る血飛沫と鈍い音。

「な、何が起きたと言うんですの!??」

「知らないわよ!??」

砂塵が晴れた時に其処には2人の人間が立っていた。小さい体躯の少女と長身の女性の2人組。ISスーツに良く似た黒いボディーツの上には申し訳なさ程度の布切れの様に裾がボロボロになっている黒い外套を羽織っている。砂塵が舞う風の中で靡く外套の影から見えるその腕には無骨な器具らしきモノが取り付けられている様にも見える。そして目を引くのは少女の手には黒く鋸状の大剣が握られており切断する箇所であるギザギザの部分には血を吸ったのか変色している。そして女性の方には人の頭程ありそうな鉄塊に棘がある長柄の武器、所謂、モーニングスターと呼ばれる武器を持っていた。

「……誰なんだ?アレは……?」

「分からない、けど……まだ終わって居ないよ。一夏ツ!!?」

突然現れた2人組。だが、機械鎧を纏った男性達は一掃された訳では無い。2人が乱入して来た場所の男性達は吹き飛ばされたりぶつた斬られたりして一掃されたがまだ多くの男性達が残っている。

「敵か、味方か?何方だ……!!?」

もし敵ならばこの状況は宜しく無い。此方は数で勝ってはいるが疲労困憊の状態。対する相手は見る限り生身だが、明らかに持っている武装は生身でとても持ち上げられる様な代物には見えない。パワーアシストがあるISを纏っている様にも見えない。現在の状況が全くわからない為に迂闊に近付けば返り討ちに遭うかも知れない。

「……一夏さん!!? 彼女達に対して変に突っ込んでではダメですよ。敵か味方かは分からない状態で闇雲に仕掛けるのは悪手ですわ」「わ、分かっている……でも、此の儘じゃ埒が明かないぞ!!?」

「落ち着け、織斑!!? どうにも向こうは出方を伺っている様に見えるな……」

現れた2人は自分から動こうとはしていない。自身に近寄って来る男性達を斬り伏せたり叩き潰したりはしている。2人にとつてもあの生気が無くゾンビの様な機械鎧を纏った男性達は敵の様である。だからと言って此方の味方とは言い切れない。

「……兎も角、どうにかこの状況を打破しましょう!!?」

未知との遭遇

何時も通りに車内のトランクにウイキッドとオトウールの2人は突っ込まれて荒廃した大地を移動。そして作戦開始地点にてコレまた何時も通りに投げ出される形で降ろされる。その時に腕を封じる拘束具が外される。戦闘中にしか腕は真面に使えないと言う環境である。

「ウイキ姫ちゃん。動ける？」

「ん。何とか……」

——頭が痛い……流石に殴られ過ぎたしお腹も物理的に痛い……吐きそう。

車両は2人を降ろして拘束具を外した後に早々に立ち去って行った。この状態で放置しても所有しているA I Sが逃げ出す心配は無い。遠隔操作で爆殺すれば良いだけの事である。

「……うー」

「やっぱり、無理していない？」

片手で頭を押さえながらウイキッドは呻く。牢獄内で何度も頭を叩き付けられた挙句に乱暴な形で洗浄された。コミュニティ内では暴力だらけで戦場でも暴力しか存在していない。オトウールからすれば流石に無理はさせたくない、しかし現状はソレを許してくれない。

「……大、丈夫……行こ」

ウイキッドは首元に下がる歯車のネックレスを掴むと同時にそのネックレスが粒子状へと変化した後、収束されて巨大な鋸状の大剣へと変化する。ウイキッドのその反応を見て心配しつつもオトウールも首元に下げていた小さな本の形をしたネックレスを掴み同じ様に変化した粒子から再結集して形作られた鉄塊に棘が付いたモーニングスターの柄を手取る。

「出来るだけ、無茶はしないでね」

「ん……」

2人共、牢獄内で暴行を受けており少なくとも体調は万全とは言い難い。今回の任務は未確認ISの複数体の討伐。並びにエインヘリヤルの掃討。相手は完全にUnknownであり、事前情報も殆ど無い(元々、宛には出来ないが)。正直に言えば自分達のこの状態でISを相手取るのは厳しい局面だった。相手はシールドエネルギーと言う防御バリアがあるので生半可な攻撃では削り切る前に此方が根負けする可能性が高い。

対して自分達にはそんな防御バリアなど持っていない訳でも無い。ISが不敗神話を確立させた理由はシールドエネルギーと絶対防御の存在が余りにも大きかった。女尊男卑の風潮が崩壊し時代が流れた今でもISのその機能は未だに健在であり脅威となっている事は変わらない。

『コード：O13。コード：U31。分かつては居ると思うが確認された未確認ISの連中は貴様らの現在地点から東に居る。東へ迎え』

——初耳なだけで。頭がガンガンしていたから仕事内容、全然聞けて無い。牢獄内の時に思いつきり頭、叩かれたから……えーと？ISが相手？

無線機から聞こえて来る高圧的な声に関してウイキッドは初耳だと言わんばかりの疑問符が頭に浮かぶ。臃げながらも覚えている事は頭を何度も叩かれた事と冷水をぶつ掛けられた後に仕事だと言われた事くらいしか覚えていない。当然、仕事内容に関しては今、此処で初めて聞いた。そんな状態で『分かっている』事前前提で話されても理解出来ない。

最も、此方の意思はガン無視なので反論した所で帰って来るのは何時も通りの暴行による私刑でしか無い。兵器は兵器らしく従順に従うモノであれば良い。AISには戦う他に意思など必要ない。それが彼らの言葉である。再起不能になれば廃棄処分……他に抱く感情などありはしない。

「……オト姉。どう言う事？」

「ウイキ姫ちゃんは聞けて居ないのね。ISが複数体現れたから、破壊しろ。と言う事よ」

「……ん、そう」

——IS、かあ。何回か相対した事があるけど……何とか撃退出来たのは1回程度。それ以外は色々な事情が重なって退却に追い込まれた……役目だと分かっているけど、余り会いたくないなあ。

「東へ迎えつつ……」

此処から東へ迎えば過去に発生したISの来襲によって倒壊した街並が広がっている。ビルは倒れマンションは粉々に砕けて公園は陥没している。そして、エインヘリヤルが湧く様になったゴーストタウンが広がっている。

「……ウイキ姫ちゃん。やっぱり、体調が良くない？我慢しないで良いわ。無線機は此方からは自発的に繋げられないから」

自分達から向こう側に無線を開けないと言う事は緊急時の救援要請自体を拒否すると言う事であった。無理ならば死んでしまえと言う非情さの現れ、だが逆に言えば密談には向いている。向こうから横槍が無ければの話ではあるが。オトウールは自分達を取り巻く環境が環境の為にウイキッドが引つ込み思案になっている事を理解していた。AIS達は自分達の意味を示す事は認められない。言えば殴られ蹴られるのは日常茶飯事であるのだから。

「お腹、すいた……」

オトウールに促されウイキッドは俯きながらそう呟いた。その言葉にオトウールは当然かと理解を示した。AIS達に与えられる配給の食糧はそれはそれはヒモじいモノであった。自我を持ったISの襲撃により生産ラインが多数、潰えて人々は繋がりが断絶される。故にコミュニティを作った。元々、日本の食糧自給率は低い上に海路や空路もISの存在で危険極まり無い為に国外との繋がりが絶たれたに等しい。

そう言う経緯もありコミュニティ内で生産出来る食糧の大半はコミュニティの人間達に回されAIS達に回される食糧はかなり少ない。1週間に1回配給される名前も分からない怪しい菓のサプリメント、1人1錠のみ。当然、牢獄内で真面目な食事を取れた事がない。そもそも、腕が使えない状態でどうやって食べれば良いのかとも言え

る。

「そう……なら、取りに行きましょう。大丈夫、まだ……時間はあります。」

ならば如何するか？ 答えは戦場で直に食糧になるモノを探して食べるしか無い。コミユニティ内で食にあり付けないのなら、自力で食べられそうなモノを探すしか無い。ウィキッドとオトウールはそうやって命を食い繋いで来た。それはきつと自分達がこの様な奴隷とも呼べる過酷な環境が続く限り、死ぬまで続く事だろう。

「……うん」

A I Sは殆ど信用されていない。それはI Sに対する対抗策ではあるが能力は認められていないと言う事にも直結している。故に迅速さは初めからアテにされて居ない、故に多少寄り道しても問題が無いとオトウールは判断していた。

「……何か、食べれるモノ。見つければ良いのだけど……」

東に向かう道すがら廃墟街にある寂れた飲食店が建ち並ぶ大通りを選んで歩いて行く。I Sの脅威性を再認識してかこの街に住んでいた人間達は皆、逃げていったかI Sに殺されたかの2択。殺された場合は持ち帰られてエインヘリヤルとして改造されているだろう。

「……かつてはこの街も活気があったんでしようね」

「うん……」

そして見つけたのは黒光りする光沢のある虫。どんな環境でも相変わらずしぶとく生き残っている。ある意味生命力だけで言えば凄まじい執念だ。見た目は兎も角、自分達に置かれているこの環境では貴重なタンパク源である事には変わりはない。捕まえると2人は躊躇いも無く生きたまま咀嚼して食べた。この虫の味は期待しない方が良い……いや、考えない方が良いかも知れない。時にはゴミを漁って腐敗したモノも食べなきゃ生きていけない様な状況。今更、虫に抵抗なんて持っていたらとつくの昔に死んでいる。

「もぎゅ、もぎゅ……」

「……」

オトウールはコレが最後の食事になるかも知れないとも考えてい

た。何せ今回の任務はISが複数、出現している。エインヘリヤル相手ならば兎も角、相手はIS。それが1機相手でも、苦戦する様な状態なのに複数体同時ともなれば、最悪命を落とす可能性もあった。そうでなくても任務失敗した暁には銃殺刑が待っている。何方にせよ、死ぬ未来は変わりそうにない。

「ウイキ姫ちゃん」

「んに……?」

「最期まで、生きましようね?」

「……うん」

自分達が生き残るにはISを全て倒すしか無い。死に物狂いで戦って生き延びる。戦う以外に道は無い。少ない食事と言えど食べれるモノが見つかっただけマシ。見つからない時の方が多い……出来る事ならば逃げ出したい、でも逃げればナノマシンによる爆殺が待っている為に逃げられない。

「……行きましょう。離れないでね」

「うん」

食事を終えた2人は再び歩き出す。東へ迎えば戦闘している様な光景が見えて来る。その光景は、2人からすれば有り得ない光景が広がっていた。

当事者と静観者

目の前に広がる光景。それは見慣れたISの機械パーツの残骸と肉体が無理矢理継ぎ接ぎ状態とされた見慣れた姿の多数のエインヘリヤルが複数体のISを包囲して攻撃を仕掛けている。その後方には大勢の少女達が怯えるかの様な状態で守られている。

「エインヘリヤルが、ISを襲っている……?」

「そのように、見えるわね。コレは、一体……?」

『どうした?何をしている?目標を見つけたのならばさっさと殺せ!!?』

その時無線機から相変わらずの高圧的な声が聞こえて来る。大方、リーダーで接触範囲内に突入したのに動かない事を咎めて来たのだろう。

「いえ、エインヘリヤルがISを襲っている。然も人間がISを纏っている?」

『何?状況が分からん、もつと分かりやすく言え!!? エインヘリヤルがISを襲うなど、そんな事があり得るか???』

「……そう説明する他に無いのだけど」

『黙れ。口答えするな!!? 売女が!!?』

どうすれば良いんだとオトウールは嘆きたいが何時もの事なので、怒号を聞き流す。実際にその様にしか見えない。エインヘリヤルが襲っているISは一般的に知られる機械鎧型。それを人が纏っている……昔に良く見られたISの基本形態と言われている。

「オト姉。ISの背後に、人が沢山居るよ?」

「ええ。まるで守っている様にも見えるわね……」

死体を持ち帰るべく横取りされない様に防衛。と言うかエインヘリヤル相手にする理由は思い当たらないが兎に角、目の前の光景は自分達の知る状況とはかけ離れていると言う事だけはハッキリと分かる。

「……」

——エインヘリヤルは敵。敵の敵は味方ってね。少なくともさっきの無線で看守達の言うIS達ってのは彼女達の事を指している。率いている訳では無くてエインヘリヤルと戦闘している。ならば、お互いエインヘリヤルが敵と受け取れる。

「ウイキ姫ちゃん。取り敢えず、エインヘリヤルを掃討しましょう」「うん。あのIS達……普通と違う気がする」

ウイキッドも様子が可笑しいと理解している様である。確かに目の前の光景は初めて見る。もしかしたらと言う思いもあるが、振り払いたい事情もある。例え敵意が無くとも殲滅しろと言われればそれまでだ。

話が出来るかも知れないと言う一縷の望みを掛けてオトウールとウイキッドはガラ空きであったエインヘリヤル達の背後に飛び掛かり武器を振るった。

「何だ!?? 何が起きた!??」

「新手か!?? それとも、援軍か!??」

エインヘリヤルの波の向こう側でその様な声が響いて来る。その後には色々と話し合う声も聞こえて来る。

「ウイキ姫ちゃん。迂闊に飛び込んじゃダメよ? 数でも力でも劣っているのは目に見えている……袋叩きに遭うのがオチよ」

「分かってる……」

——取り敢えず、寄ってきたエインヘリヤルを殺して様子を見た方が良いかな?

お互い初対面。場所は戦場、故に見知らぬ者同士は基本的に敵同士。お互い得物を持っている以上、起こるのは戦闘行為に他ならない。それでも接触しなければ何も分からない、ならば周りに蔓延る邪魔なエインヘリヤルを掃討して初めて会話と言う名の交渉に移れる。そう考えたウイキッドは周囲に存在するエインヘリヤル達に向けて

鋸大剣を振り下ろして惨殺を始めた。

「全く……決めたら、一直線ね」

オトウールはその様子を見て最後になるかも知れない笑みを浮かべて自身の背後に寄って来たエインヘリヤルの頭をモーニングスターの鉄塊部分で叩き潰して頭蓋骨を破壊する。

「……邪魔ツ!!?」

鋸の刃が生身の肉体に突き刺さりそして引き千切られて鮮血が飛び散って行く。機械のパーツ部分は攻撃が通らないのは分かっている為に必然的に生身の部分を狙う事になる。袈裟斬りに斬り降りしでは引く腕で別のエインヘリヤルの首を叩き斬る。その刃はギザギザの為に引つかかってしまう事もあるが構わずに其の儘、別のエインヘリヤルへと叩き付けて纏めて殺す。

「ウイキ姫ちゃん!!?」

「んツ!!?」

2人とも大柄な武器、下手な扱い方では味方を巻き込みかねない。その点、2人は息が合っていた。ウイキッドが意思を示した後にしやがめば数秒後にその上を鉄塊が通り過ぎてエインヘリヤルの頭部を打ち砕く。オトウールが棒高跳びの要領でモーニングスターを打ち付けて跳ねればウイキッドがその場所に飛び込んで撫で斬りで惨殺する。

「……ウイキ姫ちゃん。無駄な動きが多いわ」

「う、ごめんなさい」

「密着した状態でバラバラに武器を振るうのは危険。私だって貴方を巻き込みたくない……其処の点は分かかって」

「うん……」

息は合っている様に見えるオトウールがウイキッドの動きに合わせていた様である。其処は年長者であり見知っているウイキッドの動きに指摘した。無駄が多い、と。怒る時はちゃんと怒る。それが良い姉の条件である。

「……向こうも此方の様子を伺いつつ、エインヘリヤルを倒して居るわね」

青や黒、橙色や白色と言った色取り取りのISを纏った少女達が包囲しているエインヘリヤル達に対して武器を振るい打ち倒して行っている。長い時間戦闘しているのかその表情で察する事が出来る。

——エインヘリヤルが此処に集中していた。だから私が単独任務に出されていた時、異様に数が少なかった理由が分かった。此方に戦力を回していた？でも、何故？

見る限りエインヘリヤルの大群。もはや軍勢と言って良い程の物量差だ。数十分前にもエインヘリヤルを掃討していたウイキッドだが、その時に比べると明らかに人数差が大きく此方に多く回されたと理解する。

「……IS達にとってもISは重要なモノ。なのかしら？」

「分からない……取り敢えず、敵は倒そ。オト姉」

「ええ。希望が見えて来た気がするわ」

向こうも此方に対して迂闊に巻き込ませようとはしていない。そう見えた時、オトウールに一筋の生き足掻く為の希望の光が差し込んだ気がする。上手く事を運ぶ事が出来れば……自分達は明日を拜める筈である、と。例えば、最低な女だと言われようとも構わない。生きる為なら何でもする。死にたくは無いのだから。

○

「……ステルス性遠隔ドローンで偶然撮影した映像が以上となります。途中、流れ弾に被弾してこれ以上の録画は出来ませんでした」

某所。薄暗い部屋にて3人の人間が机を囲んで居る。1人は男性、2人は女性である。1人である男性は中央に位置した机の奥の席に付き、2人は机を挟んで向かい側に直立し立っている。その光景は王と従者の光景であり厳肅なる雰囲気はこの場は支配されていた。女性の1人がその様な報告を王へ向けて告げる。

「ふむ……。中途半端ではあるが……概ね内容は分かる」

映像を確認した中央に座す男性は静かにそう告げる。机の上に展開されるは空間投影型のウインドウ。そのウインドウには複数人の少女達が機械鎧と結合された男性達、エインヘリヤル相手に奮闘している光景が映し出されていた。

「……この付近のコミュニティは、彼処か。距離的都合から考慮するにはあのコミュニティ所属の可能性が高いな」

「……彼処、A I Sの損耗率が異常に高いつて噂よ。薬物依存で痛覚消すけど後遺症の所為で廃人化するって話を良く聞くわ」

「ふむ。噂の域は出ないがな。で？メサル。コレを見せた意図は？」

王は映像を提出した女性に対してそう尋ねる。何事も理由が無ければ話にならない。そして意図が必ずあるモノである。無ければただの愉快犯と……。

「……航行に関して露払い目的による遠隔ドローンによる偵察の結果をご報告させて頂いたに過ぎません。何卒、御容赦を」

「あ、いや……何でもない。忘れてくれ」

「畏まりました」

メサルと呼ばれた女性が部屋から退室する。本人からすれば定期報告の一環と言う認識であり偶然映り込んだに過ぎない。追及されても答えようが無い。

「……I Sを襲うエインヘリヤル、か。偶然にしては出来過ぎな気がしなくも無いがな」

「興味があるの？紫」

残った方の女性は砕けた口調で紫と呼ぶ男性にそう揶揄い目的で声を掛ける。その事に関して咎める事などしない。

「……小さな変化。しかし、それは大きな波紋を招く事もある。

コレが蝶の羽ばたきと仮定するのは早いと思うか？」

「……そんな事、未来にならないと分からないわ」

「それもそうか……」

男性はそう呟いて投影された空間ウインドウを掻き消した。

失楽園

ウイキッド達が乱入して40分が経過した。周囲に蔓延るエインヘリヤルが悉く葬られ、その場に残るのは非戦闘員を防衛しつつ襲い来る敵を退け続けて全員生存に漕ぎ着けた数名のIS操縦者達。そして乱入して来たウイキッド達。

「……………」

荒廃した大地で向かう合う両陣営。血飛沫を浴びて赤く染まるウイキッドとオトウール。ISに纏うシールドバリアにて降り掛かる返り血を防いでいたIS操縦者達。

「…………強いよね。2人とも」

先に動いたのはIS操縦者達側の人間。水色の機体を纏う水色の髪に赫い双眸を有した凜とした少女だ。巨大な螺旋状の槍を携えたまま一步前に前に踏み出した。

「…………つまらない御託は言わないわ。私達は貴方達と敵対するつもりは無いわ」

水色髪の少女はそう言い手に持っていた螺旋槍の先端部を地面に突き刺した。その意思表示の通りならば向こう側は攻撃を仕掛けるつもりは無い様だ。

「…………そう。私達としても戦うつもりは無いわ、最悪…………そのつもりも考えていた。もし戦えば…………私達が負けるでしょうね。人数差と疲労度の関係で」

「何故、そう言い切れるの？私から見て、2人とも…………相応に強いんじゃないのかしら？生身である動きは中々、見ないわ」

「買い被りよ」

オトウールが水色髪の少女との言葉に対応する。戦えば負けると言うのはオトウール本心の言葉。疲労困憊のウイキッドを抱えながら勝てる程、甘くは無いのは理解している。何せ相手はISが7機、それに加えて日本刀を持った女性もいる。状況的に言えば圧倒的に

不利である事は否めないのだから。

「……取り敢えず、自己紹介から始めないかしら？ 私は更識 楯無」

水色髪の少女、楯無はその様に名乗り手に持った扇子を開いて見せる。扇子には『大胆不敵』と言う文字が達筆な筆跡で書かれている。

「オトウール……」

——この場で名前を言う訳には行かない。何故かは知らないけど、看守達が頻りにそう言っていた。外では、実名を出すのは余りにも危険であると。だから、半分しか答えるしか無い。

「変わった名前。外国の人かしら？」

「何の事？」

「気に障ったかしら？ それは、ごめんなさいね。私達としては状況が良く分かっていなくて、ちよつと困っているのよ。さつき迄、ISらしき物を纏っていて気狂いの男性達が襲って来るモノだから……」

「エインヘリヤル達の事？ 気にかけても無駄よ」

——エインヘリヤルはISによって殺された人間達の身体を利用して作られている。その程度しか知らない。ISが態々、人間の死体を持ち帰る意図さえも分からない。何故、持ち帰る必要があつて襲わせる理由に繋がるのかも分からない。何故、なのかしら？

「エインヘリヤル……？」

「私達は彼らをそう呼んでいる。殺しても、気にかけても無駄……だって、ガワだけ、だから」

「ガワだけとはどう言う意味だ？」

その時、後方から黒い機体を纏った銀髪の少女が前へ出て会話に参加して来る。お互い敵意が無いのを感じたのか纏っていたISを粒子変換して消滅させ生身で前へと出て来る。

「言葉通り……彼らは死んだ人間の死体が使われている。残念だけど、それしか知らないわ」

「死んだ人間の死体が使われている。遠隔操作か自律式のドロローンの素体として使われている。そんな所か……少なくとも歪だな」

「ISに見た目絡みを求めても仕方ないわ。ツ……ちよつと失礼」

或いは知人の姿を見せて動揺を誘っているのかも知れない。その

時、オトウールの持つ無線機に通信が入る。

『O13。何をしている？さっさと殲滅しろ』

「……敵対勢力じゃないわ。向こうも敵対するつもりは無い」

『……持ち帰れ。本来は殲滅命令だが……使いだがある。それが出来たら、貴様達の銃殺刑は免除してやろう。売女』

期待なぞしていない。コミユニティの連中はモノ程度の認識しかしていない。例え、それが未知のISを扱っている者であっても変わらない。だが、ある種の取引……自分達が生きるにはそれしか無い。選択肢は潰されてしまった。

——こんな事を考えるだなんて、私……最低ね。彼女達を身代わりに差し出す事で私達は未来を迎える。コレしか、無いの。殲滅出来なければ私達は殺される。悪いとは思っていない……私達が生きるには、こうするしか無いのよ!!? 騙すつもり……コレは確定的。構わない……ウイキ姫ちゃんを守る為なら、幾らでも汚名を被ってあげる。

オトウールは意思を固めた。幸い向こうは敵対するつもりは無い。そして情報交換をしたがっている。対する自分達は敵対するつもりは無いのは同等、しかし相手の事情などは知りはないし仮に知ったとしても奴隷同然の自分達が何か出来ると言える程の行動力は伴っていない。彼女達がどう言う存在で人物であっても、何も変わらない。至極、どうでも良い……戦場では、そんな事……些細な事だからだ。

「その様子だと、何かしらの勢力に属している様ね」

「……個人じゃとても生きていけないのよ」

——何方にせよ……悪夢でしょうけど。

「そう。少なくとも私達はエインヘリヤルなんて知らないし、見た事も無いわ。そして、この地域の荒れ様……何が起きたと言うの?」

「さあ?」

「さあ……て。お前、何も知らずに戦っているのか?」

「私が知っている事なんて、少ないモノ」

オトウールはしれつと告げる。牢獄内と戦場にしか居場所が無い。

戦う以外に自分の生存を肯定する事を認められない。それがA I Sである。そう、提示されたに過ぎない。

「……私達として現状を知りたいわ。少なくとも私達の知っている光景とはとても思えないわ」

知性ある生物は未知なる状況に恐怖し依存する対象を求める。安定化を図ろうとする精神的衝動を刺激する……例え劣悪なモノであつても依存する他、無い状況に追い込まれる事になる事だつてある。

「……何が言いたいの？」

「状況を知りたい。勿論、タダとは言わないわ。流石に其処までは図々しいとも言えるモノ」

——自分から踏み込むなんて……いいえ、知らないからこそ踏み込める。A I S達は使い捨て前提、代わりは幾らでも居る。馬鹿な人間は、使い易い。私つて、本当に最低ね。コミュニティの連中と同じだなんて……。

楯無達も右も左も分からない状態でこの状況を生き抜ける自信と保証は無い。何せ、非戦闘員達は勉学の優秀さは認められる……しかし、劣悪なる環境でのサバイバル能力も備わっているかと問われると即答は出来ない。

大半が良くも悪くも『戦場』とは無縁の比較的平和な社会生活しか知らない。そんな状態で現に見渡す限りの廃墟が建ち並ぶ世界で全員生存出来るかと問われると流石に無理だろうと言う予測が出来る。それに加えてエインヘリヤルと呼ばれる未知の存在が跋扈して戦術があるのは数名のみ。何れ限界が来るのはわかり切っていた。

だからこそ、安全圏域へと避難する必要があつた。多少の不自由さがあつても絶対生存であるのが最低条件……彼女、I S学園の生徒会長であるのならばその様に振る舞うだけ、そう、決めているのだから。「……つまり、私達の居るコミュニティに来たい。と言いたい訳ね？」「理解が速くて何よりよ。この様な状態になっている以上、いち早く状況を把握した上で打開策を講じなくてはならないのよ」

——打開策、何を打開すると言うのかしら？ 貴方達が何者で何処か

ら来たのかも知らないし興味が無い。貴方達は知らないみたいだから、心中で言つてあげる……此処から先は行き止まり。私達が生きる為に、犠牲になって……偽善者でも騙したとでも恨んでくれても構わない。私、物凄く汚くて酷い女だから。

「ええ。良いわ……詳しい話は直接、上の人に言つて頂戴。条件次第で、受け入れてくれるわ」

オトウールは楯無達を自分達の所属するコミュニティへと引き摺り込む事に成功した。寧ろ、向こうから来てくれたのは僥倖だった。浅学な自分の交渉力で引き摺り込めるか不安だったからだ。

——今日は本当に、死ぬかと思つたわ。ねえ、今日も生き延びれそうよ。ウイキ姫ちゃん。

オトウールは自身の背後に隠れる様に立っていたウイキツドの頭を撫でてそう暗い笑みを浮かべていた。こう言う時しか、頭を撫でたり抱き締める事が出来ない。

The road to hell is paved with good intentions

帰還する時、大量の車両が自分達の方へと向かって来るのが見えた。今迄見た事のある車の台数を遥かに上回る数、彼処まで数を揃えていたのかと素直に驚く。到着した車両から降りて来た男性達はオトウルやウイキッドから見て白々しい程の笑顔だった。さも当たり障り無く優しさを演出している様にしか見えない笑みを浮かべて楯無達が守っていた非戦闘員らしき少女達を次々と車の後部座席へと乗せて行く。幾つかは大型車両であり一先ずは全員乗せれそうである。と男性達は話している。その光景は普段の彼らからすれば寒気がする程に不気味に映った。

「ご苦労だった。さあ、早く乗って、休め」

2人にその声を掛ける。見た事が無い笑みを浮かべて近付いて来られても不気味にしか見えない。

——本当はそんな事を、思っていない癖に。人前の時だけ『何も黒くありませんよ』と言う体裁を取るのには腹立つ。お前達の腹はドス黒くて、血を血で洗っていると言うのに。

ウイキッドは内心で自分でも信じられない程の毒を吐いた。かなり酷い扱いしてくる相手が優しくなる時は大抵が外部の人間が来た時だけ。外面だけは何も問題無い様に振る舞う様は醜いの一言に尽きた。この時、2人は生まれて初めて車両の後部座席に座らされた。今迄はトランクに詰め込まれていた、どうやらコミュニティに着くまでは『人間扱い』の様である。

「……今回だけだ。雌豚共」

「……」

車両の運転席からその様な蔑んだ言葉が投げ付けられる。ああ、変わらない。彼らは薄汚い連中のままであると再認識する。外面の仮面は小綺麗だが内心は畜生であるのは変わらない。そんな仮面に騙

される彼女達も不幸だろう。最も、そんな連中に騙して連れて行く橋渡しをした自分達も大概、最低と言えるのだが。

「……うに」

後部座席でオトウールの膝の上にウイキッドがちよこんと座りオトウールの豊満な胸を枕にして居眠りを始めた。たったの3分しか眠れていない上に疲労もかなり溜まってしまっている為に即座に夢の世界へと旅立って行ってしまった。

「……チツ。屑の雌餓鬼の分際で居眠りとは良いご身分だな」

「……眠る事すらも認めないって言うの？」

「黙れ、貴様らA I Sのクソ餓鬼共に意見なぞ認めていない。兵器は兵器らしく壊れるまで戦え、そして死ぬ。貴様達の存在意義はそれだけだ。夢や希望があるなどと思うなよ。貴様らのような屑女の所為で、こんな世界になったんだ。貴様らの様な屑が世界を壊した。ならば貴様達が責任を持って世界を元通りに戻せ」

酷い言い分だと言うだろう。だが、現実問題……女尊男卑が要因であるのは否定出来ない事実。そして『負の遺産』も存続した結果でもある。『傲る女共が原因、ならば女共が帳消しにする形を為せ』。それが彼らの言い分であった。先達の罪を今の自分達が償え……そう言う事なのだ。

「……全く、女尊男卑の所為で世界は滅茶苦茶だ。なあ、オイ？女は男よりも強いんだからI S相手でも余裕で勝てるよな？何せ、男は残念ながら弱いからな……だったら強い奴が最強兵器の相手をするのが合理的で1番手っ取り早い。別に食事も不要な程に必要なは無い。睡眠の概念が無い程に行動出来る、そして疲労の概念も無い……それが貴様ら女尊男卑の連中だろう？」

眠りの概念が存在する男性達と違って、女性には眠る必要はない。

空腹になる男性と違って、食事をする必要もない。

疲れという感覚を知る男性と違って、24時間働き続けられる。

それが女尊男卑に生きる女性達の概念であったと彼は語る。それを逆手に取った無慈悲な論理が此処に構築されていた。最強ならば最強の存在に立ち向かえる、男性達は弱い為にその戦禍から逃れ、I

S 達の脅威から隠れて生きるしか無い。全ての犠牲を A I S に集中させれば自分達は生き延びられる。それはかつて女性達が男性達へ向けて虐げて来た行為の一種をそっくりそのまま返却しているに過ぎない。人間扱いして来なかった連中の分際がいざ自分達がその様な境遇に陥れば文句を言う、何様のつもりだと言うモノであった。「……………」

「親の尻拭いをするのは子供だ。遺産相続ってのは資産の他にも借金も含まれるモノだ。奴らの残した遺産がコレだ!!? 返し切るまで、自由になれると思うなよ?」

——させる気など無い癖に。そんなの、暴論も甚だしいわ。

オトウールはそんなモノ、要らないとしか言いたく無い。だが、言った所で聞き入れる筈がない。過去に何があつたのかは知らないし知る事など出来ない。起きてしまった現実を覆しようが無いのだ。彼女達を乗せた車両群はコミュニティ内へと入って行く。彼女達は思い知るだろう、避難先はとてつもない地獄の様な光景が広がっているのだと……そして死ぬ迄戦うしか生きる道は無いと言う事を身を以って知る……。

——今日は生き延びれる。でも、明日は? 明日、私達は生きていられるのかしら? 最近はいんへりヤルが襲って来る事は大半だけど、I S が現れたら……。

エインへりヤルは知能が低く(それでも陣形を組める程度の動きはする)、対処法が分かれば対応は出来るし一掃は出来る。だが、I S 以上の存在が相手だとも行かないだろう。間違つても相手は『チート兵器』だの『最強兵器』だと謳われた事がありその実、本当にその通りなのだから。

車両から降ろされた先に広がるであろう駐車場には一足先に到着していた車両から降りて来た非戦闘員達の少女達が集まって談笑している。その様子を見てると何とも遣る瀬無い気持ちに陥る。助かった、何とかなった。とオトウールからすれば何の事かは分からないが、その希望も無残にも打ち砕かれる事になるだろうとは知らない者達。知らぬが仏とは正にこの事……現実を知れば、笑う事などもう

出来ないだろう。

——皆、似た様な色合いの服装をしている。歳も同じ様に見えるわ。それにしても予想以上に人数が多いわね。

駐車場はそこそこ広いがその半分以上を埋め尽くしている様にも見える白を基調とした服装の少女達。黒の配色が多いコミユニティ内では異様にも映る。短いながらも仮眠が取れたウイキッドを優しく起こしてから自身も車両から降りる。一応、人前だと言う事で何時もみたいに髪の毛を掴まれて地面に叩き付けられたり、蹴られたりはしなかった。

「さっさと行け」

小さい声音でこの場から消えろと命令される。恐らく誰も見えない場所で拘束具を付けられて牢獄内へと叩き込まれるだろう。その程度の予想は出来るしそれは日常であり現実だ。そう言った現実を前にして抵抗する気力は無いので従う様に歩き出して駐車場を後にする。

○

「まったく、女共が彼処まで集まると臭くて敵わん。あんな蠢蠢しい臭いの中に居たら気が狂うって奴だ。ほら、さっさと腕を出せ。雌豚共」

駐車場から離れた先まで歩かされ、視認不可な位置まで辿り着いた直後、頭を掴まれて硬い鉄板床に頭から叩き付けられる。鈍い音がすると同時に組み伏せられて腕に付けられた拘束具を連結されて何時もの拘束された状態にされる。

「ッ……!!?」

「全く、兵器の補充は大切だが同時に面倒事もやって来るとは、なッ!!」

「……ガッ、ハッ……!!? あ、アッ……!!?」

そして、お決まりの私刑が始まる。今回は腹を直接蹴られて転がされる。その行為が何度も行われ、蹴られる度に口の中の唾液が吐き溢されて咳き込む。どうやら素直に歩いて牢獄に戻される訳では無く蹴り転がされて戻される様である。

「…………ぐ、あつ…………がッ…………!!？」

体躯が小さく余り食べれていないウイキッドは簡単にすつ飛ばされて行く。完全にサッカーボールの様な扱いで何度も蹴られて行く。

「オイ、牛女。貴様は本当に随分と胸がデカいな？そんな色気で何回、売春したんだ、あ？安い女だな、おい」

「ぐっ、あ…………っさい!!？」

オトウールに至っては胸付近を強い力で踏み付かれて肺の中の空気を無理矢理吐き出される。身体の彼方此方を蹴られるが腕が拘束されている為に思い通りに立ち上がる事が出来ない、故に蹴られ続ける。

「おい、日本語で喋ろ。日本語すらも、分からないのか!?!? あッ!!？」

「…………がっ、あ、はっ…………!!？」

任務が一応成功したにも関わらず2人揃って男性からの私刑による暴行で三度、ボロボロの状態にされた。いや、怪我が無かった時など無かったかも知れない。蹴り疲れたのか飽きたのかは分からないがその私刑が終わった後、2人はゴミの様に牢獄内へと放り込まれた。

「…………ったく、何人使い物になるかは分からないが、売り物になれば良い奴もいるだろうさ…………その金でうまいモノでも食うか」

朦朧とする意識の中、牢獄の外でその様な当て付けの様な言葉が聞こえて来たが既に意識は遠くになりつつあった。どうせ、自分達には関係が無い…………そう切り捨てて遂に意識を手放した。

現実の悪夢

——眠れた時に偶に夢を見る。それは自分では無い夢。

深い深い森の中。人里離れた森林地帯。其処に小さな一軒家が建っていた。其処に1人の孤独な子供が住んでいた。

『……………』

長く綺麗な皓き光沢のある髪を靡かせた金色の双眸を持った少女の造形を成している。その少女は白と赤の服をその身に纏っているのが見える。

——見た事の無い服。アレは何て呼ぶのだろうか？

その少女は夜天に広がる大空を見上げている。遮るモノが無い満天の夜空が広がっており星々の光が見える。

『……………』

その時、一筋の光が横切る。流星が見えた、それは1つだけでは無く何回も横切っていく。流星群と呼ばれる光景だ。

『……………星、綺麗……………ツ……………！』

突如、夢は其処で途切れた。認知していた夢の光景は崩れ去り黒い世界に塗り潰される。

「んむう……………？」

——夢？空って、あんな色にもなるのかなあ？

気を失っていたらしい。周囲を見渡せば何時も通り代わり映えの無い錆だらけの壁、土の床、頼りなく回る換気扇……………自分達にとつて唯一の平和な世界である牢獄の光景が広がっていた。腕は何時も通り拘束されており動かせる筈も無くガチャガチャと言う金属音が虚しく響く。

「ウイキ姫ちゃん。眠れたかしら？」

「ん……………」

壁に一足先に起きていたオトウールが凭れ掛かっていた。頬付近には擦り傷だらけで一部は腫み始めているのが見える。ウィキッドは這い摺りながら壁付近に近付いてその隣に凭れ掛かる。

「……何時間経ったのかな？」

「さあ、分からないわ……次の日だと思っただけ……牢獄には時計も日付を示すモノは無いから、感覚が分からないわ」

時間の概念さえも奪われている。終わりの見えない戦闘のサイクル。兵器に時間の確認の有無は必要ないとも言っただろう。

「……何か、聞こえる。コレは……悲鳴？」

『如何して!?? 何で!??』

『嫌だ、やだ、ヤダヤダヤダアア!!?!?!?』

『来ないで、こ、こつちに来ないでえ!!?!? い、嫌アアアアア!!?!?』
牢獄の外から聞こえて来るのは苦悶にも似た絶叫の様な悲鳴。凡そ、何が起こっているのかは予想出来る。どうやら洗礼が始まっていた様である。何も知らずにホイホイ付いて来た彼女達。最初こそ、歓迎されている体裁を保っていた……退路を塞ぐ様に奥へ奥へ案内されて、遂に本性を露わにされた際にその現実を知ったのだろう。

「……やっぱりこうなったわね」

「オト姉。分かっていたでしょ？」

「ええ。私達が生き延びるには、そうするしか無かった。彼女達も、あのままでは未来は無かったでしょうけど……」

——明日死ぬか明後日死ぬかの違いだと思う。でも、1秒でも長く生きていられた方が幸せだとも思う。私達の命は、安いから。

『だ、騙したって言うの!??』

『そんなの、不条理よ!!?!?』

『様子が変だと思っただけは居たが、其処までとは!??!?』

『くっ、この状態じゃ……手も足も出せないよ……!!?!?』

言い争う声も聞こえて来る。気付いた時には時既に遅し……恐らく彼女達が強くても人質を取られてしまっただろう。どうする事も出来ないだろう。何せ非戦闘員の人数が余りにも多過ぎる。

「……何人、生き延びられるかな？」

「其処は彼女達の頑張り次第ね」

A I Sは成り立てが1番、死亡率が高い。当然だ、何せ碌な戦闘訓練を施されずに戦場へ放り出されるのだから、実戦で生き延びれば強くなる。そんな理論が罷り通っている。

まあ、常にエインヘリヤルやI Sとの戦闘が起こり得る環境故に呑気に戦闘訓練など出来る筈も無いのも事実。と言うよりも、そんな下らない事に時間なぞ割きたくはないと言うのが本音だと思われるのだが。ウイキッドと同時期にA I Sとなった者達は死亡するか行方不明になるか、或いは他のコミュニティに売り飛ばされたかの何れか。

A I Sは場合によっては金銭での売り買いに使われる事もある。当然、均等の取れた身体付きや美少女だと持て囃されるだろうA I Sも存在する。そう言った者達は戦場に出されるよりもヨクボウの捌け口に使った方が良いと言う一定多数の人間も存在する訳で、『商品』扱いで高額で取引される。売り飛ばされた先でどんな目に遭うかは本人しか知らない、最もA I Sの現実から大概が碌な目に遭わないだろう。

——臃げに聞こえた言葉。多分、何人かは売られる。大した労力も無く大量の少女達が手に入った……使えなくても売物としての使い道はある、つて所かな。

元々、A I Sは奴隷同然の存在。凡ゆる抵抗は無意味かつ無駄な行為。人権は無いに等しい。抵抗すれば暴力を振るわれて捨てられる、身体的能力で男性には大抵は敵わない。

『待つて、何処へ連れて行くつもりよ!!?』

『い、い、いや……嫌アアアアア!!?!!?』

『だ、誰か、誰か助けてエエエエ!!?!!?』

『嘘よ、コレは夢よ。夢なら早く覚めてエエエエエ!!?!!?』

現実を否定する声も響き渡る。悪夢の様な現実を目の当たりにして拒絶反応が反響して広がる。しかしそれも直ぐに途絶える。何時も通りの私刑も同時に始まる。鈍い音と嗚咽に似た悲鳴が響き渡るのだから。

彼女達からすれば体罰などの概念など生まれて初めて体験する光景だろう。元々、体罰は日本では禁止行為に定められている上に女尊男卑で少年には行われて居ても彼女達の様な年齢で嗜血を伴う程の体罰はまず体験する事は無かった。それが、現実となって現れている。時間が経過する事により悲鳴や鈍い音も聞こえなくなつて来た。恐らく現実を目の当たりにして抵抗する気力を失つたのだろう。

騒げば自身にも降り掛かる。暴力は、痛いのは嫌だ。だから従順になる。威張る事は出来ても暴力的な存在を前にして、何も出来ない。それが彼女達だった。最も、昨日前まではこの様な環境では無かった者達相手にコレは酷い話ではあるのだが。

「……終わった、みたいね」

登音が此方へ近付いて来る。コミュニティ内には牢獄は幾つも存在する。恐らく全員は入りきらないだろう……牢獄に入り切らず余った者達は何処かの物置に押し込められる可能性もある(或いは即日に売られるか)。最も『兵器』故にその辺の人権など考慮される筈も無いのだが。

鉄格子の向こう側から見えて来た後ろ手に拘束された数人の少女達。昨日までは汚れすら無い白い色だったお揃いの服は血や吐瀉物と言つた色々な要因により汚れている。誰もが未来に絶望したかの様な表情で看守に連れられて歩いている。余程、酷い光景を目の当たりにしたのか操り人形の様に従つて歩いている。

——酷い顔。私刑を目の当たりにしたら、大半がいなくなるか。殴られ、蹴られ、踏み躪られて……痛い思いをすれば何も言えなくなる。

牢獄の扉が開けられ蹴り飛ばされる形で2人程の少女達が牢獄内へと放り込まれる。小さな悲鳴が聞こえて来るが看守がそんな事、考慮する筈も無い。その他の少女は別の牢獄に入れるつもりなのか、別の場所へと歩かせて行く様に牢獄の前へと横切つて行つた。

「痛っ……何なのよ。アイツら……!!? 髪の毛さえもケチ付けて来るなんて……!!?」

「情け容赦が全くありませんでしたわね……」

放り込まれて来たのは片方がツインテールの勝気そうな少女とも

う片方は今の時代ではまずお目に掛かれないう大和撫子と言った容姿の少女だった。腕を後ろ手に拘束されている為に座る体勢に移るのも一苦勞で半ば苦戦しながらも起き上がる。そして、オトウールとウイキッドと目が合う。

「あ、アンタは……!!?」

「あら……あ、そう言えば、あの時に見かけたわね」

オトウールはそう言えばあの時、戦闘に参加していた者達の中に目の前のツインテールの少女が居た事を思い出した。当時の彼女は茶髪だったが今の彼女の髪色は真っ黒に染められている為に少し思い出すのに時間が掛かった。A I Sには人権は無いので髪色さえも指定される。茶髪や金髪、その他の色は認められず廃棄処理前の重油を使つて強引に染める(勿論、本人の生命に対しての考慮は無し)。現に目の前の少女も強制的に染められたのだろう。

「……えと」

「うん?」

ウイキッドともう1人の黒髪長髪の少女の2人は蚊帳の外。その時、ウイキッドはオトウールの後ろに隠れて居たし黒髪長髪の少女も非戦闘員組に紛れていたので2人の関係は知らない。

「……アンタ、こうなる事を分かっていたの!?」

コミユニティに来る事を認めた。そしてこの様な状況になるであろう事を予め知っていたと少女。凰 鈴音は憤る。

「ええ、そうよ。半ば分かっていたわ……そうしないと私達、殺されるから」

「殺されるって……!?」

「言葉通りの意味。あの時、私達の任務は複数のI S、状況的には貴方達の事……つまり貴方達を皆殺しに出来なければ処刑される状況だったの」

相手を殺すか或いは殺されるか、世界とは現実とはたったそれだけで出来ている。極限的に現実を表現するならば生命とは『殺し合う』モノだと、言えるのかも知れない。

「処刑って……そんなの……!!?」

「私達、A I Sに人権なんて無いのよ。許されるつもり無ければ謝る気も無いわ。私達は生きる為に貴方達を道連れにするつもりで地獄へ落とした。ようこそ、本当の地獄へ」

新たなる奴隷としての現実を突きつけられた2人の少女に対して、オトウールはいけしやあしやあとそう告げた。

過去と未来、戦争と平和

「……仲良く、出来ると思っっているワケ？」

「残念だけど、他のコミュニティも似た様な状態よ。そうでなくても貴方達はあの状態で生き延びる事が出来た？」

「……それは」

鈴音は即答出来なかった。確実に勝てた、とは言えない。状況的に満身創痍でジリ貧……ウィキッド達が現れなければ蹂躪されていた可能性の方が高かった。

「……鳳さん。怒るのは分かりますわ。ですが、彼女達にも事情があつたみたいですから」

「鈴で良いわよ。私も神楽って呼ぶから……って、今更だけどアンタ達も監禁されている様な状態じゃない？」と言うか、蒸し返すけど処刑ってどう言う意味なのよ？」

神楽と呼ばれた少女の横槍によって鈴音は少し頭が冷えた。確かにオトウールによってこの様な悲劇が起きた。しかし、オトウールが現れなかった場合、もつと残酷な悲劇が起きたであろう事は今の鈴音の頭を過つた。コレが助かったと言えるかは分からないのだが、取り敢えず話をせねば何も分からないのは確かだろう。

「……罵り合うのは何時でも出来る。良いわ、私達……AIS達の現状を話してあげる。そして、知って頂戴……私達の現実を」

オトウールは2人にAIS達の現実を自身が知っている限り、説明する事にした。その事実を聞いて2人は青褪める。余りにも不条理で理不尽なる状態である事を、そしてどうしようもない程に酷い有様だと言う事を。

「ISの反逆。その理由が昔の女尊男卑……」

「……ISの自我、そして大きな罪を償う為に全ての権限を奪われて戦闘行為に駆り出される……」

「人権は無い。逃げる事も出来ない、逃げれば生体ナノマシンで爆殺

……拘束するのも抵抗する術を奪う為……何よコレ、八方塞がりじゃない!?？」

「命令に従わなければ私刑による暴力……だから、あの様な行為を行われても誰一人として平然としていたと言う訳なのです……」

鈴音と神楽は内容を理解する。その事実故に自分達もその状況に巻き込まれた。そして、ある事に気付いた。

「……どう考えても、その昔つてのは私達のいる筈の過去の世界の話ね。そうなる」と

「今の私達は、私達から見て未来。と、なり得ますわね。確証は持てませんが」

鈴音と神楽は自分達が今、自分達のいた時代では無くどうしようも無い事態へと直面した未来の世界か並行世界へと迷い込んでしまったと予測を立てた。そうでなければ、説明付けない箇所が多い。何よりI Sの自我が芽生えた上に進化するなどと言う現象、多数のエインヘリヤルの存在。それらが発覚すれば全世界に波紋が広がる筈である。

「……未来? 私からすればそんな事は知らないし、どうでも良いのよ。知らない事だから……」

「……興味薄ッ!?？」

「鈴さん。仕方ありませんわ……いきなり過去だの未来だの言っても大半の方は相手にしませんわ」

「はあ、考えるだけ馬鹿馬鹿しくなって来たわね……想像以上の事ばかり起きて頭の処理が追いつかないわ」

鈴音はどうでも良いやと言わんばかりに投げ出した。起こってしまった事に対してとやかく言っても仕方が無い。コレが現実なのだからどれだけ文句を言っても状況が変わる訳では無い。

「……アンタの行動も元を正せば此処の連中の命令。そうなんですよ? あの時の無線通信、そんな命令だったんじゃない?」

「ええ、そうね。言われなくても貴方達を売り飛ばす形で生き残る手段を得ようとも考えていたけれど」

「アンタ、見た目以上に性格悪いわね……」

鈴音はオトウールの行動は命令に基づいた行動だと推察してそれが当たりであると判断した。最も、オトウール自身もそのつもりだった様である。

「そうであったとしても謝るつもりは無いわ。生きる為には何でもしなきゃいけないのよ。そうしないと生を繋ぐ事なんて出来ないから……」

気付けばウイキッドはオトウールの膝を枕にして又、眠りに付いていた。牢獄の中、寝るか誰かと話す事以外にする事は何も無い。牢獄内には他にもA I S達は居るがほぼ全員が廃人寸前で何も話そうとはしてこないし誰かと関わろうともしていない。自分達の現状、そして未来に絶望して流されるままに死に体の状態で生きている。恐らく、長くは保たないだろう。その内、糸が切れた様にその命が終わる。

「……そう。私もアンタと同じ立場だったら、きっと私もアンタと同じ事をしたわ。相手を利用して生き延びる……踏み台にしてでも生き残る。そんな世界を知っているから」

自分達の現状を噛み砕いて理解した鈴音はオトウールの隣、ウイキッドの反対側に位置して壁に凭れ掛かる。

「仲良くするんじゃないのかしら？」

「……正直、頭の整理は付いていないわ。幾ら叫んでも現状が変わる訳じゃないでしょ？腕が使えないし頭にナノマシンとか入れられているし、どうする事も出来ないじゃない……その内、周りにいる同業者みたいな状態になっているでしょ？」

鈴音はそう言い周囲を見渡す。地面に横たわっていたり壁に凭れて沈黙を続けている他のA I S達を見てそう呟く。今の自分達は正常だが、期間が長くなれば恐らくあの様な状態になるだろうと言う憶測も脳裏に過ぎる。

「……それに、私は理解が早い方かも知れないけど……他の連中はそうも行かないでしょうね」

牢獄の外、他の牢獄からであろう場所から悲鳴滲みた声が聞こえて来る。恐らく現状に納得出来ない新参者達が牢獄内で暴れ、看守からの私刑を受けているのを繰り返しているのだろう。

「良くも悪くも、平和な世界に生きていた人達ですから、突然、この様な牢獄暮らしとも言える環境は流石に堪えるでしょう……耐え切れぬかは分かりませんわ」

「……そう。正直に言えば半数も生き残らなさそうね。A I Sは生死の間にいる様なモノだから」

オトウールがそう告げると近くで地面に何かが倒れる音が聞こえる。壁に凭れ掛かっていたA I Sの少女の1人が身体の支えを失って地面に横たわった。

「うに……う？」

その小さな音に気付いたのかウイキッドが蠢きながらも目覚める。そしてじーつと、横たわるA I Sを見つめていた。

「その子、ずっと彼方の倒れている人に向かって見ているけど……」

起き上がったウイキッドは壁際に横たわるA I Sに近付いて頭を降ろして何かを確認する。

「……死んでる。息、していない」

「え……う？」

ポツリと呟いた声に神楽は思わず言葉を零す。その様子を見て鈴音も眉を潜めた。瀕死寸前であっても牢獄内に放置されている現状に対して呆れの表情が浮かんだのだ。見た限り劣悪であるのも分かっていたが、此処までとは。そして、2人は更なる驚愕を目の当たりにする。

「……ッ!!??」

ウイキッドは死んだA I Sの首筋に向かって噛み付いたのだ。A I Sスーツがある為に歯が突き刺さりらないので生身の部分である首から上に向かって犬食いの状態で喰らい付いた。

「もぎゅ、もぎゅ……!!??」

腕が使えない為に必然的に犬食いとなる。だが、今更気にしても仕方ない。そして、その様子をを見て看守達は『雌豚』だと揶揄するのだ。

「ひ、人を食べているの!?? あの子は!??」

「……」

カニバリズムの行為など間近で見た事の無い2人からすればウイキッドの行動は正に異常で常軌を逸する行動と言えた。人が人を喰らうなどと考えられない行為だからだ。

「……ウイキ姫ちゃん。私も、貰うわ」

そしてオトウールも又、ウイキッドとは違う方向、正確には耳付近に喰らい付いて耳を食い千切り咀嚼そしゃくする。理性ある者が理性なき行動をする……人を喰らってでも生き残る。正に此処は、地獄と呼ばれた。

「……もきゅ、もきゅ……」

「あ、アンタ達。し、正気……なの？」

鈴音は震えた声で耳の肉を噛み潰して食べているオトウールに聞く。小さいウイキッドの方は今も一心不乱に喰らい付いている為に横槍を入れるのはマズいと本能的に察した。

「死体は死体よ。食べれる時に食べないと、身が保たないわ……肉なんて早々、食べれる様なモノじゃ無いから」

「だ、だからと言って死んだ人間の肉を食べようとは……!!？」

「貴方達の常識を説かないで……貴方達の生きていた世界なんて私からすれば夢物語でしか無いの。平和とか、そんなの……あるのならば見てみたいわ」

オトウールはそう告げた後に別の肉を喰らい始めた。

『平和を知らない子供』と『戦争を知らない子供』との価値観は違う。大いに違う。生きる為に戦わねばならないと言う環境、そして無理に戦わなくても生きていける環境。何方も悪い訳では無い、その相違点は大きく隔てている。オトウールの言い分も鈴音達の言い分も、何方も正しい訳でも悪い訳でも無いのだ。

常識の為の葬礼

凰 鈴音と四十院 神楽の2人は現状を理解するがそれでも納得は出来なかった。幾ら劣悪な環境と雖も必要最低限の基準はあるだろうとは考えていた。だが、その考えは余りにも甘かった。それは牢獄暮らしが始まって数日の間に嫌と言う程に思い知らされた。

碌な訓練も無しに実戦投入の出撃。頭ごなしの命令の数々。作戦の成否に関係なく行われる理不尽な私刑。休息さえ余裕無しの再出撃。睡眠さえもマトモに取らせてくれない。

そんな過酷過ぎる環境で自分達がどれだけ恵まれた生活を送っていたのかを思い知らされる……豚や牛、塵や屑呼ばわりで人間扱いさえして貰えないと言う現実、希望さえも打ち碎かれるかの様な思いをする事となった。

「……オト姉。コレ、死んでる？」

「二応、息があるわね。新人と言う事で随分と乱雑な扱いをされているみたいね」

鈴音と神楽が収監されてから数日後の牢獄内。任務へと外へと放り出されてその2人が牢獄へと帰って来て数分後。何時も通りの私刑が2人に対して降り掛かり傷だらけの状態で牢獄の中へと叩き込まれる。倒れたまま、動かない2人をウィキッドが足先でつんつんと突いている。

「む、無茶苦茶過ぎる、わ……反論の余地無し、って」

「鈴さん。噛み付けば噛み付く程に報復され、ますわ……!!？」

鈴音が私刑に対して抵抗した為か余計な傷を増やす事を繰り返している様である。その為、神楽と比べて鈴音の生傷が多い傾向があった。

「……お腹が空いたわ。此処に来てから何も食べていない気がする」

鈴音は仰向けになって天井を見上げつつ、そう呟いた。天井も又、煤だらけかシミが多く錆び付いているのがよく分かる。

「……………うに。次の配給は、オト姉……………何時だっけ？」
「うーん。人数が一気に増えたから……………多分……………2、3週間後じゃないから？」

ウイキッドはうろ覚えだった為にオトウールに尋ねるとA I Sの人数が一気に増員された為に食糧配給的な問題で間延びになるだろうと考えた彼女は予測として2、3週間後と予測を立てた。その言葉を聞いた鈴音は飛び起きる様に2人の顔を見る。

「は、はあ!?? それ、冗談じゃないでしょうね!?? 睡眠さえも碌に取らせてくれないって言うのに、食事さえも乏しいって正気!??」

「ええ、向こう側からすれば女性が強い存在だから食事なんて少なくとも働けるだろう。と言う認識よ。この前なんて1週間に1回の間隔だったわね」

「冗談も程々にしなさいよ。何よ、それ……………どう言う解釈したらそんな結論に辿り着くのよ」

女尊男卑で暴れ回ったツケが一気に降り掛かって来る。当然、反論の余地なぞ与えられていない。食事や睡眠の概念を排斥したとしても女性は生きて24時間戦える。それが当然であると言う認識が蔓延っているのだ。

「因みに……………どんな食事が……………?」

「んーと。小さいカプセルみたいな薬が1人、1個」

「たったそれだけ!?? 女は少食って言うけど、幾らなんでも錠剤1粒だけだなんて無理があるわよ!??」

「満足に食事さえも与えてくれないのですね……………」

「……………でも、余り口にしない方が身の為よ」

数少ない牢獄内の食事、その内容を聞いた鈴音と神楽が慄いているとオトウールから口にしないう方が良いと言われる。

「……………内容は分からないけど、食べていたら……………あぁなってしまうわ」
オトウールは首を動かして同じ牢獄内にいる他のA I S達の方へと視線を向ける。壁や床に横たわっている彼女達はその薬剤を摂り続けた成れの果てだと言っている。その事に気付いたオトウールはウイキッドに錠剤を摂らせず戦場で食糧を探す事にしたのだ。どん

な成分が含まれているかは分からないが碌な内容では無いのは確か、そして痛覚を消すと言う事は分かっている。明らかにヤバイ代物だろうと言う予測は立つ。

「……嘘、でしょ？じ、じゃあ……」

「私達は使い捨て前提。死んでも代わりは幾らでもいる……と考えて居るのでしょね。死んでも構わない、使えない奴は囚任務に駆り出されて高確率で死亡する。生きている人は酷使され続けるわ……」

「そ、そんな……!!？」

戦い続けなければ生き延びられない。生き延びたとしても地獄は続く……死ぬ迄戦わなくてはならない。それが自分達に課せられた現実。自由と尊厳を奪われ過酷な毎日を送る。そして身も心も限界を迎えて諦めた時、死ぬのである。

「私達が……て、言っても……聞き届けはしないか。ちよつと寝るわ……誰かと話すのは気休めにはなるけど……流石に疲れたわ。起こさなくて良いわ」

「……私も、身体中が痛い……せめて、眠って休むと致しますわ……」
鈴音はそう言うや否や壁際に転がって行き目を閉じて眠り始めた。ウィキツドの最初に見せた異常な行動を察するに死んだと思われたら物理的に喰われる。だから前以て『寝る』と言って置かないと死んだと思われて捕食されてしまう。一応、オトウールが止めてはいるが飢えた状態だった場合、聞かない可能性がある。こんな環境では良心よりも本能が優先されるであろう事は鈴音と神楽、双方とも理解していた。

「うー……お腹空いたー」

「ウィキ姫ちゃん。今度、戦場に出たら……食べれる物を探しましよ？」

背中の方からウィキツドのそんな声が聞こえて来た為にオチオチ眠っては居られないと言う現実と背中合わせ……敵よりも身内の方が怖いとはこれは如何に。生きると言う事が此処まで過酷とは流石に思ってはこなかった。そう考えると、現代人はどれ程恵まれている事か。

「ん。そうする……」

オトウールの言葉にウイキッドは一先ず剥いた歯を収めた。生きる為なら、虫だろう人間だろうと喰らいつく野生児其の物な彼女は身内であっても死ねば喰らう。共食いとも言われるが本人はそんな言葉を知る事も理解する事は暫くは来ないだろう。

「んー、人数が増えたから出撃の機会が少し減ったわね。一応、回し回しで新人の方を出しているからかしら？」

そうなってしまうれば必然的に食糧を得られる機会が減ってしまう事にも繋がってしまう。それはそれで、自分達にとつては死活問題。かと言って出撃させるとは言えない、言えば恐らく私刑が待っているだろう。その時、牢獄の格子の隙間から男性が姿を見せる。その男性は牢獄の扉を開けてズカズカと入ってくる。

「コード：O13、コード：U31。喜べ、そんな貴様らの為に、拷問をくれてやろう。態々、用意してやったんだ。さっさと来い。雌豚共」

「え、ちよ……？？」

いきなり現れて拷問を始めると告げられた。当然、拒否権などある筈も無く髪の毛を掴まれてウイキッドとオトウールは2人とも牢獄の外へと引き摺り出される。

「い、痛い、痛い……！！？」

「ふん。精々、良い声で泣くんだな？AISを大量に確保した褒美だ。専用回線で配信してやるんだから、変な放送事故を起こすなよ」

拷問Ⅱご褒美と言う謎の図式が成立している。ありがた迷惑とは正にこの事だろう。当然、2人とも抵抗出来る筈も無く拷問が行われる部屋へと連れて行かれた。

Bloodstained Festa

成層圏に浮かび上がる巨大な存在。それは外見を一言で言えば異様としか言いようが無い程に不気味であった。細胞が集まった光景、いや筋肉の筋が重なり合った光景、或いは骨髄が絡み合った光景、兎に角異様な存在であるとしか言いようがない。分かる事は、それは人間のナニカで形成された物体であると言う事。その巨大さから小さな惑星と形容しても良いかも知れない。人間から見ればそれでも充分、巨大なモノであるが。

『……どうやら、異分子が紛れ込んだらしい』

その存在から聞こえるは機会音声か人間の声か何方とも受け取れる声。しかし、それを聞き届けられる者はこの場に居ない。

『娘達よ、息子達よ。問おう、愚かなる人間達の真意を』

『……淘汰を始めよう。人よ、更なる進化を……見せよ』

大空が揺れた気がした。その存在から白い光と黒い光が伸びた、気がした……そして響き渡るは、甲高い咆哮……。

○

戦争を娯楽とする人間がいる。兵器を娯楽として使う人間がいる。その事に関して誰も疑問は抱かない……何故ならスポーツと言うのは人間が持つ『闘争心』を害なく発散する為に発明されたモノなのだから。どの様な凶器であっても『スポーツ』であるのならば公認となつて成立する。I Sも見ることから兵器であるが『スポーツ』と見做す事によつてその存在価値、市場価値を見出し浸透する事が出来た。故にA I Sを使つて娯楽を作る行為も、何ら不自然では無いのであ

る。

2人が引き摺られた先の部屋で2人は硬い床へ放り出された。髪の毛を引き摺られた為に髪の中の痛みと共に軽く咳き込んだ。

「さて、貴様は先に来い。おい、お前は其奴の用意をしておけ」

「……ッ!!??」

ウイキッドだけが放置されオトウールだけが先に引き摺られて隣の部屋へと連れ込まれる。この先は拷問部屋と呼ばれる部屋だった筈。2人同時に入られないと言う事は何かしら用意されていると言う事なのかも知れない。

「……ッ、オト姉……あぐっ!!??」

「誰が喋って良いと言った!?!」

1人、残されたウイキッドは扉の先へと視線を向けて口を開くがその行為を咎める別の男性に頭を掴まれて硬い床に顔面から叩き付けられる。口を開いていた為に舌を噛んでしまい軽く悶絶する。

「う、うう……!!??」

その時、耳元近くで金属質な音が小さく響いた。それと同時に感じ取れる首元の違和感と腕が解放された感触。後ろ手に拘束されていた拘束具が解かれた事を意味する。ウイキッドは座り込んで首元を触って見る。重くて冷たい感触……それは首輪と呼ばれるモノであり、『支配』の意味を持つ拘束具の一種であった。

「その首輪は遠隔操作で爆発する仕組みになっている。変に外そうとしても防衛機構で爆発する。爆発の意味くらいは馬鹿な貴様でも理解は出来ている筈だ」

「……ッ!!??」

悪戯に外そうとすればその時点でウイキッドの命は無い。そして歯向かえばその時点でもアウト、遠隔操作で爆殺される。頭に生体ナノマシンに腕に拘束具、そして首輪と言う雁字搦めに縛り付ける拘束。仮に片方をどうにかしても片方が残る二段構え。

「……最近、貴様らは反抗的な態度が目に見える。貴様らの様なAI Sの分際で希望を持つなど許さん。よって、再教育が必要であると判断した。やはり目に映る形の方が従順になると言うモノだからな」

「……………」

首輪には長い鎖が付けられておりその鎖は男性が手綱のように握っている。引つ張られれば簡単に転がされる。首輪を付けられると言う事は支配される事を意味している。

「少しは自分の立場が理解出来たか？変な行動を取れば手が滑って貴様の頭が吹き飛ぶだろうな？」

「うう……………」

——首輪、凄く嫌だ。逃げたい、でもオト姉が…………。

「…………立て。腕は使えるだろう？立たないのならばいつも通り引き摺ってやろうか？」

痛い思いは好き好んでしたくは無い。命じられるままにウイキツドは座った体勢から立ち上がる。今迄の私刑とは様子が違う、何時もならば殴る蹴る等の暴力…………暴力ならば気が済む迄サンドバックになっていればその内、終わる。しかし今回は私刑では無く拷問と言われた。拷問の意味はウイキツド本人は理解出来ない。いや、知らない筈なのだ。分からないからこそ、恐怖が生まれるのである。

「それで良い。さあ、来い」

鎖に引つ張られて拷問部屋へと連れ込まれる様に扉を抜ける。その途中で首輪に繋がれていた鎖が外される。

「え…………ツ!!??」

「此処からは貴様1人で行け。モタモタするな、さっさと行け!!?」

鎖が外れた途端に困惑するも束の間、後方から蹴り飛ばされて奥へとすつ飛ばされる。放り込まれた拷問部屋は暗く後方から入ってきた部屋の照明のみが唯一の光源であったがその扉が閉じられたら真つ暗闇へと変ずる。そして、劇場の様に一筋のスポットライトがウイキツドへと照らされる。

「ツ!!?? な、何…………!!??」

そして次に照らされたのはウイキツドの前方遠くにある位置。其処には十字架を模した磔刑台が鎮座しておりオトウールが十の字状の体勢で固縛されている。足首と手首の付近、そして不必要な腕と足の関節部にも大仰な固定具らしき物が見受けられる。

「オト姉ッ!?」

本人は気を失っているのかウイキツドの声に反応していない。ウイキツドがオトウールへ向けて駆け出そうとすると眼前に鉄格子が突如、降りてきてウイキツドとオトウールのいる場所を遮るように分断した。同時に部屋内の全ての照明が照らし出されこの拷問部屋の全容が明らかになる。

誰もが予想する拷問具らしきモノは全く存在していない。AIS達が聞かされて来た自分達を壊すような残忍な道具の類は無い。あると言えばただ真つ白な部屋にオトウールを固縛している磔刑台くらい。その他に要点を上げれば壁には二重構造のガラス張りが存在しその向こう側には多数の男性陣が物見の様に集まっている事である。

「……………」

——し、知らない人が沢山。沢山、私達の事を見ている…………。

単なる拷問部屋では無いと言う事を薄々、ウイキツドは理解した。部屋の周囲を取り囲むように眺めている衆人達は皆、困惑するウイキツドと磔にされたオトウールを舐め回すかの様な視線を向けている。

『あの様な格好で出歩くとか……痴女か』

『AISとはドイツもコイツも異常な奴ばかりだな』

『首輪をつけているとは、家畜同然だな』

『服の着方さえも分からないとは…………』

『馬鹿だ馬鹿だとは聞いていたが、獣同然だ』

『精々、愛玩動物程度であるな』

周囲から聞こえて来る声はどれも嘲りを含んだ声。誰一人として心配する声など聞こえはして来ない。

『皆様、大変お待たせ致しました。今宵のエンターテインメントを皆様方に御提供致します!!?』

そして唐突に大音量で拷問部屋内に反響する放送の音声。その内容をウイキツドは理解出来る筈も無いだろう。そして放送と同時に壁の一部が開かれて4人の人影が幽鬼の様な足取りで拷問部屋内へ

と入り込んで来る。腕や脚がI Sの様な機械のパーツに覆われた男性の成れの果て、即ちエインヘリヤル。

『今回(ご)用意させて頂いたのは、憎き女性主義者の女共が構築した女尊男卑によるI Sによって誕生したエインヘリヤル!!? その一部を鹵獲する事に成功致しました。そのエインヘリヤルと我がコミュニティが所有するA I S。その片割れはご覧の通りに磔刑台にて固定しております』

「……………ん、えつと……………な、何コレ……………!!?」

その時、放送の音声で気絶していたオトウールが目を覚まして自身の身に起きた事を理解した。手足と関節を固定され磔の状態に拘束されていると言う事を。身動きすら許さない程に固く固定されている為に固定具は微動だにしない。

——オト姉……………!!? でも、どうしたら……………?

『今回、(ご)用意させて頂いたのは2匹のA I Sはお互いが大事な姉妹のような関係。片方が磔刑台ですので当然、妹分の方は抵抗するでしょう!!? 助ける為にも目の前のエインヘリヤルを殺さねばなりません!!?』

エインヘリヤルは鉄格子の柵から見てオトウール側にいる。此の儘ではウイキッドは全く手出しは出来ない。

『ですが!!? エインヘリヤルを一体、倒す事に磔刑台の固定具の1つ、8つありますが関節部分に当たる部分が圧縮を作動してその関節部分を圧壊させます!!?』

「……………!!?!!?」

『つまり、姉を助ける為にエインヘリヤルを皆殺しにした場合。姉は四肢を全て切断されて達磨状態にされてしまうと言う事になるのです!!?』

「そ、そんな……………!!?」

「悪趣味……………!!?」

オトウールを助ける為に目の前の邪魔なエインヘリヤルを殺せば、オトウールの手足の何処かの関節が固定具の万力が締め、押し折られ千切られてしまうと言う事。自分達の状況で四肢欠損の達磨状態

となつてしまえば、どのような末路を辿るのか容易に想像出来る。かと言つてエインヘリヤルを無視してオトウールの元へと進めば……ウイキッド自身の首に付けられた首輪が遠隔操作で爆破されてしまう。

『……素晴らしきかな姉妹愛!!? 姉を助けると見せかけて自分が生き残るか、姉を助けたいが為に自分自身がエインヘリヤルの餌になるか……妹分の判断に期待が膨らみます!!?』

———そ、そんな……敵を倒せばオト姉の身体が、壊されちゃう……かと言つて無視する訳には……ど、どうしたら……!!?』

ウイキッドは自分の為にエインヘリヤルを殺してオトウールを見殺し同然にするか、或いはオトウールの為に自分が嬲られるか。その選択を突き付けられた。エインヘリヤルが何故、コミュニティ内で飼育されているのかの理由はわからない……分かりたくも無い。自分の身か、それとも相手の身か、何方の身を案じるのが正しいのか……。『観客の皆様方はお手元に配布された用紙にはA I Sのコード名が書かれております。何方が、生き残るか予想下さい!!?』

同時に拷問部屋内を分断する鉄格子が外れた。その時にウイキッドの気配が近付いた事に気付いたエインヘリヤル達がこちらの方が危険だと判断したのか、一斉に襲い掛かって来た。

傍観と玉座

「……こんなモノ。公開処刑以外、何物では無い……!!?」

拷問部屋、いや……見世物である舞台の上でどうする事も出来ないウイキッドが群がって来るエインヘリヤルに嬲られる光景を目の当たりにしている人物が吐き捨てるかの様な言葉を漏らした。

——磔にされた……オトウールだったか……奴を助けようとしているのはあの時、彼女の後ろに隠れていた黒髪の少女。彼女も充分強かった気がする……だが、こんな条件をされては手が出せないのは分かり切っているだろうに!!? なんて、下衆な真似をする!!?

窓ガラスの先で行われる無様過ぎる見世物を見て近くの壁を殴るのはラウラ・ボーデヴィツヒと呼ばれる少女であった。彼女は楯無や鈴音達と同じ集団の1人で前線で戦い非戦闘員を守りつつ生き延びた。その後、辿り着いたこのコミュニティの異様な雰囲気をいち早く勘付いた。自身の生まれの環境と酷似していたからこそ気付けた。もう1つの要因はオトウールとウイキッドの腕に付けられた金属質の物質、それは拘束具だろうと口には出さなかった。何が起こるか半ば予想出来た彼女は一計を立てる。

それはこのコミュニティに取り入ると言う見方によっては裏切りとも呼べる行為……唯一、男装であるズボンを着用していた為に自身を強引に男だと偽って取り入る策を誰にも言わずに実行に移した。誰かに漏らした場合のリスクと心境のリスクを掛けた結果である。最初は疑われはしたが一先ず受け入れられた。当然ながら半信半疑の疑惑が付き纏ったままであった。

そして予想通り、非戦闘員全員が碌な目に合わない地獄が展開された。牢獄内に放り込まれ明日の見えない戦争へと生身で駆り出される……満足に食事も睡眠さえも取れない絶え間ない戦争。現役軍人であるが故に分かっていた。元々、非戦闘員の者達はISをファッション感覚で見ていた連中ばかり、そんな連中があの様な戦場で生き

延びられるとは到底思えない。

ラウラがコミュニケーションヘと取り入った理由。それはコミュニケーションが非人道的であった場合、仲間を味方を逃す為である。だが、それも上手く行く筈が無かった。ラウラの目論見は当然の如く予想されていた為、に所属場所は露骨に牢獄関連以外へと遠ざけられコミュニケーションの出入り口の門番役へと追いやられていた。今回、『楽しいショータイムがある』と言う事で会場近くへと立ち入る事が出来た。其処で見たのは余りにも悪趣味極まるエンターテインメントであった。

——エインヘリヤルを倒せば、磔刑台の拘束具の一部が締められ関節部分が圧壊切断される……脚の関節を失えば兵士としては使えない。腕の関節を失えば何も出来ないデクの棒になる!!? そんな事、分からない筈が無いだろうに……まさか、此処の連中は彼女達を殺すつもりなのか!?!?

『やはり、こごも一方的な展開であると面白味が欠けますねえ……』
『全くですな。少しは戦って貰わないとつまらないですな』

『残った方を売ってくれませんか? 愛玩動物くらいならば可愛がつてあげれますよ。例え、四肢が欠損したとしても、ね?』

『良いですね。私は出来ればあの小さいA I Sが良いですな。とても良い声で泣いてくれそうですよ』

『後で、オークションを行なって貰いましょうか。誰が落札するか楽しみですよ』

『仮に死体になってしまったとしたら剥製にしましょうか? 後世の為にも芸術は残して置かないと行けませんしなあ』

——この、下衆共がツ!!? この世界には下衆しか居ないとでも言うのかツ!!?!

壁越しに聞こえて来る来賓の観客席の方からその様な下世話な会話が聞こえて来てラウラは歯軋りと共に苛立ちの声が溢れる。完全に少女を食い物にするかの様な会話内容はかつて冷水と呼ばれたラウラと雖もとても看過できない内容であった。

拷問部屋ではエインヘリヤルに手を出せばオトウールの固定具が

作動してしまう為に手が出せないウイキッドが一方的に嬲られている。エインヘリヤル達が持つているワザと錆びさせた刀や槍、或いは銃火器が容赦なく傷付けて行く。

『ウイキ姫ちゃん!!? 私の事は、良いから!!? だから、早く、目の前の敵を殺して!!?』

磔刑台に固縛されているオトウールがウイキッドに自分の事よりもウイキッド自身の身を案じていた。生きる為に戦いなさいと。

『……む、無理、無理だよ!!? オト姉ツ!!? そう……したら、オト姉が……!!?』

刺され、撃たれ、斬られ、打たれる。A I Sスーツも傷付き破れて行き、生々しく流れる赤い血が床に溢すウイキッドが必死に叫ぶ。

『良いの……私は、守れなかった。でも、最期の最期に……貴方だけでも守れるのならば、喜んで死ぬわ!!? ウイキッド!!? 貴方は生きなさい!!? 生きて、生き抜いて!!?』

エインヘリヤルは殺さない限り動き続ける。完全に無力化するには殺すしか無い、例えば頭部だけになっても腕を切り離れたとしても勝手に動き続ける。だから、殺さねば、止まらない。

『素晴らしい姉妹愛です!!? 互いが互いの事を思っている!!? 此処まで美しい姉妹愛は中々無いでしょう!!?』

——クソ、私はこんなモノを見に来た訳では無いぞ!!? これは、早くどうにかせねばシャルや一夏嫁もこんな目に遭わされる可能性が高い……長居すればする程、危険な事になる。何か、何か手がある筈だ……!!?』

その時、確かに……天井が割れる音が聞こえた。

起死回生

「ぐっ……はあ、はあ……」

——痛い、痛い、痛い。身体の彼方此方が痛い。刺されたり、斬られたり、撃たれたりした。殴られるのは慣れているけど……こう言うのは慣れて、無い。

拷問部屋内でオトウールを実質的に人質として使われている状況でウイキッドは抵抗する術を失って一方的にエインヘリヤルから攻撃に晒されていた。

——エインヘリヤル、は。腕を落とそうが、足を落とそうが殺さない限り、動き続ける……頭を潰しても一緒……殺す定義は曖昧、らしい。

更に追い討ちを掛ける様に無線がウイキッドへと入る。

『ああ、言い忘れていたな。エインヘリヤルの損壊具合に応じて固定具の圧縮具合が変わるからな。圧迫具合が長期化すればそれだけで関節部分は壊れるだろうな?』

その言葉によりウイキッドは完全に攻撃出来る理由を失ってしまった。エインヘリヤルを殺すのもダメ、殺すまで行かなくても無力化する事も出来なくなつた。その為、一方的に鬪られ続けている。

「くっ……っ!!?」

心身共にボロボロの状態でエインヘリヤルの1人に押し倒されてマウントを取られてしまう。機械のパーツと結合されている為にエインヘリヤルは見た目以上に重い。のしかかられた場合、押し除けられない事が多い。

小柄な体躯のウイキッドでは大の大人程の体格があるエインヘリヤルに押し倒されたら振り解くのは無理がある。ましてや身体がボロボロの状態では抵抗する体力も殆ど無い。

『おおっと遂に押し倒されたア!!? 逃げる事も受け流す事ももう出来ません!!?』

——あは。もう、良いや……オト姉。ごめん、なさい……もう。

ウイキッドが諦めたその瞬間。拷問部屋の天井付近に亀裂が入ったかと思うと轟音を響かせて天井が割れて落下し始め、その残骸が降り注いで来た。

『な、何事でしょうか!? ツ!!? ら、来賓の皆様方、至急、至急ご避難をお願いします!!?』

「な、何……!!?」

突然の事態。コレはコミュニケーション側からしても想定外の出来事らしく司会役の人間の声も焦りが混じっていた。次々と落下してくる天井の残骸は拷問部屋内に容赦なく襲い掛かる。

——無理だよ。逃げられない……。

その残骸の1つがウイキッドの居る場所にも降って来た。死ぬ迄戦い続けるエインヘリヤルに押し倒されている為に逃げられない。更に身体がもう動かない状態の為に死を覚悟してウイキッドは目を閉じた。エインヘリヤルに殺されるのが先か、それとも天井の残骸に押し潰されて死ぬのが先か、そのどちらかである。

——オト姉……。

「私の妹から、離れなさい!!?」

その時、肌に吹き付ける強い風と共に身体にのし掛かっていた圧力が消える。そして、轟音が響き渡った。ゆっくりと目を開ければウイキッドの眼前には見慣れた人物の背中が見えた。

「ウイキ姫ちゃん。逃げましょう、今……この時しか無いわ……!!?」

其処に立っていたのはモーニングスターを携えたオトウールだった。つい先程まで磔刑台に頑丈な拘束具で固縛されていたのだが解放されていた。しかしながら、腕付近や足首あたりのA I Sスーツは

剥がれておりその下にある皮膚部分も又、剥がれて内側の肉が出血を伴って丸見えの様な状態となっており非常に痛々しい。

「オト姉!?? でも、なん、で……………!??」

「……………落下して来た残骸が磔刑台に当たって壊れたのよ。その際の衝撃もあつて拘束具も緩んでくれたわ……………まあ、強引に引き抜いた形だから……………ちよつと無茶したのだけど、この程度で済むのなら安い方よ」

オトウールはこの程度の怪我ならば安い方だと断じた。一時期はウイキツドを生かす為に犠牲になる事も脳裏に過つた。しかし、その後のウイキツドが立ち直れるかどうかは正に賭けであった。最悪、其の儘後追いつかねない予想も確かに存在していた。

——む、無茶するなあ。オト姉は……………

『だ、ダメだ。司令室が破壊された!?? う、うわあああ!!? ヴ、ヴォルヴァだ!!? ヴォルヴァが襲撃して来たあああああ!!? だ、誰か、助けてくれエエ、ごはあ!??』

突如として無線機から響き渡る男性の声。その言葉を聞いてオトウールは悪い笑みを浮かべていた。それは本人も自覚していない微笑みだった。

「……………今、このコミュニティはパニックになっているわ。逃げ出すなら、今しか無い」

「に、逃げる?で、でも……………オト姉……………」

「正直な話。コミュニティの連中の為に尽くすなんて以ての外よ。必ずこんな地獄から脱獄するって決めたのよ……………待ちに待ったこのチャンス、逃す訳には行かないの……………!!?」

オトウールはそう言いながらウイキツドへと血塗れの手を差し出す。皮はズリ剥けており見るからに痛々しい。だが、今はそんな事に躊躇している余裕なんて無い。

「む、無理だよ。だって、私達……………ナノ、マシンが」

「……………ウイキ姫ちゃんには知らないか。ナノマシンの遠隔操作に必要な機材は司令室と呼ばれる場所にあるらしいの」

何処で知ったのかと聞きたいがその前に女には秘密が多いのよ、と

言われて教えてくれなかった。ならば、何故、今此処でその単語が出て来たのだろうか。

「ついさつき、司令室がISによって破壊されたって無線機で騒いでいた。つまり、現時点でこの事実を知っている私達を縛る拘束は無いわ」

ナノマシンさえどうにか出来れば、逃げる事は出来る。かつてはIS操縦者の暴力的なISの私的仕様や反逆を防ぐ意味で頭ナノマシンを注入していた。その為、命を握られて居たが制御する機械が破壊されたとなれば無意味となる。その為、この混乱に乗じて逃亡しようとオトウールは即座に考え付いた。しかし……。

「でも、オト姉……コレ」

「……く、首輪……!? あの、連中……!!?」

「遠隔操作出来る爆弾……だって。無理に、外せば……爆発」

ウィキッドの首に付けられた首輪。それを見たオトウールは齒軋りする。ナノマシンに加えて首輪まで付けているとは流石に想定外だった。

『聞こえるか、コード・013。お遊戯会の途中だが、緊急事態が発生した。現時点を以ってこのコミュニティを放棄する。現在、ISの上位存在である『ヴァルヴァ』が襲来している。貴様は我々が脱出する時間稼ぎの囚になれ。作戦放棄及び敵前逃亡した場合、分かっているな?』

「ヴォルヴァ……って」

——確か、ISには進化工具合で呼び名が違ってた。普通のISより更に進化した存在をヴァルキリー……その中で全く異なる進化をしたのを、ヴァルヴァって呼んで居た……け?

ISと一言に言っても大別すると複数の呼び名に分かれる。自我を獲得し様々な進化を遂げて行つたIS達、形状は様々だが上位存在と呼ばれる者達が居る。それがヴァルキリーとヴォルヴァと呼ばれる区分の存在（車や戦車の様な呼び分けと言えば分かりやすいか）。

普通のISと違うのが『人間』と遜色無い程の存在へ変貌を遂げていると言う事である。

ISは元々ISコア自身が様々な情報を会得し学習し自己進化する事により独自で武装を作り出す事が出来た。自我を獲得し数多くの知識を手に入れ続けた結果、明確な個性が生まれるに至る。その結果、様々な姿へと変化する様になり、中には人の姿を象るに至るISCコアが現れる様になった……らしい。

「……無線機の話でも出ていた」

——ヴォルヴァだなんて、見た事無いよ。それに、普通のISよりも何倍も強い……て、誰も勝てない、存在だって。

勝ち目なんて初めから存在しないと言われている。ヴァルヴァやヴァルキリーへと挑んだAISは、誰一人として生還する事は無かった。その為『即死不可避』とまで呼ばれている。

だが、ウイキッドは首輪の存在故に此処から逃げ出せない。恐らく無線機の相手がウイキッドの首輪の爆弾の操作を行える。逃げたと知られたら、ウイキッドは爆殺されてしまう。

「……うう、どうしよう……」

「私達を囿にしてさっさと逃げるって訳……」

恐らく安全圏に逃げた後に用済みとして爆殺される可能性がある。ましてや此方の動きが読めて居るかどうか不明。混乱の最中、不安が募るウイキッドに対してオトウールは冷静だった。どうすれば、ウイキッドを死なせずに脱走出来るか、その手段は既に思い浮かんでいた。

「……ウイキ姫ちゃん。ちょっと賭けに出るわ。良い？良く聞いて」

「う、うん……」

『首輪』さえどうにか出来れば此方のモノ。強大な敵であるヴァルヴァを相手に真正面から挑むのは余りにも無謀。現状の自分達ではあっさり殺されるのが関の山。勝ち目の無い相手ならば逃げるが勝ちである。その為にもウイキッドに首輪を付けた人間の排除が最優先事項と言える。

「連中は私が生存して居る事に気付いていない。なら、私が貴方に首輪を付けた人間を仕留める。AISが人間を殺したら、もう後戻りは出来ない。必ずバレルでしょうね……でも生きる為にはやるしか無

いの」

「う、うに……………」

二重の賭け、ウイキッドの居る此処にヴォルヴァが現れないか、標的がすぐに見つかるとかの賭け。そしてお互い共にコンデイションは最悪一步手前、ヴォルヴァクラスのISは愚か、エインヘリヤル相手でも厳しい局面でもある。

「…………直ぐに貴方の呪縛をどうにかするから。良い？ヴァルヴァが現れたら戦わずに逃げなさい」

「う、うん……………」

念押ししてからオトウールはモーニングスターを振るい壁を壊した後粒子変換してペンダント状に戻し、軋しんでいた脚を鞭打ち走り出した。

皓炎煉冠ノ玉座

——急がないとこのコミュニティ自体が保たない。逃げて、とは言っただけどあの子の事だから動けない。首輪に対する不安で、足が竦んでる。

壁を壊して駆け出したオトウールはその様な事を考えながら走る。そして、曲がり角付近から喧騒が聞こえて来るのが分かった。

「良いか？ 貴様達は囷になれ!!？ 相手はヴォルヴァレベルの I S ……どの道、貴様らに勝ち目は無い。ならば俺達が逃げ切る迄の時間稼ぎをしろ!!？」

其処では牢獄から無理矢理出された A I S 達が男性から頭ごなしの命令を出されて居る光景だった。勝ち目は無い事は承知の上での囷。それはつまり犠牲上等の作戦だった。そして引き摺り出された A I S 達ら数日前に A I S になったばかりの元非戦闘員であった少女達だった。

「ふ、巫山戯ないでよ!!？ アンタ達だけ逃げようと言うの!!？」

「黙れ。貴様ら A I S の代わりなど、幾らでも居る!!？ さっさと行け!!？」

拘束具を付けたまま行かされる。コレでは正にサンドバックになって死ねと言って居るのと同義であった。

——酷いやり方ね。距離的にあの男かしら？ 間違えてはダメ……時間は浪費してられない。

「……チッ。どいつもこいつも碌な働きをしない。折角、仕入れた A I S も大半が役立たずのゴミだ。コード：O13 程度すらも練度に達しないとは、つくづく使えない連中だ。まあ、良い……ゴミはゴミらしく奴らの大好きな I S の火力の前で焼却されるが良い。コード：O13 も我々が脱出した暁には早々に消えて貰おう……首輪の爆弾はコレで爆破出来る」

その男性は手に持っていた遠隔操作を行うであろう小型の携帯端

末を見ていた。だからこそ、背後から飛び込み、モーニングスターを携えたオトウールに気付けずに後頭部を殴られ吹き飛ばされる。

「ガッ……き、キサ……」

フルスイングで振るわれた鉄塊の衝撃に意識が飛びそうになるも辛うじて意識を保つ。殴られた衝撃で手に持っていた端末を放り落としてしまう。落とした端末はオトウールの足元付近に転がり、オトウールはモーニングスターを叩き付けて破壊した。

「コレでウイキ姫ちゃん的首輪は遠隔操作では爆発しないわね」

——この端末は見た事が無い。コレを見ながら呟いていた。コレで、ウイキ姫ちゃんを縛るモノは無くなった。後は——。

「き、貴様……ど、どう言うつもりだ!?」

頭の痛みに堪え頭部から流血した男性がオトウールに向けてそう呟える。何故だろうか、今迄は怖い存在だと思っていたが、今では凄く矮小な存在に見える。

「……どうって、ことう言う事よ」

オトウールは見下した視線を以ってモーニングスターを振り上げる。鉄塊は数多の返り血を浴びて暗く燻んでいる。棘も一部は折れては居るが、目の前の矮小な人間を甚振り殺す分には問題は無い。

「ま、待て、止めるッ!!」

「散々、私達を殴ったり蹴ったり……挙げ句の果てには殺そうとしたじゃない……フッフ、いざ自分達がそんな目に遭えばそんな命乞いするのね。私達がどんなに叫んでも、止めない癖にッ!!」

「止めるオオオオオ!!??!!??」

男性の悲鳴を他所にオトウールは振り上げたモーニングスターを振り下ろす。重い鉄塊が脚の関節部に叩き付けられ関節部分が砕かれた。

「ぐがあ、あ、ああ……!!??」

「あははははッ!!? 良い気味ね!!? 散々、やって来た行為の報いって奴!!??」

——何故かしら、こうして人間を苦しめるの……とても楽しい。こんな些細な事なのに。もつと、もつと苦しめたい。壊したい、蹴りた

い……!!?」

オトウールは心の奥底から唐突に湧き上がる異常なる嗜虐心を感じていた。心が突然現れた狂気に染まって行く、その様な感覚を覚えた。

——待つて!!? 今、こんな事をしている余裕なんて無い。目的は果たした……ウイキ姫ちゃんを迎えに行かないと。

無意識に狂った笑みを浮かべていたオトウールはすんでの所で我に返る。このコミュニティは襲撃を受けて居る。この様な場所で油を売っている余裕は無い。脚を壊されて歩けなくなつた男性を放置してオトウールは走り出す。どうせ放つて置いても崩れゆく天井に踏み潰されるか放置されて地面を這い蹲っているかの2択だろう。

「ウイキ姫ちゃ……!!?」

ウイキッドが居る場所へと戻る。だが、其処には先程まで存在していなかった異常なる存在が鎮座していた。

——アレは、誰!!?」

銀色の髪が靡く頭部付近には黄金の『羽』の様な形をした真っ白な王冠がぐるりと囲い白く半透明のヴェールが靡いている。そして後ろ腰付近からは皓く結晶化した翼と思わしきモノが生えていた。そして下半身たる両脚らしきモノは一切、存在せず、背中に生えた結晶翼で浮遊している。

その姿は正しく人間とは呼べない、いや呼べるモノが1つ、存在していた。

「……まさか、アレがヴォルヴァと呼ばれるIS……!!?」

『ヴォルヴァ』。オトウールも伝聞的にしか聞いた事が無い。自我を獲得した一部の『IS』が情報記録媒体から抽出された『イレギュラー』な存在の情報をもとに派生進化した結果とも言われている。数多くのISの中でも強大な力を有し、遭遇すれば即死不可避とも言われている。

その進化の結果……元々は小さなISコアが今では、背丈はそこまです高くは無く中学生程の身長少女へと進化し変貌を遂げる事など

あるのだろうか？

いや、そんな事なぞどうでも良い事だろう。

——ウイキ姫ちゃんは!!? 居た……!!?」

視界の片隅、崩落した天井の残骸に隠れる様に竦んでいるウイキツドの姿が見えた。中央に降り立ったヴォルヴァに見つからない様に息を潜めている様に見える。満身創痕の状態でISに立ち向かえる程の度胸は備わっては居ない。だが、退路は断たれてしまっている。

——どうする!!? この立ち位置だと如何しても目の前のISに見つかってしまう。

『!』

如何するか考えた時、そのISがオトウールへと気付いたのか、振り向いた。

「え……!!?」

その姿を見たオトウールは息を呑むと同時に驚愕した。真正面から見ればその服装の構造がよく分かる。

ウエディングドレスの様な豪華なドレスでありその構造はフィッシュテールスカート型で胸元がひし形にくり抜かれて脇腹付近に縦方向に切り取られ皓い肌が見える異様な構造のドレスを身に纏っている。だが、そんな煌びやかな服装など如何でも良い。彼女にとって最も絶句する箇所は其処では無いのだから。

——何故、何故、ウイキ姫ちゃんと瓜二つの顔立ちをしていると言うの!!?」

煌々たる皓銀の長髪、燦爛と煌めく黄金の双眸、違う箇所は違うが根本的な顔立ちがウイキツドと全く同じであった。もはや双子の姉妹だと言われても違和感が無い程に酷似した顔立ち、体格も又、ほぼ同じと言って良い。

——ヴォルヴァだなんて分からない事だらけ……気付かれた以上、こうなったら強行突破するしか無いわ!!?」

オトウールは目の前のウイキツドの姿をしたISとの交戦は危険

だと判断している。自身の状態と相手はISである以上、此方の攻撃はまるで効かないと言うのは分かり切っていた。故に取れる手段は1つ。

——ウイキ姫ちゃんを連れて、このコミュニティから逃げる!!?

そう、目の前の存在から逃げ切る事であった。相手の行動は愚か、どう言う存在目的かさえも分からない。そして、オトウールは嫌でも理解する。現状の自分達では全くの勝ち目など無いと言う事をその存在を見ただけで理解した。経験や直感では無い、原始的な『本能』がそう告げていた。

皓き虐殺者（ジエノサイド）

——オト姉が見つかった!!?

瓦礫の裏で隠れていたウイキッドはオトウールの姿を見つけるも、この場所に一足先に現れた自分とそっくりな姿をしたIS。種別としてはヴァルヴァアと呼ばれるIS。と言うよりもアレは本当にISなのかと問いたいが答える者は居ない。そもそもISにはヴォルヴァアやヴァルキリーと言う別区分の総称として存在するのは話に聞いては居たが、直に見るのは初めてである。少なくとも今迄、見た事のあるISよりも遥かに違う存在である事は分かる。

——どうして、私と同じ顔なんだろ?で、でも……どうするべき……?

お互い、反対側に位置しておりヴォルヴァアを挟む形に位置している。そして現在、ヴォルヴァアはオトウールの方へと視線を向けている。奇襲を掛けるならばチャンスと言えぬ。

——勝てないのは分かってる。でも、此の儘、見逃して貰えるとは思えない。

運が良ければ怯ませる事は出来るかも知れない。もしかしたら、ISの纏うシールドバリアを粉碎する所までは行かなくても押し除ける事は出来るかも知れない。

——殺^やる、しか無い……!!? 出来るならば殺す、でもそれは無理かも知れない。なら、一撃だけでも当たって押し退ける事が出来れば……!!?

判断は一瞬だった。ウイキッドは首から下げた歯車のネックレスを握る。その直後、ネックレスが粒子状へ変わり更に大振りの鋸状の大剣へと変化する。同時に残骸に手を掛けて前方へと飛び出し、振り上げた鋸をそのヴォルヴァアへと振り下ろす。

『おろかだね
矮』

——喋った!?!?

ヴァルヴァアは小さくそう呟いた。その小さな声音はウイキッドの

耳に届いた。ISが喋る光景など聞いた事も見た事も無い、その直後に鋸の刃がヴァルヴァの胴体に直撃する10cm手前で鈍い高音が響き渡り弾き返される。不可視のシールドバリアはその一撃を容易く遮った。空中で振り下ろす形だった為に鋸が弾かれた為にウイキッドは地面に落下して尻餅を着いてしまう。

「ウイキッドちゃん。逃げて!!?」

「ッ!!?」

響き渡るオトウールの声。その声に反応したウイキッドは転がる形でその場を離脱。その直後、ウイキッドが尻餅を着いた箇所が消滅していた。音も無く、本当の意味で其処には『孔』が形成されていた。

「……………ッ!!?」

その光景を直に目の当たりにしてウイキッドは恐怖を覚えた。怪我や重傷と言った次元では無い。死さえ超越したナニカが其処で起きた。それは消滅と言う概念。一切概念を消し去る行為……………それが自分自身であったのならば……………死んだと言う概念なく、この世から消えてしまっているだろう。

『退』しやま

ウイキッドの姿をしたヴォルヴァは白い腕を振るう。その周囲に皓い粒子が集まり十字架の様な物が形成される。それらが複数、形成されて周囲を旋回している。

「……………させない!!?」

オトウールは目の前のヴォルヴァが何かをしようとしている事を察知した為にさせる前に妨害する事を選択した。モーニングスターを構えて駆け出して横殴りのフルスイングで叩き付ける。しかし、やはり直撃する前に高音と共にその動きが止められる。ISが有する凡ゆる衝撃から身を護る防壁たる不可視のシールドバリアによって外傷一つ負わせる事すら叶わない。

「……………コレが、シールドバリア……………!!?」

『弱』うるせ

「……………ッ!!?」

一撃を受け止められた直後、オトウールの首にヴァルヴァの細い腕

が伸ばされて掴まれる。ウイキッド程の体格、しかし相手はIS。本来は機械であるが故にその体格では有り得ない力で首を締め付けられる。

「ぐっ、か……ッ!!?」

首を掴まれている為に掠れた声しか出て来ない。悶絶して掴む腕を引き剥がそうと抵抗するオトウールをヴォルヴァは半身を翻してウイキッドの方へと向けて物凄い勢いで投げ付ける。恐怖で動きが鈍っていたウイキッドは躲し切れずにオトウールと激突して、2人も転がる形で近くの残骸にぶつかって更に二次被害を受けた。

「……痛ッ……う、!!?」

「ゲホッ、ケホ……窒息、するかと……」

崩れ落ちていた残骸に背中から激突。その前にもエインヘリヤルに一方的に煽られていたウイキッド、固定具から無理矢理身体を引き剥がしたオトウール。2人も怪我が多い上に体力も限界に近い。そして何より、2人の攻撃が目の前のヴォルヴァには全く通じていない。

——くっ、私達の攻撃が全く効いていない。それに此方を見ている……!!?」

「……普通のISよりも、一撃が重たいわ。コレが、ヴォルヴァ……!!?」

「……ん……!!?」
普通のISならば機械部分や装甲に命中した時にシールドバリアが発生する。しかし目の前のISは当たる直前にバリアを発生させている。その為、少しでも間合いを離されている事になってしまう。

「じかんのむだ淘、それに異、なまえ名、ヴォルヴァ違、じゃない否」

十字架を掲げたヴォルヴァは銀髪を靡かせながら2人を睥睨しその言葉を告げる。淡々とした口調であり無機質さを抱かせる。元々が機械である事がそうなのだと言わざるを得ない。喋り方であった。

「ひむ名前、わたしの自我、なまえ名前」

目の前のISことヴォルヴァは自らを『ヒム』と名乗った。どうやらヴォルヴァと呼ばれるのは好きでは無いのかも知れない。と言う

よりもそんな状況じゃ無いし余裕も無い。

『淘汰、開始』
とうたをはじめる

「ツ!!?」

ヒムの周囲に待る十字架を模した槍が動きその下方の先端部が2人へと向けられる。当然である、ヒムからすれば戦意を挫いたが敵は敵。雑兵程度ではあるが邪魔である事は変わりはない、ならば排除するのが合理的と言える。

——不味い……!!?

複数の十字架槍が勢い良く射出され2人目掛けて降り注ぐ。複数の事情が重なりマトモに回避行動が取れない2人に対して容赦の欠片が無い。それでも、死ぬ気にはなれないので無理矢理にでも身体を動かして十字架槍の直撃を躲す。

「……うぐ……ッ」

——彼方此方が、痛い……でも、逃げな。

『背信』
おろかだね

「え……?」

その眩きを漏らしたのはウイキッドかオトウールかは分からない。遅れてやって来たのは身体から力が抜けると言う事。

「かつ……あ、っ……はっ!!?」

気付けば、自分達の身体に大きく太い皓い十字架槍が貫通する形で突き刺さっていた。そして激痛が全身を駆け巡る。

——い。痛い……!!? どうして……!!?

咯血、そして困惑。躲したと思えばいつの間にか十字架に身体を貫かれていたと言う事。血飛沫が舞う、口からも血が溢れ出して吹き溢す。全く以って理解出来ない現象が発生、しかし意識が朦朧とする中で理解しようとしても無駄であった。

「……ん、こん……な、最期……」

十字架槍が粒子となって消え去り支えを失った2人は地面に崩れ落ちて倒れ臥す。胴体を開いた傷口から真っ赤な血液が溢れ出して血の池に沈んで行く。

『無駄、間違』
おろかだね せんたくをまちがえた

地面に這い蹲る中、頭上から落とされるヒムからの無情なる言葉。即死不可避……その言葉に偽りは無かった。勝ち目さえ、初めから無い。何方かを犠牲にしても逃げれば良かったのである。

——……身体が、動かない……熱い、痛い、もう……。

立ち上がる事は愚か動く事さえも出来なくなつた2人を見下したヒムはトドメを刺す事なくその場から立ち去つて行つた。彼女にとって、2人は障害でも何でも無く本当の意味で路傍の石程度の認識でしか無いのだから何時迄も構っている理由など、無いのであつた。

断章（キャラ設定）

『AIS』

Anti・Infinite・Stratos（アンチ・インフィニット・ストラトス）の略称。自我を獲得し進化を遂げたISに対抗する為に成立された対ISの戦闘員。全員がIS適性を有している。国際IS法に則り凡ゆる権利が剥奪され隷属的な契約に縛られ常に拘束され奴隷の様な状態の為に自由は許されて居ない。

また、人権は粉微塵に無いに等しく、人身売買的なやり取り、娯楽用品、性奴隷、拷問、体罰による私刑の横行とその待遇は劣悪を極めている。

生体ナノマシンを注入されている為に反抗的な態度を取ると遠隔操作にて爆殺される憂き目に遭う。制御装置はコミユニティの司令室にて統括されている（私的使用を防ぐ為に最高権限者によって管理されている）。

ウイキッド・ウエネーフィカ

35・6895， 139・691694

全てが始まり、終わった場所。貴方は光。私は影。その通りに作られた虚構のお話。それでも構わない、私がいた世界もあれば存在しない世界も存在している。

そう言えば私にそっくりな人が居るらしい。瓜二つと言う程に似ていると言う。でも、何方も男の子らしい……？何故だろう？一度、会ってみたいな。

かち、こち、かち、こち。歯車は回る、回る……どれだけ糞つても同じ運命を辿る。それは悲劇、それは喜劇、それは惨劇であっても同

じ結末を迎えます。

いつの日か、夢見た情景。深い深い森の中、多数の人形に囲まれて過ごしていた。人間達から迫害されても仕方なかった。だって、私は――。

オトウール・エフエルリス

画用紙に書かれた拙くも柔らかい絵とひらがなが多い文字。どれも拙くまるで幼い子供が書いた様なモノだった。留め方も簡易的で、出版社では無く個人で書いたモノなのだろう。

子供に囲まれる夢を見た。意思を持って前へと進む子達。ちよつと心配になる子もいたけれどきつと大丈夫。私も手伝うから……だから行きましよう。前へ……。

数多く点在する昔話。皆々、主人公……誰も役目を以って生まれて来た。それは『貴方』も『私』も同じ。違うと言えば、そう……見える世界が少し違うと言う事。

あ、あれ？コレは夢？……それとも現実？夢ならば、早く覚めて頂戴!!？ もうこれ以上、こんな光景は見たくは無い!!？

『エストレヤ』

私設コミュニティの1つ。シンボルマークは『流星』と『鴉』。コミュニティ・オーナーは崩宮 紫。

コミュニティの規模や構成員は最小レベルだが、航行可能な中型要塞艦を有しコミュニティ自体が移動を行う事が出来ると言うコミュ

ニティの中では異色の存在。オーナーの趣味で製造場やラボの規模は大きい。

AI Sに差別意識と言った偏見を持つ事なく接している為に他コミュニティと異なりAI S達に対する待遇は良い。その為か公設コミュニティからの受けは悪い。ある大きな野望を有していると噂。

因みに『エストレヤ』はスペイン語で星と言う意味。

崩宮 紫

星々を巡るモノは彗星だけではありません。未確認飛行物体と呼ばれる見た事の無いモノも世の中には存在してしまうモノなのです。

随分と荒れ放題だな。こんなちっぽけな惑星^{ほし}で威張れる程の虚勢が張れるか。最強を名乗るのならば最低でも月くらいはぶった斬って見せろよ？

昔、腐れ縁から聞いた事のある昔話に出て来る面子と良く似た連中ばかり見かけるな。デジャヴって奴？まあ、良い……全員纏めて面倒を見てやるとするか。

王冠は1人居れば事足りる、例え其奴が無能でもな。だが、国は1人じゃ成り立たない。そして、正義面だけじゃ破綻する。組織である以上、どうしようも無い現実が其処にある。

カタナ

最低。最悪。裏切者。売国奴。
ヒトデナシ。ロクデナシ。
全人類の敵。

今となっても夢で回想されるその光景。それは周囲の人間達と糾弾する視線と声。構わない、何故ならば私は貴方達にとっては、裏切者なのだから。生きる為に、貴方達を売り飛ばした。

メサルタイム

14番目。5,000年。二重。

それを意味するのは従者か或いは2つか。

私を形容して良いのは親愛なる主だけ、這い寄る方々には消えて頂きます。

夢を見る時があります。果てしなく広がるかと思わしき大海原……その上に立っていると言う夢を……。

『ヴォルヴァ』

ISの分類の1種。多量の知識を得るも本来の方針とは異なる派生・進化した存在。観測された『歴史』の中にて埋もれ忘れ去られた『イレギュラー』なる存在の情報に元に再現、再構築し自身をその姿へと変化を遂げている。全体的に人間と同等の姿をしているが身体の一部が欠損しているのが目立つ特徴。明確な人語を活用する事が出来る程の知能を持ち、何れも『イレギュラー』の情報をを用いている為に高い戦闘能力を持つ故に討伐出来た実績が未だに無い事から『即死

不可避』と称されている。

紫によると『見てくれは人間、しかし3大欲求を持ってない』との事。
因みに『ヴォルヴァ』は古ノルド語で『杖を運ぶ者』を意味し日本
では『巫女』としばしば訳される。

ヒム

それは王冠。それは炎の柱。

純粹無垢な皓い王冠を抱きし者。

蝕んだ天災、赫い眸の人形。

唯一の存在は、十字架を伴い降臨した。

始動篇

本当に弱いのは？

襲来して来たヴォルヴアクラスのI S、ヒム。暴力の権化たるその存在を前にしてウイキッドとオトウールは為す術も無く圧倒され秒殺されてしまった。

ヒムは赴くままにコミュニテイ内を蹂躪して行く。確固たる目的は無く目に映るモノを全て破壊し塵殺して行く、正しくそれは生きる希望を悉く処刑して行くかの様であった。

「良いか!?? 貴様らは俺達が逃げ切る迄の囷になれ!!? 良いな!?!」

コミュニテイの男性達はA I S達を次々と囷要因にしてコミュニテイから脱出を図っていた。牢獄から引き摺り出されたと思えば見た事も無い敵相手に命懸けで戦えと言うのである。殆どのA I Sは逆らう意思は無かったが。

「巫山戯んじゃ無いわよ!!? アンタ達だけが逃げる!?!? 下らない世迷言は口だけにしておきなさいよ!!?」

勝気な性格でこの様な環境であっても諦めが悪い鈴音が看守の男性に向けて噛み付いた。

「貴様……A I Sの分際で齒向か……」

「いい加減に我慢の限界なのよ!!? チエイサアアアア!!?!!?」

鈴音の裂帛の気迫と共に凄まじい勢いの蹴り上げが男性の股関節の間に向けて叩き込まれる。早い話が金的である。

「ぐ、ガッ……あッ!!?」

軽い衝撃であっても金的を喰らえば鋭痛が伴う。よもや物理的な反抗されるとは露知らず碌な防御姿勢さえもしなかった看守はその場に崩れ落ちて悶絶した。

A I Sの拘束は両腕を後ろに回されているだけである。つまり下

半身たる両脚に拘束具の類は一切無い。コレは歩かせる際に拘束具があると動きが遅いと言う理由からである。その為、蹴り技は普通に使える。特に鈴音は元々は『代表候補生』と呼ばれるISの操縦者の1人だった。その存在は何かと狙われる可能性がある故に護身術の1つや2つ、体得しているのだ。

「ふん。男が女が、とか弱いのは何方って話よ……!!? 神楽、逃げるわよ!!? こんな連中の戯言に何時迄も付き合っては居られないわ」「ですが、まだ拘束具が付けられたままではどうしようもありませんわよ……?」

この先、腕が使えないままと言うのは死活問題と言える。だからと言って看守共が素直に外してくれるとは神楽は思えない。既に反逆行為をしてしまっている……最悪、反逆罪で射殺されても可笑しく無い。

「じゃ、コイツに外して貰おうかしら?」

鈴音はそう言いながら股間を押さえて悶絶している男性の頭を踏み躪る。マウントは取った、コレで脅迫すれば少しは有利に運ぶかも知れない。

「ぎ、貴様ら……!!?」

「もう1発、打ち込まれたいみたいね?嫌ならさっさと私達の拘束具を外して頂戴。無理なら、次は眼球を潰すわ」

鈴音は踏み躪りながら見下しつつその要求を突き付ける。拘束具の類さえどうにか出来れば後は何とか出来る。牢獄内に押し込められていた為に他の仲間達の動向も分からない以上、自力で探し出すしか無い。その為にもこの様な牢獄暮らしはそろそろお終いにしたいのである。

「……お、己。貴様ら、ただで、ゴホツ!?」

「あちゃ、足が滑ったわく」

反抗的な声が聞こえて来た為に鈴音は足を態と滑らせて男性の耳付近を踏み潰す。一応、靴の類は履かせて貰えている為に硬い靴底と硬い床に柔らかい耳たぶが挟み潰されて痛みが発生する。

「ほら、さっさとしないと、耳が千切れちゃうわよ?」

「ぐ、くそ……!!? い、良いだろう……外してやるツ!!?」

口調は悪いが観念したらしい。一応、警戒しつつも鈴音は足を退けた。押さえが無くなった所で蹠踉めきながらも看守の男性が立ち上がり、鈴音と神楽の腕を封じる拘束具を外した。

「ふう……やつと自由、って訳には行かないわね」

外されたのは拘束具の連結。腕を纏う金属製の器具は付けられたままだ。如何やらこの拘束具の連結自体を外す鍵を持つ人間は限られているらしい。

「……そう簡単に、貴様らの思い通りにはさせんぞツ!!?」

「……ツ!?」

だが看守の男性も良い様に事が進む事を良しとしなかった。拘束が外され油断と隙が生じた所で神楽を腕力で自身に引き寄せて首元にサバイバルナイフの刃を突き付けて人質とした。

「くっ……放して……!!?」

「……ツ!!? そんな余裕があったの!??」

「AISの分際で好き放題言ってくれたな。良い事を教えてやる……貴様らが自由と呼ぶ場所はこの世界の何処にも存在しないツ!!?」

「AISである以上、貴様らは人間扱いされる事は無いツ!!?」

「そんな事、勝手に決めんじや無いわよ!!?」

醜い言い争い。だが、その争いは唐突に終わりを迎える。壁を破壊して現れた白いヴォルヴァ……ヒムが姿を現すなり十字架槍を射出して男性の頭部を破碎し吹き飛ばす。

脳漿が飛散し、眼球が根元から抉れ千切れ落ちて床に転がって行き、弾け飛んだ看守の舌が鈴音の右耳を掠めて落ちた。一瞬で出来上がる血溜まりの池。その池に沈むは言葉も無い骸。

「な、何よ。アイツ!??」

鈴音は突如現れた闖入者に対して動揺が走る。純白のドレスを纏いし姿は神々しく天使かと思わせる。だが、周囲に待る十字架槍は下方が真っ赤な鮮血に染まっている事から寧ろ、白い死神と形容した方が良いだろう。

「……どうやら、アレが襲撃者、みたいですね」

看守が頭部を破碎されて死亡した為に拘束から逃れた神楽が鈴音の近くまで走って逃げて来てそう予想する。現在、このコミュニケーションは襲撃を受けている。少なくとも目の前の存在は見た事が無く、鮮血を撒き散らしている事から襲撃者は目の前の存在である事が分かる。そして、周囲の十字架槍の鋒が此方に向いている事から……対話の余地は無さそうである。ヒムは視線を向けたまま、様子を伺っている様にも見える。その顔立ちは何処かの誰かに良く似ているが、雰囲気の違い過ぎる。

「どうも……話をしてくれそうには、無さそうね」

「丸腰では、流石に……」

「ええ。生身でISに立ち向かうなんて無茶よ」

——専用機は此処に来た時、野郎連中に取り上げられてしまった。エインヘリヤルとの戦闘時には一時的に武装が貸し出されたけど……劣悪な耐久性しか無いガラクタばかり……まあ、無いよりマシだったけど。少なくとも、ISと戦争している事から目の前のアレもISでしようね……。

「神楽、逃げるわよ」

「ええ、分かり」

神楽はその先の言葉は言えなかった。何故ならば神楽の足元、真下から突き上げる形で生えた白い十字架槍に胴体を刺し貫かれたからである。

「え、か、神楽……!?」

「……あ、が……はっ……!?」

啞血と共に絞り出される嗚咽に似た悲鳴。その光景は正しく串刺しによる処刑にも見えた。その様子を目の当たりにした鈴音がその場から逃げようとしたその時、ある事に気付いた。

——は、はは。何で……私、身体が動かないのかしら……あ、そっか……左右、斜めから十字架みたいな槍に身体を刺し貫かれているから、か。

鈴音が動こうとした時、身体が動かなかった。何故ならば左右の脇腹から脚へ向けて十字架槍がクロスする様に刺し貫き地面に縫い付

けられていた。当然、脚を抉り進む様に貫かれている。そう、自覚した時、全身に沸騰するかの様な激痛と共に刺し貫いた傷口から出血、そして口からも多量の血を吐き散らした。

——あ、……け、無いわ、ね。死ぬ、時……こ、んなに……あつさ………り、だ、なんて……。

美しくも無い人生の終幕。人間、死ぬ時はこんなにもあつさり死ぬのかと鈴音はそんな事を考えながら意識を暗闇へと落とした。

○

「ご主人様。件のコミュニティ……埼玉小コミュニティの近辺にてヴォルヴァと目されるISの出現が確認されました」

「……なあ、その呼び名。いい加減、止めないか？」

某所。厳かな雰囲気を保たれた一室にて王である紫と従者のやり取りが行われていた。

「いいえ。私にとってご主人様はご主人様です」

「………言ってみただけだ。で、例のコミュニティか。天罰でも降ったか？で、状況は？」

「確認しました所、出現されたヴォルヴァは『ヒム』と呼ばれる個体の事……ご主人様、如何なされましたか？」

襲来したヴォルヴァは『ヒム』である事が判明した時、紫の様子が微かに変化した事に従者は不安げな声を掛ける。

「いや……聞き覚えのある名前だった。まさかなと思つてな……関係ない事か。続けてくれ」

「畏まりました。状況としましては埼玉の小コミュニティは概ね壊滅寸前。いいえ、ほぼ壊滅状態であると思われまます。生身の人間、男性

如きでは『ヒム』相手に勝てる道理はありません」

「……成程、其の儘くたばったか」

「埼玉コミュニティのコミュニティが1つ壊滅した所で、多少の誤差しか変化は無いかと……経済的利潤の意味で」

——埼玉コミュニティ。複数のコミュニティから成る。群体コミュニティの一種。1箇所が潰れても別のコミュニティにて生存が可能なコミュニティ体制を取っている。

「ふむ……ヴォルヴァは普通のISよりも我が強い。そう言う種族だ……。粗方、壊滅させたら其処には長居はしないだろう……」

——襲来して壊滅させて居座る。って言うタマじゃねえ。少なくとも『ヒム』はそう言う奴だった。

「ご主人様、如何なさいますか？」

「……そうだな。ちよいと気になった事もある。進路を件の埼玉コミュニティの1つに向けて進めてくれ。ダメ元でも構わない」

——気になる事が出来たと言えば出来た。此方も此方で、火の車、って奴だからな。それに……もし、運が良ければ儲け物……。

「宜しいのですか？」

「……最初に焚き付けたのは何処の誰だっけ？」

「さて、何の事でしようか？」

——ま、見て見ぬフリは誰にでも出来る。少々、気になる事もある……無論、全員が死亡しており何も得られないと言うダメ元になる可能性も充分あり得る……それに虎穴にいらずんば虎子を得ず。別の意味でも、向かう価値はある。

それは流星の様な

——夢を見ている。それは私自身の昔の夢。あの頃は……大変だけど、平和……と言える様な状況だった。ああ、コレが走馬灯って呼ばれる光景、なのね。

——死ぬ直前に見える過去の情景……。それは破壊され廃墟と化した幼稚園。其処に私達は居た、私が年長者だった……。でも私以外は幼い捨子達ばかりだった……。そして……。

「……………」

無音の世界。一定のリズムを刻む電子音が耳に入って来る中、オトウールは静かに瞼を開けた。朧げながら見えるのは真っ白な天井らしきモノ。そして自分自身は真っ白な厚めの布と台座に寝かせられていた。

「こ、こ……は？痛ッ……!!？」

腕や脚付近が未だに痛みが残っている。ぎこちなく腕を動かして視線の届く場所へと動かして見ると真っ白な包帯が巻かれて止血されているのが分かる。頬付近にもガーゼらしきモノが貼られて止血されているのが体感で分かる。

——手当て、されている……。？それから、腕の拘束具が無い……。完全に外されている？

意識がハッキリして来た時、状況を理解する。少なくとも自分はこの場所の事を知らないと言う事を……。そして、隣のベッドを見れば穏やかな寝顔を見せるウイキッドが毛布の中で眠っているのが見えた。此方も顔付近にガーゼや包帯が巻かれており治療されているのが分かった。

——少なくとも……。あのコミュニティでこんな手厚い手当てなんてされた事が無かった。怪我をしても放置しっ放し……。放つて置けば勝手に治ると思われていた……。手当てされているだなんて……。やっぱり夢……。なのかしら？

「……予想よりも早かったな。俺の見立てでは1週間は寝込むと思つて居たが……」

「ツッ!?」

その時、唐突に声を掛けられる。聞いた事も無い声、声色から男性の声である事が分かる。目を見開いて声の主を探す。声の主は反対側の壁付近にある椅子の上に胡座を掻いて座っていた。若い男性だ、滅色の髪をした青年と思わしき年齢、上着を肩掛けにして羽織っているその人物は片手に古めかしい書籍を開いてオトウールへと視線を向けていた。その姿を認めた時、丁度、目が合った。

「別に取って食おうとはしないさ。一応、此処の責任者としては様子を見ておかないと行けないと思っただけさ。ま、そう言っても君は混乱するだろう事は容易に予想出来るがね」

「……………」

——私の思惑を見透かしたかの様な言動……。

「貴方は、誰？」

「自己紹介がまだだったな。俺は崩宮 紫……このコミュニティ『エストレヤ』のオーナー……早い話がリーダーであり代表って奴だ。こんな形で悪いが、一先ずはようこそと言わせてくれ」

「コミュニティ……?でも、その名前は知らないわね」

——そもそも私達が居たコミュニティの名前さえも知らない。教えてくれる事は無かった。と言う事は、気を失っている間に違うコミュニティに攫われたと言う事?

「状況が分からないって顔だな。経緯を簡単に説明すればだな、恐らく君達の所属していたコミュニティはISに襲撃されていた」

「え、ええ。ヴォルヴァって言うISに」

——秒殺された。全く太刀打ち出来なかった……。

「整合性はある、と。んで、その埼玉コミュニティはAISの扱いが特に酷いって有名なのでな。薬物投与はするわ碌な休息を与えずに酷使するわで身体を壊す者が後を絶たず、使い物にならなくなった者は捨てたり愛玩動物にして売り飛ばしたり、エンターテインメント代わりに使ったりと、やりたい放題だ」

「……え、ええ。大半が間違っていないわ。それにあのコミュニティ、埼玉コミュニティって言うのね……」

「自身の所属しているコミュニティの名前を知らないか。成程、愚民政策か……理に適っている。知らない事が良い事もある。知らないからこそ従うしかない」

「ぐみん、せいさく？」

「思考力を奪う政策の事だ。簡単に言えば無知を提唱させる政策だな。その様子だと、言っても分からないか。無学だと、な」

「……ええ、何を言っているのか分からないわ」

「……と、話が脱線したな。その時、埼玉コミュニティの近くを通り掛かったのな……当然、壊滅的状况だったが流石に見て見ぬフリは、な。ウチの手の者を使って生存者を探させた所、瀕死の君達を見つけた。流石にヤバイ状態だったからな。医務室に即、放り込んで手当てをさせて貰った」

「……善意で、助けたと言いたいのか？」

「俺がそう見えるか？」

「いいえ。貴方の人相じゃとてもそうには見えないわ」

紫の言葉にオトウールは銜てらいも無くそう言い切った。暴力塗れの牢獄、コミュニティでの命懸けの生活の中で過ごして来た時間が余りにも長く、赤の他人……正確には男性が信用出来ない。その為、目の前の紫が単なる善意で自分達を助けたとは思えないし思いたくない。「クク、齒に物着せぬその物言い。嫌いじゃないぜ？まあ、君達の現状じゃそう考えて当然だろう」

オトウールのその言葉に紫は特に怒る事も不貞腐れる事もしなかった。至極当然だと言つてのける。

「……ご主人様。余り彼女達を追い詰める様な事はなさらないで下さいませ」

その時、医務室の部屋の扉を開けながら澄んだ声音の声が聞こえて来た。

「そのつもりは無かったがな。そう見えても仕方ないか」

入って来たのは長い銀髪を靡かせてヴィクトリアン調の白と黒を

基調とした侍女服^{メイド}をその身に纏った長身の女性だった。彼女の言動に紫は肩を竦めてその言葉を聞き入れる。

「……」

——2人の様子から見知った間柄、なかしら？でも……。

オトウールの知る男性はA I S（全員が少女である女性）を徹底的に虐げている。それは事実であり現実。なのに目の前の光景は全く異なっている。お互い対等の様なやり取りが行われている。

「……カタナ様の情報通りでした。多数のA I Sが牢獄に閉じ込められ奴隷同然の扱いを受けていた模様です。それから、人身売買も行われていた様です」

「……其処はやはり何処のコミュニティも似た様なモノ、かな。メサル。報告は後にしてくれないか？」

「畏まりました。ですが、余り……」

「分かっているさ。流石に彼女からしても俺と会話を続けるのは苦痛だろう。手短に終わらせる」

メサルと呼ばれたメイド服をその身に纏った女性は部屋から退室する形で下がって行った。

「悪いね。此方も色々と立て込んでな……彼女はメサル。君達を直接的に救助したのは彼女だ」

「……そう。まだ、色々と分からない事だらけなのだけど……」

——助けた理由とか、色々。

「まあ、な。積もる話があるのは確かだが……ネタバラシをすればメサル。さっきのメイド長から焚き付けられた形だ。実はと言うと、君達の事は少し前から知っていた」

「え？」

「知ったのも偶然だがな。それに、あの『ヒム』を相手にして瀕死の状態とは言え生存するとはな……流石に驚いた……アレらは真正面から挑んで勝てる様な相手じゃない。なのに生き延びた、それだけでも素直に称賛に値する。凄いな……君達は」

——惨敗も良い所、だと思っただけ。全く歯が立たなかった。

「……さて、これ以上つまらん話をして精神的に苦痛なのに代わり

は無い。今回はコレで打ち切るとする。傷口が癒えるまで、安静にとけよ。用立てなら、メサルが定期的に様子を見に行く様に伝えておくから彼女に何か言う様にな」

紫はそう言うと言子から立ち上がり退室しようと歩き出す。

「待って!!?」

「何だ?」

オトウールは退室しようとする紫を呼び止めた。分からないのだ、彼が何故、自分達に対してこの様な施しを行ったのか、全く分からない。善意でする様には見えない……兵器であるAISに、何故?

「何故、其処までするの?」

「……君達とある取引をしたいからさ」

紫はそう言い残すと医務室から退室して行った。

醜いカラス

——『取引』をしたいから、か。

紫が退室した後、オトウールはその言葉を反芻していた。何事も対価が必要となる。生きる為にも何かを犠牲にしなくてはならない。死んだ同僚でさえ喰らいながら生きて来た。特価交換、それはオトウールは理解していた。

「改めて失礼致します。ご主人様もお人が悪い……」

其処へ先程、退室していたメイド服を着た女性が再び医務室へと入ってきた。その佇まいは正に瀟洒しょうしゃと言っても良いだろう。

「……お初目に掛かります。この中型移動要塞艦コミュニティ『エストレア』所属、メサルティムと申します。当コミュニティのメイド長及び副艦長を務めております。ご主人様より所用を仰せつかっておりますので御用がありましたら何でも仰ってください」

メサルティムはその様な丁寧な言動でオトウールに完璧なる自己紹介をした。

「え、ええ……」

「ご主人様は少々、不器用な事があります故にあの様な言動をなさります。主に代わり謝罪をさせて下さいませ」

「い、いえ。その様な事は……何も……」

——や、やり辛い人だなあ。こんな人、初めて見た。

メサルティムの言動及び所作はオトウールから見れば洗練されている為か、中々付いて行けない。見た事も無ければ会った事のない人種。

「……お名前をお伺いしても宜しいでしょうか？数多くのコミュニティで使われる識別コードでは無く貴方様ご自身の本来のお名前を」
——A I Sは名前を使う事は認めてくれなかった。大半が識別コードで呼び捨てられる。でも、この人は名前を聞きたいと言っている。

「オトウール、オトウール・エフェルリスよ。えつと」

「う、うに……う？」

其処で今迄、寝込んでいたウイキッドが目覚める。布団の中でモゾモゾと蠢きながら寝惚け眼で起き上がりとうとしてベッドから落ちた。「うにゆ^{!?}? うにゆ……」

メサルティムは無言でベッドから落ちて小さい悲鳴を上げているウイキッドを抱き上げてベッドの上へと寝かせた。

「……うにゆ。あ、オト姉ツ!!?」

「ウイキ姫ちゃん。良かった、目覚めたのね……」

——ウイキ姫ちゃんもかなり怪我していた。エインヘリヤル達に蹴られ続けていた上にヴォルヴァの攻撃、正直な所。心配はしていたけど、手当てもされて生き延びれた。それに、首に付けられていた首輪も外されている……。

「……えっと、この子はウイキッド。ウイキッド・ウエネーフィカ。私はウイキ姫ちゃんって呼んでいるわ」

状況が全く分かっていないウイキッドは小首を傾げながら頭に疑問符を浮かべている。オトウールよりも幼い精神状態のウイキッドに説明しても半分も理解は出来ないだろう。

「オトウール様とウイキ姫様で御座いますね。御二方、所用がありましたら何でも仰って下さい」

その時、ウイキッドの腹の虫が可愛らしく鳴いた。その様子を見てメサルティムは口元に手を当ててクスリと微笑んだ。ウイキッドとオトウールは戦場で捕まえた黒光りする虫(蜚^{ゴキブリ})を口にしたり、牢獄内で衰弱死したA I Sの血肉を喰らって辛うじて生き延びて来た。何日も食にあり付けない日も多い為に、普通の人間から見れば2人も腕や脚が細く飢えている様にも見える。

「……その前に軽食を。御二方の身体的状況を加味して消化の良い物をご用意しましょう。少々、お待ち下さいませ」

メサルティムはそう言うや否や、速やかに医務室を退室して行った。様子を察して即座に最善の判断を下す。迅速な行動と言えた。

「良く分からない人、ね。あの人は……」

「オト姉、オト姉。此処、何処?」

「あ、ウイキ姫ちゃん。ごめんなさい、起きたばかりだから良く分からないわよね。分かる範囲で説明するわね……」

状況が理解出来ないウイキッドにオトウールは現在の状態を説明した。自分達の居たコミュニティが壊滅した事、このコミュニティの者達に保護されたと言う様な状態の事。

「……うーん？理由が、分からない」

「ええ。確かにそうね……」

——助ける理由が思い当たらない。

悩んでも悩んでも答えが出て来ない。少し時間が経つとメサルティムがワゴン台を用意して再び入室して来た。ワゴン台の上には少量ながら確かに食事と言えるモノが乗せられている。

「……申し訳ありません。当コミュニティの懐事情は大変厳しくご満足頂けないと思われませんが……」

「いえ、謝らないで。生きてるだけで儲け物よ。それに、ウイキ姫ちゃんが生きているし私も生きている……それだけで充分なのよ。私達にとつては」

ウイキッドも自分も生きている。それだけで充分だった。自分達は戦う事しか出来ない、それでも構わなかった。戦わないと生きていけないのだから。最後まで生きる、そう決めている。どんな目に遭っても、其処だけは譲らない。

「……遅いですね。ご主人様が興味を持つのも領けます。少ないですが、どうぞ召し上がって下さい。牢獄内では腕を使えなかったでしょうから食器の扱い方は分からない筈ですので、食べさせる形になりすが宜しいでしょうか？」

2人とも箸やフォーク類を使った事が1度も無い、せいぜい手掴みか犬食いである。羞恥心の類は余り無かった為に、お願いする事にした。食事は味は薄めで飲み込みやすいスープ類や少し柔らかめのパンであった（保存が効くモノを選んだのだろう）。ISにより食糧の事情も激変してしまっている為に致し方無い。それでもウイキッドやオトウールからすれば充分ご馳走と言えた。

「美味しかった……」

「……そう言つて頂けると幸いです。まだ万全の状態では無いので安静にして下さいませ」

——確かに私達は重傷、今も身体の彼方此方が痛いわ。動くのも億劫ね……あの牢獄だとどれだけ怪我をしても戦場に放り出されていた。怪我をしても体調が崩れていても『寝れば治る』と言われて殴られて蹴られて……。

「……酷いお話です。人、とは此処まで醜くなれるモノなのでしょう
か」

「え？」

「……何でもありません。他に何か——」

「一つ質問、良いかしら？彼の『取引』とは、どう言う意味なのかしら？」

其処でオトウールは気になった事をメサルティムにぶつける事にした。それは最後に告げた『取引したい』と言う事だった。

「……本来ならばご主人様本人から話すべきですが、^{せんえつ}僭越ながら私からお話しましょう。その前に当コミュニティの状況を説明せねばなりません」

——確か色々、事情があると言っていたわね。

「当コミュニティ『エストレア』は規模と反比例する様に人員が少ないのです……それは数ヶ月にISの襲撃を受けた結果、大損害を被つたのです。元々『エストレア』にはA・I・Sは居らずISに対しての有効打になる様な手は無いに等しいのです」

「……戦力は皆無。そう言いたいよね」

「はい。移動艦と言う事で運送業が生業となっています。当然、移動し続けている為に道中にてISやエインヘリヤルと遭遇する事も多いのです」

——自分から突つ込んで行く姿勢……。

「……道中、この近辺を通りかかった際にオトウール様達の様子を拝見させて頂きました。多数のエインヘリヤルを相手に大立ち回り、お見事でした。その後日に埼玉コミュニティの1つへヴォルヴァ・ヒムの襲来の末に壊滅状態に陥りました」

「……………」

「誠に申し訳ない事にある下心がありました。何分、我がコミュニテイは懐事情が厳しい所があります。そして、生存者を救助する理由は……………」

「戦力が欲しいから」

「ウイキ姫ちゃん？」

「…………ツ!!？」

其処でウイキッドが口を開いた。それはメサルティムが今、正に言おうとしていた事を的確に的中させた。だからこそ、メサルティムが目を見開いた。

自由への衝動

「戦力が欲しいから」

「ウイキ姫ちゃん？」

「……ッ!!？」

其処でウイキツドが口を開いた。それはメサルティムが今、正に言おうとしていた事を的確に的中させた。だからこそ、メサルティムが目を見開いた。

「ウイキ姫様、御聡明で御座いますね。A I Sはその所属するコミュニティに所有権があります。A I Sが所属元を消滅する手段は3つ。コミュニティのオーナー等、権利者クラス同士による売買契約が締立し異動が認められた時。もう1つがコミュニティが壊滅し権利者の生存が否定される時。そして最後が、廃棄処分された時」

A I Sは隷属的な契約に縛られており所属コミュニティの所有物。異動する時は基本的にA I Sは売買され売り飛ばされる形で違うコミュニティに送られる(その時、大概が高額で取引される事が多い。勿論、愛玩奴隷と言った末路である)。

「……成程、そう言う事。貴方達は戦力が欲しい、その為にA I Sが欲しかった。だから救出した、その判断で良いのね？」

「取り繕う事は致しません。はい、その通りです。当コミュニティは余裕がありません。他コミュニティにA I Sの所有権を買い取ると言う行為も足元を見られる故に常軌を逸する高額である事が多く、尚且つ売りに出される者達は……誠に申し上げ難いのですが、廃棄寸前と言う方々ばかりで……」

コミュニティとしてもA I Sは殴る蹴る等の扱いは劣悪極まるが所有物であり『兵器』である事には変わりはない。そして、売り飛ばす時もその時に最高の利益として運用するのが常。役立たずで使えないA I Sでも性奴隷と言う形であれば売物になるのだから。

「……壊滅したコミュニティから辛うじて回収して本人に『来てくれるか』と交渉するしか、無い」

「はい、その通りです。過去にも似た様な行動を致しましたが一步遅れてしまったり、心身共に疲弊して力尽きたり精神を病んで錯乱し自殺してしまつた方々ばかり……会話にまで漕ぎ着けた方々は貴方様方が初なのです」

ウイキッドは理解した。自分達を助けた理由を。それは戦力確保の為……だが、相手の対応は交渉する姿勢であると言う事。普通ならば治療は兎も角、強制的な言動をするだろうと考えたからだ。

「この行為、最低だと罵って貰つて構いません。ご主人様の為に最善を尽くす。それがメイドの務め。如何なる罵声も喜んで受け止める所存です」

メサルティムは毅然とした態度でそう告げる。火事場泥棒染みたま真似、人間としては最低である事は百も承知。そして、その全ては自身の主の為に尽くす。メイド長であるメサルティムは振る舞うだけである。自身の主の為に尽くす、他に意図は無い。

「……………」

「貴方達が、私達の知る人間とは違う。そんな気がするわ……手当てもしてくれやし食事も出した。感謝すれど、罵倒を言うつもりは無いわ」

——それに、行く宛なんて無い。それに……その交渉、条件付きながら受けても良い。

「オト姉?」

——……何時だつて賭けばかりよ。仮にこのコミュニティを出て行つて地上を彷徨つていても食糧になりそうなモノが見つからない時が多い。その果てに何時の日かは違うコミュニティに捕まるでしょうね。あの紫つて人は『何処のコミュニティも似た様なモノ』と言つていた。此処がターニングポイントになるかも知れない。私は……。

「ウイキ姫ちゃん。ちよつと難しい話だからちよつと、ね」

「うに」

——対応が丁寧だった。生きる為に、最善策……そして向こうは取引をしたいと言つている。なら、少し欲を出しても行けるかも知れない

い。失われたモノを取り戻したい……その為に私が出来る事は……決まっている。

「……メサルティムさん。先の男性」

「メサルで構いませんよ。ご主人様ですか？」

「その人が言う『取引』。条件があるけど受けても良いわ……」

——失われたモノ。それから……自由。相手は戦力を欲しがっている。対価に私達も何か釣り合うモノを要求出来る。無理だとしても、身体を差し出してでも勝ち取る……躊躇いは無い。ウイキ姫ちゃんが、自由ならばもう1度、檻の中で過ごしてでも良い。

「……ふふ、本当に遅いですね。分かりました、此処から先は私個人の幕はありません。ご主人様ご本人にお委ね致します。それで宜しいですね？」

「ええ。不鮮明な所はあるし……まだ混乱する事もあるわ。でも……どの道、帰る場所はない」

——帰りたくも無いけれど。ウイキ姫ちゃんと一緒ならば、何処へでもきつと行ける。

「畏まりました。では、ご主人様をお呼びして来ますので少々お待ちを……」

メサルティムはそう言い一時退室した。この取引が成立すればもう引き返せない。最も引き返すつもりも全く無い……最後まで生きると決めている。そして自分達を閉じ込める牢獄は壊れた。

——此処で、未来は決まる。ええ、間違いない……私達は私達の道を歩きたい……誰かに指図される事なく、生きたい。きつと、自由つてこう言う事を言うのかも知れない。

「オト姉。オト姉の判断なら、何も言わないよ？」

「……ウイキ姫ちゃん。ええ、ありがとう」

——紫つて人。裏で何を考えているのか分からない。この判断が間違っていたとしたら……と言う不安もある。でも、此の儘、地上に出たとしても終わらない戦場かも知れない。不安、果てしなく不安が付き纏う。あの人は『愚民政策』と言っていた……知らないからこそ、恐怖を感じる、と。

「それから、ウイキ姫ちゃん。何が起こっても何も言わないで」
「う、うん……」

ウイキッドに何が起きても口を挟まないで欲しいと言っておく。素直故に言う事は一応、聞いてくれる。度が過ぎれば挟んでは来そうだが、一応の釘差しはしておいた。

「想像以上に早いな。素直に驚かされてばかりだな……。ちよいと決断早すぎないか?と言う心配もあるがな」

暫く時が過ぎると医務室の扉が開かれて紫が入って来た。オトゥールの伝聞を聞いて予想外だと言いたげな表情を浮かべて此方の様子を案じる様な物言いをしている。本人からすれば『取引』の話はもう少し後になると考えていたからだ、コレは本当に予想外だった。

「決断の遅れは危険を招く、違いかしら?」

「性急も又、危険を招くが……手を拱いているよりはずっと良い。で、メサルからこの『エストレア』の事情は聞いたからその辺の話は割愛させて貰う」

「ええ。貴方達はA I S、つまりI Sに対する戦力が欲しい。合っているわよね?」

「ああ、間違いは無い。ウチは万年、金欠で火の車って奴でな……仕事を取ろうにも作ろうにもI Sの存在が邪魔でな。対処法を確立出来ずに手を拱いている為に細々とした仕事しか取れない。俺の目的を実行に移すにしても、コレでは途方もない時間が掛かる。相応の実入りのある仕事を取り俺の目的に近づく為にはやはりI S絡みが最短経路。かと言ってその為のA I Sの確保は『エストレア』じゃ難しいのが現実でな」

紫は『目的』があると言う。その目的を果たす為にもI Sの存在は邪魔らしい、その邪魔なI Sを排除する為にも現状で一番、有効打になり得るのがA I Sの存在であった。

「で、君の言う条件を聞こうか？」

「行方不明の仲間を探したい。その足掛かりにさせて欲しいの」

オトウールの要求は、コレまた紫からすれば想定外だった。紫の予想としては彼女達自身の自由か何かかと考えていたからである。

——移動出来るコミュニティと言っていた。つまり此の儘、彼方此方に向かう事が出来ると言う事。ならば行方知れずになつてしまつた皆を探しに行ける。きつと、皆……何処かで生きている筈!!？」

罪禍の証

オトウールが紫に『条件』を提示しているその頃、何処かの某コミュニティでは……。

——何時からこうなったのか、もう覚えていない。コレはボク達に對する罰なのか。

拘束された腕を後ろ手に回され白い廊下を歩かされる1人の少女が居た。前後に軍服を着た男性2人が挟んでいる。その光景を見れば罪人の連行の構図となるだろう。

首に嵌められた首輪には鎖が伸びておりその先は前を先導する男性が持っている。その鎖に引かれて歩く姿は家畜か奴隷の様に思わせて屈辱的な感情に支配される。

——現地の人間達の歓迎。それはボク達を引き裂いた。あれは選別だった……彼らはボク達を受け入れる事はしなかった。次々と拘束具を付けられて奴隷同然の身に落とされた。

歩かされる金髪の少女、シャルロット・デュノアは心の中で此処までの経緯を思い出す。それは、余りにも残酷かつ無慈悲な宣告。右も左も分からない世界に放り出されて突き付けられた現実……無知な人間は悉く現地の人間達によって奴隷化される。未開の土地で不用意に踏み込んだ者達は散々な目に遭う……それが自分達だった。

IS適性を調べられ適性あり（非戦闘員達含めて全員適性が有った）と見做されるや否や、頭にナノマシンを打ち込まれ、拘束具を付けられて次々と何処かへと連れ去られた。かく言うシャルロットも当然、強引に引き摺り出された。連れ去られた先は牢獄。その中へゴミを放り込むかの様に投げ込まれた。訳も分からない世界に迷い込んで訳の分からない仕打ち、その事実には殆どの非戦闘員であった少女達は泣き叫ぶ。その叫声に看守は咎めて数人が殴る蹴るの暴行を受

けた。恐怖を覚えた者達は大人しくしていたが、八つ当たり同然で巻き添えを受けて殴られ蹴られ踏み躪られる。

その日から地獄が始まった。毎日の如く行われる私刑と言う名の暴行行為。機械と人体が融合した奇怪な姿をしたエインヘリヤルとの戦闘を強制される。生き延びても暴行は止まる事は無く、生傷が絶えなかった。食糧、睡眠も十分に与えられない上に疲弊していたとしても強引に戦場へと立たされる。逃亡を企てた者達はナノマシンによって爆殺された。戦わなければ生き残れない、そう言う環境へと自分達を取り巻く環境は変わってしまった。生きたければ戦え、でなければ死ぬ。その事実には少女達は絶望した。

そんな日々が続いた時、シャルロットだけが牢獄の中から出された。そして告げられた言葉。

『喜べ、貴様は高額で売れた』

シャルロットは他のコミュニティへと売り飛ばされたと言う事である。利益の為の高額商品として売れたと言う事実。そして、自分を含めて他の者達も同じように何処かのコミュニティへと売り渡された事を知った。一気に奴隷同然の身に落とされた挙句に行方が分からない場所へと売り飛ばされてしまった。その言葉を受けた直後、ケースの中に放り込まれて車両に運び込まれて何処とも知れないコミュニティへと連れ去られたのだった。

——この世界じゃ、女性と言うだけで悪夢を見る。

売り飛ばされた先のコミュニティでも地獄であるのは変わらなかった。清潔感はあるがつまりそれは研究施設であると言う事であった。A I S 達は人体実験の為に使われており、明日も知れない日々を送っている。そして、その実験は非人道的と言わざるを得ない。

「入れ」

シャルロットが連れて来られた部屋。其処で目にした光景、それは。

「ツ!?？」

「あゝッ……いゝ……む……い……や……め……!!?」

部屋の奥、其処では両手を頭上で拘束された緑色の髪の少女が淫靡な嬌声を上げていた。幼さが残る顔立ちだが身長は高い事が分かる。

——何、アレ……!!?」

何も身に付けて居ない。生まれのままの姿のままに拘束されている。爆乳と言っても差し支えない程の豊満な胸にはコップ状の器具が取り付けられておりその底から細い管が伸びているのが見えた。

「貴様らの様な女尊男卑の女共の所為で全国の生産業の方々が大打撃を受けてしまった。酪農家の方々も当然の如く、大赤字だ。何せ飼料代が高騰してしまい乳牛や肉牛と言った家畜が次々と失われてしまったのだからな。ならば代替案が必要となるだろう」

「あゝっ……いゝ、や……も……う……ゆ……!!?」

切なく言葉にならない喘ぎ声を上げる少女を見せつけられてシャルロットは気付く。気付いてしまった。あの器具は搾乳器であると言う事。女尊男卑によって凡ゆる物価が高騰化し、貧富の差が増した。

「……乳を出す存在が居たな。と思ってね。そう、貴様らの様なA I Sには丁度良い仕事だろう?牛達を見習って乳を出す事だ」

酪農家も打撃を受けて飼料を賄えず乳牛の個体を減らして行き、潰れる酪農家も続出した。その為に乳製品の物価が高騰化となつてしまった。その為に代替案として女性の母乳を用いると言う事に至るのにそう時間が掛からなかった。

——……搾乳器を使つて……!!?　そ、そんな真似、許されるの!!?

戦慄した表情でシャルロットは目の前で搾られ続け喘ぎ声を上げ続ける長い緑色髪の少女を見る。

「何、他人事の様な視線を向けている?貴様も、失われてしまった乳牛達の代役を立派に果たせ」

「ッ!!?」

首筋に注射器の針が突き刺され何かしらの薬品を投与された後、拘

束具を外され、着ていた簡易服を脱がされた後に喘ぎ声を上げ続けている少女と同じ様に両手を頭上で拘束されて吊るされる形に拘束される。両足も床にある固定足枷に繋がれて拘束される。膝立ちの為にこの姿勢が続けば疲労が重なる。

「くっ……!?」

——この姿勢……かなりキツイ!!? 他にも似た様な人が同じ姿勢で搾乳されている……!!?

その場所に固定された事により立っていた場所から見えなかった場所と同じように拘束された少女が拘束具と搾乳機に繋がれて乳牛扱いされているのが見えた。シャルロットの視界に映ったのは小柄で赤いツインテールの貧乳の少女と青黒い髪の少女の2人だ。2人とも喘ぎ声を上げて身体を震わせて胸から母乳を搾り出されている。

——ひ、酷い……!!? あんなにも搾り出されちゃ……!!?

他人の心配よりも我が身の心配をしろと言わんばかりにシャルロットの胸にも搾乳器を取り付けられてる。吸盤の様な口の為に吸い付いて離れない。両手を拘束されている為に自力で外す事も出来ない。

「言っておくが乳牛用の搾乳器だ。その吸引力は凄いな……精々、胸だけでイかないように堪える事だな」

「に、乳牛用……!?」

——そ、そんなの使われたら……!?? あッ……!!?

そして無情にも搾乳器を制御する機械の電源が入れられシャルロットの胸からも母乳が搾り出される事になる。乳白色の液体が乳首から大量に溢れ出し管を通ってタンクへと滴り落ちていく。普通、此処まで出そうと思っても出ない。にも関わらず溢れ出している。

——や……と、どめ……い、で、出る……な、なんでえ!?? ま……さが、さつ、ぎの……ぢゅ……しゅ……!??

淫靡な叫声は止まらない。それは機械が止まる時か、或いは男性達が止める時までシャルロットは泣き叫び続ける事になるだろう……。

波乱の幕開け

「行方不明の仲間を探したい。その足掛かりにさせて欲しいの」
オトウールの要求は、コレまた紫からすれば想定外だった。紫の予想としては自由か何かかと考えていたからである。

——移動出来るコミュニティと言っていた。つまり彼方此方に向かう事が出来ると言う事。ならば行方知れずになつてしまった皆を探しに行ける。きっと、皆……何処かで生きている筈!!?

「……行方不明?そりゃあ、埼玉コミュニティから別コミュニティへ売り飛ばされた者達の事を指すのか?」

「それもある。けど、他にも居るのよ。ウイキ姫ちゃんはその時、1番幼かったから覚えて居ないでしょうけどね」

「説明してくれないか?」

「ええ。と言つてもそんな長くは無いわ。私達は捨子、元々は孤児なのよ。両親の顔さえも覚えて居ないわ。廃墟の街並みの幼稚園と呼ばれた建物で寄り添つて生きていた。皆、その頃はとても幼かったわ……ウイキ姫ちゃん以外、名前が分からなかった。だから私は皆に名前を付けたの」

「ふむ……」

「けど、ある時に大人の男性達がやって来た。その時、初めて大人の男性と言う存在を見たわ……絵本で見た大人よりも酷い人達だった。皆、捕まつて……散り散りになった。私とウイキ姫ちゃんとその他、数人の子達は同じコミュニティ、他の子達は何処かのコミュニティへ……そして牢獄に入れられた。その先は貴方の知っている通りよ」
「……AISの過半数が孤児や捨子……生きる為に自分からAISになる事を選ぶ少女も居る。成程、君はその孤児達の集まりのお姉さんだったんだな。年長者故の」

「ええ……」

「成程。君の要求は行方不明の仲間の少女達を探す事、か?」

「もう少し欲を言うのならば、安全な場所に迎え入れて欲しい。大体、

私よりも年下でウイキ姫ちゃんより年上の年齢の子達よ。どんな子に成長しているか、全く分からないけど……何とか説得してみるわ」
「……ふむ。纏めるとだな。君達は戦力、及び人員の提供、その見返りに俺は清潔なベッドを提供するって形か……？」

「その表現が何を意味しているのかは読み取れないわ……」
「そうだったな。無学だったのを忘れていたよ……この表現だと誤解を招くか。確かに俺達は戦力が欲しい……だが、君の言うそのA I Sはアテになるのか？」

紫が疑問に思うのは其処であつた。確かに戦力は欲しいが、見た事も無く実績も不明。そして戦力になるかどうかさえも怪しい。エストレアの懐事情としては言い方は凄く悪くなるが使えない人材を抱えられる程の余裕は全く無いのだ。

「ごめんなさい。其処は、何とも言えないの……それでも、取り返すチャンスが欲しいの!!?。今迄は皆……私の手の届かない場所に行ってしまった……だからこの手に残ってくれたウイキ姫ちゃんだけでも護ろうと考えていた。でも、チャンスが巡って来てくれた……だから、お願い!!?。皆を取り返すチャンスを頂戴!!?。」

オトウールは其処で横たわっていた体勢から無理に起き上がり座り直す。身体中、包帯だけを巻いている身体を晒す。躊躇いは無い……。

「……私自身の身体を好きにしても構わない!!?。あのコミュニケーションの様に奴隷の様に使ってくれても、性奴隷の様に性欲の吐き口にしても、牢獄に押し込めて拷問に晒してくれても構わない!!?。だから……!!?。」

オトウールは自分自身を犠牲にしても構わないと言う覚悟を持って懇願した。痛みがある中で頭を下げた。

「止めなさい、頭を下げるな」

其処で紫は制止させた。こんな光景は見たくは無かったからだ。

「自分の体を大事にしろ。何も『無理』とは言つて居ない……それに軽々しく性奴隷とか口に出さないでくれ……」

バツが悪そうに紫はそっぽを向きながらそう告げる。知つては居

るがその手の話題に関しての免疫は殆ど無い、それに現在のオトウールは身体の各所に包帯を巻いただけ（代えの下着さえも付けて居ない）の姿故に直視出来ないのだ。

「……で、その行方不明の仲間って何人くらいなんだ？」

「えつと……うーん。30人は、超える……かしら？」

「マジ、か……」

想像以上に多かった。そして紫はオトウールの記憶力にも驚いた。何年前かは知らないがその人数を記憶しているのだから凄いと言える。何せ、暴行が横行する中で褪せた記憶を覚えているのだ。気丈と言えはその通りだ。

「……ふむ。名前は、覚えているか？」

「ええ。私が皆に名前を与えたもの。覚えているわ」

「殆、驚く他無いな。君の提示する条件が行方不明の者達の保護、か。話を聞く限り……大半がAISになっているだろうな。故に全員が生存している保証は確約は出来ない」

「……覚悟はしているわ」

「それを第一条件として俺が呑めば此方の要求も聞いてくれる、で良いな？」

「ええ……私の身体を好きにしてくれて良いわ。縛るなり鬻るなり、お好きにどうぞ？」

「それは却下だ。自分の身体を大事にしろ。俺からの要求は戦力提供、位だ。元々、AISとして生きている君達は言い方は悪いが戦う事しか知らないだろう？」

「……本当に言い方が悪いけど。ええ、その通りよ。私達は戦う事以外、何も出来ないわ」

「……そうか。だが、今はそれで良い。知りたい事は後で知って行けば良いさ。何、焦る事は無い。いつの時代でも勉強が嫌いだと言う者は1人として存在していないからな」

「……それで、返答は？」

オトウールは自身の要求を答えた。紫は対ISの戦力として2人を欲している。対するオトウールは行方不明の仲間達の搜索及び保

護を要求している。リスクとしては紫にとって不利になる様な取引条件。紫は顎に手を添えて少し考える。

「良いだろう……」

「その取引条件を呑もう」

考えた末に紫はオトウールの提示した条件を認めた。オトウールは条件を呑んでくれるなら紫の取引に応じると答えた。つまり取引成立である。

「現時点を持って君達2人を『エストレア』に迎え入れる。そして、君の言う行方不明の者達の捜索及び保護に関してだが、発見次第、状況を整えた後に当コミュニティである『エストレア』に迎え入れる、で良いな？」

「ええ……帰る場所も無ければ行くアテも無い。アテも見えず彷徨った挙句、また他のコミュニティの人間達に捕まって牢獄に押し込められるよりは貴方のコミュニティの方が良さそうって考えたの。正直な所、無茶な要求だとも分かっていたわ……却下される覚悟もしていた」

「……足元を見られて居たのは此方だ。ヴォルヴァを相手にして生存

出来る奴なんてそう居ない。俺から見れば逃したく無いと言うのが本音……どんな無茶な要求が飛び出すか戦々恐々だったからな……」

紫は戦力皆無の状況で見出せた2人を逃す程、愚かでは無い。多少のリスクを背負ってでもオトウールとウイキッドを抱き込む価値があると見出したのだ。それに改めて考察を行った結果、見ず知らずの面子よりも見知った者達で固めた方が内部崩壊のリスクもある程度は低減出来ると言う発想に思い至った。何も出来ない訳では無い、『道』は1つでは無い。性急過ぎて居たのは他ならぬ自分の方であったと呆れる他、無かった。

「今一度、考えた結果……。それで君が行方不明の者達に説得してくれるんだよな？」

「ええ、皆……。見つけたいのよ。例え、亡骸であつたとしても」

「フツ……。なら良い。どんな連中かは知らないが……。何事も未知の存在である事には変わりはない……。どうやら性急過ぎていたのは俺の方だった、オーナー失格だな、フハハ……。余程、焦っていたのか、俺は」
「うに？話、終わった？」

「ええ。でも、もうちよつと掛かるわ。そうでしょう？」

「ああ、この取引には『穴』がある。君達と『埼玉コミュニティ』との契約が消失している事が前提条件だ。確かにヴォルヴァによって君達の所属コミュニティが壊滅的な被害を受け回収出来た生存者もそう多くは無い。メサルが確認した限りコミュニティ・オーナー以下、有権者各位の所在は不明。生死不明だ」

「仮に生きていたら？」

「……返還要請が来るだろう。その場合は応じざるを得ない。その為、この取引は一時的になり得る可能性もある。オマケにAISには頭にナノマシンがある筈だしな、流石に現状では摘出するのは無理だ……。そう言う意味でも返還の要求を反故するのは危険だ……。其処の所は頭に留めて置いてくれ」

埼玉コミュニティの有権者が生存していた場合、返還要請が出されると指摘する。その場合、紫はその要請に応じる必要がある。コミュニティの規模的にも向こうが圧倒的に上であり、その要請を反故にし

た場合物理的な衝突が発生する可能性が高い……その場合、エストレアは間違いなく勝ち目は無い。そうでなくてもA I S各位に脳内にナノマシンに注入されている。現状、遠隔操作で爆破されていない為に様子見か或いは……。仮にその問題は無くなったとしても無理に反故にすれば経済制裁が行われる可能性も視野に入る為にコミュニケーションとしては死活問題に直面する。そう言う意味でも今回の取引を持ち掛ける紫はかなり危ない橋を渡っている事になる。

「……その心配は薄そうよ。紫」

その時、医務室の扉が開かれてある人物が入って来た。

死体蹴り

「……その心配は薄そうよ。紫」

その時、医務室の扉が開かれてある人物が入って来た。非常に長い黒い髪を後方に流した赤い眸を持った女性である。その手には真新しいファイラらしき物を手に持っていた。

「カタナ。どうだった？」

「当たりも当たり。埼玉の連中、変な所で律儀よね。はい、面白いモノを見つけて来たわよん」

「その口調、何とかしろ……全く」

「フフ、気にしない気にしない」

2人の様子に面食らう2人。やはりこのコミュニティの男女関係は良好の様である。埼玉コミュニティでは女性は全員がAISだった為にこんな光景、見た事がない。

「む、カタナ。都合が良い時に都合の良い物を見つけて来てくれたな。コレは間違いなく有効なカードになるだろう。まさか今、正に心配していた事が杞憂になるとはな……」

そのファイルに目を通した紫は目を見開いていた。その内容は本人としては喜ばしい限りの内容だったらしい。カタナと呼ばれた女性は用件が終わったのかさっさと退室して行った。

——うー？何を言っているのか、さっぱり分からない。

「……何が書かれているの？私達、文字が書けないし読めないのよ」

腕が使えない事もあり文字の読み書きは出来ない。大半のAISは識字率が低い傾向がある（会話は可能だが文字の読み書きは出来ない者が多い）。オトウール達もまた、例外では無かった。

「其処までか……ああ。簡単に言おう……君達は死んだ扱いになっている。コイツはAISの死亡名簿みたいなモノでな。AISは兵器扱いであり資源と言う認識から、資料管理は行われるモノだ。主にAISの人数や生死の有無もな。戦力把握の為に逐一、管理するべきモノ……日本人はそういう事に関しては細かいんだよ。識別コード

もその一環だ」

「名前を呼ぶのが面倒だと思ってた」

「コード名の方が纏めやすいと言う事情がある。名簿も名前の長さが統一されていた方が見栄えが良いと言う理由もある。最も、一応は固有名詞も記載されている。オトウールの名前の下の項目にウイキッドって名前とか」

「あ、それ、私の名前……」

「ウイキッドでウイキ姫、か。いや、後にしよう。其方の小さい嬢ちゃんとは話をしていないが後にさせてくれ。兎に角、死亡扱いになっていたのは確かの様だな」

紫はそう言いファイルを閉じた。2人が死亡扱いになっていると言う事は何らかの形で廃棄処分するつもりだったと言う事になる。

「あー、ヴォルヴァ襲来の直前……半ば処刑寸前だったわ。拷問のショーみたいな見世物で殺されそうになったのよ」

「内容は聞かない。2人が死亡扱いになっているという事は先程、告げた返還要請の枠組みには入らない。死体を返せと言う奴は居ないし、そもそも正式な公文書である死亡名簿に記載された時点で契約は解消される。仮に要請が来たとしてもこの死亡名簿が証拠として調停役の者に提出出来る」

埼玉コミュニティがウイキッドとオトウールの2人を返還要請を出したとしてもその2人は正式に死亡している形となっている。この場合、2人は同じ名前の他人と言う扱いと見做される。経歴が真っ黒であるがA I Sは殆どが孤児や捨子、同姓同名の他人となる。流石に死者を要求する程の数奇者はそうそう居ない。と言うよりも物言い様ではあるがそう言う現行の法律となっている。死亡したと言う公文書が存在する場合、有効となり別人扱いとなる。コレは二重契約を防ぐと言う名目との事(両方で所有権争いが勃発するのを防ぐ意味合いもある)。

「えっと……？」

「まあ、今は分からなくて良い。2人は、正式に『エストレヤ』の所属に移行させても問題は無いと言う事が判明したと言う事だ」

「つまり……？」

「これからは俺が君らのクライアントかつパトロンと言う事になる。宜しく頼むぞ、君達には期待している。ま、その前に療養してから、となるがな。ナノマシンの方の心配はあるが……」

こうして2人は正式に『エストレヤ・コミュニティ』へと迎え入れられた。そして、お互い、腹に一物を抱えている事を、お互い察していた。

○

「お疲れ様です。ご主人様」

「ま、何とかなつたかね。結構、危ない綱渡りだったがな」

——埼玉コミュニティの司令室が壊滅していた。AISのナノマシンの遠隔操作の制御は司令室にて行われているとは初耳だったが、だが、残り続けるのはそれはそれで危険と言える。設備の再建ができ次第、摘出手術が必要になる。

エストレヤの執務室。その場所にて椅子に座った紫は一段落したとため息を吐きつつ書類を片付ける。その近くではメサルティムが侍り声を掛ける。

「ですが、本当に宜しかったのですか？オトウール様の要求もかなりの難題と言えますが」

生死は兎も角、大半が何処かのコミュニティにAISとして所属している可能性が高い。該当コミュニティに対して所有権を要求し、契約を締結させる。しかし、それが成立する事はほぼ無いと言って良い。

仮に成立したとしてもエストレーヤの懐事情は厳しく足元を見られ破綻する程の法外な金額を提示される……。また、戦力にならないAISを売り飛ばす際も性奴隷と言う形で高額な金額により売られる為に金銭でのやり取りではどうしても難しい。

「そうだな……。AIS自身が所属を変える事も認められていない。隷属的な契約……って奴だ。埼玉コミュニティみたいに娯楽で殺す行為が横行していた場合、既に事切れている可能性もあるし……。或いは」

「愛玩動物、性奴隷と言う形で権力者によって家畜化されてしまっている可能性も視野に入ります。搜索保護が要求だったとは言え……」
「ああ、探すのは簡単だが……。保護となると中々の難題と言えるだろう。だが、認めると言つちまつた以上……。反故にするのも酷だ。」

オトウール嬢は自分の身体を差し出してでも条件を呑ませようとして来やがった。流石に其処までの覚悟を見せて来られちゃな……。ま、戦力が欲しいって言うのは本音。そしてヴォルヴァと渡り合える可能性を持ったAISは現状を見渡してもあの2人くらいだろうか？」
そう言う意味でも多少のリスクを支払っても確保したい思惑があった。そのリスク&リターンと言う物は付き物。

「僭越ながらお言葉ですがご主人様。実はもう2人程、瀕死の淵から生還した方が居られます」

「ん？初耳だな、それは……。確か他にも生存者は居たのは聞いているが……」

「怒濤の交渉劇でしたモノで報告するタイミングを逃してしまい今に至ります」

「それはすまなかった……。さてと、オトウール嬢とウイキ姫は兎も角、他の面子はどうにもならない可能性が高いな」

ウイキッドとオトウールは処刑前提での拷問ショーが行われた。故に事前に死亡名簿に記載されていた。死亡名簿に記載された時点で契約は解消される。が他の者は契約は有効である。

「ウイキ姫様やオトウール様は死亡扱い故に対外的には同姓同名の者としてエストレーヤに所属する形となりますが……。他の生存者の方々

は、契約は未だに有効です」

「ああ……そうだな。ま、その件に関してはコミュニティ・オーナー共が生きていたらの話だ。今、考えても仕方ないだろう。

そんな事よりもメサル、オトウール嬢から行方不明者の名前を聞き名簿として纏めて置いてくれ。その名簿を元に調べてみよう。契約は契約だ守る義務がある」

——家族と言うモノは余程悪い関係で無ければ決して捨てて良いモノじゃない。オトウール嬢にとってその仲間達が『家族』なのだろう。姉として家族の為に、身を削る事を厭わない。見事な姿勢……此方も相当な無理を強いる事になるんだ。その期待には応えてやる理由がある。

「畏まりました。ご主人様。他には？」

「ああ、それから文字の読み書き、生きる事に関して教えられる事を教えてやってくれ。流石に今迄は家畜や奴隷の様な扱いだったんだ……エストレヤではそんな扱いはしたくは無い。自分の人生は自分で決めれる様にな……。それに好奇心旺盛な年頃だ、教えられる事は教えてやってくれ」

「詰め込み教育になる可能性があります、宜しいでしょうか？」

「其処は本人の意思を確認してからな。結構、手を焼くかも知れんからな」

「ご安心を。このメサルタイムにお任せ下さいませ」

——無茶を言う事を承知していたから身体を差し出すつもりだったのか……全く、どんな覚悟しているんだ。それに、ウイキ姫……か。名前と言い、容姿と言い……本当、ソックリだな。

「……後、あのとき伝え忘れていたコミュニティ内の一部の機密区画以外に立ち入り行動する許可を出しておいた。後、彼女達の部屋や服の用意も頼む。済まないな、一度に大量に頼む事になって」

「勿体なきお言葉です。ご主人様の判断こそが私にとっての最善で御座います。どうか、意のままに最善を尽くしてくださいませよう」

「……ありがとう。さて、野望への一步を踏み出すとしようか」

——見ていろよI^羽S^虫共。その下らない思想諸共、宇宙の塵にしてく
れる。

2人の道

ウイキツドとオトウールが『エストレヤ』の一員になって数日後。瀕死の重体であり包帯塗れであった2人だが数日も経てば身体に負った傷の殆どが癒えてしまい普通に歩ける程に快復した。この事実に流石のメサルティムも驚きを隠せなかった。

『白昼夢の様な、驚きの快復力』

と言う言葉を残している。2人にとっては慣れてしまった当たり前の現象だったがメサルティムや報告を聞いた紫からすれば驚く様な出来事であった。そう言う訳で数日後には医務室から移動する事が出来る様になった訳である。

「オトウール様、ウイキ姫様。お二人のお召し物がご用意出来ました」
医務室から用意された部屋に移動する際に服が必要と言う事で新しい服を用意された。瀕死の重体の時に身体測定もしていたらしくサイズは問題無い様にされていた。

用意された服は黒を基調とした外套付きの衣服でスカートは膝位まではある黒いセーラー服に近い衣服であった。

「……そう言えば今迄はA I Sスーツしか着ていなかった」

「そうね……服の概念さえも忘れていたのね。私達……」

埼玉コミュニケーションの牢獄で過ごしている時は常に全身を覆い尽くすA I Sスーツを身に付けていた。その為、身体のラインは常に丸分りであり男性陣からも舐め回すかの様な視線に晒されていた。最も慣れてしまっていた為に気にならなかったが。

「……その白兵戦仕様のボディスーツは材質等を解析した所、かなりの技術力が窺えますね……耐衝撃に優れ、耐熱、防塵共にも及第点以上の耐久性がありました」

「そんなに凄いモノだったの?」

「はい。ご主人様も舌を巻いていました。『何処の誰だ?こんな良い代物を開発した奴は?』と」

牢獄、戦場問わずに常に着ていたA I Sスーツはかなり高性能な機能を備えた戦闘用スーツだったらしい。単純に奴隷に着せる服は無いとも思っていた。

「それらに対して私がご用意出来た衣服の耐久性は一般的な衣服相当程度の耐久性しかありません。I Sは愚か、エインヘリヤルの攻撃でさえ簡単に破けてしまいますのでご注意を」

「……戦闘用では無い事は理解しているわ。ね、ウイキ姫ちゃん」
「ん、ん……」

「……流石にその状態でI Sとの戦場に出すのも危険です。御二方が宜しいのであれば再びA I Sスーツを着用をお願いしたいのです。技術の転用をするにしても……相応の時間の資金が必要となります故に、何卒ご容赦を」

「ん……その程度なら、構わないよね？オト姉」
「ええ……今更、着る服に頓着なんて持っていないもの……」

身体がラインが丸分かなりなボディスーツで行動する事が多かった為衣服に対しての拘りは無い。埼玉コミュニティでは娯楽と称して卑猥な衣装を着せられて視姦された事もあった。

「有難う御座います。ご主人様からお二人のお部屋をご用意する事、それからある程度の一般教養の教育を行う事を仰せつかっています」
「一般、教養……？」

「はい。主に文字の読み書きと言った事と食器類の扱い方、お風呂の入浴方法、衣服の着方、その他、至極当たり前の事……となりますね。他にも追加の戦闘関連は少し考慮は必要となりますから後回しします」

他にも色々と教えるべき内容はあるが紫からは『生きる事』を優先して教える様に伝えていた。学校のように蛇足なる事を教えても無意味となる。

「……少々詰め込み教育となりますが御二方、宜しいですか？」
「私達は何も知らない。教えてくれると言うのなら受けるのが得ね。何も知らないよりも知って置いた方が良く……そうよね。ウイキ姫ちゃん」

「うに……!!?」

「承知致しました。このメサルティム、責任を持ってお二方の家庭教師を務めさせて頂きます。お二人の部屋に案内した後に早速始めると致しましょう」

こうしてこの日からメサルティムの家庭教師による一般教養の教育が2人に向けて行われる事となった。今迄はずっと言いなり同然で思考力さえも覚束なく未来も希望も無かった牢獄の中で生かされて来た。コレからは自分達で生きる必要がある。その為にも自分の足で生きる力が大切と言える。そう言う理由もあり行う事を踏み切った。

○

「ふむ。成程……そう言う事か」

エストレヤ某区画。其処で紫はある作業をしていた。部屋の壁際の棚には工具の類が大量に置かれており此処が技術関連の部屋であると言う事がよく分かる。その部屋の中央の作業机には巨大な鋸の様な大剣が置かれている。それはウイキッドが戦闘の際に使っていた大剣である。2人には事前に使っていた武器を見せて欲しいと通達して本人が良いと許可を得ている。

——本音を言えばA I S、A I Sとは言うがどう言う仕組みで生み出されているのかさっぱり分からない。生体ナノマシンと拘束具の概念位しか知らないのが現状。かと言って名前だけが広まり詳細は全く分からない……それにI Sはシールドバリアの存在故に一般的な兵器を遺物と化した。

故に対抗策はシールドバリアを突き破れる程の破壊力のある兵器かエネルギーを中和出来る機構を備えた武器。ならばA I Sの必要

性が無い筈……なのに固執して運用している。その答えがこう言う事か。

「目には目を、と言う事だな」

ISは自我の獲得により進化した。故に既存の方法はまるで意味を成さない。それは言うまでも無い……ならばどうするか？答えは同等になり得る存在を用意する事であった。主に武器が。

——ウイキ姫とオトウール嬢。映像で見える限り武装は手に持っていた。回収時には持っていなかったと聞いている。何処に行った？そして、AISはIS適性を有する者に限定されている。

「量子変換、か」

——2人が身につけていたペンダント、それが量子変換されて武装に変化する。それは本来のISの拡張領域に格納されていた武装を取り出す機能、だった筈。つまりこのペンダントは……領域は小さいながらも拡張領域を有する……ISコアなのか？いや、拡張領域はISコアに依存する筈……そして現在の定義では全てのISコアが反旗を翻したと聞くが……。

ISコアが離反した。しかし技術は残されていた。その技術を用いて対抗する術を辛うじて確立させた。そうでなければ……。

「……疑問が解けたと同時に新たな疑問が生まれたな」

——IS共の目的が分からなくなった。いや、それよりも……これは。

紫は嫌な予感がした。量子変換の技術転用は可能であるのなら大きな進歩となり得る。コミュニティ同士で技術提携が行われる事はかなり限定的であり、エストレヤとしてはコミュニティ絡みで言えば孤立気味な状態。経済的にも懐事情は芳しくは無い。それでも成さねばならない目的がある。

「……解析すれば何か分かる筈。打てる手は全て打つとしようか」

——量子変換の技術は使われてはいたが……本体たる武装の強度は然程高く無い。有り合わせの廃棄鋼材を使って繋ぎ合わせただけに思われる。こんなんでISのシールドバリアを破れると思っただのか、甚だ不思議だ。いや、利益第一主義ならば……最小の労力で

最高の利益を得るつもりだったのなら筋は通るか……消耗率は凄まじい事になるが……。

「それに、ついでに回収出来たコレらも解析しないと」

視線を壁際へと移す。其処には埼玉コミュニティで発見された複数の機械鎧……それは正しく確認できた資料に存在するISの機体、其の物であった。つまり所、明確な自我を獲得する以前のIS、となる。何故、埼玉コミュニティに存在しているのか……明確な自我を獲得出来ていないのか、謎は深まるばかりである。

——ISコアも確認出来た。そうなればコレはISと言う事になる。今のご時世、この様な状態のISは殆ど見受けられない。コレが最初期の姿であるとは聞いている。解析すれば……使い様はある筈だ。

解体して解析、そして改造すれば野望に一步近づく……そう考えた紫は腕が鳴ると言わんばかりの笑みを浮かべていた。

——最適な人員を最も活躍出来る場へ用意する。そして、

「ご主人様、失礼致します」

其処へメサルティムがこの部屋へと入って来る。彼女は紫がこの部屋に居ると知っていた様である。彼女は今、ウイキッドとオトウールの教育係を任されている。

「メサルか？」

「お嬢様方を浴室へと案内致しました。やはり入浴絡みは初体験の様でして……おっかなびっくりなご様子でした。流石に高温の浴槽は怯えるかと思ひ多少の微温湯にして起きました。身体の洗ひ方、拭き方は事前にレクチャーして起きましたので暫くは大丈夫かと……」

「……冷水の放水による洗浄だけだったみたいだからな。まあ、のぼせなない程度の様子は見てやってくれ。して？」

「はい。そろそろ、埼玉コミュニティに所属し現在、保護しているAISの子達にも此方の事情の説明を為さる頃合かと……」

「ん、そうだな。ウイキ姫とオトウール嬢に掛り切りだった……本音を言えば2人にしか注視していなかったからな……」

——2人は重傷、状況からヴォルヴァと交戦していたしその2人も

事実を認めている。だが、他の面々は牢獄内にて幽閉された状態だった。その内、別の2人も重傷だったが快方に向かっていると言う（その2人も交戦していたと思われる）。つくづくA I Sの快復力は異常と言わざるを得ない。生体ナノマシンの影響……いや、流石に考えすぎか。

「出来れば1度に説明したいが、無理があるか？」

「本来ならば、安静にさせてあげるのが筋。かと言って医務室に大量に詰めかけるのも……」

「医務室送り以外での保護人数は何人だ？」

「約15名程です」

——その人数ならば何とか収まる範囲内だな。

「分かった。医務室にお嬢達を集めてくれ、其処で皆に説明する。無論、彼女達の今後の状況も含めて話す」

「……酷な話になりますね」

「ああ、カタナが情報を集めては居るが件の埼玉コミュニティのオーナーが存命であった場合は、残念だが……諦めるしか無い。狂っているとは言えど、秩序が無ければ最悪な状態になる。

彼女達が死亡名簿に記入されている場合ならば、強引に帳尻を合わせて誤魔化す事は出来る。無い場合は、契約は生きている事になる。さて、命を金に変える様なお嬢達で無ければ良いがな」

「ご主人様。解決策になっていませんよ？」

「確かに。後は野となれ山となれだ……やる事は山積みなんだ。俺の目的の為に人数的な問題でもウィキ姫とオトウール嬢の2人は余りにもキツ過ぎる……オトウール嬢の探している面々、戦える面子である事を切に願おう」

——情報が必要だ。カタナ、失敗るんじゃないぞ……。

状況整理

紫が埼玉コミュニティに所属していたA I S達に状況を説明した。そして、今回の件は一時的なモノでしかない事も含めて説明した。

「A I Sが所属元を異動させる事が出来る状態の条件は3つ。まず1つ目が、所属元のコミュニティが運営不可能な壊滅状態にある事。これはコミュニティが崩壊してオーナー及び権利者各位が死亡した事が実証された場合、成立する。」

2つ目がコミュニティ・オーナー以下の権利者が該当するA I Sの所有権を何らかの形で放棄する事。これはA I Sの廃棄処理が実行された……つまり捨てる行為となれば所属元からは抹消された形となる。死亡名簿に記載される場合も該当する。」

3つ目がコミュニティ・オーナー以下の有権者によるA I Sの売買の契約が成立する事。早い話が人身売買による売買契約だ」

「……先に言って置くが君達の所属は埼玉だ。その契約は現在も有効の可能性が高い。故に客人としてでも乗組員としてでも置いておける期間には限りがある……」

「どうして……!?？」

辛うじて生存しエストレヤが保護したA I S。その全てが過去からの世界から迷い込んだ少女達であった。紫としては彼女達がA I Sにしては恐ろしく聡明であり此方の話に理解が出来ると言う事。識字率も非常に高い事からかなりの教育レベルに有している事が判明している。それを踏まえて現状を理解出来ていないギャップが存在していた。

「……現在の君達の異動条件がクリア出来ない。君達の名前を聞いたのも理由がある」

「理由、とは？」

「先も話した通り、異動させる状態の条件の1つにそのA I Sが死亡したと言う公文書がある。コミュニティにとってA I Sは資産の1つとして数えられる。死亡した場合は死亡名簿に記載する事が義務

となつている。しかし、売り飛ばされる者も居れば廃棄処分として存在を抹消される場合もあるから、余りアテにならないのが実情だが、書かれたと言う事は所有権が抹消された事を明確に示す数少ない事実となる。部下の1人が偶然、発見してな……」

「……書かれていなかった、と言う事ね」

「理解が早くて何よりだ」

「じゃあ、其処にアンタが新たに書き加える事は出来ないの!?!?」

ややヒステリ気味な少女がそう詰め寄る。地獄の様な牢獄の隷属的な日々は今迄平和だった世界に住んでいた彼女達にとっては耐え難い現実だろう。

「それは出来ない。過去にコミュニティの人間の1人がA I Sを無断で横領する事件があったらしい。その為、専用の入力機械による公文書でしか有効にならない。と言うよりもウチにその公文書を書く為の機械が無い」

「……そんな。折角、あの地獄の様な牢獄生活から抜け出せたと言うのに、また逆戻りになるって言うの!?!?」

「痛いのは嫌だ。早く、早くお家に帰りたい……!!?」

「どうして、私達が何をしたって言うの……?」

その言葉を切っ掛けに他のA I S達も動揺が走る。概ね、似た様な感情を抱いているのだろう。その気持ちは外面では気持ちは理解は出来る。

「……ねえ、崩宮って言ったわよね?」

悲痛なる空気が立ち込める中、空気を突き刺す言葉を出す者が居た。重傷の状態で発見され別の医務室のベッドに放り込まれていた鈴音である。つい最近、目覚めた。まだ安静にするべき状態である為に医務室に皆を集めたのだ。

「……ああ。フォン嬢。質問なら答えられる範囲で答えよう」

「……別にこの状況をどうにかしろとは言わないわよ。無理な事を無理には言えないわよ。と言う形であれ助けられた形だもの……それを踏まえて聞きたい事があるのよ」

「……?」

「その話、コミュニティの有権者が生きていた場合、よね？」

「そうだ。死んでいた場合はフリーの状態となる。一応、自由となるが……こんな世界環境で右も左も無い状態で生きるのは過酷であり危険を伴う。だからこそ人類はコミュニティと言う共同体を作り上げた」

「ええ。理解出来るし、理に適った行動ね」

「……現状では、生死不明の状態だ。壊滅的な被害を受けて逃げ延びた可能性もあるが……死んでいる可能性も充分ある」

その言葉に何人か溜飲が下がる。そして心の中では『男なんて死ぬ』と言う女尊男卑的な思考を浮かべている者達も居た。

「……別に追い出したいと言う訳では無い。脅かす様な事を言っすまなかつたな。隠しておくよりも話しておいた方が良いと思っすな、知らないままよりも知って置いた方が良いだろうとな」

「最悪の場合、腹を括っておけ。そう言いたいよね……」

「……まあ、そうなるな」

「もう1つ良いかしら？オトゥールとウイキッド、その2人はどうなったのかしらね？」

——と言う関係かは知らないが恐らく亀裂が走る。しかし隠しているも艦内で行動して遭遇する可能性も無きに有らず……正直に伝えて置こうか。変に隠し立てして変な不和が起こるよりはマシかも知れない。

「……2人は公文書である死亡名簿に記載されていた。埼玉コミュニティでは2人は死亡済み、と言う形となっている。どうやら処刑される事が決まっていたが、コミュニティが壊滅した為に実行直前でオジャンになって命拾いしたかどうかはイマイチ微妙だが、生存し本人の口から直接聞いた」

「しよ、処刑……って」

「嘘でしよ……処刑されそうになっていたなんて。そんな事、一言も……」

「死亡名簿に記載されていた……それってつまり!?!?」

「そうだな。あの2人は公的に死亡した扱いなので埼玉コミュニティ

の所属から正式に抹消済み。そう言う訳でお互いの利害が一致した結果、我がエストレヤに正式に所属が決まった。仮に埼玉コミュニティから返還要請が来たとしても埼玉コミュニティが記載した死亡名簿を見せれば相手は引き下がるしか無い。『同姓同名の別人。お宅の人は死亡済みでは?』ってな」

そして起こるは卑怯だのと言う声。気持ちは分からなくも無いが、コレばかりはどうしようも無い。割り切れとは流石に言いたくは無いが納得してもらわないと少々、困る。話が進まないから。

「そつか。生き残る奴は生き残るって事ね……」

鈴音はそう言い、眼を伏せた。相手は情に流される人物では無さそうだと何となく理解したからだ。今日、出会ったような関係、見ず知らずの人間に手を差し伸べる様な人間を鈴音は知っている。しかし、その様な真似を何の躊躇いも無く出来る人間は凄く限られている事もまた、知っている。

紫はコミュニティのオーナー、彼にも彼なりの事情と言うモノがある筈。

「で、でも……3つ目は!? 人身売買って奴の話!!?」

それでも諦めたく無い少女が最後の希望を託す。人身売買と言う言葉に抵抗はあるが、それでもあの牢獄暮らしよりはマシと考えたのかも知れない。

「ああ、それか。該当コミュニティの有権者達に対して君達の所有権を要求し、契約を締結させる。早い話が君達の所有権を俺が買うと言う形。売買契約成立した場合、所属元から買い取られた所属先へと異動が成立する……この場合は埼玉コミュニティに対して君達の所有権を金銭で購入すると言う形になる」

「そ、そう!!? それは!??」

一縷の希望、この短時間で良く気付いた。少々ヒステリ気味だが頭の回転は早いのかも知れない。或いは生存への衝動が強く働いているのかも知れない。

「無理だ」

「どうしてだ?」

だが、その希望も無残に打ち砕かれる。紫は即答で無理だと告げた。それもその筈、エストレヤの懐事情は余りにも厳しい上に才トウルとの契約に予算を回す必要がある。冷酷ではあるが何より理由が薄い事情もある。

「仮に交渉が進んだとしても法外な金額を提示されるのが常だ。然も1人じゃなくて10人単位、恐らく合計金額は……億超えになるだろう」

「億、超えって……」

「そしてウチには金が無いんだよ、金が!! 懐事情は火の車で、金欠上等の状態だ。そして、凄く言い方は悪いが……其処までして君達を買い取るメリットが無い」

「……!!??」

紫が彼女達の所有権を要求し法外な金額を支払うメリットが無い。彼女達は埼玉コミュニティの様な牢獄暮らしが嫌だから『自分を買って欲しい』と思っている。しかし、権利ばかり要求しているような状態……そんな連中を買っても寄生するだけで何の役にも立たない。

「それもそうね。アンタから見て、私達はA I Sとして実績が無い。A I Sは戦闘員……進化したI S相手に戦わねばならない存在……戦えない奴を法外な金額を出してまで求める余裕は無い」

「……理解が速くて何よりだ。ああ、その通りだ……別の目的で所有権を要求する奴も居ない訳では無いがな……少なくとも俺が君達を買い取る理由は薄い……」

「……成程ね。アンタが『買いたい』と思えば良いのかしら?」

「余程の事で無ければ出せる金は無いぞ? そう思われると言う事は所属元から見ても『売りたいくない』と言う感情が浮かぶ一因にもなる。だからこそ、高額で売買される」

「難儀な世界ね……I Sと戦争している癖に、何をやっているのか、本当に呆れるわ。そんな状況に振り回されている私達はもつと滑稽じゃない」

鈴音が乾いた笑みを浮かべる。断片的にしか分からないが少なくとも人類から離反したI Sとの戦争が行われていると言う状況で、そ

んなくだららない事をしている連中に振り回されていると言うこの状況……笑うしか無いのだ。

「……だけど、やる事がハッキリしたのは僥倖ぎょうこうとさえはその通りね。何が何でもアンタを納得させてやるわ」

「……ほう？少なくとも、あの2人よりは学がある様だな」

鈴音は決意した顔を紫へと向ける。その顔に対して紫は良い面構えだと考えた。『納得させてやる』、ならばやって見せると期待の念を抱いた。状況から、この女もヴォルヴァを相手に生き延びたのは明白と言える。実績は不明なので判断材料は無いに等しいがコレから自分自身の存在価値を示せば良い。

——さて、本音を言えば予算は既に組んじまっている。カツカツな上にこれ以上、割ける余裕も無い……IS共の動きがイマイチ読めなくなつて来た以上、どうにもな。

彼女達を取り巻く状況、正直な話……紫から見た場合、どうする事も出来ない状態の一步手前。埼玉コミュニティの有権者が生存云々の話……それには裏がある。鈴音達やウィキッド達がいた埼玉コミュニティはそのコミュニティの支部の1つ。つまり大元たる本拠地コミュニティの有権者が要請を出した場合も有効となるのである。

「ご主人様!!？」

その時、暗い空気を突き破るかの様な声が医務室へと割り込まれた。

「メサル？何かあったのか？」

「ご主人様宛に秘匿メールが届いています」

其処はメサルタイムが強張った表情で医務室に突入して紫の近くで小型の空間ウィンドウを展開させる。其処には秘匿されたメールのアイコンが表示されていた。

現実と理想

「ご主人様!!?」

その時、暗い空気を突き破るかの様な声が医務室へと割り込まれた。

「メサル?何かあったのか?」

「ご主人様宛に秘匿メールが届いています」

其処はメサルタイムが強張った表情で医務室に突入して紫の近くで小型の空間ウインドウを展開させる。其処には秘匿されたメールのアイコンが表示されていた。

「本来ならば私が読み上げさせて頂きます所なのですが……」

部外者多数。情報漏洩の危険性を考慮して憚っている。気持ちは分からなくはないし彼女にとって主である紫にとって最善となる行動を心得る。

「機密情報の可能性か……しかし、俺宛となると差出人は自ずと限られる……面倒だ。此処で見るか」

「宜しいのですか?」

「どうせ、大した内容じゃ無いだろう……多分」

——開けた途端にウイルスに感染と言う訳には行かない。メサルの事だからメールファイル其の物を偶に使っているデコイサーバー(完全に独立した空のサーバー)に移しているだろう。コンピューターウイルスは面倒だからその為に用意している。

「えーと、差出人は?」

——埼玉コミュニティの……誰だよ。まあ、有権者の1人だろうな。何処の誰かは知らないが埼玉コミュニティの有権者ならば要件は1つだ。サラツと読んだが内容も想像通り。

「……メサル。返答を書いておくから、後日の用意を頼む」

「畏まりました。では、ウイキ姫様達の様子を見て参ります」

メサルタイムはそう告げて退室して行った。

——死亡名簿のコピーを添えてから返信のメール、と。此方の17

名は、契約は有効……。が、ウイキ姫とオトウール嬢は契約は切れている。どうにも向こうも理解しているのかその2人に関して注釈でその旨を添えてやがった。法律絡みに引っかけりたくは無いらしい……。変な所で律儀な連中だ……。形振り構わない、と言う訳でも無さそうだ。

「……メールの内容は君達に関する事だった。もう、予想は付くんじゃないのか？」

「……その様子だと埼玉コミュニティからって事？」

鈴音が冷静にそう告げると他の少女達は顔を青褪める。何故なら本人達からすれば死刑宣告に等しいからである。

「ああ……。そうだ。契約が正式なモノである以上、反故にする訳には行かない。エストレヤとしてもこの返還要請を跳ね除ける理由は無い、いやする事が出来ない。正統性がある話な上に向こう側からすれば真つ当な行動だからな」

「そ、そんな……!?？」

「いや、嫌よ……。あんな牢獄暮らしなんて、嫌ッ!!？」

「に、逃げるしか無い!!? やっぱり男なんて最低よ!!?」

隷属される可能性は高い。その事を承知である。仮に反故にした場合、此方が悪くなり衝突しかね無い。それは避けるべきである。戦力が心許ない状態での戦争勃発……。後の事を考慮したりしなくても、無茶である。

「……どうしようも無い。と言う訳ね」

「まあな。契約が生きている以上、これ以上はどうする事も出来ない。此方にも事情ってモノがあるんだ」

エストレヤさえも味方になってくれないと言う事実を認識した一部の少女達が逃亡を企てたが扉の近くに待機していたメサルティムにより阻まれていた。理不尽だと叫ぶ声が広がる。刻一刻と変化する環境は本人達からすれば、不安の連続……。数週間前までは普通の生活を送っていた……。無理も無いだろう。

「……無理な事を頼んでも仕方ない、か。金が無い上に要請が出た以上……無理って訳か」

「そう言うことだ。短期間で天井の見えない金額を用意するのも無理があるからな……」

「……………」

——A I Sの扱いについての口出しは出来ない……他コミュニケーションの勝手、だからな。

割り切る。紫は彼女達の未来と自分達の未来が噛み合わない事を予見してそう判断を下した……同情で助けるのは良い、だがそれは自己満足で終わる。綺麗事ばかりでは……やって行けないと言う事も知っている。釈迦でも仏でも神でも無い、自分は人間なのだ、相手は選ぶ……。目の前の生命を全て救える筈が無い……救えない命だつてあるのだ。紫は……失った多数の命を背負っている。だから、止まる訳には行かない……。

その後、暴れる少女達を宥めるも自分達の未来が暗い事を知った彼女達が落ち着く筈も無い。受け止めれる筈が無いだらうと紫も承知している。恨まれる事も分かっている。

——引き渡し日は3日後。流石に覚悟は決まらないか……愚民政策をする理由が分かった気がしたよ。余り嬉しくは無いけどさ。はあ、ままならんし上手く行かないもんだ……何事も、さ。

○

「おお……」

「……気持ち良いわね。水を温めるだけで、こんなに安らぐなんて」

医務室では暗い空気に包まれていた頃、浴室では初めてお風呂に入っているウィキッドとオトウールが居た。メサルティムから入り方は教わっていた。そして、かなり洗い残しが出るだろうと判断したメサルティムが今回は浴室にボディソープ系の泡立つ洗剤液を投入する事にした。勿論、洗剤なので口に含む事はしない事を教えている。

「身体、洗いましようか」

垢落としのタオルやスポンジを使って擦り落とす。浴槽の中でも擦り落とす。泡立った浴室の中で泡が吹き溢れて彼方此方へ飛散して飛び交う。

「うにゅ、く、擦りたいよ……!!?」

「ウイキ姫ちゃんって、此処が弱いのか?」

「お、オト姉、止めてく!!?」

「何時も胸ばつかりに飛び込んで来る癖に。ほらほらく♪」

「うにゅ!!?」

浴槽の中でオトウールはウイキツドの脇腹や脇の下付近を擦りつつ洗ってあげる。何時もオトウールの豊満な爆乳の胸に飛び込んでいる為に此処ぞとばかりに仕返しを試してみる。脇腹や脇の下は弱いのか浴槽の中でドタバタと暴れるも密着している形で洗っている為に押さえ込まれている。

「髪の毛の汚れも落とさなきゃ。ウイキ姫ちゃんは特に重油で染まっちゃっているから……落ちると良いのだけど」

特に髪の毛を重点的に行う。埼玉コミュニティではA I Sの髪の毛は黒以外は禁止だった。しかも廃棄重油を使って染めていた(大変危険な行為)。その為に洗剤で落ちるかどうかは少々、不安だった。

「うにゅにゅ……」

「ザラついてしまっているわ。髪の毛も痛むって聞いたし……中々、落ちないわね」

「うにゅ!!?」

ウイキツドの髪の毛を重点的に洗う事、数十分。喚いているウイキツドを尻目に洗い続けた結果、汚れた黒色の一部に白銀の毛が見え始める。オトウールの執念が身を結び、染まった色が剥がれ落ち始めたのだ。

「……やれば出来るモノね。一気に行くわよ!!? ウイキ姫ちゃん。堪えて!!?」

「うにゅ!!? う、にゅにゅ!!?!!?」

「こーら!!? 暴れないの!!? やり辛いわツ!!?」

浴槽内でドタンバタンと暴れ回る。余程、痛いのかウイキッドも痛みに堪え切れずに浴槽で暴れに暴れて浴槽内で波が荒れ狂っていた。それから、更に数十分後……。

「うにゅ〜……………」

「ふ、普通に戦闘をするよりも疲れたわ……!!？」

微温湯とは言え長時間お湯の中の上に暴れた為にのぼせてしまい力尽きたウイキッドはオトウールの豊富な胸に凭れていた。かく言うオトウールも流石に暴れ回るウイキッドを押さえ込みながら洗っていた為に疲れて浴槽の壁に凭れて息を整えていた。

浴槽内の水面に垂れ下がる雪の様に光り輝く白銀の髪、その髪色こそがウイキッドの本来の髪の色。無理矢理染められていた汚れが落とされて穢れなき純粹なる白銀の髪へと元の姿へと戻っていた。

白銀の髪に赫い双眸。早い話がウイキッドは外見的には『アルビノの人』であった。その為か日光嫌いの体質だが、ある程度は耐えられるらしい……ある程度は。

「ふう……身体も洗ったし、ちよつと頭が痛いわね。そろそろ上がりましょうか……」

オトウールはのぼせたウイキッドを抱えて浴室から脱衣所へと向かう。脱衣所でバスタオルで身体を拭き取る。

「ふう……」

——こうして気持ちよく裸になる日が来るとはね。前までは身体を洗う時と言えばスーツを脱いだ後に冷たい水を放水の形で浴びせられるだけだった。勿論、多数の男性達に見られながら……あの視線は、堪えるモノがあった。

「御二方。一足先にお風呂上がりとなっていましたか……おや」

其処へメサルティムが脱衣所へ入って来る。其処で疑問符が浮かび上がっていた。その視線はウイキッドの髪へと注がれている。

「ウイキ姫ちゃんの髪の毛は無理矢理染められていたのよ。何とか汚れを落とすきったけど、疲れてしまったのよ」

「その様ですね。お召し物をどうぞ。ウイキ姫様は私がお連れ致します」

「え、ええ……」

教育係のメサルティムに対してオトウールはある程度は気を許していた。瀟洒な態度は未だに慣れはしないがウイキッドに対して危害を加える事は無かった。メサルティムが用意した簡易的なインナーウェアに着替えて用意された自室へと戻る。オトウールが紫に對しての取引の都合上、ウイキッドと相部屋であった。

「……お疲れとの事で今日の勉強はお終いと致しましょう」

「え、ええ……」

「明日までにご主人様がウイキ姫様とオトウール様の武装をご用意頂けるとの事です」

ウイキッドをベッドの中に寝かせたメサルティムは隣のベッドに腰掛けるオトウールにそう話す。

「武装……成程」

AISとしての自分達は変わらない。それはお互い承知している。そして、自分達はそう言う事しか出来ない。それしか出来ない。

「……私からも明日には前線に出ても問題は無いと考えて居ます。宜しいですか？」

「ええ……構わないわ、元よりそう言う契約だもの。それに、動かないと身体が鈍ってしまうモノ。笑っちゃうわよね……そうしなければ、私達は自分を肯定出来ないモノ」

「……これは年長者からのアドバイスです。戦い、それは避けられない道です。戦わねば生き残れない。生きる為に、戦う他に道はありません。それは紛れもない事実……ですが、道は1つではありません」

「……何時の日か、自分らしく生きられる道を見つけて下さいまし。オトウール様」

——自分らしく生きられる道……か。

「……夜も更けます。そろそろお休み下さいませ」

そう言われて寝る事を促される。確かに今日は別の意味でも疲れたのも事実。オトウールはその言葉に押される形でベッドへと潜り込んで眼を閉じた。その様子を見届けたメサルティムは静かに部屋

から退室して行った……。

黎血なる誓い

翌日、目覚めたウイキッドとオトウールは紫にエストレヤの艦橋へと来る様に部屋内の内線を通じて伝えられた。無論、艦橋の場所も知らない為にコレまた、当然の如く現れたメサルティムの案内にて艦橋へと足を踏み入れる。

「ほわ〜」

——広いなあ。何か、モニター？っぽいのが沢山ある。周りは壁なのに外の風景が見える……見える範囲には廃墟と化した街と割れた道路、倒れた鉄塔とかが見える……。

「……改めてようこそ、だな。中型移動要塞艦コミュニティ『エストレヤ』へ。メサルも悪いな……わざわざ、案内させてさ」

「いえ。艦橋へ足を踏み入れた事が無いのですから致し方ありません」

エストレヤは移動式の陸を征く中型戦艦の形状を成している。その為、他コミュニティで言う司令室の代わりに艦橋ブリッジが存在する。代わりに司令室が存在しない。

「……それで、此処に集めたのは？」

「執務室でも良いんだがな。狭い場所よりは良いだろう？君達に渡すモノがある」

紫はそう言い自身の背後に置いていた大型のケースを2人の前に置いて開く。その中にはウイキッドとオトウールが使用していた武装と同じ種別の武装が納められていた。

「……君達が以前まで使っていた武装を見させて貰ったよ。正直に言わせて貰って、アレでISに立ち向かおうなどとは無謀だ」
「どうして？」

「有り合わせの廃棄鋼材を無理矢理継ぎ合わせて作られたモノだからさ。加えて質が悪い劣悪品……埼玉コミュニティはコスト削減を大幅に進めていた様だ。アレではシールドエネルギーを破壊する所か削るのも厳しいだろうから……」

2人が今まで使用していた武装は廉価品に加えて粗悪品。廃棄されていた鋼材を強引に継ぎ接いだなんちやって武器だったと紫は語る。見てくれだけの武器でISのシールドバリアを打ち破る所か削る事さえも難しいとも言われた。

「……ふーん」

——何言っているのかさっぱり分からない。

紫の説明にウイキッドは半ば聞き流していた。良く分からないが埼玉コミュニティ所属の頃の武装ではこの先は厳しいと言われた、という事は理解した。

「取り敢えず、埼玉コミュニティ跡地で回収出来た資源を用いて改めて作り直した。武装の形状は本人達が使い慣れているモノの方が良いと思つてな……その形状にさせて貰つた」

ウイキッドは鋸を、オトウールはモーニングスターを手に取つて量子変換させてネックレス状へと変化させた。

「……ちゃんと持ち運びやすい様に戻せるのね」

「量子変換の技術は機能しているか。ちよいと弄らせて貰つたが……上手く行っているみたいで良かった。ああ、先に言っておくがまだ試作品なんだ。実際に使つてみて必要であれば改良を重ねて行く必要がある」

「試作品？」

「ん、ああ。多分、知らないだろうが……量子変換の技術自体が元々はISの機能の一部だ。ISコア自体が離反したと言えども開発された技術自体は人類側には残っていた。その技術を使つて何とか対抗していた様だ」

「……量子変換つて普通にあり触れているモノじゃ無かつたの？」

——牢獄から外を見ていた時、男性達は普通に使つていた気がする……。

「……まあ、確かなな。戦争とは技術革新の発展を促す側面がある。ISコア無しでも転用出来る様になったんだろう。其処に、俺が更に改良を加えてみた」

「具体的には？」

「……君達が使っていたのは展開された状態と待機形態であるネットワークスのモノ。元々、一部のISは待機形態と完全展開の形態に分かれるモノだった。ISコアが離反した事により武装形態と待機形態に基づく様に考案されたのだろう。其処には『拡張領域』と呼ばれるモノが無い」

「う、うにこ？」

紫の説明にウイキッドは疑問符を浮かべている。良く分かっていない証拠と言える。

「……簡単に言えば君達の扱う武装に拡張領域を組む込んだ。無論、試作品だから後々改良が必要となる」

「……オーナー……貴方、そんな技師見たいな真似が出来るのね。ウイキ姫ちゃんの首輪や私達の拘束具を外したのはオーナーなのね？」

オトウールは紫の事を『オーナー』と呼んでいた。名前で呼ばずに『コミュニティ・オーナー』の方で呼んでいる。気を許して居ないのか或いは他に理由があるのか……。

「ああ、機械弄りが得意なモンでね。最近は金欠やわ、材料が無いわに加えて色々と機材が壊れて簡単な細工しか出来ないがね。一応、その程度ならば簡単に出来る。君達を回収する傍らで使えそうな機械備品も一部は回収出来たから……修理するには足りないが……」

——うーん……良く分からないけど、凄いな……。

「……重さも然程変わっていない。うん、手に馴染むわ」

其処でオトウールは脳裏にある事が浮かぶ。それは本人達にとって大事な事である。

「ねえ、この試作品を試す傍ら……行きたい所があるのだけど良いかしら？」

「ん？何処と言っても……埼玉コミュニティの跡地くらいしか浮かばないか」

「ええ。探したいモノがあるの。私達にとっては必要なモノ……思い出の様なモノなのよ。あのコミュニティに捕まる以前に皆、持っていたモノ。姿形が変わってもソレを見ればきつと分かってくれる筈だ

から」

引き裂かれた『家族』。バラバラになった今、その証明が必要になる。成長して姿も変わっているかも知れない……中には忘れてしまっている者もいるかも知れない。会うにしてもかつての思い出を思い起こさせる品があれば、一助になるかも知れない。そうオトウルは考えたのだ。

「……ふむ。回収出来るモノは粗方、したと思うが……病み上がりの状態故に試運転には丁度、良いかもな……分かった。180度回頭!! ? 埼玉コミュニティ跡地へ向けて前進!!?」

オトウールの言葉に紫は用件を呑み、エストレヤの進路方向を転進させた。適当な場所で武装の試運転と準備運動を行おうかと考えていたが、本人達の要望もある。どうせならば纏めて行うのが丁度良いと考えたのだ。

「……実際にエインヘリヤルなり、IS相手に使って感触を確認した方が良い。まあ、遭遇したらの話ではあるが……で、探索が終わったら報告書なり」

「私達、まだ文字書けないわよ?」

オトウールとウイキッドはまだ文字の読み書きの教育は余り進んでいない。その為、報告書の提出はまだ早い様である。

「………其方は今後に期待だな。口頭でも構わないから、感想なり教えてくれ。参考にして改良を進める」

紫は半ば呆れた顔をしつつも口頭での感想を求める事にした。改良するにしても担い手本人の感触に依じての感想が必要になる。何せ紫からすれば初の技術もあるからである。

「……それから、無線機を渡しておく。ウチのオペレーター担当に繋がる直通の無線機だ」

「ええ、有難う。一つ気になるけど、廃墟と化したコミュニティにエインヘリヤルって湧くのかしら? 今まで、漠然と倒して居たけれど……エインヘリヤルの事もISの事も、余り良く知らないのよね」
「うにうに」

——何故、襲って来るんだろ? ISに使われているから?

愚民政策故に考える事も知る事も無かった2人。その為に気になれば気になつてしまう。

「……そうだな。俺の所にある資料から引用すればエインヘリヤルつてのは死亡した人間の肉体を用いてIS共が改造して作った兵隊擬きつて所だな。北欧神話ではヴァルキリーが死した勇猛な戦士を連れてヴァルハラへと迎え入れる伝承が伝わるからそれを振つて呼ぶ事にしたそうだ」

「ええ、其処は知っているわ。後半の北欧神話とかは全く知らないけど……それで、どうやって作つて作っているの?」

「いや、其処の点は綺麗サツパリ、分からん。そもそも……ISコアが知恵……つまり経験を積む事によって自分の武装や身体を再構成する事はあつても、全く外部の存在まで干渉するとは、な」

進化したISから更に突然変異の様に進化した『ヴォルヴァ』の例を挙げると、見た目こそは人間の造形を成しているが、有機物である人間の様に食事や睡眠、性欲の概念。引いては多細胞組織、筋肉繊維、呼吸の概念が無い。機械が人間に進化する事は出来ない。何故ならば根本的に設計デザインが異なる。その壁は超える事は出来ないからである。

「そう……分からない事だらけなのね」

「ああ……しかし、何かしらの絡繰からくりはある筈だ。質問に苦し紛れに答えると、エインヘリヤルは何処にでも湧いて来る……」

「うに?どうしたの?」

「いや、改めて考えるとだな。IS共は『フレイヤ』、『ヴァルキリー』……『ヴォルヴァ』、そして『エインヘリヤル』。其れ等は全て北欧神話に出て来る単語だ。名は体を表すと言う事から擬えている様にも思えてな。エインヘリヤルと呼ぶよりもナグルハアルと呼ぶべきか……。それだと、確認された事のあるヴォルヴァが名乗る名前に整合性が取れない……」

紫はそう呟きながらブツブツと考察の海に沈んで行く。

「ご主人様。ご考察は後程……もう直ぐ埼玉コミュニティ近辺に到着致します」

「あ、ああ……分かった。2人とも、艦橋下にある出入口ゲートがある。其処を通れば出入口用のハッチがある。其処から外へ出られる」
「ええ……それじゃあ、行ってくるわ。ごめんなさい、我儘を聞いて貰って」

「礼を言うのは俺の方だ。君達からすればトンデモない博打に付き合う事になるのだからさ……それに、この世に無駄な事は無い。必ず意味はある……それを無駄と捉えるのは本人次第だからな」

「それ、良い事を言っているつもり？」

「ああ……だから胸を張って行ってこい。一応、此方が現行行動で続行困難な状況に直面したと判断した時は即時帰還命令を出させて貰う。例えばヴォルヴァの出現が確認された時は、な」

「ええ。バツタリ遭遇なんてゴメンだわ」

——正直に言えば……勝てるとは、思えないし……即死不可避……それは本当、見たいだし……。

「でだ。今現在用意出来る君達の服装では、流石に耐久性は皆無に等しいぞ？」

2人が今、着ている服は一般的な衣服相当の耐久性しか無い。刃物を用いられれば簡単に破けてしまう。

「仕方ないじゃない。それとも戦闘用のA I Sスーツを用意出来る？」

「すまん……破損した君達が着ていた残骸しか無い。解析はしているが改めて新調するにしても材料等が無い」

「なら、此の儘行くわ。無理はしない様にするわ」

「分かった……じゃあ、行ってこい。良い戦果を期待しているぞ」

紫にそう送り出されてウイキッドとオトウールは開かれたハッチを潜って外部の地上へと降り立った。

廃墟の傷痕

「うに、外から見ると、こうなつて居たんだ……」

「こうして外部から外観をゆつくりと見る機会なんて殆ど無かつたモノね……と言つてもかなり派手に損壊している見たいだけ……」

移動式コミュニケーションである中型移動要塞艦『エストレヤ』から出撃したウイキッドとオトウールの2人はかつて所屬して居た埼玉コミュニティの拠点要塞を外部地上から眺めていた。ヴォルヴァ種であるIS、『ヒム』の襲撃により外観も様変わりしていた。火薬の残り香が鼻を擽り倒壊した壁、残骸と化した山、そして死臭。

『あー、テスト、テスト。ウイキ姫様とオトウール様、でしたね？聞こえて居ますか？』

無線機から聞き成れない人物の声が聞こえて来る。紫が言つていたオペレーター担当からの様である。

「うん。聞こえるよ」

『声ですけど、こうしてお話するのは初めましてですね。当『エストレヤ』内外オペレーター担当のスピカと申します。お嬢様方、以後宜しく願いますねっ!!?』

メサルタイムがお淑やかで瀟洒であるのなら彼女が元気が取り柄の様にも見える。声だけなのでまだ判断出来ないが。

『偵察ドローンを用いてやその他、諸々の手段で受信した情報や状況の連絡を私の方で行います。尚、作戦続行不可能であると判断した場合、速やかに帰投して下さいます様をお願いしますね。流石に、死んでも勝てとは言いたくありませんので……』

「ええ。死ぬ訳には行かないもの……」

『宜しいです。では、今作戦の趣旨の確認を行います。オトウール様の要望で埼玉コミュニティP2番跡地の探索任務となります』

スピカはすらすらと2人の外出目的の確認を行う。間違いは無いので特に意見は無い。

『それで、追加で頼みたい事があります』

「うに？頼みたい事？」

『埼玉コミュニティP2跡地に残されている開発機材等を回収して欲しいんです。壊滅的被害を受けたと言っても使えそうなモノが残されている可能性があります』

「……でも無傷とは、行かないと思うよ？」

外壁の損耗具合から内部も倒壊している可能性が高い。それこそ無傷である保証は無いだらう。

『多少の損壊程度ならば大丈夫です。ご主人様ならばその程度、直せる可能性が高いので。理由としましてはエストレヤは過去に大損害を受けてしまい工場やラボ、備品に至るまでが無視出来ない程の大ダメージを受けてちやいまして……修理しようにもお金が無くて、したくても余裕が無かったんです』

「……何と言うか、ギリギリな状態なのね。探す傍ら、回収するけど……どうやって運べば良いの？大型だと2人じゃ無理よ」

機材と言っても大きさは様々、それよりも少女2人で運べる程の重量とは思えない。如何に戦闘員と雖も力仕事が得意とは言い切れないのだ。

『ご安心下さい!!？』お二人に渡された武装に『拡張領域』が搭載されている筈ですから、それを使えば持ち運ぶ事が出来ます!!？』

「うにに？」

「……そう言えばオーナーは私達の武器に拡張領域を組み込んだとか言ってるわね」

『使い方は使えそうな機材を発見した時に指示を出します。今、此処で説明しても空論になっちゃいますから……あ、基本的に耳元でゴチャゴチャ言うのと気が散ってしまいますでしょうから用件がある時に連絡を下さいね？無線機の位置情報は分かりますので迷子になった際もある程度は誘導可能です』

「……ええ、分かったわ」

簡単な説明を終えた為に無線機が沈黙した。一応、此方から連絡を入れる事は出来るが用件が無い時は黙っていてくれる様である。

「……さてと、ウイキ姫ちゃん。行きましょう」

「うん、分かった」

コミュニティ内の通路。其処を歩く事は少なかった。大半が暴行を受けて意識が朦朧としていた時に引き摺られて移動していたからだ。

「……壁は穴だらけ、崩れた天井……随分と派手に暴れ回って居たんだね。彼方此方にA I S達の死体が転がっている……」

「その様ね。死臭も酷いわ……ウイキ姫ちゃん。流石に時間が経過した死体を口に付けない方が良いわ……」

鉄臭い鉄板床の上に飛散した血と転がっている死体から発する腐敗臭が混ざり合って不快な臭いが立ち込めている。死骸には時間が経過した為か大量の蛆虫が湧いており見るからに不快であった。

「……オト姉。何処から探す?」

「そうね……司令室辺りから探しましょうか」

オトウールの探し物を見つける為、取り敢えずは司令室を目指す事にした。所属コミュニティと雖もこうして歩き回る事は無かった為に手探りで探す事になった。構造も分からない為に知らない場所と大差無いからだ。

紫の話によるとエインヘリヤルは何処にでも湧いて来ると言う話だったが、今の所は遭遇して居ない。その道中で牢獄前に差し掛かる。

「……外から見ても良い気分にならないね」

「ええ、少し前までは牢獄の中に居たから、尚更、ね」

牢獄内には事切れたA I Sの成れの果てが其の儘、放置されていた。流石にメサルタイムも生存していないA I Sを連れ出す余裕は無かったのか、或いは危機的な状態を加味して此処まで来なかったのか……兎も角、惨状である事に変わりはない。

「……あ、骨が落ちてる……太さ的に……ヒト、かな?」

「……白骨化、だそうよ。死んだ直後なら食べては居たけど……此処までの状態を生で見るのは初めてね。何気無く食べていたけれど

……改めて見ると酷い光景ね。長居しても時間の無駄、行きましよう」

一部の死骸は風化し白骨化まで進んでいた。羽虫が周囲を飛び交っており通路上よりも強い腐臭と異臭が立ち込めている。長居するのも宜しくは無い。

○

ウイキッドとオトウールがコミュニティ跡地に赴いている頃、紫は執務室にて複数の空間ウィンドウに表示される項目を流し読みしていた。手元には手書きの文字で書かれた文字列が並んでいる。それはオトウールとの取引によるモノ。彼女が探している者達の名前であった。表向きに調べる訳には行かない、何せ『お宅のA I Sの名簿を下さい』なんて言える筈が無い、ならば管理サーバーにクラッキングを仕掛けて調べる他無い。と言ってもエストレヤのサーバーに搭載されているシステムのスペックでは情報を抽出する程度が限界。システムを乗っ取る事は無理である為に機密情報関連は何処にも接続されていないサーバーに放り込んでいる。

「だー……多過ぎる!!？」

椅子の背凭れに凭れ掛かりつつ紫は思わず投げ出したくなる程の声を上げた。何故なら名簿に纏められた名前は自己宣告して来た人数を大きく上回る。それらを1列1列、調べるのも中々の苦行と言える。

——日本人名が少ない。いや、オトウール嬢の名前からそうなる事は分かっては居たが……此処は日本の土地故に、A I Sも又、日本人名が多いと踏んで居たのだが……妙だな。

「……明らかに外国籍の名前のA I Sが大半だ。コレはどう言う事な

んだ？」

空間ウィンドウに表示されたクラッキングして表示された名簿に記載されているコード名と名前。その大半がカタカナ表記の名前、その綴りから日本人風の名前とは思えない。此処は確かに日本の国土内……紫から見れば違和感がある。

——……一応、何人かは確認出来た。大方の予想通り彼方此方のコミュニティに売り飛ばされて所属（隷属か？）している様だな……名前があるだけで、生死の状態までは分からないな。やはり、死亡名簿は別に保管しているか。

「ご主人様、少し休息を取られては如何でしょうか？長時間、ブルーライトを見続けて居ますと身体に悪いでしょう。紅茶を入れましたので、ご一服を」

其処はタイミング良くメサルタイムが現れて紅茶入りのティーカップを近くに置いた。紫は作業を一旦止めて、ティーカップを持ち口に運ぶ。

「……ああ、済まないな」

「して、首尾は如何程でしょうか？」

「……やはり大半の者達がA I Sとして隷属状態となっている様だ。粗方、該当する者は確認出来た。しかし、全員では無いな」

——名簿に約1名だけ男子が居た。名前はリイティア・テイターリア……未成年の男子とは珍しい。殆どのコミュニティでは成人男性しか見受けられない。10代以下の男子は何処のコミュニティでも存在は見受けられない……何処かに隠して教育していると思われるが……。

「と、なりますと……コミュニティ所属では無く、資産家等に売り渡された可能性もありますね」

「可能性は無くは無いだろうな……」

——いつの時代も秩序が成立しているのならば金がある奴が社会的に強くなる傾向がある。戦力として使えなくても女である事に変わりはない。せいの捌け口としての使い道がある……資金力のある奴が性奴隷と言う形で買い取るケースもある。気に喰わないが、事実

だ。幾つかのコミュニティのパトロンとなっている場合もある故に無視は出来ないだろう。

「……個人相手ならば幾らかはやり口はあるが。A I Sの人身売買で売られた場合の末路は概ね悲惨だ」

「……性奴隷として扱われる事の方が多いと聞きます……気を強く、と願いたいのですが……皆様、全員がそうとは限りませんね」

全員が全員。意識を強くもっているとは言い切れない。それはメサルタイムが最も良く知っている。ウイキッドやオトウールの方が珍しいのだ。大半のA I Sは現状に対して絶望して諦めてしまっている子達の方が多い。

「……システムのスペックが低い以上、これ以上の調査は難しいな。コレだけでは交渉カードとして弱過ぎる。真正面から独占権を主張したとしても交渉まで漕ぎ着けられないな……所属経歴程度の情報だ。生死まではわからない」

「ご主人様。お姉様に一報、入れて居ます。ウイキ姫様達にコミュニティ跡地にて利用可能な機材の搜索を追加依頼しています」

「……見つければ品質によつては何とかなるが、概ね都合よく見つかるとは思えないな……」

——それよりもカタナの奴。随分と調査が長いが……碌な事になつていないよな？それよりも、ウイキ姫……髪の毛を洗ったら下から銀髪が出て来るとは……つか、本当にソックリだな……。

壊れた導

牢獄の前から移動して上階へと登る。2階以降は、廊下の底が抜けてしまつており穴が随所に発生しているのが見える。落ちない様に渡つて行く必要がある。

「ウイキ姫ちゃん。落ちないように気をつけて」
「うに」

崩落した廊下。普通の人間ならば迂回するだろうが、2人はしなかった。量子変換して展開した武装を棒飛びの要領で構えて助走を付けてから打ち付けて反動で向こう側へ跳ぶ。最初にオトウールが行いその後を見よう見真似でウイキッドが真似て飛び越えた。ウイキッドの場合、体重が軽い為にすつ飛び形で飛び過ぎる傾向があつたが跳び越える点に関しては問題ない。

「……上手く行つたわ」

「彼方此方の通路、底が開いちやつているみたい」

何回も開いた穴を跳び越えて行く。破壊の傷痕は凄まじくちよつとの衝撃を与えてしまえば崩落してしまいそうな程に耐久力が落ちている。現に飛び越えた後に元いた場所は崩れ落ちてしまっている。「ええ。足元が悪いから気を付けて行きましよう……司令室は何処かしら?」

今にも崩れ落ちそうな廊下を歩きつつ司令室を目指す。このタイミングでエインヘリヤルやISに襲撃されては堪つたモノでは無い。最もこんな廃墟に用件があるのか?と言われた場合は答えに窮してしまうが。

「……此処、かしらね?」

壊れた扉から中の様子を伺う。多数の電子基盤と思わしきモノが見える。そもそも司令室と言われてもピンと来ない為に機械が多数存在する場所と言う認識程度にしか思い当たらない。そう言う事もあり機械が多数ある部屋と考えて探していた。

「うに。大きく抉られた跡が見えるよ……」

折れ曲がった扉を退かして部屋の中へと侵入する。壁には一閃するかの様に大きく抉り斬られた跡が残っている。恐らくあの時の無線の内容からヴォルヴァ・ヒムの手による破壊の痕跡だろう。

「機能を停止している。万が一、と思っていたけれど……その心配は無さそうね」

沈黙したアナログ・キーボードを触って見てオトウールは動く気配は無いと判断する。司令室のシステムを介してAISのナノマシンの遠隔操作を行っていた。そのシステムが完全に沈黙している為に自分達の頭に注入されていたナノマシンの脅威は緩和されたと思われるべきか。

「……ほええ……あ……オト姉、オト姉」

「ウイキ姫ちゃん？」

周囲を見渡していたウイキッドがオトウールを呼ぶ。ウイキッドの視線の先、抉られた壁の傷痕から向こう側の部屋が見える。無機質さの部屋の一角に場違いなモノが視界に映るのが見えた。丁度、破壊された一閃の穴から向こう側へと入れそうである。

「……隣の部屋にナニカあるよ？」

気になったウイキッドはその隙間を潜り向こう側の部屋へと侵入した。オトウールも通ろうとしたが……。

「あ、胸が……これじゃあ、通れないわね……」

オトウールはウイキッドと比べて身長が高い上にウイキッドに枕代わりにされる程の爆乳である為に引っ掛かってしまつて通れなかった。壊すにしても各地の脆さ具合から見るに強い衝撃を与えてしまうと倒壊してしまう可能性があった。

「ごめんなさい、ウイキ姫ちゃん。お願いして良いかしら？」

「うに!!？」

仕方ないのでオトウールは司令室に待機してウイキッド単独で部屋内を物色する事になった。司令室の隣はロッカー類がある部屋に見える。

——えーと、あ、あつた。

部屋の奥、その隅に無造作に置かれていた蓋の開いたダンボール

箱。その中には色々なモノがごった返して置かれていた。大半が小物であり玩具の様にも見える。その時、風を切る音が聞こえた。

「……わひゃ!?」

突如、背中を押されて押し倒された、どうやら何かが乗し掛かって来た様だ。視界を動かすと其処には青黒い胴体に多脚の脚が付いた機械兵器が其処にいた。造形は蜘蛛を模している様だ。その機械蜘蛛がウイキッドに乗り掛かっている。

「え、なに、なに!? ひゃ!? つ、冷たい!!」

小柄故にウイキッドと力では重量のある機械蜘蛛を押し除ける事も叶わない。跪いている間に機械蜘蛛の口付近から白い粘液が首元に掛けられる。ひんやりと冷たく粘着質の様に纏わり付く。

——な、何をする気……!? わ、わ!?

その後、身体の周りに白い粘液が掛けられて行く。粘液故に身体に着くと中々、剥がれない。その為、暴れても身体を拘束するように粘液が掛けられ動きを徐々に封じて行く。粘液の正体は糸の様であり蜘蛛糸の様にも見えた。

——う、うう。う、動けない……!!? もう、嫌ツ!!? 蜘蛛、嫌

い!!?

「も、もう!!? 離して!!?」

唯一の足だけは無事だった為に思いつき蹴り上げて体勢を崩させる。重量はあったがどうにか体勢を崩させる事には成功してその時に出来た隙間から逃れる。

——腕とか動かせない……うう、どうしよう。

白い蜘蛛糸の様なモノで上半身は簀巻き状に拘束され腕は使えない状態にされてしまっている。機械蜘蛛は蹴り飛ばしたただけでは沈黙せずに多脚を用いて体勢を立て直す。

——うー、機械の蜘蛛とか、気持ち悪いよ。武器が使えないし、どうしよう。使えると言ったらロツカー?

腕が使えない状態故に使えるモノは限られている。蹴った程度では目の前の機械蜘蛛は壊れない。そもそも動力自体が良く分からない。埼玉コミュニティでこの様な兵器があったか?とウイキッドは

記憶を探るも思い至らない為に直ぐに意識を切り替えた。

「ツ!!?」

機械蜘蛛はウイキツドの抵抗を確認した為に多脚を用いて此方へ突っ込んで来る。蜘蛛らしい気味の悪い動き方であり生理的嫌悪を覚える。その突進を躲してロッカーのある方向へと誘う様に逃げる。

——立て付けの悪いロッカー、あった。この場所なら……。

ロッカー類がある場所へ逃げ込む。建物自体が倒壊しつつある状態の為に床が隆起している場所が散見されていた。その為に幾つかは倒れそうなロッカーがある。その1つの陰に隠れて待ち構える。

「来た……今ツ!!?」

機械蜘蛛が来るタイミング身体を使った体当たりで倒れそうなロッカーへとぶつかり傾かせた。傾き始めたロッカーは追って来た機械蜘蛛に倒れ掛かる形で倒れて押し倒す事に成功する。

——え……?」

其処でウイキツドは目を丸くした。倒れたロッカーを支える形で機械蜘蛛から離れた位置に青白いハニカム状の膜の様なモノが展開されている光景を。

——見た事ある……!!? アレはシールドバリア!?? という事は、アレはIS……なの?

小型と雖もウイキツドの体格よりも大きい機械蜘蛛。シールドバリアの存在からIS、だと推測出来る。ウイキツドが見た事あるISはほぼ全てがロボットや機械鎧の様な姿をした存在。少なくとも人型に類似しない姿をしたISを見るのは初めてである。

——シールドバリアがあるんじゃないから蹴つても殆ど効かないしじゃ止まらない!!? 腕が使えないから蹴つても殆ど効かないし……!!? と言うかこんなIS見た事無いよ!!?」

蜘蛛糸の拘束により腕が使えないと言う事は武装も使えないと言う事を意味している。そして相手は小型化していると雖もISはIS。油断すれば命の危機に直面する……と言っても現時点でもかなり危険な状況なのに変わりは無かった。

——くっ、此の儘だと……不味いかも、ISが出没するならするっ

て無線機から連絡あつても……。

耳に付けたインカムからは僅かなノイズ音が響いているだけに留まっていたら。何かしらトラブルが発生している可能性が高い。隣の部屋からは奥まった位置でありオトウールが気付いていない可能性もある。更に後方は行き止まりである為、ウィキッドの状況は正に危機的状況と言わざるを得なかった。

反撃の狼煙

「うーん。ちよつと遅いわね……」

その頃、隣の部屋では斬撃跡の亀裂前でオトウールがウイキツドの帰りを待っていた。亀裂から入れないなら正面から入ろうかと考えたが、この部屋の前の扉付近の床が陥没しており入りたくても入れない状態となっていた。その為、入るならばこの亀裂の隙間から入るか壁を粉碎するか2択となっている。

「……それに、無線機からはノイズみたいな音が響いていて通話出来ないのが気になるわね……ウイキツドちゃんとも連絡が取れないし、ちよつと心配ね」

——流石に長いかな。此の儘、待つて……ッ!!?

オトウールは思考に耽った直後、後方に飛び退きつつ首元から下げているネットクレスに手を掴むと同時に量子変換で形成させたモーニングスターを構えて着地。立っていた場所には多脚の機械、機械の蜘蛛の様な存在が現れていた。

——頭上から奇襲!?!?　と言うよりも、こんな存在見た事が無いのだけど!?!?

「……取り敢えず、敵は敵。かしらね!!?!?」

オトウールはモーニングスターを構え直して突撃し横殴りにフルスイング。何はともあれ、自分達以外は基本的に敵。機械相手ならば躊躇う理由は無い。そもそも、此処は既に廃墟と化したコミユニティだ。暴れられて困る者など既に居やしない。

躊躇いを感じさせずに振るわれた鉄塊は機械蜘蛛に直撃する直前、ハニカム状の薄い膜に阻まれた。それでも衝撃は殺し切れないのか不自然な形で機械蜘蛛が吹き飛んで行く。

——シールドバリア!?!?　人型では無いIS……!?!?

オトウールはすぐ様にそのハニカム状の膜がISが最強たらしめるシールドバリアである事を見抜いた。前提条件としてシールドバリアを打ち破る事が出来なければ本体に攻撃は一切通らない。なま

じ打ち破れたとしても『絶対防御』の存在がチラついている。

「……考えるのは後。となると、ウイキ姫ちゃんの向かった先にも居る可能性が……流石にちよつと危険かも知れないわ。あの子、大の蜘蛛嫌いだし。」

立ち止まっている余裕は無いと判断したオトウールはモーニングスターを構え直して体勢が崩れた蜘蛛型ISの脚部を狙って振り下ろす。しかし、鉄塊は脚部に直撃する直前にシールドバリアに阻まれ耳障りな音が響き渡る。

「——シールドバリアは無限にある訳じゃない。ISの残存エネルギーによる、と。生半可な攻撃じゃ、バリアを削り切れない。」

だからこそ、ISにはISと言われた。既存の常識を覆す火力を以って、制するのだと。

「……私はこんな所で立ち止まっている余裕は無いの!!?」

オトウールは身を引いた後に身体を捻って遠心力を利用し床を擦りつつ足元から搦り上げる形で蜘蛛型ISを打ち上げる形で一撃を叩き込む。当然ながら、真下にも張られたシールドバリアがその一撃を拒む。それでも叩き付けられた衝撃は殺し切れない為にカチ上げられて天井にも激突する。

「……全く効いていない」

モーニングスターの一撃、そして天井に激突しても本体にはダメージらしいダメージを与えるには至って居ない。その様子からシールドバリアを打ち破るには至って居ない事が推察される。幸い、激突した衝撃で着地には失敗している。

「——やはりシールドバリアの存在がやっかい過ぎるわ。外部からの攻撃を悉く受け止められてしまう。伊達に最強の兵器を名乗っては居ない。良くあんな連中を前にして人間達は今日まで生きて来れたわ……。」

其処からオトウールの判断は早かった。攻撃が効かないならば何時迄も相対している暇は無い。危険はあるが何もしないよりはマシと判断してウイキッドの潜り込んだ隣の部屋を跨ぐ壁を叩き壊して飛び移る。

——今回はあくまで探索。無理してISの相手をする必要は無いわ……!!?」

隣の部屋はロッカー室の様であり多数のロッカーが置かれている。隣の部屋に飛び込めば騒音らしきモノが聞こえて来る。此方でも似た様な状況になっている様である。奥へと進めば先程の蜘蛛型ISと同型機と上半身が蜘蛛糸の様なモノで拘束されたウイキッドが対峙しているのが見えた。

「ウイキ姬ちゃん!!?」 と言うか、邪魔ツ!!?」

「オト姉!!?」

状況を瞬時に把握したオトウールは進路方向に居る邪魔な蜘蛛型ISを背後からモーンングスターで振るって殴り飛ばす。当然ながらシールドバリアの存在により吹き飛ばされるも本体には傷さえも入らない。

「奇襲仕掛けて来るなんて、狡猾ね。知能を付けたとは良く言うわ……」

此処にはISが2機も居る。此方の攻撃が全く通じないのだから不利は明白。それが人間の様な自我を持ち知能を付けた相手ならば尚更である。

「ウイキ姬ちゃん。取り敢えず今は、逃げましょう!!?」

オトウールは足元の床をモーンングスターで叩き壊して底を開けて落下して下の階層へと物理的に降りる。その後、ウイキッドを連れて兎に角、ISから逃亡した。

○

『や、やっと繋がりましたー……。急にジャミングされたのか通信出来ない状態になっちゃいましたから、心配しましたよ』

「ジャミング？」

『人為的な通信障害です。通信の妨害電波が発生すると無線機の通信が出来なくなっちゃうんです。廃墟で唐突に発生するなんて……』

「……心当たりと言えばISと遭遇したわ」

蜘蛛型ISの奇襲から逃れた2人はコミュニケーション内のある部屋にて休息を取っていた。ウイキッドの上半身に蜘蛛糸が巻き付けられておりウイキッド本人が自力で解けない為に解く必要があった。その最中に無線機の通信が復活して今に至る。

『え、ええ!?? そ、そうなんですか!??』

『代わってくれ。オトウール嬢。よもや、本当にISに遭遇したのか?』

「え、ええ。蜘蛛の姿をしたISよ。ウイキ姫ちゃんと同じくらいの体長だったわ……シールドバリアを持っていたわ」

『成程な……過去に何回か人型では無く動物系に再構成した姿を持つISの存在が確認された事がある。蜘蛛型もその一種なのだろう。と、なると現状から考えられるのは奴が一定範囲内にジャミングを展開していると思われるな』

「……後、私達の今の武器じゃ破壊する所かシールドバリアを打ち破る事も難しそうよ。本気で殴り付けても防がれちゃった」

『だろうな。進化している以上、IS自身もシールドバリアの欠点も気付いている筈だから……』

紫は現状では勝ち目が無い事は承知だった様である。元々、常時張りっ放しだった頃に比べると瞬時に展開している様にも見えた。ISもエネルギーが必要であるが故に無駄なエネルギーを使わない機械的な合理的判断に基づき行動しているのだろう。

「……貴方、分かっていたの?」

『IS共の乱入は流石に想定外だったの。廃墟にわざわざ、出向いて来る理由が分からんよ……が、都合が良い。そのISを破壊して残骸を持ち帰って来て欲しい』

「貴方、話を聞いていたの!?? 私達の攻撃は殆ど効いていないって!!?」

あろう事か紫は蜘蛛型ISの残骸を持ち帰って来いとまで宣って来た。オトウールからすれば正気の沙汰とは思えない言動だった。オトウールのモーニングスターのフルスイングの一撃さえ無傷で耐え切った相手。恐らくISの中でも小型だが、シールドバリアの存在故に舐めていると痛い目に遭うだろう。

『聞いていたよ。無策で挑むのは、な。君達に渡した武装は『試作品』と言った。拡張領域以外にもある機能を付けている。まさか、初日からISと遭遇するとは運が良いのか悪いのかは分からないがな』

自嘲気味な声。本人も初っ端からISと遭遇するとは考えては居なかったらしい。本人は運が良いのか悪いのかとも言おう。

「……その機能ってのは何よ?」

『埼玉コミュニティから回収出来た代物の中にリスクが大きいけど、使い次第では……と言うモノがあった。時間が足りなかった上に検証データも無い上に資料も乏しい……ので未完成のままだな。試しに使わねば無意味な技術だ』

「簡単に言っつてよく。分かんない!!?」

紫の説明にウイキッドは声を上げる。やはりウイキッドには分かりにくいのか通じていない。

『そうだな。簡単に言おう、シールドバリアを中和し一時的に無力化する……と言えば簡単か』

その言葉は2人からすれば驚愕モノと言える内容であった。

一矢

『そうだな。簡単に言おう、シールドバリアを中和し一時的に無力化する……と言えば簡単か』

その言葉は2人からすれば驚愕モノと言える内容であった。

「そんな技術があつたの？」

『偶然見つかったに過ぎないし検証もままならないのが実情。それに、俺の中では未完成だからな。完成させるにしてもデータが欲しい所……かと言って、慣れない状態で中型以上のISや、ヴォルヴァ相手には無謀過ぎる。お誂え向きにISと雖も小型の奴が現れてくれた。試験として試すには持つてこいつて訳だよ』

「無茶苦茶ね……まあ、何時もの事だろうから今更文句は言わないけど。で、どうすれば良いの？」

牢獄暮らして頭ごなしな命令の連続だった事もあってか、無茶苦茶な指示には慣れていた為に呆れつつもオトウールは軽く流してやり方を促した。

『各々の持ち手の所にトリガーを加えている。誤作動を防止する為に力を込めないと起動しない様になっている』

「あ、この少し出っ張っている箇所かしら？ 普段持つ場所よりも少し上の方にあるわね」

『試作品故に多用は出来ない。起動出来る時間は約3秒程。今の所、その数秒しか維持出来なかつた』

「3秒……成程、直撃させる直前に起動させれば大丈夫そうね」

3秒しか効果が出ないのならば直撃する直前に起動して叩き込む使い方が安定する。ウイキッドとオトウールも重量系の武装（ノコギリやモーニングスター）なので斬ると言うよりも叩き潰す事に主眼を置いた武装に近い。そして紫も内心は『コイツらの体、どうなっているんだ？』と思っっているかも知れない。

『大まかな原理は……ウイキ姫辺りが嫌がるから簡単に言う。ISの

シールドバリアは硬質化させたエネルギーだ。対する中和させるエネルギーをぶつけて緩和させる。早い話が腐食作用があるエネルギーをぶつけて溶かすって感じだ』

「酸性雨みたいなの？」

『その認識で構わない。良く知っているな？』

「バカにされている気がするけど……いえ、無知だったから否定し難いけど……メサルさんに読み聞かせて貰った本の内容」

『そうか。が、未完成な上に試作品。乱用は出来ないし、カツカツだった為に仕様上、使えるのは1発限りだ。中和させるエネルギーを武器に数秒間だけ纏わせるだけに留まっている。』

そしてそのエネルギー自体は攻撃性が無く質量相手には何の意味も無い。まあ、2人の武器だとぶつ壊す意味では破格だろうがな』

正直な話。ISの脅威性は殆どがシールドバリアと言って良い。それ以外は確かに高火力、機動力を併せ持つが機械の塊。強固な守りたるシールドバリアさえ剥がせればやり方はある。

「分からないなら知れば良い。そう言う意図もあるのでしょうか？」

『まあな。ゴチャゴチャ言う論よりもさっさと試した早からろう？』

「ええ……私達は知っても、戦う事しか能が無い事に変わりは無い。そんな機能があるなら先に言いなさい」

その文句に関して特に答える事も無く無線機の通話は途切れた。ノイズ音が聞こえる事から恐らく近くに例の蜘蛛型ISが接近して来ている証拠だろう。話は聞いた、後は厄介なシールドバリアを粉碎して本体を叩き潰すだけである。無線機で会話しつつもウイキッドの身体に纏わり付いていた糸を解き終える。

「さて、と。ウイキ姫ちゃん、殺りましようか」

「うにっ!!?」

お互い武器を構えて今いる部屋と廊下の入り口へ視線を向ける。この部屋は然程、損壊していない。壁も崩れていないので出入口は1箇所しか無い。壁に背を向けている為に天井に穴が開いて居なければ真正面からでは無いとこの部屋に入れない。最初の遭遇時の行動から蜘蛛型ISは奇襲を得意とする思考をしていると考えられる。

「良い？当てる直前にトリガーを押し込むのよ」

「うん……分かった」

そして姿を現した2機の蜘蛛型IS。同じ造形をしている事から同型機である事は明白。同じ思考回路を持つているのかどうかは分からないし気にした所で時間の無駄。蜘蛛の造形から粘着性の糸を射出する機能を搭載している事から後手に回るのは危険。故にウイキッドが選んだのは言うまでも無く先手必勝。鋸の鋒で床を擦りながら走る、その後をオトウールも続いて走る。勝負は1回切り、ならば最初の1撃に全てを掛ける。

——今ッ……!!?

左右から飛び込んだ2人は構えた武装を振るいながら持ち手に備え付けられたトリガーを力一杯に押し込んだ。鋸の刃、鉄塊共に淡く光る白い粒子が一瞬だけ見え、その状態で蜘蛛型ISに叩き付けた。当然、当たる直前でハニカム構造の膜が展開されるも小気味良い破碎音と共に膜が砕け散るのが見えた。

——やったッ……!!? なら、後は此方のモノ!!?

確かな手応え、間違い無く展開されたシールドバリアは砕け散った。ならば後は『絶対防御』の心配となるが、今はその事に意識を割いていられる余裕は無かった。

「……壊れるッ!!?」

ウイキッドは大の蜘蛛嫌い。その為、いい加減、見たくない為に大上段から鋸の刃を蜘蛛型ISへと叩き込んだ。斬ると言うよりも抉り壊すと言う趣旨の所為か、蜘蛛型ISの胴体に深々と喰い込み壊れた箇所からスパークが発生した。

「えいやッ!!?」

隣ではオトウールもモーニングスターを振るい、シールドバリアを失った蜘蛛型ISに叩き付ける。少なくともウイキッドの振り回す鋸よりも粉碎させる事に長けた武器の為に、鈍い音と共に胴体が地面に叩き付けられ破壊音が響いた。

「さっさと消えちやえ!!?」

一撃を入れた後、喰い込んだ鋸を引き抜き其の儘、横殴りに振るい

吹き飛ばす。最初の一撃が強烈だった所為か細かいパーツが多そうな多脚部がバラバラになりながら向かい廊下の壁に叩き付けられ、無抵抗に崩れ落ちた。

「……………」

蜘蛛型 I S の各所から小さな煙が立ち昇るが動く気配が無い。破壊に成功したのだろうか？

「つ、繋がった……。お二人とも無事ですか!?？」

「ええ……。破壊に、成功したわ。シールドバリアを打ち破れた」

「うに。本体は然程、強く無かったよ?」

『I S の撃破……!?? ち、沈黙を確認しました……!!? 本当に、生身で打ち勝つ日が来るなんて……』

「うに? どう言う事?」

『え、ええ、はい。実は今の今まで、どのコミュニテイも I S に対して撃破し沈黙に追い込む事が出来た瞬間はありませんでした。』

理由は勿論、件のシールドバリアを打ち破る手段が確立出来なかったからです。戦車や強力な個人携帯火器は数が限られて無闇に使えないし整備施設も大半が遠い昔に閉鎖、それどころか技術も失われつつありました。

そう言う経緯もあり今まで、A I S はエインヘリヤルを殺すのが限界でした』

——だから、I S と戦争している癖にエインヘリヤルの掃討しか仕事が出来なかった。I S と相對するのは任務中に割り込んで来た時……或いは囷にされるかの 2 択、と。

「……余程、シールドバリアの存在が大きかった、と言う事なのね」

『はい。一時期、破壊された I S の残骸が発見される事がありました。……明らかに人の手で破壊出来たとは言い難い破壊損傷でしたので、違うと見做されています』

「I S 同士が殴り合っている?」

『人間同士でさえ、唾み合い殺し合う事が散見されて居ます。I S 同士でも仲が悪い機体が存在しても不思議がありませんね……。一部のコミュニテイはそうした残骸を回収して急拵えの武装に製造してい

るみたいです』

埼玉コミュニケーションもその一つ。しかし無残にも原型を留めずに破壊された残骸ばかりだったのか、使えそうなパーツを掻き集めて継ぎ接ぎの様に繋ぎ合わせたただけであった。

「そう……詳しい話は後でオーナーに直接、言うわ。それから残骸を回収して来いとも言っていた。拡張領域とやらの使い方を教えて」

『あ、はい。と言っても、そう難しい事ではありません』

スピカに拡張領域の使い方を教わり破壊に成功した蜘蛛型ISの残骸を拡張領域内へと量子変換して回収する。その後、司令室近くへと戻りオトウールの探し物を探す事、数十分……部屋の隅にあったダンボールの中に探していたモノを見つける事に成功する。

「あつた……当時のまま、残ってくれていた」

「コレ……」

見てくれは腕章に近い。オトウール自身の手作りのモノ……過酷な環境故に仲間意識を持ちたいが故に共通のモノを用意したかった。そして考えた結果、動きの邪魔にならないモノが腕章擬きだった。散り散りとなって離れ離れの状態……姿も変わっている可能性もあった、覚えて居れば気付いてくれるかも知れない。

「目的は達成。帰投するわ」

『了解しました。お二人とも、お疲れ様でした。まさか初日で小型と雖もISの撃破に漕ぎ着けるとは……』

「其処はオーナーの開発力の賜物ね……」

埼玉コミュニケーション跡地を後にした2人はエストレヤへと帰投する事に、この後待っているのは報告位である。因みに機材回収の件は未遂行となるがそれに変わるISの残骸を回収出来たので代用となるだろうと言う事になった。

研究の真髓

「……初日でいきなりISの撃破、か。指示したのは俺だが……」

その日の夜。2人が戻って来て本人達の割と適当な報告を受けた後に拡張領域に放り込まれていたISの残骸を受け取り、ラボにて壊れた箇所を更に解体しながら紫は考察を続ける。

——シールドバリアは確かに驚異的、しかし打ち破る技術が断片的ではあるが確立したとみて良い。現状の課題はやはり時限的である事か……コレではガス欠になるのは目に見えて分かる。ISが団体さんで来られたら終いなのは目に見えている。

「……机上の空論程度ではあったが、よもや本当に中和可能となるとはな」

本音を言えばISのシールドバリアを解除出来たのは半ば驚きだった。まさか本当に可能になるとは思ってもみなかった。然も、話を聞く限り本当に呆気なく壊れたと言う。

「しかし……」

——ISには『コア・ネットワーク』なるモノが存在すると言う……あるコアが会得した情報を、別のコアへと流す機能がある。今回の一件、少なくとも他のISコアへと通じている可能性が極めて高い。と、なれば対策を取るだろう。手段を得ても直ぐに理解されるなんて、やっつけられないだろうな。直ぐに完成させなければ……マズいかも知れないな。

「お疲れ様です。ご主人様……そろそろお休みになられては如何でしょうか？」

ラボに紅茶のセットを持った状態でメサルティムが入って来た。時刻は既に11時を回ろうとしていた。紫が作業に没頭して翌日になっっている事も少なくない。

「……先に休んでくれて構わないのだがな」

「そうは行きません。ご主人様が倒れられてはこのエストレヤは機能を停止してしまいます。もっとご自身のお身体を大事になさって下

さい」

メサルタイムに遠回しに叱られてしまった。此処で意固地になると余計に止められてしまう事を知っている紫は頭を掻きながら作業の手を止める。

「分かった分かった。今日はこの程度で止めるとするよ。寝る前に紅茶はどうかと思うがな……」

「止めても作業を続けると思いました故に……」

「今回は止めておくさ。何度も心配掛ける訳には行かないからな……」

「して……首尾は如何でしょうか？」

恐らく今後の展開に付いての質問であると紫は察する。その事を聞く事も要件に入っているのだろう。

「何とも言えないのが本音だな。確かに今迄、小型である事を加味しても、ISに致命傷を通り越して、撃破し沈黙せしめる事が出来た。しかし、シールドバリアを打ち破る事は出来たとしてもそれは単体の時での話。連続で集まって来られたら、勝ち目が無い」

「……対象を撃破して終わり、とは行きません。増援が来る事も考慮せねばなりませんもの」

「ISの事を知っているようで、思いの外分からない事も多い……偶然見つけたモノを良かれと思つて搭載したに過ぎない。確かに、突破口となり得るかも知れないが……継戦能力が余りにも無さすぎるのが痛い所だ」

——本音を言えば、時間は掛かっても物理的な形でシールドバリアを削り壊し切れるのが理想。エネルギー系統は、エネルギー切れになればかなり危険な状態になるのは目に見えて分かる。俺が今後展開する事になる光景は試合でも1発限りの決闘や戦闘じゃない……戦争だ。

1時間や1日で終わるモノじゃない……それこそ年単位で続くかも知れない……エネルギー系統の武装を批判する気は無いがどうしても継戦能力に欠ける傾向があるのが否めない。供給出来る場所は非常に限られていると言う理由もある。

後、と言うか……根本的な理由として、愚民政策故に思考力が乏しくなりがちなA I S達はその辺を理解出来るのか不安と言う認識が1番強い……。エネルギー切れの概念自体の前に使い方さえも理解してくれるか不安過ぎる……。

「と、なりますと?」

「現状のままでは、余りにも不安定かつ継戦能力は劣悪極まりない。どうしても代替案が必要になる。具体的な理想はシールドバリアを生成展開するエネルギーの形成を阻害する磁性を有した貴金属……」

——その素材を用いた武装であればシールドバリアの形成を阻害させ続ければ時間は掛かったとしても打ち破れる筈……更に相応の強度及び硬度、破壊靱性じんせいが無ければ無意味だ。鈍な安価な鉄じや厳しい、硬度が高くても靱性が小さいと脆い……。しかし、こんな空想染みた案が浮かんでしまうと言う事は……。

「ご主人様、そのような金属が存在するのでしょうか?」

貴金属には色々な特性を有する。分子構造によって割れやすいが硬い、硬いが熱により溶けやすいと様々、しかしその様な限定的とも言える特徴を有する貴金属は聞いた事が無い。

「……そんな特性を有するレアメタルは地球上には何処にも存在しない」

「机上の空論ですのね……」

「いや?自然界には存在しない、だが人類は求める故に生み出す事を見出した」

当然ながら紫は存在し得ない純正金属だと断ずる。しかし、無いのならば……。

「合金として改めて生産する。クルップ鋼や安来鋼等の合金も生産されて来た……それらが建築材や工具等として利用されて来たからな」

「合金を改めて生産する……?」

「ま、女尊男卑の所為で鑄造技術類も破壊されてしまったからな。大半が残っている残骸を切り出して再利用しているのが精一杯……」

女性からすれば縁の無い話。女尊男卑の加速の結果……大半の生産業が崩壊の一途を辿り失われた技術も多い。何とか復興しようと

躍起になるも師弟関係による口伝である事が多く、資料として残されていないのが現状……。

「……今は机上の空論でしか無いが少なくともキチガイ染みたイカれ女が考えたやり方よりかは現実的だと俺は考える。実現出来るかはまだ分からないが……やつてみる価値はある」

「……実現出来た場合は一步前に進みますね」

—— 一番乗りであればアドバンテージを得られるのは明白……交渉カードに利用出来る上に此方に傾く可能性がある。

「ですが、そろそろお休みになられて下さい。夜も更けて居ますので」「こうしてはいられないのだが……」

「ご主人様の私生活の矯正もメイドの務めですので」

そんなやり取りをしながらメサルタイムに襟首を掴まれ引き摺られる形で紫はラボを後にする事になった。

鈴音達の埼玉コミュニティへの引き渡しまで残り……後、2日。



筋肉の筋が蠕動ぜんどうしている様に見える肉と機械が混ざりあつた壁と床、それは通路に見える。その通路を肉摺る音を立てながら歩く影がいた。

煌々たる皓銀の長髪、燦爛と煌めく黄金の双眸。豪華で純白のドレスを纏った小さな少女。いや、それは少女の姿を象つたIS……ヴォルヴァと呼ばれる特異なIS、その名はヒムと名乗った。

『戻ったか……息子よ』

ヒムの歩いた先、其処は広い空間。床は肉筋が犇いており天井から

は血管の様な管が何本も垂れ下がり壁と繋がっている。壁は筋肉筋の様な筋が並んでおり今も蠕動して蠢いている。不気味としか言いようが無い光景の中、厳かに声が聞こえて来る。

どうぼうがうたれた
胞」

『……娘が、人間に殺された、か』

「諾」

伝えられた言葉。それは同胞たるISが人間に破壊されたと言う事実だった。その報告を受けた『声』は暫しの沈黙の後に音を震わせる。

『悦ばしいな。遂に、至った、か。ならば、扉を開けよ』

『娘達よ、息子達よ。橋を架けよ……更なる進化を見せよ』

揺れる、揺れる。空間が揺れる。大空が震える。新たな境地が、始まる……。

生存競争

「うにうに」

「……こうやって何も要件が無くて出歩くのは初めてね」

埼玉コミュニティ跡地の探索及び、初のIS撃破した日の翌日。ウイキッドとオトウールはエストレヤ内の散策をしていた。武装の試作品の使った時の感想やらを聞かれたが思った事を告げるだけに留まった。感想を言うにしても主観でしか無いのも又、事実。

翌日の朝になって教育係を務めるメサルティムからは暫くは出撃とかは無いと言われた。何でも対IS用の武装の改良の為に紫が行動を始めてしまったと言う。元来、研究者気質でのめり込んだら止まらないタイプ……向こうからリアクションがある迄は周りの事などほったらかしにするらしい。度が過ぎた場合、メサルティム辺りが強引に軌道修正するとの事。そう考えると紫はメサルティムの尻に敷かれてる様にも見える……。

「此処が食堂になります」

「ほえ、結構広いね」

そして現在、散策するにしても迷う可能性もあった所為かメサルティムの案内の元、2人は見て回る事にしていった(勢い余って変な所に首を突っ込みかねない為、特に好奇心が強そうなウイキッド)。まず、最初に食堂へと案内していた。

「……………」

「オトウール様?どうされたのですか?」

「オト姉?どうしたの?」

食堂へ着くなりオトウールは周囲を見渡した後に、難しい顔をしている。その表情に不安に思ったのかウイキッドが下から覗き込んでいた。

「いえ、色々考えて居たのよ。中規模……と言われても良く分からなけれど、私から見たらこのコミュニティは大きく見えるわ。食堂……と呼ぶこの場所も充分広い……」

確かにエストレヤの食堂も大型コミュニティ程では無いが充分広い部類に入るだろう。だからこそ、オトウールは、改めて考える事と疑問に思う感情が芽吹いている。故にその疑問をぶつけた。

「どうして、此処まで閑散としているの？このエストレヤと言うコミュニティ、規模にしては人数が、構成員が、余りにも少な過ぎる」
食堂は閑古鳥が鳴いているかの様に閑散としているのだ。時刻は午前中とは言え、何人かは訪れていても不思議では無い。しかし、現在のこの光景には自分達以外、皆無なのである。それに、昨日艦橋へ向かう際も誰一人としてすれ違う事も無かったし艦橋と言う場所にも紫以外の人間は居なかった。このコミュニティは人が少な過ぎる……オトウールはそう考えていた。

「……お気づきになられましたか。はい……確かにこのコミュニティの構成員は数える程しか、居ません」
「何で？」

「……ご主人様から聞いたお話ですが、エストレヤの過去に、大きな事故が発生したそうです。私にご主人様へお仕えする以前のお話」
「事故……？」

「詳しいお話は私も良く存じません。知っている事は私がお仕えする時には御二方だけだった事と私が来る以前の状況を知るのはご主人様とカタナ様のみと言う事です」

「そうなんだ……」

メサルティムも規模に反して構成員が少ない事は気付いていたが、紫のプライバシーに関する事と見做して深くは追求しなかった。

「……私達にとつては関係無い事、か。変な事を聞いてごめんなさい。迂闊に踏み込んで良い話じゃないわ、忘れる」

オトウールも気安く聞いて良い話題では無いと考えたのかこれ以上は聞かない事にした。事故が起きたのなら金は無いだの、修理だのと言っている事に説明が付く。このコミュニティは元々は私設故に紫とカタナで切り盛りしていたのかも知れない。真相は紫のみぞ知る事だろう。

「……気を取り直して、次へ参りましょうか」

本人が言わない以上、此方側からは特筆して何かを聞く必要は無い。誰とでも話したくは無い事もある。そして自分達も、誰にも聞かせたくない事情もあるのだから。

「あ……」

「ん……？」

食堂を後にしたウィキッド達は艦内の連絡通路にてある一団とバツタリ遭遇した。何処かで見覚えのある面々がいる。だが大半の者達が焦燥たる表情を浮かべている。

「アンタ達……」

「おや、何処かで会ったかしら？」

ツインテールの髪をした少女、鈴音がオトウールの顔を見るなりその様な言葉を投げ掛けるも対するオトウールは小首を傾げる。

「何処かって、アンタ!!? 同じ牢屋の中に居たじゃない!!?」

「あ、思い出したわ。あの時の……新参A I Sだったわね……」

其処でオトウールは目の前の鈴音の事を思い出した。埼玉コミュニティで起きたヴォルヴァの襲撃のイザコザでとつくに死んだのかと考えていたからだ。正直に言えば、半数以上は生き残れないだろうと考えていたし実際にあの時、見かけた人数より大幅に数を減らしている。

「……本当、性格悪いわね。アンタ……もう忘れているだなんて……!!?」

「私達も余裕が無いのよ。自分達の事で一杯一杯なのだから、赤の他人の事なんて気に掛けて居られる余裕なんて無いわ」

売り言葉に買い言葉染みたり取り。A I S同士ではあるのだが、置かれた状況は全く違う。そして鈴音達はオトウール達が安全圏に居る事を知っているが見る限り、オトウール達は鈴音達の置かれている状況を知らない様だとも受け取れた。

「……此方の事情を知らないで、良く言えるわ」

「事情？ああ、そう言う事」

「うに？…どう言う事？」

その言葉でオトウールは鈴音達の事情を察した。そして自分達も最悪、そうなる可能性もあったと言う事も思い出す。自分達は処刑前提だった故に死亡した扱いとなり契約は失効している。その為、その心配は無かったが鈴音達の場合、その契約は生きていると言う事を。「ウイキ姫ちゃん。状況が違うと言う事よ。彼女達は元々いたコミュニケーションとの契約が続いている。私達は死亡した扱いとなっているから、エストレヤに移れたけど…彼女達は埼玉コミュニケーションに戻される。そう言う事なの」

「うに…そう、なんだ…」

断裂関係

「ウイキ姫ちゃん。状況が違うと言う事よ。彼女達は元々いたコミユニティとの契約が続いている。私達は死亡した扱いとなつて居るから、エストレヤに移れたけど……彼女達は埼玉コミユニティに戻される。そう言う事なの」

「うに……そう、なんだ……」

オトウールは彼女達の焦燥から大凡の事を察した。埼玉コミユニティのオーナーが生存していると言う事を。

昨日、自分達が居た埼玉コミユニティの拠点要塞に赴いたが、それだけがコミユニティとは言えない。コミユニティと言っても複数の拠点の複合体である場合もある事をメサルティムから教えられた。埼玉コミユニティは群体コミユニティ。壊滅したと言つてもその一つの拠点が潰れたに過ぎない。

今更、思い出したが自分達が見世物の末に処刑される直前にヴォルヴァ種『ヒム』の来襲によりオーナーや有権者と言った連中の避難する為に即死不可避の囹作戦を強いられた。その時点ですぐに避難したのである。

「……疫病神」

鈴音はボソリとそう呟いた。疫病神、と。オトウールもウイキッドもその言葉の意味が分からず疑問符を浮かべている。だが、その言葉が火蓋となりA I Sの者達が堤が切れた様に各々の感情が炸裂する。

「そうよそうよ!!? アンタ達の所為よ!!? 何もかもが!!?」

「アンタ達が現れなければ……私達はこんな惨めな思いをしなくて済んだのに!!?」

「悪魔!!? 外道!!? アンタ達の所為で……私達はまたあんな地獄に逆戻り!!?」

「家に帰して!!? 元の世界に帰してよ!!? 死にたくない!!? 死にたくないのよ!!?」

「寝なくても戦えなんて!!? 食わなくても戦えなんて!!? そんなの出来る訳無いじゃない!!? お風呂にも入りたいし、オシヤレだつてしたい!!? 何でよ!!? 私達が何をしたつて言うのよ!!?」

次々とぶつけられる言葉の数々。そのどれもが罵倒や暴言の類である事は感情で分かる。此処、エストレアでの生活は不便はあるが埼玉コミユニティとは雲泥の差である事は実感している。

「……貴女達の言葉。私にとっては如何でも良いわ」

オトウールがその言葉を受けて返した言葉は素っ気無いモノであつた。

同じA I S。でも、待遇は雲泥の差となつた。だから如何した?

人間とは他人がより良い環境だと嫉妬する獣の名前だ。色んな言葉で片付けられるが……所詮はその程度の問題である。

「あの時も言ったし、さつきも言ったわ。私はウイキ姫ちゃんの事だけで一杯一杯。だから、それ以外の事なんて知つた事じゃないの」

オトウールの目付きが鋭くなつた。自分は穢れている事は充分理解している。自分達の為に他者を見捨てるわ道連れにするわ、身代わりにもする。最低だと分かっている。それでも、譲歩はしない……自己中心的だとしても生きる為ならば、他を犠牲にしても構わない。

「其処までです」

お互い剣呑な空気。或いは乱闘でも起こりそうな空気を制する声が響いた。一応、事の成り行きを見守っていたメサルティムが登音を鳴らして介入して双方の間に割つて入る。

「鈴音様方、オトウール様方。当艦にて乱闘事はお控えなさるようお願い申し上げます。双方共に吐き出したい様々な感情がある事、このメサルティムは重々承知しております」

目を伏せながらメサルティムは淡々と続ける。確かにメサルティムから見てもA I Sの待遇は劣悪を極めているのだが、自分の立場からその環境に関しての意見は絶対に通らない。いや、それが原因でオーナー、ひいてはエストレア全体の存続にも関わりかねない。

「ですが、双方の『立場』は決定事項。鈴音様方の所有権は埼玉コミユニティ、オトウール様方の所有権はエストレア・コミユニティにあり

ます。以前、ご主人様が説明された通りの条件が所属元を断つ為の必須事項です」

「……………」

「お互い、此処で言い争っても何も進展はありません。故に解散を言します」

メサルティムから見れば、鈴音達が居られる時間は今日で終わりだ。明日の午前8時頃、埼玉コミユニティP3にて鈴音達AISは埼玉コミユニティへと返還される。それで彼女達の関係は終わる。

「……………如何して、アンタ達はそうやって生きて居られるのよ……!!?」

「別に無条件で此処に居る訳じゃないわ。私達だって、相応の対価を払う契約で此処のオーナーと取引しただけよ」

「…………」

気不味い空気に包まれる中、オトウールはウィキッドを連れて自分の方からこの場所から立ち去った。メサルティムの言う通り言い争おうが、罵倒をぶつけ合おうが状況が変わる事は無い。騒いで叫んで如何にかなる程、簡単な問題では無いのだ。

○

「うん？」

剣呑な空気となり事実上、壊れた関係となった彼女達と別れ、次に案内されたのは製造場であった。しかし、人員が居ない為に稼働はしていないようである。

「此処では戦闘用の武装や補助装備等を開発する場所です。……しかしながら、人員が居ない為に常時稼働は出来ません」

「私達の武器も此処で？」

「はい。基本的にご主人様が使っています、何分……製造の心得があ

るのはご主人様だけであるのが実情なのです」

「……………ふーん」

大型の設備もあり、オトウールから見ても何が如何なつて動くのか検討が付かない。自分達は戦うのが仕事の為に理解出来ないのは当然かも知れない。

「資材や鋼材や設計図とか見つければ、貴女達の装備も充実するかも知れません。探索の際には気にかけて頂けると幸いです」

「……………そうね。生き残る為には、強くならなきゃ、ね。それに強力な武器があれば……………きつと」

——最低でもヴォルヴァくらいには抗えないと……………高望みかも知れないけど、それ位の目標じゃないと明日は見えない。

その後、特に何事もなく時間が経過して翌日となった。

そう、未だ埼玉コミュニティとの契約が締結されている鈴音達がエストレアから埼玉コミュニティへと引き渡される日、であった。

約束された絶望の刻

エストレヤによつて保護された鈴音達が本来所有権がある埼玉コミュニティへ引き渡される当日。エストレヤは埼玉コミュニティP3番へと向けて航行していた。引き渡し時刻は午前8時を予定している。

ヴォルヴァ種である『ヒム』が埼玉コミュニティ支部にて派手な破壊活動の傷跡が大きいのか道中でエインヘリヤルには遭遇しても幸いISには遭遇しなかった。IS以上だと厄介極まりないがエインヘリヤル程度ならば撥ね飛ばす事は出来る。移動要塞である利点と言える。最も、停止する場合は掃討の必要があるのだが。

「ご主人様、まもなくエストレヤは埼玉コミュニティの支部の1つであるP3番へと到着します」

艦橋にて紫はメサルチームからそう報告を受ける。今回の航路では特に筆舌するような問題は発生しなかった。それも当然だろう、既に埼玉コミュニティP3の周辺地域に進入している。

つまり、P3で所有しているAISによつて日夜エインヘリヤルは掃討されている。

「エストレヤ、艦体状況オールグリーン。損害はありません」

艦橋の下方にあるオペレーター席に座っているのは水色の長い髪に眼鏡を掛けた女性、スピカから報告が飛ばされる。此処までは何事も無く事が進んでいるようだ。

「ああ、そうだな。……で、肝心のフォン嬢達は？ メサル」

引き渡される事が決まっている生き残り組の鈴音達の様子をメサルチームに訊く。

「……大層荒れておられます。当然ですね、此の儘肅々と進めば再び今日を生き延びる為だけの生死、ギリギリの人生ですから」

「……………」

エストレヤコミュニティではそんな光景は存在しないが、大半のコ

コミュニティでのA I Sの扱いは差はあれど大体が散々な扱われ方なのはもはや常識である。

A I Sに対して同情する者はほぼ居ない。全ては女尊男卑の元凶として見られているが故に。

「……だが、俺達が彼女達にしてやれる事は何も無い。こう言う時代だ、だからこそ秩序は遵守しなければならない」

A I Sの極端で迫害的な扱いはもはや公然の状態。彼女達が再び凄惨で隷属的で性奴隷な扱いをされるであろう事は容易に想像出来る。……だが、埼玉コミュニティにおけるA I Sの扱い方は違法では無いのだ。

組織を運営するオーナーとして、守るべき存在は決めねばならない。目に見える者達、全てを助けられると言う思考回路は極めて危険で、傲慢な感情だからだ。

「理解は出来ても納得は出来ない……彼女達の心境はそうだろう。だが、今の時代を生きる者達にとって先達の負債は余りにも大き過ぎる上に庇いようがないからな」

そして、時刻は午前8時間近。

エストレヤは無事に埼玉コミュニティP3番のゲート前へ横付けする形で停止した。

「当艦は無事に埼玉コミュニティP3番、正面ゲート前へと到着致しました」

「ああ……。メサル、フォン嬢達を出入り口ゲートへ誘導、スピカも手伝ってやれ」

「畏まりました、ご主人様」

「分かりました」

コミュニティの構造上、引き渡しはゲート前で行われる事となる。無論、その時にエインヘリヤル等の襲撃も考えられる為に、警備は万全で望まれる。

メサルタイムとスピカの誘導でエストレヤから数日振りに外に出された鈴音達は精神的に未来が絶望しか無い事に憔悴しきっていた。

エストレヤから降ろされた彼女達が見たのは、ゲート前に立っている軍服姿の男性達、権利者やオーナーと思わしきこの荒廃した世界では色んな意味で引き立つ高級そうな服を纏った男性達。

そして、ゲートの周囲に配置されたA I S達。彼女達は見覚えのある戦闘用のA I Sスーツに腕に枷が嵌められた姿であり、スーツも幾つか破れ身体のおちこちが傷だらけな上に疲弊している様子が見て取れる。今にも倒れそうな者も居る事からかなり過酷な扱いを受けていると理解させられる。

「……………」

そして、最後にエストレヤから降りて来たのは当艦のオーナーである紫であった。紫は真つ直ぐ埼玉コミュニティのオーナーの1人の前に向かう。

「……………」この度は我々、埼玉コミュニティの所有するA I Sを保護して頂き誠に感謝する。私は破壊された埼玉コミュニティP 2番のオーナーだ」

「ええ、ご無事で何より。ヴォルヴァに襲撃されたとか…………。急死に一生を得ましたな」

「ええ、よもやヴォルヴァに襲撃されるとは…………コミュニティは破壊されてしまったが勇敢なA I Sの決死の行動により私は無事に五体満足で脱出する事が出来た。私の為に忌々しいI Sにより散つていた部下達にも哀悼の意を示さねばなるまい」

上辺ではA I Sに助けられたみたいなお態度だ。実際は身代わり捨て駒にしたのだがまあ、指摘する理由は無い。

「さて、オーナー同士。互いに多忙の身だ。諸君」

埼玉コミュニティのオーナーが片腕を挙げると部下である男性達が前に出て鈴音達を取り押さえ手にしていた枷を無理矢理にでも取り付けに掛かる。嫌だ嫌だと叫ぶ者、暴れる者、諦めて抵抗しない者と反応は様々だったが、滞りなく『兵器』の梱包作業が進められていく。

「貴殿が保護し預かっていたA I Sは確かに我々が引き取った」

「此方も、確かに貴コミュニティに所有権があるA I Sを引き渡した」

オーナー同士による引き渡し契約の締結された。その頃には鈴音達は拘束具を付けられ、抵抗を奪われた末にゲートの奥へと歩かされていく。特に強く抵抗していた鈴音はマスク状のギヤグを付けられ口答え出来ない様にされていた。

「さて、モノはついでだが1つ宜しいか？」

「ん？何かね？ ああ、処刑しようとしていたAISの事かね？」

「既に死亡名簿に記載され、公的には別人扱い。しかし、まだ頭部に埼玉コミュニティのナノマシンが残っている。コミュニティ管理法の規則に則り、AISがコミュニティ間で異動となった場合、ナノマシンは所有コミュニティの物に変えなければならぬ」

「成程、そう言う事かね。今回、エストレヤには世話になった。君、ナノマシン摘出用の器具を持ってきたまえ」

「はっ!!？」

近くにいた部下に器具を持って来させる様に指示を出す。

「流石に移動してから返却するのも面倒だ。暫し、ゲート前をお借りしたい」

「然程、時間はかかるまい。そんな事で目くじらを立てる程、私の器量は浅くは無い」

その後、埼玉コミュニティからナノマシンの摘出器具を借りた紫。

その日の内にオトウールとウィキッドを医務室に呼び寄せて頭部に打ち込まれていたナノマシンを取り除いた(因みに麻酔と言う便利な道具は無い為、ウィキッドがガチ泣きしたので結構な時間がかかってしまった)。

無論、その日の内に摘出用の器具は埼玉コミュニティへと返却し、エストレヤは埼玉コミュニティを後にしたのだった。

胎動篇

狂った法律

「うう〜……!!?」

「はいはい、痛かったわね。ウイキ姫ちゃん」

エストレヤの医務室にて、病床に腰掛けたオトウールは膝の上にウイキッドを座らせて頭を摩っていた。2人とも頭に包帯を巻いている。

つい先程、頭部に打ち込まれていた遠隔操作で起爆するナノマシンの摘出作業を終えたばかりだ。本来ならば部分麻酔を用いてやるのが道理ではあるのだが麻酔自体、中々手に入らない貴重品となっており、重傷であつても麻酔無しで治療せざるを得ない状況が多々あつた。

「うう、痛い……」

皮膚を切開させる為、かなり痛かったのかウイキッドは頬を膨らませて不満げな顔をしていた。泣いて叫んでいたが事が終われば泣き止んだが、不満を漏らしている。

「痛い思いをさせたのは悪かったな。麻酔が手に入らなくてそのままやらざるを得なかった」

「オーナー……」

「うにーッ!!?」

摘出用の器具を埼玉コミュニティへと返却して来た紫が其の儘、医務室へと戻って来た。すかさずウイキッドは不満げな顔を見せる。分かりやすい。

「AISの所有権が他コミュニティへと移る場合、打ち込まれたナノマシンを差し替えなければならぬって言うコミュニティ管理法がある。起爆用のナノマシンはコミュニティ毎に異なる信号だ。複数のナノマシンが混在していると電波干渉が起きて不具合が生じるのが理由だ」

そもそもA I Sに起爆用のナノマシンを入れる理由はA I Sがインヘリヤル掃討やI Sの誘導(囹)作戦中の敵前逃亡防止の為である。作戦中は危険しか無い為、A I Sだけで行動する。その為、コミュニティの管理を脱して逃亡を企てるA I Sも現れる。それらの逃亡を未然に防ぐのが目的……即ち『首輪』の1つだ。

「つまり、エストレヤのナノマシンを私達に入れるつもり……?」

オトウールは膝に乗せたウイキッドを両腕で抱き締めてそう訊ねる。自分達は公的にエストレヤが所有権を持つA I Sだ。契約は契約、もしそうなのだとしたら、自分の身を差し出してウイキッドはしない様に懇願するつもりだ。

「しねえよ、そもそもそんな物はエスト^ウトレ^チヤにや無えよ」

覚悟を決めた様な顔付きで訊ねたオトウールに対して紫は手をヒラヒラと振りながら否定する。エストレヤにはそんな物騒なナノマシンは無いのだ。

「そう……。でも、良いの……?」

コミュニティは他にも多数ある。それに自分の目的の為には他のコミュニティと接触しなければならぬ。話を聞く限り他のコミュニティも埼玉コミュニティと似たり寄つたりの環境だと言われている。そんな状況で他のコミュニティから見てどう映るかは分からない。

「ナノマシンなんて外から見分かりやしねえよ。聞かれたとしても適当に取り繕えば良いさ」

「……果たしてそう上手く行くかしらね?」

その時、医務室の扉が開かれて黒髪を靡かせつつ紫の背後からカタナが現れ冷や水を掛ける形で話に割り込んで来る。

「はい。頼まれていた最新のA I Sの運用法のファイルよ。舐め回す様に目を通しておきなさい」

じゃあね、と。要件が終わったのかそそくさと退室して行った。オトウールから見て良く分からない人物だと思う。

「……オーナー、それは?」

「オトウール嬢、君の目的の為にも他のコミュニティと接触する必要

がある。それは分かるな？」

「……ええ」

「ウチは移動要塞のコミュニティだ。直に目標地点に移動出来るからな。しかし、エストレヤとしてはA I Sを所有するのは初めてだからな。」

最新の情報は常に調べておかねえと行けない。具体的に言えば……コミュニティの領域内にて他コミュニティ所有のA I Sの扱いについて、とかだな」

「……ッ」

その言葉にオトウールは歯噛みした。所有権のあるコミュニティ内の散々たる扱いは既に身を持って知っている。

紫は近くの椅子に座りファイル纏められた運用法の文字を目で追って行く。

「……えーと、何々？」

作戦行動中以外、牢獄、保管場所等ではA I Sは常に拘束。歩行以外の行動は禁止。

A I Sには基本的にA I Sスーツ及び付属品のみ着用させる事。

A I Sに対して管理担当者は常に懲罰用器具を携帯しておく事……。

A I Sの食料配給は投与してから最低でも1週間以上の間隔を空ける事。

また、1度に与える投与物は錠剤1個以下にする事。それ以上与える事は禁止。

うわあ、その他にも予想通りの文字の羅列」

ファイルに留められた用紙を流し読みしつつ紫は予想通りの内容に辟易している。オトウールも当たり前かと言う思いが耽る。

「それから他コミュニティ内へ護衛と言うか肉盾の理由でA I Sを持ち込む際は管理担当者或いは権利者の半径10m以内に留め、常に拘束しておく、視認可能な場所に許可証を付けておく事。」

他にも携帯肉便器として使う際には当該コミュニティの決められた場所って、公文書でこんな文字を使うんじゃないやねえよ……!!? 頭に

蛆でも湧いてんのか、こんな法律考えた奴!!?」

内容を理解すると同時に紫は『何だコレは!!?』とクソツタレな感想をしてファイルを閉じて頭を押さえた。

「外面からA I Sの扱われ方を見て大凡は理解していたつもりだが、いざ内容を見てみると壮絶だ。反吐が出る……」

——……彼らは私達を人間として見ていない。この世界に追いやった大罪を犯した雌豚の様な存在。

「……心配するな。此処に書かれている事は管理法で定められ遵守すべき内容だろうがエストレヤ内では、こんなクソツタレな内容はゴミ以下の内容だ」

「……良いの?」

秩序は守るべき。

こんな時代だからこそである。それに紫が見た内容はコミュニティ管理法で定められたコミュニティで生活し生きる誰もが遵守すべき内容である。オトウールやウィキッドは兎も角、コミュニティ・オーナーであり公としての立場がある紫は無視する訳には行かない筈である。

「このエストレヤでは俺が法だ。俺が定めた、俺の法だ。だからエストレヤではそんな部外の管理法なぞお互い気にするな」

そう言い紫は切つて捨てた。

「うにー、でも、なんでこんな話をしたの?」

ウィキッドは半分以上、理解出来ていない。難しい話なので聞き流していた。

「ああ、これから東京コミュニティに向かおうと考えている。東京コミュニティは各地に点在している公設コミュニティを統括する……言わば首都機能を持つコミュニティと言える。規模も相応にデカい。

基本的にエストレヤの方針としてはオトウール嬢から聞き取った君らの家族の行方を追うが、聞いた時点で変動が発生している可能性があるからな。総当たりで行くのもアリだが……俺としても状況を整えたい。今後の為にもな」

「貴方にも目的がある。……そう言う契約。もし、他のコミュニティ

に行く必要があるのなら……好きにして構わないわ」

「……正直に言えば俺としては不本意の極みだ」

オトウール達が東京コミュニティに立ち入る必要があるのなら、当然ながら拘束しておく必要がある。そう言う法律であるのも当然だが、『中央政府』が位置する主要コミュニティならば尚更だ。

「……覚悟はしている。エストレヤの外ではその管理法を守らなきゃ行けないんですよ？」

「ああ、流石にな。今迄はA I Sを所有していなかったから割とフリーで動けたが……既に公文書で公表した以上はな。勿論、そう言う機会は極力は避けるつもりだ」

「もう一度言うけれど必要があるならば、雁字搦めでも何でもして頂戴。拘束されるのは、もう慣れてるわ。どんな辱めだって構わない……皆を取り戻せるのなら、何だってする」

「……オト姉」

ウイキッドが不安そうに視線を向ける。オトウールにそんな役目を押し付けるのは嫌だつて顔をしていた。

「大丈夫……心配しないで、ウイキ姫ちゃん」

「……すまん。要らぬ負担を掛ける」

「謝らないで。貴方は、貴方達、エストレヤの人達は私達を人間として扱ってくれている、とても嬉しい……と思うわ。」

でも、外では私達を奴隷として扱って頂戴。そうしないと、貴方達の立場が危ないわ」

エストレヤ内ではそれで良いのだろう。だが、エストレヤ外の社会ではA I Sは奴隷同然の存在だ。

「……本当、聡い奴だよ、君は」

「本当なら私達は貴方に扱き使われるだけの存在。でも、貴方は私達を案じてそして動いてくれる……だから私達も貴方の『兵器』として使われなきゃ、いけないわ」

「契約は契約。だな。その筋では期待させて貰うぞ」

「ええ……そう言う契約だもの」

お互い目的がある。

その利害が噛み合ったからこそ、今此処に居る。それだけは違えない。ウイキッド、オトウールと紫の関係はそれで繋がっている。

「メサル」

「お呼びですか、ご主人様」

紫が呼ぶと又しても背後に今度はメサルチームが現れた。此処の人間はオーナーである紫の背後から現れるのが常識なのだろうか？

「話は聞いていたか？」

「はい。徹頭徹尾、お聞かせ頂きました」

「コミュニケーションで使用されている拘束具を手配してくれ。極力使いたくは無いのだが、必要になるかも知れんから、細工する」

「畏まりました。A I Sスーツに関しては如何しましょう？」

「それも同時に頼めるか？ 管理法を見た限り流通している筈だ。埼玉コミュニケーションだけの技術ではないらしい……どうやら俺達は相当、情報に置いて行かれている様だ」

「畏まりました。では、暫しお待ちください」

メサルチームはそう答え、医務室を後にした。

「……取り敢えず、東京コミュニケーションには俺だけ要件がある状況だと思うがその間は、エストレヤ艦内を自由に行動してくれ。何かあればメサルやスピカに聞くと良い」

「ええ、分かったわ。その道中でエインヘリヤルとかに遭遇はしないの？」

「埼玉、東京間の航路は基本的に安全だとされている。仮にあったとしても東京コミュニケーションのA I Sによる掃討作戦が毎日やっているだろうよ」

「……そう、分かったわ。もし、何かしらの作戦があれば呼んで頂戴」

「ああ、そうさせて貰おう。それまでは休んでくれ。休む事を知らない兵士に明日は無いからな」

過去の哭聲

——気分は本当に最悪だった。

約束された日。

その日となり鈴音達は再び埼玉コミュニティの支配を甘受する事となった。

偶々通り掛かったエストレヤ・コミュニティに保護され誰もが助かったと、頭ごなしの命令ばかりと、悪夢の様な環境から解放されたと安堵した……。元々、比較的平和で命懸けの戦闘行為や奴隷同然の扱われ方など無縁の者達……。到底耐えられる様な精神では無かったが故に。

だが、その光明もその一瞬だけの幻想でしかなかった。彼女達の所有権は埼玉コミュニティにて締結されており、有権者が存命である以上、返還しなければならぬ義務がエストレヤに生じたからだ。

結果、如何する事も出来ずに今日、埼玉コミュニティへと引き渡される日を迎えた。

——返還要求が来た後、私達が出来る事は何も無かった。何人かはあのメサルタイムと言うメイドに問い詰めたけど答えは『無理』の一言で切り捨てられた。

エストレヤから降ろされ埼玉コミュニティの人間達に引き渡された後に待っていたのは初めて埼玉コミュニティに来た時よりも激しい洗礼だった。

いきなり殴られ、蹴られ、転がされた後に二の腕と手首に枷を嵌められ連結させ拘束される。更に今度は足にも枷が嵌められた。腕だけでなく足も拘束されればいよいよ抵抗すら出来なくなる。叫んだり暴れる者も居たが滞りなく取り押さえられ拘束され、地面に転がされた。

「先日、廃棄処分したコード：O13とコード：U31もA I S の分際で反抗的な態度だった。……だが、貴様らはあの薄汚い売女共よりも随分と付け上がった態度は目に余る!!？」

頭上より聞こえてくる男性の罵倒は徐々に語気が強くなっていく。その視線は鈴音に向けられた直後、腹を思い切り蹴り飛ばされた。

「が、あッ……!!? ゲホッ、ガッは……!!?」

——腕も脚も拘束されて……無防備な所を……こんのッ!!?

蹴り転がされて咽せ返りながらも僅かな抵抗として睨み付ける。そんな行為すらもささやかな抵抗でしか無い。その反抗的な目も気に入らないのか鈴音を蹴り飛ばした男性は足で鈴音を仰向けにした後に鈴音の俎板の様な胸部に脚を乗せて強く踏み付ける。

「ガッ!!? カハッ!!? この……!!? 離、セッ……!!?」

肺が圧迫され息苦しさを感じながらも抵抗の意思を止めない。

「その中でも特に貴様だ、コード：R18!!? その態度は正に悪しき社会病理である女尊男卑を彷彿させる。如何やら我々の今迄の判断は実に甘かった様だ」

ギリと踏み付ける力が強くなって行く。崩壊した埼玉コミュニティの支部での鈴音の態度の悪さは既に把握されている。

「貴様には入念な再教育が必要だと上層部の判断が下された。この意味、その貧相な頭でも理解出来るだろう。出来なければタダの家畜にも劣るがな。おい!!?」

「ちよ、何……むぐううう!!?」

そう言い捨てるや否や、鈴音に対して今度は蓋付きのマスクギャグが取り付けられた。手足の自由に加えて喋る事すら奪われた。

「さあ立て!!? ボサつとするな、キリキリ歩け!!? A I S の分際で、寝ていられると思うな!!?」

「むぐう!!? ぐうおうあ!!?」

そして、連行だと言わんばかりに腹や胸を蹴られ立ち上がる様に恫喝される鈴音達。鈴音は口を封じられた為に言葉にならない悲鳴をあげる。

「いぎい!!? い、痛ッ……!!?」

「や、止めて、止める……!!? がほっ……あっ!!?」

「痛い? 貴様らに痛覚が存在するとは驚きだな? I S に選ばれた女性は最強なんだろう?」

他の男性達も同じ様に他の者達に足蹴にして行く。腕も脚も拘束されて動きが大きく制限された今、立ち上がる事すら難しいのに立ち上がる事を強制する。

「……………いゝッ!?? あがつ……………も、う、嫌だ……………!!?」

「お前達、A I Sは全身、シールドバリアで全ての痛覚は遮断されているんだろ? ならば我々の様なひ弱い男達の蹴りくらいで逐一、泣き喚く必要は無いだろうなあ!??」

痛い痛いと言き叫んでも、男達は暴行を止めない。何故ならA I Sは兵器であり、尚且つ痛覚を訴える権利は存在しないからだ。

震える脚で何とか立ち上がろうとしてもその脚を蹴られて転ばされる事を数回繰り返す。

「何だ? その生まれたての牛の様な立ち上がり方は!?? 貴様らは雌牛か? ならば、家畜として売り飛ばしてやろうか!??」

「こゝ、こんな連中……………I Sがあれば……………!!?」

その中で痛みに苛まれ、1人のA I Sが思わずそんな言葉を漏らした。彼女は過去の世界でI Sに恵まれず、I Sがあれば何でも叶うと本気で考えていたI S学園の生徒だった。

「ほう……………? 貴様、良く言った。こんな世界を創った分際で、良くそんな言葉が吐けるな?」

「ひ、ヒイ……………!!?」

その言葉が聞こえたのか、男性はそのA I Sの胸倉を掴み上げて持ち上げその顔を近付ける。男と言う者、然も女尊男卑が罷り通っていた世界の男性達と違い高圧的な人格と相対した事が無かった為に萎縮してしまう。

「良いだろう。そんなにI Sが欲しいのならば、特別にI S討伐作戦をくれてやろう」

I S討伐。A I Sの惨状は嫌でも理解している。粗末な武器で敵と戦わされる。粗末な武器で何とか戦い、生き延びた。しかし、それは相手がエインヘリヤルと言う存在で動きも単調だったから。

「……………I Sが大好きなのだろう? ならば当然、作戦成功は確実だよな? ……失敗した場合、貴様は用済みで処刑だ」

「……………そ、そんな…!!?」

——…処刑って、あの2人も処刑されるとか言われていたわね…。私達にも容赦無く降り掛かる…か。

生身でISの相手をしろ。

ISがどんな存在か、彼女は片鱗たりとも理解している。シールドバリア、絶対防御の存在の2段階構造…既存の兵器を有象無象に追いやった存在。事実上、彼女に対して死刑宣告であった。

「持つて行け。先日ISが確認された区域に投入しろ。処理出来れば上々、出来なければ処刑しろ」

「はっ!!?」

「い、嫌アアア!!? 死にたくない、死にたくない!!?」

「貴様に拒否権など無い!!? 我々の言われた通りにISを討伐すれば良い、貴様は人間では無くA I Sで兵器だ!!? 人間扱いされると思うな!!?」

地面に投げ捨てられ、別の男性達に掴まれ連行されるA I S。嫌だ嫌だと叫ぶも、恫喝されながら引き摺られ作戦区域へと連行されて行った。ナノマシンの存在がある故に逃亡を企てても爆殺されるのがオチだろう。

「…：フン。要らぬ時間を取った。貴様ら、何をボサつとしている!!? さっさと立て!!? それとも此処で今すぐに処分してやろうか!??」

先程の光景を見て放心していたが、罵倒された事で我に振り返るに堪えつつ立ち上がる。

「それで良い。さあ、歩け!!?」

口答えすればどんな目に遭わされるか分からない。いや、先程の彼女みたいに機嫌を損ねれば死刑宣告されるかも知れない。ISや女性有利の風潮が塵芥でその加護も無い為、A I Sとされた彼女達は服従する以外に生き延びる道は無い。

傷付いた身体を引き摺り1人、また1人と埼玉コミュニティの中へと向けて歩き出す。

——…今に見てなさいよ。いつか、必ず…自由を勝ち取ってや

るわ。

「ほう……？ 如何やらたつた今から教育が必要らしいな？ 良い度胸だと言ってやろう」

「……むぐ？むぐううう？！」

——ちよつと、何するのよ!!？

鈴音の態度に対して先頭に行く上官の男性はそう判断して、トレードマークであったツインテールの片方を掴む。

「私はコード・R18を別件で持つて行く。お前達は、他のAISを牢獄へ放り込んでおいた後に来ると良い、実に良い見せ物が見られるぞ？」

男性は部下達に指示を飛ばした後、鈴音の髪を掴んで引っ張る。

「むぐう?!? うぐうう?!?」

「フン、人間の言葉も喋れん程の低脳に成り下がったな。まあ、耳くらは機能するから問題は無いな」

——何処へ連れて行くつもりよ?!? 髪を、引っ張るなツ!!?

男性は鈴音をある場所へと連行する。その先にあるのは……。

A I Sは正しい用法での御使用を

——何よ、コレ……？

R 1 8が連れて行かれた先、其処はコミュニティ内にある公衆便所であった。牢獄やその近辺はの晒しの地面や錆び付いた光景が広がっていたが、内部に行けば行く程、清潔感に満たされて行く様である。A I Sの生活する環境とは大違いと言える。

——何を、されるって言うのよ……?!?!

連れて来られた場所、薄々は理解してしまう。

「我々は貴様らA I Sと違って弱い男性だから……。埃塗れや劣悪な環境では生きて行けないのだ。

最も菌類が繁殖しやすい公衆便所も常に清潔で無くてはならないから、常に意識せねばならん」

逆を言えばA I Sならばどんな劣悪な環境でも生き延びられると言う常識がこの世界で罷り通つていけると言う事に繋がる。

公衆便所の奥に少しだけ広い仕切りが存在していた。その中を見せられた時、R 1 8は思わず絶句した。

看板の様な構造、板には穴が3つ。中央が少し大きく左右が小さい。境目に南京錠が付けられているのが見える。晒し台と呼ばれる、見せしめの台座であった。此処に拘束されれば逃げる事は出来ない。

「悦べ、R 1 8。貴様はコレから作戦行動中以外は公衆肉便器として設置する。何、1 0 0 0回犯ればその反抗的な目付きもマシにはなるだろう」

「ツッ……」

A I Sは前提として対I Sの戦闘員であるが他にも娯楽道具や肉欲解消の為の性奴隷、肉便器としても使用される。ただ、肉便器として使用する時には管理法で定められた条件をパスしなければならぬ。

その中で特に厳しく定められているのがコミュニティ内で隔離場所を限定する事。コレは感染症やその他のモラルハザードによるコ

ミニニテイの秩序崩壊の防止の為。

仮に適当な場所で行った時、もし来客等の目に留まると不都合が生じる事が要因であった。

——に、肉便器って……私、まだ処女だって言うのに!!?」

「無論、A I Sである貴様に拒否権は無い。口も膣内と肛門にもな」

「んん、ッ!!?」

「おっと、逃げるな!!? 貴様の態度は本当に気に入らん、大人しくしろ!!?」

髪を引つ張られた後に壁に思い切り叩き付けられ出血する。頭に衝撃が走り意識が一瞬、飛びかけた。

「……………ッ!!?」

その後も何度も壁に叩き付けたり殴ったりして意識が朦朧となり抵抗が弱くなった時を見計らいR 1 8の首を晒し台の下板に付けた。其処で腕の枷が外した後に頭の左右に手首が置いた後、上の板が被されて南京錠で施錠する。

「ッ!!? ツ!!?」

晒し台に拘束された事に気付いたR 1 8は暴れるが、晒し台はビクともしない。代わりにマスクギャグの蓋が開けられる。R 1 8に付けられたマスクは開口マスクと呼ばれ、リングが嵌められて噛む事が出来ない様にされているのである。

「おごがああああああ!!?」

開口器の所為で言葉にならない呻き声を発するも内容は理解不能だ。

「ふむ。売女に相応しい姿だな。貴様らA I Sに服など勿体無いが……せめての慈悲だ。エストレヤで着せられた服は其の儘にしてやろう。その方がより屈辱的であろう?」

公衆便所で肉便器。つまり、コレからは便所の代わりとしてR 1 8は犯される事となる。

「安心しろ。先程も言った通り、我々は弱いからな。不潔な環境ではとても生きて行けない。使用後には常に洗浄をしてやる。仮にも貴様は我が埼玉ミニニテイの備品なのだから」

その時、複数の音が聞こえて来る。

「パイセンく。来ましたよ〜」

「やっぱりコード：R18を肉便器処分にしたんすか〜?」

「久しぶりの肉便器型AISですね。貧相な体付きっすけど、それはそれでアリですね」

公衆便所に入って来たのは複数人の男性達。何もこの男性の部下達である。上司と部下の関係だが、意外にもフランクな関係の様である。

「おう、お前達。待っていたぞ。ちゃんと他のAIS共は牢獄に放り込んだか?」

「勿論っすよ。アイツら他のAISと違って喧しいわ、反抗的で面倒っすよ」

「訳の分からない事ばかりでしたから、ちよつと顔面蹴りましたわ」

「まあ、直に自分の態度が如何に愚かであるか理解するさ。このコード：R18だがお前達、好きに使え。特にコイツは連中のリーダー格らしいからな、リーダーが潰れば奴らも抵抗力を無くすだろう。壊すつもりで使って構わん。」

私は残っている事務作業があるから、失礼しよう」

男性は部下達の咆哮と、R18の悲鳴を背に公衆便所を後にしたのだった。

「んぐおおおああアアア!!?!? おぶぐおおおああ!!?!?

R18が肉便器として公衆便所に設置されてから数時間後。公衆便所内では言葉にならない喘ぎ声が響いていた。

「おらおらッ!!? ちゃんと舌を使え!!? AISの分際で水分補給させてやるんだから、ちゃんと与えられた仕事はやれ!!?」

「おぶぐおおおむぐうおおお!!?!?」

——臭い臭い臭いッ!!? 男の精液臭いって!!?

開口マスクを嵌められて故に口の中に突っ込まれた肉棒を噛む事が出来ずに喉元奥まで突っ込まれ鼻腔に悪臭が注ぎ込まれる。

「小さい割には締まりが良いな!!? ほら、さつさとイかせてやるよ!!?」

「んぐツ!?? ぶぐこふうお!??」

——前と後ろからダブルでエエエエエエエエ!??

この公衆便所は2ヶ所の公衆便所が重なる構造となっている。R18が設置された個室便所は後方からも扉となつて開く構造となっている。その為、前では口で、後ろからは肛門から犯される構図となっている。

「おら、出すぞ!!? 全部飲み込めツ!!?」

「むぐゴオオオオオオオオ!!?!!?」

肉棒の付け根まで咥えさせられ喉に直接、精液が噴出され一気に喉を通り胃へと注ぎ込まれて行く。粘り気のある精液が喉全体に張り付き、呼吸し辛く鼻から白い白濁とした液体が吐き出される。

「こつちも出すぞ!!? 果てちまいなツ!!?」

「ぶぐごお、おオオオオオオオ!!?」

更に続けて後ろからも肉棒に突かれて接合部から精液と愛液が零れ落ちて、床を便所内の汚して行く。

「ぶぐごおー……むぐごおー……えッほ、えぼお……!!?」

——……イツた、あと、何回……イカされる、の……?

絶頂を迎えた後、肉棒が離され口の中に残っていた精液を吐き溢す。肉便器型A I Sの使用において1人当たり使用時間が決められているのだ。1人が長時間独占してはならないと、管理法で定められている。

「おいおい、溢すんじゃないよ。公衆便所は綺麗に使わなきゃ行けないって言うのによお!!?」

「おぶおろろろ!!?!!?」

公衆肉便器設置場には備え付けの蛇口及び放水チューブがあり、それを使いR18の顔や身体に付いた精液や汗を洗い落とす。肉便器として使っている以上、次の人が気持ちよく使える様に配慮する事は当然なのである。

「へへっ、次は俺だな。コード・R18。お前らA I Sは俺達とちがつ

て最強なんだろう？ このコミュニティ全員相手しても余裕だろう？ 何せ、あと数十人以上が使用待ちで待っているんだからな」

そう言うや否や、次の男性の肉棒がR18の口の中に突っ込まれる。休む暇など与えられない、AISには人権は無い。そしてR18は公衆肉便器として男性達の相手をしなければならぬ。

「ほらほら、前ばかりに興味を持たれては困りますよ？ 後ろもしっかりとご奉仕して貰わないと。貴方達の様な存在の所為で、世界は滅茶苦茶になったのですから」

後ろに来た優男風の男性が取り出した肉棒は極太と呼ばれる代物だった。それが一息に一気に奥まで突き刺し子宮口に龟头が激突した。

「むぐ、うぐぐぐツ!? いぐぐ、いぐおおおお!?」

——そ、そんなの知らない、イク!!? イカされりゆうううう!!? 頭、白くなりゆううう!!?

「おっと、私も少しくらい慈悲はあります。クリトリスはこの辺りでしょうか?」

後ろの男性が取り出したのは毛筆。今となつては余り使い道が無いが、こう言う時には用途はあった。

「ツツツツツ!!?」

——な、何コレ……!? 嘘、き、気持ち……良い……!?

「おや、やはり弱点ですかね? 皆さん、此処が弱いようですよ?」

そして、入れ替わり入れ替わり肉棒を前や後ろから突き刺され、絶頂を繰り返して行く。腹に大量の精液を流し込まれ小腸を通り大腸を経て排泄……全身、肉体中身まで男性の精液に浸されて行く。前と後ろからの快樂の波に意識が飲み込まれ、更に時間が経過した。

「コード：R18。起きろ」

「ぶふおおあ!?」

大量の水を叩きつけられ、意識が朦朧としながら覚醒した。視界の

目の前には自分をこの肉便器へと追い落としした上官の男性が立っていた。

あれから何時間経過したかは分からない。ただ、何回も何回も犯された為に時間の感覚はもはや分からなかった。ただ、全身の身体が凄く怠いと言う事だけは意識が朦朧としながらも分かる。

「貴様の様なA I Sが気絶や睡眠が許されると思うなよ」

「……………うあ」

「まだ寝ぼけているか。さっさと起きろ、肉便器!!?」

そう叱責と共に頬を叩かれる。その衝撃でまた意識が飛びかけた。

「う、ううう……………」

「仕事だ。今回は遠出となる。指定区域内で有用な物資があると言う情報が入った。貴様を始めとしたA I Sにその回収をして貰う。無論、エインヘリヤルの出没が確認されている。その知能指数が下から数えた方が早い低脳でも理解したか?」

肉便器とは言えA I Sとしての本分は果たさねばならない。それが、彼女達の生きる目的だからだ。

「うえああ……………」

「ふん、マトモに人語すら喋れんか。まあ、良い……………臭くて敵わんから、念入りに洗浄してから投入してやる」

エンジントラブル

それは唐突に発生した。

「んにゅ!?」

エストレヤは現在、東京コミュニティに向けて航行中。突如、艦内全体を揺るがす震動が発生した。

その時、自分達の部屋のベッドで転寝していたウイキッドが突如、吹っ飛び天井に激突した。

「ウイキッドちゃん!? 何が起こっているの!?」

ウイキッドは小柄な為か体重がとても軽い。その為、普通の人よりも吹き飛びやすい。その為、先程の地震染みた震動で真上に吹っ飛び天井に激突したのである。

「ううう……」

天井にぶつかつた後に其の儘、軽い音を立ててベットに落下した為に2次被害は無かつた。

「……こんなに激しく揺れるなんて。埼玉コミュニティに居た時も、何回か地震って言う現象が起こつたわね」

「ううう、痛い……」

——うにや……。ほしが見える……。

「だあああ、クソがツ!!? メインエンジンが故障しやがった!!?」

何処か遠くで紫の怒号の様な咆哮が聞こえて来る。どうやら何かしらのトラブルが発生したらしい。

「……………」

思わず顔を見合わせるウイキッドとオトウール。紫とは協力関係となつて日はまだ浅いが、普段の様子の子のイメージから冷静な性格だと考えていたが、あんな感じに取り乱す事もあるのかと邪推した。

「様子、見に行く?」

「そうね……。何か出来る事があれば良いけれど」

ウイキッドは激突した際の痛み故に頭を押さえつつオトウールと一緒に部屋を出て艦体中枢部に向かう。エストレヤの中枢部には動

力源たるメインエンジンがあり、航行するに必要な設備が備わっているエンジンルームがある。

其処で紫とメサルティム、そしてもう1人、スピカが悩ましい表情で立っていた。

「……ん、ああウィキッド嬢とオトウール嬢か。済まん、強烈な揺れで驚かせたな」

「うー、飛んだ」

紫が2人の姿を認めてそう言うと、ウィキッドは簡潔に状況を口にした。ウィキッドの体は小さく突風が吹けば吹き飛ばされそうだと考えたので、文字通り部屋内で吹っ飛んだんだろうと脳裏にその光景が過った？

「……何があつたの？」

「ああ。エストレヤのメインエンジンが故障しちゃった。状況柄、メンテナンスの機会が中々取れずに結構無理していたからな……。遂に、限界を迎えちゃった」

——あ、そう言えば……埼玉コミュニティの跡地に行った時、過去に大きな損害を受けたとか何とか言っていたような……。

「……こしょう、するとどうなるの？」

「エストレヤ自体、移動出来なくなるって事だ。修理とかイカれちゃった部品を交換しようにも残念ながら予備が無えのが現状だ」

エストレヤは過去に受けた損害のダメージを引き摺っている状態。他の部屋も修理が手付かずのまま放置せざるを得ない状態である。

「……成程、つまり私達が外で何かしら使えそうなモノを回収してくれば良いのね？」

「流石、オトウール嬢。聴くて何よりだ。今まさにそれを言おうとしていた。現状、エストレヤは航行出来ない、この状況下ではエインヘリヤル共に集られては修理云々の状況では無くなっちゃう。」

よって、AISである2人には周囲のエインヘリヤルを掃討しつつ安全確保、そして使えそうな代物を片っ端から回収して欲しい」

紫から『命令』と言う形でそう言う要請が出された。自分達が出る事はそれ位しか無い。勿論、その状況に受け入れはしている。

「……ただ、済まないがA I Sスーツに関してはまだ用意出来ない」

「……それは仕方ないわ」

「うにっ」

「……此方でも現状出来る範囲で修理を進めておく。こんな所で立ち往生している暇は無いからな」

紫としても此処で時間が潰される訳には行かない。やらねばならない事が山程あるからだ。

「ウイキ姫ちゃん、直ぐに出発しましょう」

「うにーっ」

——そう言えば、埼玉コミュニティの周辺しか見た事無かった。……見た事無い光景が見える?のかな。

○

エストレヤから出撃したウイキッドとオトウール。降り立った先に見えたのは長年のI Sとの生存競争にて廃墟と化した街並みの光景が広がっていた。コレまで見た事があったのは度重なる戦闘により建物が殆ど崩壊して荒野同然となった大地だ。

だが、それでも原型を留めずに完全に倒壊してしまい全貌が分からなくなつた場所も多く見える。

「建物がいっぱいある……」

「埼玉コミュニティ周辺は、エインヘリヤルとの戦闘で荒地になつていたからね。この周辺ではエインヘリヤルは居ないのかしら……?」

——……変な形の建物が見える……。

『あー、テストス。お二人とも、聞こえますか?スピカです!!?』

「うに、聞こえる〜」

「ええ、問題無いわ」

其処でエストレヤのオペレーター、スピカからの通信が入った。『感度良好。システムオールグリーン。別電源にして正解でした。あ、此方の話です。』

では、今作戦の趣旨の確認を行います。本作戦はオーナーの要請で、該当地域での討伐任務及び探索任務となります』

前回と同じ様に2人の外出目的の確認を行う。如何やらエストレヤにおけるルーティンの様だ。間違いは無い。

『現在、エストレヤはエンジントラブルにより航行出来ません。故にエインヘリヤルがエストレヤに接近すると大変危険な状態になります。』

ですので発見したエインヘリヤルは速やかに排除して下さい。……ただ、オーナーの言う通りまだお二人のA I Sスーツが用意出来ません……」

「……分かっているわ。極力、無理はしない様にする」
「うに……」

普通の布製で戦闘用に用意された服装では無いので被弾は避けた
い所。

——……エストレヤが無くなると、私達、行き場が無くなっちゃう。そうなれば、自分達はまた何処かのコミュニティに回収されてしま
う。

埼玉コミュニティでの扱われ方は酷かったが、他のコミュニティでのA I Sの扱いは大体同じ……。つまり隷属的な支配に置かれる事を意味する。しかも今度は、バラバラにされてしまう可能性もある。故にエストレヤが壊滅するのだけは絶対に許してはならない。

『お二人の出撃方向の反対側から襲来してきた場合は、此方で何とか
します』

「……大丈夫なの？」

『I S以上の相手は確かに厳しいですが、エインヘリヤル程度ならば如何にかなります』

スピカは素直にそう認める。I Sのシールドバリアや絶対防御の

存在はそれ程までに理不尽なモノだ。

『そして、回収物資に関してですが……メインエンジンの修理にはやはり鋼材で加工された部品類が必須です。耐久性があつてメインエンジンの各所、部品に代替可能な構造の部品が見つかる可能性は低いでしょう。』

ですが、鋼材であればその場で加工して作れると思います』

「えっと……」

『あ、すみません。一先ず『ホームセンター』と読める看板がある建物を探してください。恐らく何処かにある筈です』

目的地を指示された。『ホームセンター』と呼ばれる場所を探せば良いらしい。

「……ほーむせんたー?」

『其処にならオーナーが求めている物資があるかも知れません。見つけたら別途指示を出します』

「……分かったわ。取り敢えず、その場所を目指しつつエインヘリヤルを倒して行くわ」

まだ理解が出来ないウィキッドの代わりにオトウールがそう返答を返した。

『はい、では作戦開始。くれぐれも周りには注意して作戦を遂行してください。……方が一の話ですけど、ヴォルヴァ種が現れた場合……自分の身を優先して下さい』

「……こんな所に現れるモノなの?」

本当に方が一の話である。

『ヴォルヴァ種の行動パターンは未解明な部分が多いです。しかし、貴方達が見た白いヴォルヴァ『ヒム』以外にもヴォルヴァ種と見られるISは存在しています』

——うー、他にもいるの……?」

その話を聞いてウィキッドは嫌そうな顔をした。ヒムに圧倒された事実もあるが……あのレベルのISが他にも存在するとなると精神的に億劫にもなる。

「……出来れば会いたく無いわね」

『はい。もし此方のレーダーで感知した場合、速やかにお知らせします』

出来れば現れないで欲しい所であるが、今考えても仕方ない。

「……お願いするわ。ウイキ姫ちゃん、行きましよう」

「うん」

墟街航行

「……コレは植物、かしら？　此処まで大きくなるモノなのね」
「うにー」

廃墟と化した街並み。その街では多種多様の植物が青々と生い茂っている。埼玉コミュニティ周辺では都市群であつても酷く荒れ果てていた為に荒野が広がっていたが、この近辺では雑草を始めとした植物が悠々と成長していた。

『あ、埼玉コミュニティ近辺はエインヘリヤルの戦闘が多くその影響か土地が痩せてしまい植物が育ち難い土壌と化していたので、植物は余り見た事が無いのですね』

「うん、土と瓦礫ばかり……」

仕事で駆り出された時は戦闘でそんな余裕は無かつたし、その傍で空腹に耐えかねて食糧（虫）を漁るか、それ以外では牢獄か私刑だけだった為に周りに気を配る暇は無かつた。

『外の世界を知る事は貴方達にとって良い方向に向かう事でしょう。』

あ、くれぐれもエインヘリヤルに不意打ちされない様に気を付けてくださいね？　仮にもコミュニティ以外は危険地帯なのですから』
「ええ、そうね」

アスファルトが割れ下の土が露出している道路の遊歩道を歩く。信号機は壊れて機能せず、標識等は錆び付いてしまっている。昔は人の往来があつてであろうが、今となってはISやその配下であるエインヘリヤルが跋扈する世界故に、ゴーストタウンと化している。此処以外の都市や町もそうである。

「オト姉、オト姉。アレ、なにに？」

探索が進む中、ウィキッドはあるモノに注目した。その視線の先には廃墟と道路を区切る崩れかけた塀の前に佇む赤いカラーリングの長方形の物体だ。窓硝子の先には様々なカラーリングの小物が並んでいるのが見える。その下には数字が書かれボタンらしきモノが配

置されている。

——……小さいモノ？ 爆弾？が並んでる。

「何かしら、コレ……？」

『あ、コレは自動販売機と呼ばれるモノです。投入口にお金の硬貨を入れて飲料水を購入出来る機械……と言えば良いでしょうか。『無限革命』が起こる以前ではありふれたモノです。しかし、今となっては大半が壊れています』

「ていつ!!？」

スピカの解説の最中にウィキッドは量子変換で自身の得物である鋸を展開するや否や振りかぶつてのフルスイングで自動販売機に叩き付けた。長い間、風雨に晒され続け老朽化が続いていたのか、自動販売機はミキイと言う音を立てて挽き裂かれた。その破壊された箇所からポロポロと中に残されていた缶が次々と落ちて来る。外から見えていた色合いと同じモノばかりだ。

「出てきたー」

『……あはは、気になるモノは壊してみると言う認識なのでしょうか』
ウィキッドの行動にスピカはやや呆れた様な声音で嘆息した。何かの拍子でエストレヤ内で壊さないか注意が必要と脳裏に過った。

「……中に液体が入っているのかしら？ 見た事が無い形、ね」

足元に転がってきた缶を拾い上げてオトウールはその物体を観察する。表面には細かい字が多数書かれている（大半が漢字故にまだ読めない字が多い）。そして1番目立つのが『オレンジジュース100%』と言う文字が大きく書かれている。底の面にも数字らしき物が書かれており、上の面には奇妙な形の出っ張りが見えた。

『あ、それは缶と呼ばれる形状です。自動販売機にて販売されているモノは全て飲料水です。……しかし、お二方が見つけたソレらを口にするのはお勧めしません。既に賞味期限が切れており、飲めばお腹を壊してしまいます』

製造されてから既に30年以上、経過している。エストレヤとしても2人をそんなくならない理由で死亡するだなんて認められない。

「……そもそも如何やって飲めば良いのか自体、分からないのだけど

ね。ウイキ姫ちゃん、コレ、食べられないそうよ?」

「うー……」

『コミュニティ以外では食糧の調達は非常に困難です……こと、人の手で加工されたモノならば尚更です』

「……………それも、そうね」

壊した自動販売機を後にして更に奥へと進む。時折、道路が派手に割れていて地下の排水管が露出していたり、塀や建物の壁が壊れて瓦礫の山と化している箇所も見受けられる。

その程度の障害ならば普通に乗り越えられる為に気にせず直進して行く。

「……………エインヘリヤルは居ないみたいね。……………戦闘するつもりで進んでいるけれど」

代わりに既に死んでから風雨に晒され白骨化した骸は時々見かける。エインヘリヤルやISに襲われて死亡したのか、或いは餓死したのかは分からないが。

「……………うにー」

『エストレヤ周辺にもエインヘリヤルの出現は確認されていません。この近辺には居ないのかも知れませんが……。エンジントラブルの最中、不幸中の幸いでしょうか』

「……………もつと、彼方此方に一杯居ると思ってた」

埼玉コミュニティでは外に出される時は大体がエインヘリヤルとの戦闘だった。その為、外に出ればエインヘリヤルが犇めいているのだと考えていた。

『……………確かに世界はISとエインヘリヤルで溢れています。しかし、生命の生活圏には偏りが生まれてしまうのは歴史が証明しているのです。』

この日本と呼ばれた頃が久しいこの国でも地域によつて人口に偏りが生まれていました。都市部には人が集中し、地方では過疎化が進む……………。

それらを踏まえて考えると……。ISは自己進化をし続けています。つまり……………』

「……ISにとって価値のある場所に集まる、と言う事？」

『メサルの教育の賜物ですね。姉として鼻が高いです!!? はい、中央政府が発表した見解ではその可能性があると明言しています。つまり、この地域はISにとって価値が低い場所と言えるかも知れません』

「……なら、少なくとも今は安全、って事？」

『はい。……ですが、必ずしもそうは言い切れないのも実情です。安全……と言うのも今だけかも知れません』

「……そんなに都合良くはならない、か。気休め程度に考えておくわ
「あ」

ウイキッドが何かが動いたのを感知した。視界の隅、木の枝葉に紛れて何かが見えた。

「オト姉、居た」

「ツ!!? エインヘリヤル……!!?」

曲がり角から歩いて来たのはスパークした状態の機械腕で這いずる形で歩くエインヘリヤルだった。呻き声を上げながら徘徊している様にも見える。

『アレ!??もしかしくなくてもフラグでした!??』

スピカは慌ててレーダーを確認。微弱な反応であり思わず見逃す所でもあった。

「倒す……!!?」

スピカの慌てた反応を他所に見つけるや否やウイキッドは跳び跳ねてノコギリを振りかぶってエインヘリヤルに襲撃をかけたのだった。

冷裏一体

——この世界に来て何日くらい経過したか。凡そ、1、2週間くらいか……相変わらず、こう言う空気には慣れんな。

埼玉コミユニティに取り入ったラウラ。その為、他の者達とは異なり一先ず申し訳なさ程度には自分の立場を確保は出来た。その代償として虫唾が走る光景を何度も目の当たりにする羽目になったが。

弱者兼兵器として酷使されるA I S達の扱いは酷いモノであり、拷問、体罰や無茶な作戦決行は当たり前であった。それらが曲がりなりにもクラスメイトや知人が対象であれば、多少なれど憤慨したくもなる。が、堪えねばならない場面ばかりであった。

そんな日々が数日経過した時、ラウラは自分達を見つけたA I Sの2人が悪趣味染みたショー紛いの処刑場を見せられていた時、それは発生した。

『ヴォルヴァ』と呼ばれる数あるI Sの中でも上位に君臨する存在が突如として襲撃して来たのだ。その光景に埼玉コミユニティの動きは早かった、A I S達を囿に使うて自分達は早々に避難したのだ。

その時、ラウラは何とか対応したかったが、自身のI Sを使用するのはコミユニティ側にバレてしまう恐れがあった。そう慣れば自身に秘める思惑が破綻する為に出来ず、他の職員達に連れられる形で該当コミユニティを離脱し、別のコミユニティに避難した。

ヴォルヴァの襲来により囿役や置き去りにされたA I S達は多数、死亡しその中にはI S学園の生徒のA I Sも含まれていた。

その後、避難した職員やオーナーは避難先である埼玉コミユニティP3にて再編する形で編入しラウラも避難先のコミユニティP3に在籍する事となった。

——此処、埼玉コミユニティP3に来て知ったが……。我々が初めて埼玉コミユニティ……P2だったか、来た時に脱走事件が発生したらしい。脱走者はI S学園の生徒達。

ラウラはコミュニティ内の休憩室にて瞑目し情報を整理する。現時点で多少の柵はあれど自由に動けるのは自分だけだ。自分が動かなければ、知人やクラスメイトは使い潰されるのは明白。

——私がコミュニティの人間に取り入っている間、IS学園の生徒達をAISとして拘束しようとした時、半数以上が激しい抵抗を見せたらしい。

仮に私も其処に居たらそんな扱いを受けるくらいならば暴れて逃げる選択を取るから、理に適っている。

暴れ出した者の名前は分かる筈は無いが大凡、予想は出来る。大方、専用機持ちと教師であるラウラの恩師の織斑 千冬、そして副担任の山田 真耶だろう。

専用機持ちや教師達が暴れている間に一般生徒達の逃亡幫助した……。その時の光景は分からない為に確信は出来ないが半数以上は逃亡に成功して欲しい所である。

コミュニティ内では名前ではなく監獄の様に管理番号呼びである為に白地にラウラ自身は遠ざけられていた為に生徒本人か特定が出来なかった。

——ただ、此処に来てから数日後、件の襲来事件で生き残っていたAISを別のコミュニティが保護し埼玉コミュニティへAISが返還されると訊いた時、嫌な予感がした。

そして、埼玉コミュニティ内へ連行されて行くAIS達を見て確信した。IS学園の生徒達だ、と。その時、看守共の罵声は覚えている。

態度が目に残ると言う事で更に厳重な拘束が施された上に、その保護した別コミュニティから苦情が寄せられ更に厳しい管理体制が取られる事となった。

そして、1番の懸念は鈴音だ。ラウラが把握している中で埼玉コミュニティが所有するAISにされた専用機持ちは彼女だけ。鈴音の性格は分かっている……。その結果、彼女は公衆肉便器型AISにされた。

並のAISの時点で自由は全く無いが、それでも牢獄で雀の涙程ではあるが休める。だが、肉便器として扱われているAISは保管場所

がコミュニティ内の公衆便所となり、性処理の肉便器として扱われる事となる。その時点で扱いの差があると云えるだろう。

——…その時の鈴を見た時は酷いモノだった。完全にやり捨てられた様な状態だった。

それでもA I Sである以上、兵器として使われる。肉便器として使われた後に戦場に放り出される。疲弊しても休める時間は与えられず其の儘、戦場へ……。もはや、死ぬと言っている様なモノなのだが、コミュニティとしては『A I Sは性奴隷の様に扱えば回復する。故に何も問題無い』と言うラウラからすれば理解出来ない理論が罷り通っている。女尊男卑の反動は何から何まで大きく跳ね返って来ている事が分かる。

「……………」

——回想はこの辺で良いだろう。……だが、結局の所、把握済みの中で何人生き残っているかが気掛かりだ。鈴も肉便器として扱われている以上、何処まで持ち堪えられるか分からない。いや、流石の彼女でも限界はある……。

人類の活動圏はコミュニティだ。……だが、A I Sとして使われている者達に人権は無い。だがコミュニティの外はI Sやエインヘリヤルの存在により安全圏は皆無とされている。

……ラウラとしてはコミュニティ以外にI S等の襲撃を避けて生活している集落があっても不思議では無いとは考えているが……現状を鑑みれば確証は持てず推測の域が出ない。そして、コミュニティではA I Sに立場は無い。いや、この世界を創った女性に立場はほぼ無いに等しい。

まず、A I S達に遠隔操作で起爆させられるナノマシンが打たれている。見た所、流石にコミュニティ内で起爆したと言う話は聞かない。……が、敵前逃亡等が発覚すれば容赦無く爆殺……。故に作戦中に逃亡……と言う手が使えない事になる。コレが1番、大きな痛手と言えた。コレをどうにかしなければ……。

「ボードール、居るか？」

休憩室の扉が開かれて1人の男性が入ってくる。このコミュニ

テイにおいてA I Sの管理する部門の上官に当たる。ラウラは速やかに席を立つて敬礼した。

「ハッ!!？」

ボードールと言うのは、ラウラがコミュニケーションに取り入る際に使った偽名だ。……ただ、本名を使うのは拙いと考えた末に咄嗟に思いついた。

「次の作戦、コード：R 18以下、複数のA I Sを作戦区域に投入して来い。お前にも運送任務をして貰おうと考えてな。そろそろこの埼玉コミュニティに慣れて来た事だろうから警備以外の仕事をして貰うつもりだ」

「！」

A I Sが作戦に投入される際、車両を使って作戦区域に運送する。だが、この任務は死亡率が高い傾向にある。理由は勿論、A I Sを送る都合上、エインヘリヤルやもしくはI Sが出現した区域間近にまで接近しなければならぬ。運が悪いと遭遇して襲われる可能性がある。

その為、車両は運転する者はA I Sを速やかに下ろして危険区域から離脱しなければならない。また、回収する時も迅速な行動が求められる。

それだけでは無い、A I Sは対I Sへの兵器ではあるが、学も無ければ女尊男卑の無能さばかりある連中……仕事の効率は酷い為に討伐に時間が掛かる。A I Sは無能ばかり、その間にも安全圏を見つけ自分が生き残らなければならぬ危険な任務でもある。

なら、降ろした後コミュニケーションに即一時帰還……と言いたいが、仮にも腐っても芥でもどうしようもない屑であってもA I Sはコミュニケーションの資産だ。迅速に回収して管理しなければならない。

「……本来ならばベテランの奴に同席し仕事の内容を学べる体制を取りたいのだが、我々も人手が足りていないのが現実だ。……初めてやる作業である事は承知だがお前1人で運送任務をこなして貰う。コレばかりはすまん」

「了解しました。無事、やり遂げて見せます」

「……そうか。今回のA I S共に与える任務は物資回収だ。初任務でありながら少し遠出だ。」

該当区域にエインヘリヤル共の存在は確認されてはいるが、少数との事だ。尚、I Sは確認されていない……」

「上官、質問があります」

「ああ、何だ？」

「運送時、進行ルート上にエインヘリヤルが居た場合は？」

「基本的に事前のレーダーで極力エインヘリヤル等が確認されていない区域を通過するルートを提示する。……方が一、運送中に目視で確認した場合は極力見つからない様に回避を優先しろ。A I Sを積んでいるとは言え、拘束具を外す手間があるからな」

「分かりました」

「他に無いな？なら10分後に車両庫に来るんだ」

「ハッ!!？」

上官の男性はそう言い、休憩室から立ち去って行った。

「……」

——……理由は分からんがA I Sに接触する形の任務が来たか。今まではコミュニティ内の警備の任務ばかりだったからな……。少なくとも、情報を得られる好機である事に変わりはない筈だ。

「……よし」

——A I Sと連携が取れれば、事態は変わるかも知れんな……。兎も角、今は仕事に専念するでしょう。私が疑われ始めたら全て崩壊する……!!？」

停滞は否定する

「……倒した」

エインヘリヤルを発見。反応される前に頭部を粉碎し、其の儘、胴体を切断した。腕が壊れようが足が吹っ飛ばうが頭が刎ねられようがエインヘリヤルは蠢き続ける。元々、死体に機械を無理矢理繋げた様な見た目なのでマシンゾンビみたいなモノだ。確実に破壊しなければ奇襲される。

「一体だけだったのかしら？……他にエインヘリヤルは？」

『えっと……その1体だけみたいです、はい』

「……………」

オトウールはスピカに無線で他にエインヘリヤルが潜伏していないか聞く。以前、ジャミング仕様の蜘蛛型ISの存在もあり、レーダー云々は余り信用は出来ない。

『すみません。前回の埼玉コミユニティP2跡地の時もそうでしたが、エストレヤのレーダーシステム自体、他のコミユニティから見ても旧式と呼ばれても差し支えない性能なんです。』

それに加えてIS自体、日々進化しているんです。その内、レーダーに反応しない対レーダー完全ステルス型ISやエインヘリヤルが誕生するかも知れません』

「……つまり、レーダーに反応しないISが現れるかも知れない、と言う事？」

『そう、考えて頂ければ……』

「オト姉、オト姉。このエインヘリヤル、ボロボロ……」

——腕自体、壊れてる。それに脚も元から千切れていたみたい……。

「……私達が壊した箇所、じゃないわ。元から？　いえ、私達よりも前の戦闘の時、かしら？」

『……元々、反応が微弱でした。つまり、手負いで沈黙寸前だったのかも知れません』

——だから、あんなにアツサリ死んだんだ……。

「こう言う個体も居るって事みたいね……」

『何処かのコミュニティの作戦での撃破漏れで逃亡に成功した個体かも知れません。しかし、IS側はエインヘリヤルの生産はしませんが、修理すると言う行動は確認されていません』

それは、つまり……。

「使い捨て……と言う事なのね。人間達がAISを使い捨てる様に……。ISもまたエインヘリヤルを使い捨て同然に運用している……」

嫌な共通点である。

人類はIS適性がある女性をAISとして扱って使い捨てる前提。対するISは死んだ男性をエインヘリヤルとして改造し使い捨て兵器として運用している。ただ、違う点と言えば生きてるか死んでるか、そしてIS側は自らも戦闘に加わる場合があると言う事だ。

『ISは人類と敵対してから独自の進化を現在進行形で進んでいきます。今もまた知らない情報が発生しても不思議ではありません』

進化する機械。進化する生物。生存競争の果てに何方が勝るのか……それは分からない。自分達はその渦中に居る事だけは確かである。

「あ、ねえねえ。エインヘリヤルのパーツって使える?」

思考の深みに嵌りかけた時、ウイキッドは壊れたエインヘリヤルを見てオトウールを見てそう言う。

『あ、はい。えっと、ウイキ姫様。もう少し良く見せてください。もうちよつと、左に……あ、逆です逆!!? そうそう』

2人に渡された無線機にはカメラ機能が備わっている特別製の為、エストレヤのオペレーターであるスピカはモニターを通して外界の様子が把握出来る。

『うーん……見た感じ劣化が酷そうですね。耐久性は然程高くは無いと思われれます』

「使えない?」

『……端的に言ってしまうば、そうなりますね』

このエインヘリヤルは機械腕のパーツは劣化が激しく転用しようにも耐久性が乏しく使えた物では無い様だ……。

「そっかー……」

「兎も角、この一体だけじゃ無さそうだし……警戒を……っ。ウイキ姫ちゃん」

オトウールがモーニングスターを構え直して周囲を見渡す。

「ん、何か、いる……？」

ウイキッドも何かの気配を感じ取ったのか、周囲を見渡してみる。割れた道路、折れた標識、朽ちた信号機、生い茂る雑草や街路樹。その内、遠くの曲がり角付近で何かが動いた様子が見えた。

『リーダーには、何も反応がありません。……野生動物でしょうか？』

地上では昆虫も居れば犬や猫と言った動物も偶に見かける。……最も死骸となっているパターンも多いが。

「……ッ!!？」

「あ、逃げた」

影が動いた。つまり其処にナニカ居たと言う事。どうやら此方に気付いて逃亡を選択した様だ。

「どうしようかしら？」

エインヘリヤルならば此処で襲って来るだろう。気付かずに素通りしたのか？

『……放置しては後々で窮地に陥るかも知れません。正体を突き止めますよう!!？』

スピカは追撃を指示。ウイキッドとオトウールは同意し、得物を量子変換させ仕舞い身軽になった所で逃げたナニカの方角へと向かう。

「あ、あっただよ!!？」

曲がり角から見えた時、一瞬だけだが脚らしきモノが見えた。交差点を2つ程、通り過ぎた先の曲がり角。

「追いましよう」

更に追い掛ける。又しても曲がり角を抜けた一瞬だけ見えた。肌色の足?が一瞬だけ見えた。

——……人間の足?

エインヘリヤルならば両手両脚、機械のパーツに置き換えられている為にその線は無い。だとするならA I S？ いや、それも無い。何故なら自分達は兎も角、A I Sは基本的に首から下を全身を覆い尽くすA I Sスーツに身を包んでいる。肌が露出している場合は大概が性処理道具として扱われている時、くらいしか思いつかない。

『ツ!!？ 前方にエインヘリヤルの反応あり!!？ お二人とも、気を付けてください!!？!』

「きやあ!!?」

スピカの警告と共に、前方から悲鳴が聞こえてくる。更に奥の曲がり角から見えた光景は、袋小路の場所に一体のエインヘリヤル。丁度、大通りと袋小路を封鎖する形で現れた。先程の壊れ掛けとは違い装甲等は大型で人間の肉体の部分とバランスが噛み合っていない様に思える。その奥には恐怖からか腰を抜かして尻餅をついた少女が見えた。

——A I S、じゃない……？ 後、あんなエインヘリヤル見た事無い。

『データに無い新型のエインヘリヤルツ!!？ 一先ず、あのエインヘリヤルを破壊して下さい!!?』

「分かったわ」

「うに……!!?」

新種のエインヘリヤル……。先程、進化の話があった為に何れは起こる事は分かっていた。

だか先ずは目の前のエインヘリヤルを倒す事からだ。幸い、相手は此方に気付いていない。今なら不意打ちを仕掛ける事が出来る。即座に得物を展開した2人はほぼ同時に得物を振るい背後からエインヘリヤルへ強襲を掛けた。

生かす為の優しさ

大型の装甲を持つエインヘリヤル。既存のエインヘリヤルよりも一回り大きい脚部装甲と腕部装甲。対して肉体の方は成人男性の骨格と大差なく、見ようによっては腕と足だけが巨大化した様な形だった。大凡のシルエットは変わらない為に狙うべき箇所も変わらない筈だ。

——確かに装甲は大きい。でも……肉体部分は変わらない。

「オト姉!!?」

「ええ!!?」

装甲の高さの都合上、図体が大きい為。低身長のウイキッドは其の儘では狙いたい箇所を狙えない。ならばやり方を変えれば良い。

合図と共にオトウールはモーニングスターを地面に降ろし、その上にウイキッドが飛び乗った瞬間に振り上げ山なりの曲射弾道で飛ばした。

「えいつ!!?」

跳躍しエインヘリヤルの生身の部分。首筋目掛けて鋸の刃を滑り込ませる。ミチリと言う軋む音を鳴らしながら飛ばされた慣性に従いながら其の儘、刃を突き立て挽き抜く。鋸の刃が通り過ぎた時、その箇所から血が溢れ出す。

「脚を貫くわッ!!?」

同時にオトウールがエインヘリヤルの右の脚部装甲に横からモーニングスターを振るい叩き込む。鈍い音と甲高い音が同時に鳴り、鉄塊が装甲の中へと減り込む。

「一回じゃ、ダメなら何度も叩いてあげるわ!!?」

一度、引き抜きその場で旋回し反対側から殴り反対側から装甲に減り込ませる。

『うあああ……!!?』

攻撃を受け強襲に気付いたエインヘリヤルは呻き声を上げながら腕を振り上げる。狙うは正面に躍り出たウイキッド。大型の腕部装

甲はその大きさの機械の塊だ。質量兵器としてA I Sを叩き潰すのであれば十分な圧碎兵器と言える。

「わっ!!?」

その圧力は堪え切れるものではない。回避を選択して横に避けるが、振り下ろされた衝撃で地面が揺れる。その震動で空中へと跳ね上げられた瞬間、右腕で掴まれてしまう。

「あ……ッ!!?」

——コレ……あぐう……!!?

身体が小さい為に首から下に装甲で挟まれる形になってしまう。逃げ出そうにも腕部の装甲が握り潰す様に圧迫して来る。

「……あ……ッ!!? い、痛い……!!? 締め……あ……う」

——い、痛い……!!? な、何か……刺さつ、ぐる……しい……!!?

元々、エインヘリヤルの装甲は滅茶苦茶で廃材やら適当なモノで乱雑に繋ぎ合わせた場合が多い。その為、腕の装甲と言えど手の指の部分が変な形になっていたりコードが断裂して最初から火花が散っていたりしている。

このエインヘリヤルの装甲も出鱈目上等な配分であり脚部はマシだが、腕部に至っては剥き出しで折れた鉄の棒があった。その一部が、握り潰す内側に出ておりその内の数本がウイキッドの身体を突き刺していた。

「ッ!!? ウイキ姫ちゃん!!? つこの!!? その子を放しなさいッ!!?」

ウイキッドがエインヘリヤルの腕部装甲により握り潰されそうになっている。その事に気付いたオトウールは鋭い目付きで見上げ、怒りによる力任せのフルスイングでモーニングスターを横に振るい2回程、叩き付け脆くなった左側の脚部装甲を打ち抜き破砕する。

『……ぐが、あッ……』

片脚が破壊され姿勢を保てなくなったエインヘリヤルは左側へ傾き左腕を地面に付け支えるも、ウイキッドを掴む右腕はまだ現状を維持して握り続けている。

「しつこいわねッ!!?」

後方から右腕近くへ向い、その場でモーニングスターを地面に突き立て棒高跳びの要領で中空へと跳躍。狙うはウイキッドを掴む腕部装甲と生身のままの二の腕の連結部分。

「ウイキ姫ちゃんを放しなさいッ!!?」

跳躍し、振り上げたモーニングスター。慣性を乗せ振り下ろされた一撃は、肉を引き裂き中の骨を砕き押し折った。

「むぎゆっ!!?」

生身の肉が砕け、分離し制御不能となった右腕装甲が地面に落下。その衝撃で掴まれていたウイキッドが外に放り出され、地面に転がった。

——うう、痛い……!!? お腹に刺さった……。

着ている服が破れているし、突き刺さった箇所から出血し汚れてしまっているが骨は折れていない。このご時世、AISに対して医療施設を使わしてくれる者はいない。骨折なんてしてしまえば即座に囚役なり廃棄処分で死ぬだけだ。

だから、怪我しても痛くとも、動かなきゃいけない。生きたいのであれば……。

『うおおお……!!?』

左脚、右腕を失つてもエインヘリヤルはまだ健在だ。確実に殺すまでは止まらない。右腕を摺り動かす様に振るって来る。巨大な質量、ぶつかるだけでも大きな衝撃なのを言うまでも無い。

「うつつとい」

迫る左腕。ウイキッドも即座に展開させた鋸を地面に突き立って中空へ跳躍し、摺り動かされる左腕の上へと飛び乗った。突き刺さった痕からジクジクと血が出血して漏れているが構っている暇は無い。

「お仕置きよ!!?」

ウイキッドを解放した後、オトウールは速やかにモーニングスターを残る左脚の装甲に叩き付けて行く。両脚を砕けば、動きを止める事が出来る。

『う、あ、あ……!!?』

——頭を、割る。

左腕装甲の上を走り駆け上がり、装甲から生身の連結間際の箇所
に鋸を突き立て更に跳躍して、エインヘリヤルの頭よりも上空へと跳
ぶ。

「叩つ斬る!!?」

空中で縦に回転し勢いを付けながら鋸を大上段でエインヘリヤル
の脳天へと叩き込む。

『え、あ……ッ!!?』

ミキリと死んだ後の為、脆くなっていた頭蓋骨に罅が入るも途中で
鋸が引つ掛かってしまう。

「さっさと、死ね」

ウイキッドは鋸の柄を上から蹴りを入れ無理矢理、真下へと刃を食
い込ませ強引な形で頭を両断させた。断面図から腐敗した脳髓が垂
れ流しにされ地面へと滴り落ちた。

「ウイキ姫ちゃん!!? まだよ!!?」

「ん」

ウイキッドが頭を両断するのとオトウールが脚の装甲を殴り砕く
のはほぼ同時。完全にバランスを崩し頭を両断されたエインヘリヤ
ルが地面に倒れる。だが、まだ死んではない。

『あ……え、あ……!!?』

残った左腕だけとなり、その左腕を乱雑に振るい周辺に叩き付けて
暴れている。もはや、ただその場で悪足掻きをしている様には見え
ない。

「終わりにしましょう」

「ん」

生身の腕の部分を破壊して、文字通り四肢切断の状態にした後、胴
体を滅多打ちにして漸く沈黙した。

「……ふう、地味にしぶといエインヘリヤルだったかしら?」

「最初に胴体を碎けば早かった……」

——頭を狙うよりも其方の方が早いかも、あ……腕と脚が暴れて結
局、面倒かも。

「それよりも、ウイキ姫ちゃん。怪我しているわ……!!?」
「う……」

先程、握られた時に折れた鉄の棒が身体に突き刺さっていた。以前の牢獄生活の時、怪我しても治療なんてされる筈も無いので普通に放置されるが、今は違う。

『お二人とも、ご無事ですか!??』

「一応、新種のエインヘリヤルは撃破はしたわ。でも、ウイキ姫ちゃんが体を貫通する怪我しちゃって……」

無線でスピカと通話しながらオトウールは自分の着ている服の裾を一部破り、ウイキツドの患部に布を巻き付けて止血をする。流石に血を垂れ流しの状態は宜しくない。

『ええ!?? わ、分かりました。医務室の用意を通達しますので、探索を切り上げて下さい!!?』

「……まだ、目的は達成していないわ」

まだエストレヤのメインエンジンを修理する為の資材を見つけていない。

『で、でも……!!?』

「……貴方達が私達を人間扱いしてくれるのは嬉しいわ。……でも、手ぶらで帰る訳には行かないわ。それに、この程度の怪我で逐一、撤退しちやキリが無いわよ?」

「まだ、やれる……!!?」

自分達は『兵器』だ。紫との契約で自分達は此処に居て、そしてエストレヤで自由に動いている。その対価を示し続けなければならぬ。

『ダメです。鼻真目に考えても身体に穴が開く程の負傷を背負ったまま作戦行動は危険だと言わざるを得ません!!?』

如何に快復が早いとは言え、もつとお二人自身、自分の体を考えて下さい。それから前回に言いましたよね? 作戦続行不可能と判断したら速やかに帰投する様にと!!?』

「……………」

『そもそも探索任務と言うのは1回目です。全ての目標を達成出来る程、

簡単ではありません。不測の事態が発生するであろう事は多々あり、何回も繰り返し出て出撃し周辺を探查して初めて達成出来るモノです。幸い、エインヘリヤルは撃破しました。成果としては充分と言えます』

「……」

『ですから、今回の任務は終了を通過!!? 速やかに帰投して下さい。医務室を開けておきますので、早く帰って来て下さい!!?』

スピカに任務終了を通過される。こうなれば作戦は終了となり帰投する。指示には従わなくてはならない。

「……オト姉、帰ろう」

「……そうね。帰って来いと言われちゃ、帰るしか無いわね」

今迄は危険だから中断と言う指示は無かった。どれだけ危険な状態でも達成しろと言う命令ばかりだったから尚更と言える。AISとして成功すれば生きる、失敗すれば殺される。それだけの価値しか無かった。

「……オト姉、あの……アレは?」

「……」

周囲を見渡す、エインヘリヤルの死骸と壊れた巨大な装甲に衝撃で崩れた壁。此処でエインヘリヤルと遭遇するキツカケとなったであろう人間の姿は無い。瓦礫に潰されたか、或いは自分達が交戦中に逃げ出したか、今となっては知る術は無い。

「……今、考えても仕方ないわ。コミュニティ外で生きる人間達も、居ない訳じゃないし」

最もその生活は過酷だろう。AISと比べれば何方がマシか、と言われると……甲乙は付け難い、が。

帰投命令が出た以上、長居は出来ない。オトウールはウイキッドと一緒に、エストレヤへと帰投するのであった……。

人権亡き者達

スピカからの通達で作戦を一時中断し、エストレヤに帰投したウィキッドとオトウールの2人。其の儘、医務室に放り込まれた。

理由はウィキッドが戦闘で体が貫通する程の怪我を負ったと言う理由から。当人達は普通のケガだと主張するが、鼻屑目に見ても重度な怪我だとスピカの判断によるモノであった。

「……双方の主張は理解した」

メインエンジンの修理作業を一旦切り上げた紫も作戦報告を受ける為に医務室に訪れ、スピカとウィキッド達の主張に耳を傾けた。

「オーナーとしての立場と俺個人的な意見を統合して……スピカの主張の方が論理的に考えて正当だと言える」

結果、紫はスピカの判断が正しいと結論を付けた。理由は諸々あるが、第一にウィキッドとオトウールは紫の計画において雑に切り捨てられる様な駒では無い事が挙げられる。

「確かに何の成果も無く帰還すると言う事に納得出来ないと言う君らの主張も理解は出来る。だが、命あって物種だ。他のコミュニティは理解出来ない論理だがな」

「……………」

「何、1日くらいメインエンジンが停まったとて緊急事態の内に入らん。以前は1週間も立ち往生したもんだからな」

「……怒らないの?」

「はあ? 外の状況が危険塗れだと言うのに強行軍なんて真似は余程の切羽詰まった時か、指揮系統がポンコツで使い物にならんかの2択だ。それに、何の成果も無いと言うのは誤解だ」

「え?」

当初の目標は達成出来ない上に何かしらの収穫も無いと言うウィキッドとオトウールに対して紫はその主張を否定した。成果はあったのだ。

「君ら2人はコミュニティ外で人間を見たんだろう? A I Sでは無

い、人間を」

コミュニティ外で行動するのは作戦行動に駆り出されたA I Sだけだ。或いは輸送するコミュニティの部隊員。A I SならばA I Sスーツを着用している……2人が見たのコミュニティの恫喝する軍人や看守でもA I Sにも見えない少女だった。

「ええ、大型装甲のエインヘリヤルと交戦中に逃げたか死んだかは分からないけど……」

「……………」

「それらに関しては2通りのパターンが考えられる。まず1つは、リムドロップ」

「リムドロップ?」

「……コミュニティ内で犯罪、或いは気に入らない等の色々な理由でコミュニティから追放された連中の事だ。その者達の事をリムドロップと蔑称されている」

「……コミュニティから、追放?」

「組織と言うのは無象の群衆だ。思想は統一されている訳では無く様々な認知が跋扈している。……例を挙げればA I Sの扱い方を肯定している者も居れば否定的な者も現れる」

A I Sに対する扱いは苛烈だ。しかし、中には否定的な者も現れるかも知れないとの事。しかし、拠点運営の為に反乱因子は排除しなければ共倒れを起こす可能性がある。故に、殺しはしなかったが追放処分された。

「もう1つは、コミュニティで生まれ育った者では無い者達。中央政府から認知されているコミュニティとは別独立自治拠点で生活している者達……リムドロップの者達から生まれた者達、そして何らかの要因で孤児として生き繋いでいる者達」

その言葉にオトウールは反芻する。自分達も元々は孤児だ。コミュニティで産まれた訳では無く、寂れた土地で何とか生きていた。……となれば、この地域周辺に拠点があると言う事になる。が、接触には注意が必要だろうな」

「でしょうね。……追放されたのならばコミュニティに恨みを持って

いても不思議では無いでしょうし」

紫の言葉にオトウールは同意する。寧ろ自分達がやられて、尚且つ自分達もやった事だからだ。

AI Sは孤児を中心にやらされる。コミュニティ外で女性を発見しては手当たり次第にAI Sとして隷属させる。コミュニティのやり方を知っているのであれば、余計な敵対関係を作る事になる。

オトウールとしても必要のない戦闘は避けたい所だからだ。

「理解が早くて何よりだ。それに……外部拠点の存在が疑われる以上、他のコミュニティから『AI S狩り』として此方の作戦区域に割り込まれる可能性もあるからな。イザコザは面倒臭い」

『AI S狩り』とは文字通り、AI Sとして隷属させる為にコミュニティ外に繁殖している女性(状況的に孤児が多い)を捕獲する作戦の事。

前回、埼玉コミュニティでウイキッドとオトウールが従事したIS殲滅作戦(遭遇した時、当人達はIS学園の生徒だと主張した)は状況の特異性から急遽変更されその呼称に該当する。

コミュニティ外で生活している拠点が確認された場合、消耗が激しいAI Sを補充する為に挙って『AI S狩り』が行われる。

「それにこの地域は周辺のコミュニティの活動圏が隣接する境目……複数のコミュニティが同時に来るかもな。巻き込まれると面倒臭え」
複数のコミュニティが同じ区域に作戦行動として行動する場合もままある。その時、戦果を巡ってコミュニティ同士が揉める可能性がある。そうなれば結構、面倒臭いのだ。

「こと、移動式要塞艦であるエストレヤならば尚更と言える。」

「……コミュニティの人間としても大変なのね」

「ま、現場で身体を張る君らに比べればマシかも知れないがな。難しい話はこれで終わりだ。明日になれば動けるか?」

「うに、多分。大丈夫」

「無理はしない様にな。何度も言うがそう言う『契約』だからな」

「ええ……分かっているわ。お互い、死ぬ訳には行かないもの」

「なら良い。今日はご苦労さん。ゆっくり休んで、明日に備えてくれ」

○

某日、某刻。

「……」

車内にて気不味い空気が漂っている。

——……コード：R18とは鈴の事だった。しかし、酷い姿だった。明らかに疲弊しているのが見て取れる。やはりA I Sには休息の時間すらも与えられないと言うのか。それに、この作戦は気が進まない。

ラウラに与えられた任務。それは『A I S狩り』と言う任務だった。該当区域にてコミュニケーション外で生活する人間達の拠点が確認された。その拠点を制圧して女を捕獲せよと言う内容。

つまり、自分達が初めてこの世界に迷い込んできた時に遭ったあの光景を今度は自分達が引き起こせと言うモノに等しい。

現在、作戦に投入されるA I Sを車内のトランクに詰め込み、ラウラ自身が車を運転（するのは初めてだったが大凡、慣れた）し該当地域へ向けて運転している。

——こうやってA I Sは増やされるのか……判断基準はI S適性とは言え……I Sに反応するのは女性ばかり、それに適性とは言っても大なり小なり反応する。……全く反応しないと言う話は殆ど聞いた事が無い。奴らからすれば女性は全員、A I Sと言う扱いなのか。女尊男卑でI Sをファッション扱いしていたゴミ共とは別の意味で反吐が出るな。

A I SⅡ女性と言う方程式が成り立っている。だからこそ、コミュニ

ニティ内では男性ばかりがコミュニティ運営を担っていた。

「……よし、この辺で良いか」

ラウラは廃屋近くに車を停めた。A I Sに持たせている無線機の電波の都合上、コミュニティからの無線の中継地点として車が使われる。その為、A I Sを投下して即座にコミュニティへ撤収が出来ない。迅速にA I Sを回収する理由も勿論ある。

「……お前達、大丈夫か？」

トランクを開き中に詰め込まれていたA I Sにされた鈴音達を出した。

「コレが、大丈夫に見える……?」

後手で拘束され、足枷も着けられて満足に動けない状態で地面に座り込む鈴音。作戦に投入される前は肉便器として扱われて水で洗われたとは言え、精液塗れの悪臭が付き纏っている。

「……臭かった」

「もう、嫌。……早く元の世界に帰りたい」

他の2人も元はI S学園の生徒。他のクラス故にラウラは詳細を知らないA I Sだ。

「……まさか、コミュニティの連中と連んでいるなんてね……。私達がどんな目に遭っているか知らずに良い気なモノね」

「罵倒は幾らでも受けてやる。……今は私の指示を聞いてくれ」

——当然、良い顔されないのは分かっている。裏切り者に等しいからな。

「……嫁も教官、シャルロットや箒、セシリアの行方知れずのまま。だが、きつと生きている筈だ。……元の世界に帰れるかも分からないが、何とかこの状況を脱して合流したい」

「……私達は拘束されているから、動けるのはアンタだけね」

「私が何とかお前達が逃げ出すチャンスを作ってみる。……それまで耐えてくれ」

「……コミュニティである連中に虐げられ続けるよりも荒廃した世界でサバイバルしている方がまだマシかもね」

鈴音はラウラの計画に同意する。A I Sとして使い潰されるのは

真平ごめんだ。牢獄で肉便器扱いされるならば、廃墟暮らしの方がまだ精神的にマシと言える。

「だからと言って迂闊には動けん。少なくとも今はな……。今回の作戦を通達する……。達成出来なかったA I Sは処分されかねん」

「ええ、分かっているわ。本当にウンザリする環境よ、この世界は」

はぐれ者の巣穴

『お二方の作戦該当地域への進入を確認。作戦内容は昨日と同じ内容。中断された任務を継続して下さい』

翌日、エストラレヤから出撃したウイキッドとオトウールに対して無線でスピカからの音声が伝えられる。昨日の反省を踏まえて今回は、応急処置の為のガーゼや包帯等の簡素ではあるが携帯医療道具を拡張領域内に格納して持ち込んでいる。コレで作戦行動中でも、軽度な怪我なら安全に止血等は出来る。

『尚、外部拠点の存在が指摘されており、他コミュニティのA I S部隊が作戦区域に進入する可能性があります。介入コミュニティの懸念として可能性としては、埼玉コミュニティと東京コミュニティが1番可能性が高いと言えます』

最低でも2陣営のコミュニティが『A I S狩り』の任務を実行する可能性がある」と指摘された。

「遭遇した場合は？」

A I SならばA I Sスーツを着用している。しかし、自分達の着ていたA I Sスーツは破損が激しくて使い物にならず、今は代用として黒いセーラー服を身に纏っている。この状態だと、他のA I Sからもコミュニティの人間からも『A I Sでは無い』と思われるも仕方ない。『その場合は私が向こうの回線に介入して相互不可侵を取り付けます。私達の最優先事項は『A I S狩り』ではありませんので、衝突する必要はありません。』

そもそも、作戦中のA I S同士の戦闘はA I S管理法で禁止されていますし、他のコミュニティ所有のA I Sを故意に欠損させる行為は器物破損に該当します。場合によっては損害賠償を請求する事になります』

——…A I Sつて『兵器』で物。

何処まで行ってもA I Sには人権が無くコミュニティの備品や兵

器扱い。だが、他人の物を壊しては訴えられると言う概念はこんなクソツタレな世界でも健在であった。

『ですが、此方から手を出すのも絶対に止めてください。エストレヤの財政状況は本当にカツカツなので』

「ええ、肝に銘じておくわ。出会ささない事が1番だけど……」

『それが1番です。それじゃあ、作戦開始。くれぐれも注意して任務を遂行してください』

昨日、通った道を通り大型装甲型エインヘリヤルと交戦した場所にまで向かう。その場所では交戦時に破壊された痕跡が残されたままだったが、破壊した装甲の類は存在せず完全に消えていた。

「……私達が回収した覚えは無いのに、消えているわ」
「死体はあるよ?」

装甲部は消え去っているが、エインヘリヤルの本体である男性人間の死体は放置されている。あくまで機械装甲だけが失われている。

『……外部拠点の人達が持ち去ったのかも知れません。噂ではその装甲の部品等でブローカーと呼ばれる職種の者達と取引をしているとか、詳細は分かりませんがね』

「考えるだけ、時間の無駄ね。あ、ウイキ姫ちゃん。エインヘリヤルの死体は食べられないわ、前に食べてお腹を壊したでしょう?」

「うう……」

——あの時、お腹、痛かった……。それから、後で人間に凄く殴られて蹴られて、吐いた……。

『あのー、出来ればそれ関連の話題と行為は控えて頂けるとありがたいです。その、猟奇的です』

スピカはカニバリズムの話題に耐性が無いので、それ関連の話題は遠ざけたかった。

「……むー」

「さて、此処までの道のりで『ホームセンター』なる建物は見つからなかったわね。もっと奥へ進んだ先にあるのかしら?」

「うー……!!?」

オトウールがコレまでの道縫らに要件のある建物を見落としていなかったか思考に更けている間、ウイキッドは塀の割れた箇所から奥へと覗こうとしているが、低身長故に高さが足りずに苦闘していた。「あ、ウイキ姫ちゃん。奥を見たいの?」

それに気付いたオトウールは後ろからウイキッドを抱き抱えて視線を高くして一緒に向こう側を見る。その先に見えたのは大通りの十字路であった。

「……エインヘリヤルの気配は無さそうね」

『はい。レーダーでも確認されません』

「一先ず行ってみましょう。他に行く方角は無いし」

塀を乗り越えて大通りの十字路へと出る。この周辺にはそれなりに高い建物、ビルやマンションと呼ばれる建物が集まっている様だ。

最も、荒廃が進んでいるが形は残しているようだ。

「……アレは何かしら?」

「何か、書いてる?」

信号機近くに別の細い棒が立っている。其処には板みたいなモノが付けられていた。

『アレは道路標識です。……掠れてしまって殆ど読めませんが、近くに辛うじて読めた限り、地下鉄駅があるみたいですね』

「ちかてつえき?」

——何それ? 美味しいの?

『かつては地下に穴を掘って電車と呼ばれる乗り物で移動する為の中継地点となる場所でした。……しかし、今となっては近づかない方が良いでしょう』

スピカは地下鉄駅には行かない方が良いと警告した。

「……何故かしら?」

『先ず第一に、無線機の電波が届き辛いと言う理由が挙げられます。それに地下鉄の路線はほぼ機能しないとは言え照明が機能していない可能性が高い為、真つ暗で視界の確保が出来ません』

視覚が使えないと言うのはかなり不便だ。コミュニケーション外では電力もガスも水道も機能を停止している。その上でエストレヤとの無

線が通じなくなるのも痛手と言える。

『そして、2つ目ですが……外部拠点が地下鉄駅構内に設置されている可能性が高いんです』

「その地下鉄駅に？」

『はい。コミュニティを追放されたリムドロップ達は地下鉄駅を拠点として使っていた事例が数多くあります。』

理由としてはISやエインヘリヤルの脅威から逃れる為です。ISやエインヘリヤルは大半が空中や地上での戦闘行動に秀でていますが、地下や狭い建物内と言った閉鎖空間では行動し難いからです』

エインヘリヤルもISも機体や装甲の兼ね合いから図体が大きくなりやすい(無論、例外も多数存在している)。そう考えると建築物と言った閉所内では動き難いだろう。

『同じ理由でコミュニティも移動型要塞のエストレヤを除いて殆どが地下に居住する為の地下都市を構築しています』

コミュニティもその下に地下に空間が作られて居住空間、地下都市として機能している。地上だと上空からIS、地上から地上兵力たるエインヘリヤルの襲撃を受ける。だから、地下に空間を作り其処を拠点とした。

「地下に……？」

『はい。基本的にAISは地上の牢獄に監禁されます。万が一、コミュニティにISやエインヘリヤルが襲撃された時の囿にする為です。その間に地下空間の市民達は避難経路を通り他のコミュニティへ避難すると言う手筈になるんです。』

ですが、コミュニティの中には予算や建設地点の土壌等の理由の兼ね合いで地下に居住区を作れず地上の前哨基地としての機能しか無いコミュニティ支部もあります。

埼玉コミュニティP2支部も、地下に居住区が無いタイプのコミュニティです。

小規模のコミュニティが複数集まって群体型のコミュニティの場合、外周に位置するコミュニティは前哨基地として役割を持たせる傾向があります。逆に中心部に地下空間の居住区を設ける形式です』

「……初耳の事ばかりね」

『そうかも知れませんか。貴方達はただ言われるまま戦わされてしまったから……。兎も角、その周辺では『A I S 狩り』に來台他コミュニティのA I S が進行している可能性が高いと言えます』

「鉢合わせになるのは避けたい所ね……」

——……………ぶつかるのは、避けたい。

『はい。ですので、反対方向へ向かう事を推奨します』

「分かったわ、彼方の方角ね。行きましよう、ウイキ姫ちゃん」

「ん」

地下鉄駅がある場所を避けて、自分達の目的のある『ホームセンター』を探す。此処で他のA I S と遭遇しても良い事は無いからだ。

それはとても残酷なIS（モノ）

馬鹿ばっか。

誰も私の事を理解しない。

アイツも理解しなかった。

何で執着していたのか理解出来ない。

だから壊すのよ。アンタもね。

○

地下鉄駅の入り口がある付近から遠ざかり、目的地を探すウイキツドとオトウールの2人。この近辺には飲食店の他に何かしらの商業施設が集中する地域らしく、寂れた看板や打ち捨てられ残骸と化した小物とかが道路とかに散乱している。

「この辺りは商店街、だったみたいね……」

当然ながら既に廃墟と化している。

『状況証拠から考えられるに近くにスーパーマーケットが出来て以降、客が其方に盗られて寂れてしまったみたいです』

「何処も似たようなモノだと思っわ……」

「うー、腐ってる……」

商店街の一角、野菜売り場では萎れていたり腐ってしまった野菜が散乱している。長い年月により原型を留めておらず元は何の野菜だったか判別は出来そうにない。

『……使えそうなモノは無さそうです。目的のホームセンターへ向かいますよ』

その時、何処か遠くで爆発に似た音が響いて来る。

「オト姉ツ!!?」

「エインヘリヤル!?!?」

『いえ、違います。リーダーに反応はありません……。これは先程、遠目に見えた地下鉄駅にA I S狩りに突入したA I S部隊の可能性が濃厚と言えます。爆発物で混乱させる目的なのでしょう』

これは予想はされた事、エインヘリヤルの方がマシだったが、仕方ない。

「……あの時に鉢合わせしなくて助かったと言いたいけど、警戒しなきゃいけないわね」

——帰り道に出会すのは避けたい。出来るならば視界に入らない内に帰還したい。

作戦地域近くに他コミュニティのA I Sが投入された。エインヘリヤル以外にも警戒しなくてはならないこの状況。少しは急いだ方が良いかも知れない。

商店街を抜けて、地下鉄駅があつた区域から遠ざかる様に歩き続ける。舗装が剥がれた道路を行き、倒壊した建物の瓦礫や壁を登っては降りて進んで行く。

「……スピカ。アレは?」

暫く歩く事、20分程。少し開けた場所に出た。遮蔽物が無い為にエインヘリヤルや他のA I Sに発見されるリスクが跳ね上がる為、極力避けたい場所だが、その一角に大型の建物が見えた。

上部は青く下部は白い塗装の壁、その壁の大きな看板は真つ二つに割れておりその一部が剥がれ落ちているのが確認出来た。その建物の周りは舗装された広場になっていた。

『確認しました。……恐らくアレが目的地のホームセンターだと思います。……近くにエインヘリヤルと言った敵性反応はありません』

「何故、こんな広場の中央にあるのかしら?」

『えーと、ホームセンターと言った大型の建物には駐車場。目の前に広がる車両を停める為の広場を設ける事が一般的でした。特にホームセンターは取り扱う商品の都合上、広めの駐車場が求められるんで』

す』

「うー……」

「兎も角、他のA I S達がA I S狩りに集中している間に目的を達成しましょう」

広い駐車場には身を隠す為の遮蔽物は無い。その為、駆け足気味でホームセンターの建物へと直進してその建物の玄関口へと移動する。「……ガラスが割れている。此処から入れそうね。ちよつと割れ目が小さいから砕きましょう」

オトウールは量子変換して展開したモーニングスターを振るい壁ガラスを粉々に破碎し、自分が通れる程度の大きさの穴を広げ、内部へと侵入する。

ホームセンター内も荒れており、棚に置かれていたモノが床に落ちていたり、綺礼さつぱり無くなっていたりもしていた。照明が落ちている為、薄暗い光景が広がっている。

『ウイキ姫様とオトウール様。お二人が作戦目標地点への到達を確認しました。これより、回収資源の確保に向かってください』

「うにーっ!!?」

「……ええ、鉄製のモノであれば取り敢えず回収すれば良いかしら?」
『そうですね……。昨日も伝えた通り最適な形状があるとは限りません。そもそも残っているかどうか分かりませんので、あるだけ回収してしましましょう』

スピカの指示によりホームセンター内で金属製のモノを片っ端から回収し拡張領域内へと格納して行く。

今は役に立たずとも後々、役に立つかも知れない。その辺りは全部、紫に投げてしまえば良い。自分達は指示された通りにやれば問題は無い。

「ん、粗方、集めた……!!?」

——コレだけあれば、大丈夫。……多分。

「取り敢えず、使えそうなモノかは分からないけど、沢山回収したわ」

『……コレは!?? ツ、き、緊急事態ですつ!!? レーダーに超高速で其方に接近中のI S……!!? こ、この反応は!??』

スピカに無線を入れた時、かなり焦った様子の声が2人に届く。この慌てぶり……嫌な予感がしたウイキッドとオトウールは意思疎通するまでも無く、ホームセンターから飛び出した。

その直後、ホームセンターの壁や天井、その他諸々が爆轟と共に爆ぜ散り、その衝撃波を背後から浴びた2人も巻き込まれて駐車場の中程にまで吹き飛ばされて転がる。体格や身長差によつてウイキッドの方が遠くに飛ばされた。

「今度は何……!?」

「うー、痛い……!!」

駐車場の地面に転がる2人、ホームセンターが建っていた場所には黒煙が上がっており今となつては瓦礫の山と化していた。一步、反応が遅れていたらまず巻き込まれた挙句、間違いなく肉片と化していたであろう。

『お、お二人とも大丈夫ですか??』

「……だ、大丈夫」

『シグネチャー観測!!? 最悪です、まさか……』

無線の言葉に被さる形で瓦礫の山が粉微塵に吹き飛ばされ形状を保っている瓦礫が宙を舞う。その場所には1機のISが荒々しく存在していた。

5 m程の巨体。全体的にマゼンダの色合であり、非固定で宙に浮く複数の球体型の砲門が印象的。その傍には偃月刀の様な刀身が控えられていた。巨大な機械鎧型のIS。即ち――。

『シグネチャータイプ『ヴァルキリー』……!!? 対象ISのネームド

『甲龍』!!? 交戦時、勝利率生存率ともに0%……!!?』

――ヴァルキリー……!!? アレが……!!?

『ヴァルキリー』。数あるISの中でも『ヴォルヴァ』と並ぶ特級の危険種であり上位種に君臨する存在。ヴォルヴァは孤高であるならばヴァルキリーは軍団。ヴァルキリーの名の通りエインヘリヤルを率いるとされている。

故に『ヴァルキリー』と交戦し打ち勝てたA I Sは1人として居ないとの事。

『……オオオオオ!!?』

静かな咆哮が周辺に響き渡る。

『ツ!!? 作戦地域にエインヘリヤルを多数、確認!!? ヴアルキリーがエインヘリヤルを呼び寄せていますツ!!?』

此の儘では危険!!? ヴアルキリー統制下のエインヘリヤルは脅威です!!? 包囲される前に速やかに作戦地域から離脱して下さい!!?』

今の自分達ではヴァルキリーに太刀打ち出来る筈もなく擦り傷を与える事すら叶わない。更には普段は乱雑に暴れるだけのエインヘリヤルはヴァルキリーの統率下になると途端に統制の取れた動きをする様になる。そうなれば数の暴力かつ制圧性を持った軍団に蹂躪される事になる。

スピカの指示通り、此処は急いで離脱する事を考えた方が良い。

『……ツ!!?』

機械鎧型のISには頭部は無い。両手両足の装甲とその他、スラスターや非固定武装が存在するのみ、胴体と呼ばれる部位は無い。

だが、聳えるそれは自分達を睥睨している様にも見えた。

『……ウイキ姫ちゃん。逃げましょう、一目散に!!?』

「んツ!!?」

勝ち目が無い事は分かっている。2人は戦闘を避けるべく、逃亡を開始する。もたつけば呼び寄せられたエインヘリヤルに囲まれてしまう。そうなれば生き残れる確率は大きく下がる事になる。

まだ、死なない。此処で死ぬわけにはいかないからだ。

逃げる先には

『ツ!!? 射程外から狙われていますツ!!?』

その無線の直後、自分達のすぐ隣が突如として爆ぜ散った。

「……砲身さえ分らないなんてツ!!?」

「何処から狙ってるか、分からない……!!?」

今度は進もうとした先の地面が抉り取られる様に爆ぜて巨大なクレーターが形成された。

——死角が、分からないツ!!?」

「……あつちからエインヘリヤルの群れが見えるわ。あの場所を強行突破と言うのは無謀ね」

『普段ならば可能かも知れませんが、ヴァルキリーの統率下だと、危険度が跳ね上がっています!!? 現に3段構造、正面が肉壁となつて第二陣、左右の陣が包囲する配置になっている事が確認されました!!?』

突撃すれば前線を崩した瞬間に包囲されてしまうだけでなく『甲龍』から狙い撃ちされかねませんツ!!?』

ヴァルキリーである『甲龍』が出現。考えられる中で最悪の状況。それに加えてエインヘリヤルが大量に出現した。ヴァルキリーはエインヘリヤルを使役する為、この状況下での交戦は極めて危険だった。

その為、一刻も早く離脱する為に遮蔽物の多い街中へ飛び込んだのだが……『甲龍』は砲身も砲弾も視認出来ない不可視の砲弾を用いて遠距離から攻撃して来ている。

特にウイキッドの場合は着弾時の衝撃の余波で吹き飛ばされてしまふ。

「まだ、追ってくる……!!?」

『甲龍』はゆっくりではあるが、飛行するまでもなく脚部装甲を動かして歩いて追跡して来ていた。壁や建物と言った障害物は腕部装甲で

握られている偃月刀で薙ぎ払って破壊し直進している。

歩いているとは言え5mもある巨体、歩幅も大きい上に自信が呼び寄せたエインヘリヤルが進行上に居れば構わず偃月刀や不可視の砲弾で薙ぎ潰し、或いは踏み潰している。

「何処かで振り切らないと……エストレヤにまで追って来られたら……!!?」

——……皆、逃げ場を無くしちゃう……!!?

現在、エストレヤはエンジントラブルで航行出来ない状態。その状態で『甲龍』を迎え撃つなど無謀の極みだ。作戦地域から離脱するのは当然として、『甲龍』の追走を振り切った上で捕捉される前にエストレヤを航行可能な状態にした上で離脱せねばならない。

『ヴァルキリー』と言った上位種のISは『無限革命』以降に増産された下位種のISと違ってハイパーセンサーと呼ばれる360°、全方位に熱源反応を探知するレーダーが搭載されているんです……!!? 性能も指折りで私達の使っているレーダーの何倍も高性能なんです……!!?』

「想像したく無いわ、それじゃあ……ヴァルキリー以上の存在は背後から奇襲するって手が使えないって事?」

ただでさえISにはシールドバリアや絶対防御があるのに、ヴァルキリーと言う上位種には不意打ちが通らず、嫌でも正面から戦わなければならぬ。……正直に言えばマトモにやり合えば此方の攻撃はシールドバリアで易々と受け止められた瞬間に一撃で返り討ちに遭う流れが嫌でも思い浮かぶ。

『そう、……ッ!!? 熱源反応を確認!!? 来ますッ!!?』

エインヘリヤルの集団を避けて細い路地裏の通路を伝い移動する。その中でも轟音と地響きは断続的に鳴り響く。

地面が着弾の衝撃の余波で揺れる。建物が破壊され崩落の衝撃で粉塵と共に揺れる。ビルに付けられていた窓ガラスが衝撃波で一斉に割れて地面へと降り注いでくる。

「此の儘じゃ、振り切れない……!!? ISの機動力を前にAISの足の速さじゃ逃げ切れないわ……」

『即死不可避』。

その単語が脳裏に過ぎる、埼玉コミユニティの牢獄内でコミユニティの人間達が口にしていた。一度、捕捉されたら逃げ切れない、死あるのみだと。

隠れても熱源反応を探知する為、意味が無い。

走って逃げようとしてもISは高速で移動が可能、意味が無い。

戦って打ち倒す？ シールドバリアや絶対防御に阻まれる以前に接近する前に不可視の砲弾で胴体が圧殺四散するだろう（シールドバリアを中和する機能が搭載されているとは言え、近づく事が出来なければ無意味）。意味が無い。

「それに……わざと外している様にも見えるわ」

先程から不可視の砲弾が飛来しているのだが、ギリギリ直撃しない箇所ばかりに着弾している。横に逸れていたりするか或いは進行方向向上に着弾している。外れたと考えるよりも、わざとだと考える方が自然に思えて来る。

『甦るつもり……かも知れません。必死で逃げる人をゆっくり追い詰める思考回路があるとは……!!? あのIS、性格が悪そうですね……』

「……ツ!!? オト姉、あっちにもエインヘリヤルがいっぱい……!!?」

路地裏の出た先には多数のエインヘリヤルがごった返しているのが見えた。先回りされていた様である。

『……マズいですね。完全に誘導されています!!? 『甲龍』のハイパーセンサーの都合上、狭い路地裏に籠城しても周囲の建物ごと破壊されては下敷きに……!!?』

引き返し、路地裏から道路に出ようとする場所にも他のエインヘリヤルの一団が屯している。

『……ダメです。完全に包围されてしまいました……!!? お二人ともの周囲にはヴァルキリーの統率下にあるエインヘリヤルが多数……。更に統率者であるヴァルキリーがお二人のいる地点に到達するまで、約4分……!!?』

スピカから絶望的な状況だと言わざるを得ない言葉が告げられる。エインヘリヤルや『甲龍』の図体の関係上、細い路地裏には入っては来られないがそんな問題、路地裏を形成する周囲の建物を破壊してしまえば関係が無い。

「数が多過ぎる……!!?」

残された手は正面突破しか無い。

しかし、普段のエインヘリヤルが相手ならば襲って来る者を殴り倒しての強行突破は可能なのだが、あのエインヘリヤル達はヴァルキリーの登場により統率されている。

その様子は遠目からでも様変わりする程に変化している。馬鹿正直に突っ込んだとしても擦り潰されてしまうだろう。

『到達まで、あと2分!!?』

その通信の直後、一際強い振動と轟音が響き渡る。自分達の直ぐ近くに剥がれ落ちた室外機が落下して来た。

「……………」

オトウールとしては、ウイキッドだけでも逃がしたい。唯一残った『家族』、彼女だけは喪う訳には行かない。けれど、有効な打開策は思いつかない。

最初こそはモーニングスターでエインヘリヤルの群れの向こう側へ飛ばすと言う作戦を思いついたが、場所が狭く振るえないし、此処からではエインヘリヤルの奥行きが分からない。もし、エインヘリヤルの群れのど真ん中に落ちればあつという間に擦り潰されてしまう恐れもあった。

『残り1分!!? 此の儘じゃ…………!!?』

もう目と鼻の先にまで迫って来ている。包囲されている以上、逃げ場は――。

「オト姉、すぴか。あれ、蓋?」

ウイキッドは地面に地表に丸い円形の何かしら模様が入った蓋らしきモノを指示す。

『それは、マンホールの蓋です!!? その下は、下水道と呼ばれている地下通路です!!? 詳しい説明は時間が無いので省きますが、簡単に

言えば地下には通路があります!!? 如何にISのハイパーセンサーと雖も地下にまでは感知出来ない筈ですツ!!? 既に長い年月が経過し耐用年数を超過しているので物理的な破壊が出来るかも知れませんか!!?』

「他に手は無さそうね……!!? スピカ、カウントをお願いツ!!?」

『はいっ!!? 残り30……熱源反応を確認!!? この周辺一帯を吹き飛ばすつもりかも知れません!!?』

「えいつ!!?」

オトウールはモーニングスターをマンホールの蓋へと叩き付けて割る形で破壊した。

「割れた……!!? ウィキ姫ちゃん、急いで!!?」

「うにっ!!?」

先にウィキッドを行かせて自分もそのマンホールの縦穴に梯子に手を掛けて降り始める（胸がつかえそうだったが、何とか入れた）。その直後、頭上の地上で轟音と大量の粉塵、そして激しい震動が発生し、降りる最中で、粉塵が頭の降り掛かるが怯まずに降りて行った。

○

マンホールの縦穴から降り立ち、地下の通路へと降り立った。地下鉄駅での話の通り、ライフラインは止まっている為、光源は無いに等しいが先程、降りて来た縦穴から僅かに光が差している。

「……一時はどうなるかと思っただわ。無線は……大丈夫かしら?」

『あの、お二人とも……ご無事ですか?』

無線の電波は届いている様だ。

「ええ、私もウィキ姫ちゃんも無事よ。ただ、降りて来た箇所は瓦礫で塞がれてしまったわ……」

見渡す限り一面は暗闇に包まれている。流石にこの状態で突き進むのは無謀としか思えない。

『……やはり、あ。オーナー、え？はい、あ、オーナーに代わりますね』
『オトウール嬢、ウイキ姫嬢。ヴォルヴァに続いてヴァルキリーにまで襲撃されるとは災難だったな』

スピカから紫に代わった。修理の合間と言うかスピカの声が聞こえたのかも知れない。

「オーナー……」

「うにー……」

『要件は手短に済ませよう。余り夜間行動は推奨したくは無いがそうも言っては居られない場面が必ず来ると思ってた。即席ではあるが、一応、その黒セーラーに簡易的ではあるが懐中電灯代わりの照明器具を付けてある』

「初めて聞いたー」

『まあ、有り合わせで作った紛い物なんだがな。使い方は襟首の裏にボタンがある。それを6秒程、押せば照らせる範囲は狭いが真っ暗よりはマシだろう』

紫の指示の通りに着ている黒セーラーの襟首の裏にある小さなボタンを押し続けると袖付近から白い光が放射された。腕を動かせばその先に光が届く。

「ひろー……!!?」

降りた先で光を当てて周囲を照らしてみる。非常に大きな円柱形の通路である事が分かった。

「変な照明機能ね」

『無いよりはマシだろう？ 兎も角、ウイキ姫嬢の反応から其処は雨水管の様だ。基本的に水が流れる通路と言う事で上から下へと流れる、下ったその先にポンプ所と呼ばれる施設がある。其処から地上へと上がる筈だ』

下り坂になっている方へと進めば外へと出られる様である。

『……ただ、その場所はマンホールの縦穴があるから電波が届くが、恐らく其処から移動すれば電波が届かなくなるだろう。……気を付け

『て進んでくれ』

「ええ、分かったわ……!!?　行きましよう、ウイキ姫ちゃん
「んっ!!?」

それは初めて知る感情

——この世界に来てから本当に最悪な気分ばかり。人権さえもゴミ箱に捨てて腐らせた様な世界。挙げ句の果てに性処理道具にされるし、本当にクソツタレだ。

「……………」

——そして、今、私がやっている事も最低な事だつて事も含めて最悪と言えた。どんな顔で一夏や箒達に会えば良いのよ……………!!?」

コード：R18はコード：S42、コード：F15と共に所有先の埼玉コミュニティの命令により作戦行動中だった。内容はコミュニティ外の人間達の拠点を制圧して繁殖している女性達を捕獲しろと言う、俗に言われる『A I S狩り』と呼ばれる任務。自分達がこの世界に来てあの2人がやった事と全く同じ内容だ。

それに合わせて周辺にエインヘリヤルの掃討も命じられていた。

A I Sスーツに身を包んだとしても、シールドバリアも無ければ絶対防御も無い。その中で戦場へと送られては精神的に疲弊する。自分分は兎も角、今回参加させられた2人は元々は一般人でこの様な生死の狭間を彷徨う戦場は大きな苦痛が伴う。しかし、この世界でI S適性のある自分達に人権は無く、逆らえば処分される。故に従うしか道は無い。

「……………」

幸い、エインヘリヤルは目撃されず、拠点にされていた地下鉄駅の場所も判明し、ラウラを介して報告した途端、多数の車両が地下鉄駅周辺に押し寄せて中で隠れ住んでいた人間達を片っ端から車両へ詰め込んでいた。

その間、自分達は

『捕縛中にエインヘリヤルが湧くかも知れん。貴様らの様なゴミの目や耳で安全が確認されたとは到底信用出来んからな。作業が終わるまで見張れ、1匹たりともエインヘリヤルを俺達の視界に入れるな』

暴言込みの見張りを命じられ、今に至っている。命令する癖に自分の行動は信用されていない。何をしたとしても、認められはしない。

こと、R18は人類に対してかなり反抗的な態度だった事も起因しているのだろう。

——ラウラ……。

ラウラもコミュニケーションの人間達と交ざって、制圧された拠点の人間達を連行している様子が見えた。無表情を粧っているが内心、苦虫を噛み潰していそうである。

「おい、貴様ら」

——ツ!!?

その時、コミュニケーションの人間がR18達の前に来た。今度は何があると言うのか。

「その場で膝をつけ、そして腕を後ろに回せ」

「え、いきな、ガツ!!?」

口答えたF15は別の人間に後ろから頭を掴まれて其の儘、割れたアスファルトの地面に頭部を叩き付けられる。何度も、何度も、鈍く痛々しい音が響く。終わる頃にはその顔は血だらけとなっていた。

「いた、い……」

「言葉も理解出来なくなったか？ 雌豚が、惚ける暇があるならやれ」

——気に入らないけど此処で暴れて何人か殺したとしても……結果は変わらない……。

二の舞はごめん。それに此処で抵抗したとしても結果は変わらない、いや悪化するだけだ。R18とS42は腕を後ろに回すと同時に二の腕と手首、足首に枷を嵌められ、鎖で枷同士を連結され拘束される。口答えたF15は頭を踏まれながら座らされて拘束された。鎖の長さの都合上、正座された体勢で立ち上がる事が出来ない状態にされる。

「顔を上げろ」

「ツむぐ!!?」

「んくぐつ!!?」

——ちよつ、コレって……まさかッ!?

顔を上げた瞬間、口に開口器の一種であるリングギャグを嵌められて口が閉じられない様にされる。R18はこの展開が読めたのか顔が青褪めた。

「今から貴様らには便器になつてもらおう。丁度、俺達もトイレがしたくなつたしな、それに……貴様達も水分が欲しくなつただろう? こんな機会、数週間に1回あるか無いかだ。そう遠慮はするな、全部飲み干すが良い」

そう言う男性はズボンのチャックを開き、息子を見せる。生まれて初めて見るソレをみたF15とS42はリングギャグで歪められた顔で嫌そうに言葉にならない叫びをあげる。

「んんっ!?!」

「んあ!?!? んあ!!?!」

「簡易便所を設置したぞ!!?! ほら、早めにしないと後の仕事で痞える事になるぞ!!?!」

——うげえッ!?!? う、臭い……!!?!?

そして数人の人間達が集まり、A I SであるR18の口の中に変わり番で次々と突っ込んで行く。その光景は集団旅行のパーキングのトイレ休憩と称して公衆便所で小便を済ませて行く光景であった。

一団が終われば交代して別の集団が用を済ませて行く。次々と注ぎ込まれ、頭が壊れそうであった。

「……………」

「では、警邏任務に戻れ」

数十分後に拘束具を解かれて解放された。しかし、口の中は酷く臭くて気分は最悪だった。しかし、此処で倒れたままだと

「寝るな、雌塵がッ!!?! 水分補給した程度で休めると思うなッ!!?!」

「ゲボツあッ!?!? ゲボツゲホツ!!?!」

立ち上がるのが遅れたS42が腹を思い切り蹴られて地面に転ばされ吐いた。その後も何度も蹴られてその度に、唾液と注ぎ込まれた尿を吐き散らした。

「…………ふん、所詮は威張って虚勢を張るしか能力が無い売女か」

気が済んだのか其の儘、放置された。見ていて気分の良いモノでは無いのだが、庇えば纏めて被害を被る事になる。最低だと言う自覚はある。

「……うう、口の中気持ち悪い」

——コミュニティに戻れば私は肉便器生活……。早い所、抜け出さない……。ない……。ない……。

頭にナノマシンが打たれている為に此処で逃げ出したとしても爆破されれば終わりだ。

他に手立てが思い付く筈も無く時間が過ぎて、拠点の人間達をほぼ車両に詰め込んだその矢先、遠くで爆発音と轟音が響いた。

「ッ!??!」

「本部、何が起きた!?? 何……ヴァルキリーの出現が観測された、だと!?? 合わせてエインヘリヤルが作戦区域に多数侵入!??!」

リーダー格の男がコミュニティに通信を飛ばして状況の確認を取った。その結果、厄介な事態に陥ったと。

「諸君、良く聞け!!? 作戦区域近くにヴァルキリー、ネームド『甲龍』が出現した!!? 合わせて『甲龍』により多数のエインヘリヤルが呼び寄せられている!!? 諸君らも知つての通り、ヴァルキリー統率下のエインヘリヤルは極めて危険な存在と化す!!?!」

——甲、龍……!??!

R18はその言葉に目を疑った。それは自身の専用機の名称と全く同じだった。他にこの名称を持つISは聞いた事が無い。

「コード：S42、F15。緊急事態だ、貴様ら2人はヴァルキリークラスのIS、『甲龍』とそのエインヘリヤルの軍勢を我々が作戦区域から脱出出来るまで足止めしろ」

——バカ、言ってるじゃ無いわよ……。!!?! そんなの、捨て駒と一緒じゃない……。!!?!

自分がISを搭乗していたから分かる。生身でISに敵う筈が無い。ISにはISにしか敵わない、と。既存の銃火器の火力でも仮にもロケットランチャーでもシールドバリアや絶対防御によって防がれる……。

AIISの装備は近接武器一辺倒、ISは飛行能力を有する故に制空権を握られ空から制圧されれば終わりだ。その癖、自分達の予想よりも遙かに進化しているのだ。

それに加えてエインヘリヤルの軍勢も迫って来ている、数は不明だが『多数』の時点で不安しか無い。戦闘経験も殆ど無い元一般人では轢き殺されるのがオチだった。

「無論、貴様らに拒否権は無い。此処でAIISを2匹失ったとしても、釣りが出る」

『AIIS狩り』で代替りの人員が補充出来たからだ。言う事を聞かないし成果も出ないのならば捨て駒として使うのが上等な扱いと言うモノだ。

「そ、そんな……!!?」

「コード：R18は肉便器型AIISだからな、折角用意したのにすぐに処分してしまつては部下達から不満が出る。上司としては部下達の不満要因を自分で作るのは本意では無いからな」

——そんな理由で生かされるなんて、屈辱でしか無いわ……!!?」

「貴様らは此処で足止めしろ。何、俺達が逃げ切れるまでで構わん。大した成果が出るとは思っていないからな、貴様らが世界を腐敗させ此処まで荒廃させるしか能力が無く責任すら取れん連中に期待する方がバカの考える事だからな」

男性達はR18を持って車両に乗り込み、足止めを命令したAIISの2人を現場に残して急いで出発して埼玉コミユニティへと向けて走り去って行つた。

「こ、こんなの……こんな事つてアンマリよ……!!?」

「逃げて……ナノマシンが爆破されて終わり……!!? 嫌、死にたく、ない」

そんな2人の慟哭に応える為か、建物の陰や、壁を壊して多数のエインヘリヤルが群れを成して現れた。機械を乱雑に取り付けたその姿はもはや、2人の目には絶望の化身にしか映らなかつた。

かつて女性が強かった

取り残されたS42とF15。

見た事も無い数のエインヘリヤルの群勢が眼前に現れた。IS学園時代での訓練でしかマトモに武器を扱った事が無い素人に薄毛が生えただけの小娘。

「な、何……あの化け物みたいなのは!!?」

「アレが周りが言っていた、エインヘリヤル……!!? 多い、多過ぎる……!!?」

2人の手元にあるのは廃棄され鋼材等の有り合わせの物を無理やり繋いだり取って付けた程度の乱雑な造りのキメラの様な日本刀擬き。

所々、錆びていたり刃の部分は中程まで割れていたり、刃毀れしており、お世辞にも使い捨ての鈍器にしか使えなさそうで見えるからに耐久性にも心許ない代物。

「こんなの、無理……!!?」

「あんな数、私達だけで……敵う訳が無い……!!?」

対するエインヘリヤルは両手両足が乱雑な機械を無理やり取って付けた構造、だが腕と言うよりも甲殻類の鋏かペンチと例えると分かりやすい構造。それをどう使うのか2人には想像が及ばない。

『オオオ……!!?』

集まったエインヘリヤル、その先頭の個体が腕を地に付けてゴリラの様な歩き方で駆け出し、鋏状の腕を振り被ってAISへと飛び掛かって来る。後に続く様に後続のエインヘリヤルも迫り来る。

「……む、無理ッ!!? に、逃げよう!!?」

「し、死にたくない!!? 勝ち目無いよッ!!? こんなの、どうかしてる!!?」

雲霞の如く迫り来るエインヘリヤルの群。それを見て2人のAI

Sが選択したのは抵抗でも戦闘でも無く、逃亡を選んだ。

2人はIS学園の元生徒だった。

本当ならば学園生活を満喫し、ISの訓練を経てあわよくば夢のISの専属操縦者になるなり、IS企業に就職して順風満帆な希望に満ちた人生を歩む筈だった。

しかし、現実には残酷だった。

気が付けば荒廃した世界に流れ着いた。この世界では今迄、当たり前のような認識で罷り通っていた女尊男卑の常識は一切通用しなかった。

この世界では女性……IS適性がある者は須く人権は無いに等しく、口を開くだけで殴られ蹴られ、終いには性処理道具として使われて、不衛生な牢屋に押し込まれ、食事も排泄も睡眠も満足に出来ない悪夢のような環境に追いやられた。

夢ならば早く覚めて欲しいと誰もが願ったがコレは紛れもない現実だった。

そして、粗雑な武器を手に戦場へと放り込まれた拳句、囚役と言う捨て駒と言う無残な終焉を迎えようとしていた。

「死にたくない、死にたくないッ!!?」

「必死に勉強してIS学園に入学して……!!?　なのに、如何して!?!」

地下鉄駅前広場から逃げる様に走り出すS42とF15。その後方には荒廃した大地を踏み鳴らしながら多数のエインヘリヤルが津波の如く追ってくる。獲物を見つけた蟻の大群の様に。

何処か遠くで建物が爆発し倒壊する様な轟音と共に地響きが劈く様に響いた。

『オオオオオオ……!!?』

鈍い咆哮が轟く、巨大な獣の様な嘶き。地響きと共に迫り来るエインヘリヤルの群勢。

過剰、非情、ああ、無情。

如何に女尊男卑であろうと畢竟、『暴力』が伴わなければ蠮螋の斧に過ぎぬが理。いや、威勢だけが取り柄の愚者には。

悲鳴が上がると同時に持ち上げられた腕部装甲が地面へ振り下ろされる。腕部は180度捻られ上下反転した状態、つまり……F15の頭を下に向けて、であった。

「あッ!? あがつ、あッ……!?」

荒れ果てた大地。

かつて女性権利団体が荒らしに荒らした国の大地。

思想を、経済を、地形を、文化を、そして人理を。

驕り昂り、食い荒らした世界に叩き付けられた。其処には怒りも無ければ無慈悲も無い……あるのは理由だけだ。

「いぎいいいい……あばばばッばら、あば、らがッ!!?」

砂利に塗れ、割れた混凝土を舐める様に、削る様に、均すに顔面が擦らされる。その度に顔が鑢の如く削られ悲鳴をあげさせられる。

「いやあ……離してッ!!? 離してッばアア!!? 許して!?? 誰か、誰か助けてッばああ……!!?」

少し離れた場所ではS42がなけなしの抵抗を試みたがあっさり倒されエインヘリヤルの一体に捕獲されていた。両腕を腕部装甲で掴まれその場で両腕を広げる形で吊るされ、抵抗出来ない様にされる。情けなく助けを乞うも、助ける者は居ない。A I Sは兵器だ、兵器が助けを求める事など想定されていない。

「あ、………だらば………がつ、あ………!!?」

何回、地面で擦られたか分からない。地面を擦るの止めたエインヘリヤルは掴んでいるF15を持ち上げる。顔は血塗れであり鼻も頬も皮膚が削り剥がされかつて整っていた顔は見る事も憚れる。右目も傷付き、視力も失われているが……まだ、生きている。

「も………やべ………」

エインヘリヤルは人間男性の死体が使われている。命乞いの言葉など通じる筈も無く、事務的に左側の腕部装甲を動かす、蟹のハサミの様な形状でありその先端部をF15の腹へ迫る。

「ッ!? あ………な、に………ツいいいい!?? あ、アアアア………がつ、あッあ!??」

A I Sスーツは防塵、防熱と耐衝撃と言った耐久性に優れている。

統率の取れた動きが無くなったかの如くバラバラの方向へと移動して立ち去って行った。その場所に遺されたのは無惨な亡骸となった2体のAISだけであった。

流離の放浪商人

雨水管の中を移動するウイキッドとオトウールの2人。袖口に備え付けられた紛い物の照明器具の灯りを頼りに前へと進んでいく。

暗いが故に、逸れると探るのが大変であると判断したオトウールはウイキッドをおんぶして行動する事にした。

「……水の通る場所だから、濡れているのかと思っただけど、乾いているわね」

「うにー……」

足元は乾燥しており、水気は無い。ISとの長い間、戦闘は続いているのだがこの地下にまでは影響は及んでいないのか今の所、崩れた箇所は見当たらない。

——……光の先は真っ暗闇ね……。

雨水管は非常に長いらしく、灯りの先は真っ暗闇であり何処までも暗闇が続いている様な錯覚を覚える。既に数十分間、歩き続けている為降りて来た場所は見えず後方も真っ暗闇であった。

「オト姉、オト姉。何処まで続いているの?」

「……それは分からないわ。でも、終点はある筈よ」

後頭部からウイキッドが訊ねて来る。真っ暗闇で光を反射する白い壁ばかりが続いている。ISやエインヘリヤルに襲われない点だけは有り難いのだが、こうも同じ光景が続いていくと何となく不安感が込み上げて来る。

それはまるで暗闇が齎す原始的な恐怖。

「……こんな場所でISとかに襲われたら堪ったモノじゃ無いわね」

廃墟と化した埼玉コミュニティで蜘蛛の姿をしたISに襲われた事がある。昆虫や動物の形状へ自己進化を遂げたISも存在するのならば飛行する事を辞め、地下へ潜る事を選択したISが存在しても可笑しくはないだろう。

「んにゅ? オト姉、オト姉。何か……見えるよ?」

「光源……なのかしら？」

前方に白く光る丸い光らしき物が見える。

「……」

地下の雨水管の内部に人間やA I Sが屯しているのか？ と言う疑問よりも先にI Sの存在を疑う。オトウールは無言でウイキッドを降ろし、モーニングスターを展開する。

ウイキッドも袖口の照明を照らしながらノコギリを展開し、臨戦態勢を取る。基本的に、拠点であるエストレヤ以外では遭遇する者は全て敵だと考えた方が良くからだ。

雨水管は一本道、遮蔽物に身を隠したり避けて進むと言う手段は使えない。正面からぶつかるとしか無い。

「こつちに来る……!!？」

「ええ……!!？」

自分達の進行方向と向こうの光源の進行方向。お互いに近付いて来ている……接敵するのは時間の問題だ。

「……」

警戒しながら歩き続ける。隠れる場所も何も無い場所、飛び掛かれる距離になればいの一番にシールドバリアを中和する一撃を叩き込む。

——もう直ぐ、見えるかしら？

白い光源も大分、近付いて来た。

そして、その姿が照明に照らされた。

「あれ？ こんな所で人間に遭遇するたあ、思わへんかったなあ？」

「え……？ 人間……？」

「うにゅり？」

光源の正体はカンテラと呼ばれる携帯用のランプだった。

そのカンテラを腰から吊り下げていたのは金色の髪をツインテールに纏めた少女であった。白いシャツに黒ズボンと言うラフなスタイルで、大きなリュックを背負っておりリュックのポケットから色々

なモノがはみ出している。

「……え、えーと?」

オトウールとしては此処で人間に遭遇するとは思ってもみなかった為、困惑した。ウイキッドも疑問符を浮かべてオトウールに指示を窺うのか上目で見上げている。

「取り敢えず初めましてやなく。ウチはアルギエバ!!? 各地を転々としてる流離の放浪商人って奴やで!!?」

「ほーろーしよーにん……?」

「そつちのちびっ子は……ミラを思い出すなあ。じゃなくて、放浪商人ってのは旅をしながら商売する人の事なんや。何処でも取引出来るんがウリなんや!!?」

アルギエバと名乗った少女は放浪する商人であると名乗った。商売と言えばお金で物資をやり取りする人間……とメサルティムの一般教養として教えて貰っている。

「今、地上はIS……つーか、甲龍が暴れとるからなあ。避難がてら雨水管で移動中やつたんや。あんさんらも同じ口かいな?」

「え、ええ……。そんな所、かしらね」

——今の時代……女性の立場は地の底に落ちている……。まあ、彼女が何者かはこの際、如何でも良いわね。

「とまあ、折角やし何か買ってつてくれへんか? 色々、あんで?」

「ごめんなさい。私達、AISだから……お金とか持っていないの」

AISは支給されたモノしか手に出来ない。人間達が使うとされるお金なんてモノは縁が無い。

「この時代で女やったらAISカリムドロップの何方かしはおらんわ……。ウチも女やしコミュニティとかは入られへん。入ったら直ぐに御陀仏やしな。せやから物々交換でかまへん、かまへん」

アルギエバは物々交換の取引を持ち掛けて来た。幸い、先のホームセンターで金属製品やら色々なモノを回収出来るだけして来た。それを使えば……。取引出来るかも知れない。

——……もしかしたら、オーナーが求めているモノを持っているのかも知れないわね。

オトウールは少し怪しいがアルギエバの取引に応じる事にした。

未知の味覚

アルギエバと名乗った各地を放浪する商人。

雨水管の中でランタンや袖の照明器具によつて照らされる中、オトウールは先のホームセンターで集められるだけ集めた金属製の物品を見せる。

こんな時代でもコミュニケーション内やコミュニケーション同士では金銭で取引するのだが、AISには人権もクソも無く金銭の所持は認められていない。

故にお金が無いのだが、アルギエバは物々交換でも構わないこの事。

「ほー、調理用具とかなら使えるやもせえへんな。然も殆ど損傷してへんと来た。いやあ、ええもん持つとんな〜」

正直な所、オトウールやウィキッドから見てもホームセンターで集めたモノの大半は如何使うのかさっぱり分からないものが多い。

例えば、大きな円形に持ち手が付いているモノは最初、見た時は鈍器の一種かと考えた程だ（アルギエバが言うにはフライパンと呼ばれるモノで調理用具と言う分類の道具との事）。

オトウール達が集めたモノを物色するアルギエバは、状態が良く使えると判断したモノを引き取ると申し出た。

「いやー、ほんまアンタらええもん持っていたやん」

「私達から見れば何に使うのかさっぱりだわ……」

アルギエバが引き取ったモノを見てオトウールは素直にそう溢す。本当に何をどう使うのか想像出来ないのだ。

「それ、どーするの？」

「ん？ ああ、商売やからなく。コレらはまた別の人の欲しがる人に売るねん。そして、また別のモンを買いうって訳や。需要と供給って言つてな〜」

「じゅよう？…きょうきゆう？」

ウィキッドにとつては難しい話らしく首を傾げて疑問符を浮かべ

ている。その仕草にアルギエバは思わず目を輝かせた。

「小首傾げてめっちゃ可愛ええやん!!? 小つこうて、愛くるしくてギョツて抱きしめたいわ!!? いや、するツ!!?」

「うにーっ!?」

すかさずアルギエバはウイキッドを持ち上げて頬擦りし始めた。突然の行動に反応出来ずウイキッドはされるがままであった。

「めっちゃ軽いし頬っぺた柔らかいわ!!?」

小動物を見る目でアルギエバは破顔した。……対するウイキッドはジト目で彼女を見ていた。如何にもこの様なタイプに遭遇したのは初めてな為かドン引きしている様にも見える（オトウール視点）。

ひとしきり楽しんだ後、ウイキッドを降ろした。降ろすや否や、ウイキッドはオトウールの後ろに隠れて少しだけ顔を覗かせた。彼女に遊ばれた為かウイキッドは頬を膨らませて剥れている。

「わー、ちょっと不機嫌な顔も可愛ええなあ……」

アルギエバの表情はもはや、ロリコンのソレにしか見えない。最も、オトウールとウイキッドはロリコンの言葉すら知らないのだが。

「うう……!!?」

「単純に警戒されているだけだと思っわ……」

オトウールの後ろに隠れて唸って威嚇している。ノコギリを出さないだけマシかも知れない。

「久々に可愛いモンをギョツて出来たわ。おっとと、脱線してまう所やったわ。ほな、次はウチの番やな。好きなん見てってな」

アルギエバは話題の軌道修正し、オトウール達から引き取ったブツを量子変換で拡張領域内に格納し、代わる形で量子変換で自分が持っていたブツを展開して2人の前に並べた。

「おチビちゃんにはコレをあげるで!!? 抱っこさせてくれたお礼って事で」

「うに? 何コレ?」

広げたブツ、その内の1つをウイキッドに見せた。それは小さな籠に赤い色で円錐形っぽい物体が複数入っている。表面にはブツブツがついており底には緑色の葉っぱみたいなモノが付いている。

「……それは、何かしら？」

オトウールもその物体を見た事が無い。見た限り、植物みたいなモノだと思われる。

「アンタらはA I Sやから、コレは見た事無いんちゃう？ コレは苳と言つてな。」

その昔、女尊男卑が世界に広まる以前の時代……子供から大人まで人気やったって言う甘い果物なんや。

でも、今のこの時代となつちや、栽培出来る所はかぎられてもうてな……。まー、そんな難しい話は終いにして、いつペン食べてみ？」

アルギエバは苳の蒂を取り、其々、ウイキッドとオトウールに渡した。ウイキッドはその苳を口に運ぶ。

「！」

その刹那、口の中で爆裂が発したかの様に頬に手を当て、瞳を丸くした。感じた事の無い味覚……今まで口にして来た、腐かけた人肉や虫の足やら頭の苦く不味い味、更には蜚の味の味とは雲泥とも呼べる味覚の差があつた。

「……何、この味……？」

飲み込んだウイキッドはそう綻びながら呟いた。まるで、感情が溢れ出しており嬉しいと言う感情が顔に出ていた。

「信じられない……。こんな、こんな美味しい食べ物が存在していたなんて……!!？」

オトウールも苳の味を知って思わずそんな言葉が溢れた。今まで、口にした事の無い味だったからだ。

「あはは、初体験つて言うとなつちやでなく。その味は『甘い』つて言うんやで。覚えておいて損は無いで。今のご時世、滅多に口に出来へん代物やしな」

苳は残り18個程。

アルギエバが言うには今の時代、苳と言つた果物と呼ばれる種類の植物は育てるのが難しくなつており、数が少ない……希少品だと言う。

大半のコミュニティは女に対して差別的で酷い扱いである事が常

識的なのだが凡そ1割にも満たない極々一部のコミュニティでは女に対する扱いはまだまともらしく、其処で仕入れたと言う(その1割にエストレヤ・コミュニティも含まれていると言える)

普通ならばかなり高額で取引されるが今回、ウイキッドで愛でさせて貰ったお礼と言う事でこの母は無償で譲るとの事。

「さあさあ、他にも色々あるから見てってな!!? ウチもええもんを結構、貰ったから奮発すんで〜?」

そう言いながらオトウールやウイキッドが気になったモノを説明するアルギエバ(しかしウイキッドは半分以上、理解出来なかった)。「ふんふん、メインエンジンの修理で鋼材関連が欲しいって訳やな。それなら、こつちとかどうや?」

オトウールは自分達が如何言う経緯での作戦行動中か説明するとアルギエバはその要望に答えて拡張領域からまた別のブツを量子変換で展開して取り出した。

「合金の塊って奴やなく。確か、工具鋼って奴やったかな。コイツを売ろうにも買い手が付かなくて困ったたんやわ。どや?」

日夜、エインヘリヤルと戦争するしか無いコミュニティ相手ならば買い手が付くかも知れないがアルギエバは女。殆どの場合、向かえばA I Sとして拿捕されるのが関の山だ。

そんな訳でアルギエバが売り付ける相手に合金を加工出来る者はほぼ居ない。『金属の塊を買ってどうしろと?』と言う返答が返ってくるだけだ。

「……使って大丈夫なの?」

「其処はウチにも分からへんわ。けど、アンタらの所有者は分かるんちやう?」

判断は紫に委ねるのが1番だろう。

あくまで自分達は使えそうなモノを片っ端から回収しろと言う命令を受けただけだ。モノの良し悪しなど分かる筈も無ければ期待もされていない。

「分かったわ、貰えるだけ全部、頂戴」

「商談、成立や!!? ほな、全部あげちやうで!!?」

取引が成立してオトウール達は工具鋼と呼ばれる合金を入手した。
「……ええ商談やったで。そろそろウチも移動せえへんとな。流石に地上における甲龍もどつか行つたら」

「ええ、そうだと良いけれど……」

「そない考え過ぎたらあかんで!!?　ほな、また何処かで商売させて貰うやさかい。2人とも、死んだらあかんで!!?」

広げたモノ、購入したモノを拡張領域に納めた後、アルギエバはそう言い残してオトウール達が歩いて来た方向へと歩き出して行つた。

「今の時代、あんな人も居るのね」

「うに……!!?」

エストレヤの紫やメサルティムを始め、自分達A I Sを兵器や奴隷として見ない者達も少ないが存在している。大局的に見れば少数派で、大半の人間はA I Sは兵器や使い捨ての道具程度の存在なのだろう。それでも、ちゃんと見てくれる者達が居るのならば希望は持てるかも知れない。

「さあ、立ち止まっては居られないわ。早く、エストレヤへ戻りましょう」

「ん」

ウイキッドをおんぶしてオトウールは雨水管の先へと再び歩き始める。暫く進めば菅の先が行き止まりになりハシゴらしきモノが見えて来た……。

帰投前進

「うにゆ？ 此処は……？」

長いハシゴを登った先には少し開けた空間が広がっていた。照明を当ててみるが見た事も無いような物が多数、見える。

「此処がポンプ所って呼ばれる場所なのかしら……？」

『……オトウール様、ウイキ姫様!!?』

「あ、すぴか」

その時、無線の電波が繋がったのかエストレヤから通信が入ってきた。その声はスピカのモノである。

『……お二人共、ご無事ですか?』

「ええ。オーナーの言うポンプ所に到達したわ……。中は暗いから灯りが無ければ何も見えないわね」

『良かった……。繋がらない間、雨水管の中でISに襲撃されてしまったのかとヒヤヒヤしていました……。』

「幸い、遭遇はしなかったわ……。それよりも先に外に出るのが先決ね。……それで、ISやエインヘリヤルとかはどうなったの?」

『ヴァルキリー種はこの周辺地域から離脱しました。同時に統率下にあったエインヘリヤルの大群も四散して行きました。エストレヤ周辺にもエインヘリヤル及びISの反応はありません』

『……そう。本当に情けないわ……。ヴァルキリーが現れただけでエインヘリヤル相手に逃げるしか手が無いなんて……』

『気に病まないで下さい。あの数が相手では多勢に無勢。一息に飲み込まれて終わりです。……勿論、そうは言っていない時も来るかも知れません』

「……必ず来る」

スピカの言葉にウイキッドはそう断言する。ISはそんな甘い思考回路をしていないと。

「ええ……。それまでに私達も強くならなきゃ行けないわ」

『……そう、ですね。一先ず、今作戦の目標は概ね達成出来ていま

す。ですので寄り道せずに帰投して下さい』

「分かったわ……」

ポンプ所の中を移動して扉を見つけたら鍵なんてモノは探しても見つからないので、物理的に破壊して突破して外へと出た。

ポンプ所は河原近くに建てられているようで、長年放置され川付近は雑草が生い茂っているのが見える。

『お二人の位置情報を更新しました。其の儘、南……ええ、はい。其方の方面へ向かって進んで下さい。そうすればエストレヤが見えて来る筈ですの』

○

無事に五体満足でエストレヤに帰投出来たウイキッドとオトウーはその足でエストレヤのメインエンジンで修理を進めている紫の下へと向かい作戦報告と共に確保した物資を提出した。

「ふむ。……適当な金属製品が見つかると思っていたが……よもや合金を見つけるとはな。何処で見つけたんだ？」

オトウールは雨水管で各地を流浪する放浪商人アルギエバと出会い、自分達がホームセンターで見つけた金属製品と彼女の持つ商品との物々交換による取引をして手に入れたと紫に説明した。

「……何でも、こうぐこうって言ってた」

「ふむ、本人はそう見たのかも知れんが……コレは合金工具鋼じゃないな」

アルギエバは工具鋼と称したが、紫はこの鋼材は工具鋼では無いと判別した。

「違うの……?」

「ああ、これは機械構造用合金鋼と呼ばれる種類の鋼材だよ」

「何故、一目見て分かったの？」

「合金鋼には用途別や合金元素の容量及び種類に合わせて区分する為に材料記号が定められている。コレは刻印されているタイプだった。その記号を見て分かった。」

で、肝心のコイツは合金加工されて実際に用途別加工される以前の状態だ。この状態から各種、用途に合わせて加工して行くんだ」
「うににに？」

紫の説明はウイキッドには理解出来ず小首を傾げて疑問符を浮かべている。かく言うオトウールも同じく分からない単語が多くて話が分からない。

「……………簡単に言えばコイツを使えばエンジンの修理は可能だと断言出来るって事だ」

更に踏み込んで言ってしまうえば、紫にとって今一番に欲しかった鋼材とも言える。

ホームセンターで見つかる金属製品を掻き集めて修理してもメインエンジンが航行に耐え得るか不安要素が多かった。

「うにーっ!!？」

「……………しかし、アルギエバ、か。コイツは何処ぞの加工場廃墟とかで見つけたのだろうか。……………一先ずその名前、覚えておこう」

こんなISやエインヘリヤルが跋扈する世界を一人で渡り歩く商人……………。一部のコミュニティと取引をして、リムドロップやコミュニティ外の自治集落とも取引して生計を立てている……………。

しかし、本人の目利きの能力は兎も角、取引相手としては価値はあると判断出来た。

「他にもイチゴと言うモノも貰えたわ。栽培？出来る所は少ないらしいけど……………」

「美味しい……………」

そう言いウイキッドは苺を拡張領域から1つ取り出して口に含んだ。

「苺、か。そりゃ珍しいモンも取引しているんだな。栽培に関しては確かに難しいだろうな……………この時代ならば尚更だ。放っておいても

そこら辺に生えて来る雑草とかとは訳が違う」

「違うの？」

「うむ。俺達が今居る此処らの大地は多雨湿潤気候と呼ばれる気候地域でな。苺を栽培するには余り向いているとは言えないがビニールハウスを用いる事で栽培が出来る体制がかつては整えられていた。が……今の状況じゃあ苺を栽培出来る余裕がある場所は非常に限られているだろうな」

「うー……」

「……うーん、良く分からないけれど、そんなに手に入らないって事かしら？」

「そう考えてくれ。兎も角、その苺は君達で食べると良い。今回の任務の成果としてそれ位の報酬はあつて良いだろう……。さて、報告はこの程度で充分だ。俺は速やかにエンジンの修理に取り掛かりたいからな」

2人の報告は充分だと切り上げて、紫はエストレヤのメインエンジンの修理に取り掛かる旨を告げる。

「分かったわ。修理にはどれくらい掛かるのかしら？」

「そうだな……。君達が出撃中にエンジンのイカれた所をざっと見たから……。後は回収した合金の加工やら、取り付け、交換を諸々込みで考えて……。凡そ4、5日くらいは掛かりそうだな」

紫は修理には4、5日は掛かると答えた。

「その間には出撃に関しては緊急事態を除いて無しだ。で、その間にメサルの授業で色々、学習しておいてくれ」

「うー」

修理中の間、ウィキッドとオトウールは勉強するようにと命令された。2人ともまだまだ読み書きが覚束ない状態だ。最低でもひらがな位は読み書き出来るようになってもらいたい。流星に識字出来ないのは不憫だから。

「と言う訳でメサル!!？」

「お呼びで御座いませうか、ご主人様」

紫がメサルタイムの名を呼ぶともはや当然の如く、彼の背後からメ

サルタイムが姿を現した。

「俺がメインエンジンの修理期間中は勉強を見てやってくれ。4、5日は掛かるから、纏まった時間は取れるだろうからな」

「畏まりました。他には？」

「特に無いな。勉強の進め方は任せる」

「はい、畏まりました。では、お二方、参りましょう」

メサルタイムはオトウールとウイキッドを連れてエンジンルームを後にした。

「さあてと、何はともあれ欲しかった合金が手に入ったんだ。オーバーホールと行こうか……!!？」

紫は鋼材が手に入ったので本格的にエンジンの修理に取り掛かる事にした。

嚙呑篇

一難去つて

翌日。ウイキッドとオトウールに宛てがわれた部屋にてメサル
タイム主導による勉強会が行われていた。

「ね、わ、む……？」

机の上に広げられているのは紙。

其処にウイキッドはペンを握って拙い動かし方で文字を書く練習
をしていた。……しかしながら、モノの見事にとても読めそうには見
えない落書き同然の文字（紫が様子を見に来た時、その文字を見て『ま
るで阿比留草文字みたいだな』と）になっており、読める字を書くに
はまだまだ時間が掛かりそうだ。

「……あ」

「本日、25本目ですね。オトウール様」

「ご、ごめんなさい……。力加減が難しく……」

オトウールもオトウールで指の力でペンを押し折ってしまうなど
苦戦していた。

モーニングスターと言う重量級の武器を振り回している上に環境
柄、体力を使う状況しか無い為に臂力が強い。

その為、オトウールはペンや鉛筆と言った小さく耐久性に乏しいモ
ノは簡単に粉碎してしまい、先ずは指の力を加減する練習からになっ
てしまっている。その為、事実上書けない状態だ。

「お二方、少し休憩致しましょう。煮詰めても良いとは限りませんの
で」

「うにゅ……」

メサルタイムは1時間経つごとに休憩を挟む事にしていて。詰め
込み教育と言うのは余り良い効果には繋がらない事を本人は知って
いるからだ。

メサルタイムは部屋を退室した後に、飲料水を入れたボトルとコップを持って戻ってきて、コップに水を注いで2人に渡した。

「焦る事はありません。ゆっくりと理解して行きましょう」

「うにー……」

「ええ、ありがとう……」

「コレでもコップを持つのも苦労した方であり、今でも油断すれば握り潰して砕いてしまう。」

「……して、オトウール様。お一つお聞かせ願えないでしょうか？」

「……？ 何かしら？」

水を口に含んだ後、メサルタイムはオトウールにある質問を投げ掛けた。常々、気になっていた事でもある。

「……オトウール様は何故、ウィキッド様を『姫』とお呼びになるのでしょうか？ ご主人様もその件に関しては個人の都合だとして深くは追求しない事にしていましたが、僭越ながら気になりました」

紫もスピカもその件には口には出さなかったがメサルタイムは敢えて訊ねた。何故、オトウールはウィキッドを『ウィキ姫』と呼んでいるのか。深くは聞かず自分達もそう呼んでいたが、やはり気になってしまった。

「……私も何故、そう呼んでいるのか余り覚えていないの。気が付けばそう呼んでいた……だからその理由に関しては、答えられないわ」
オトウールもオトウールで何故、姫と呼んでいるのか良く分かっていないと答えた。

「うにー……？」

オトウールの膝の上に座っているウィキッドは疑問符を浮かべながら彼女の顔を見上げていた。

「成程……。答えてくれてありがとう御座います。オトウール様」

「私からも質問。何故、それを聞いたの？」

「はい。コレから東京コミュニティに向かうのですが……:場合によっては貴方方もご同行せざるを得ない状況が発生するかも知れません」
「……」

無論、2人はAISとして手枷や足枷と言った拘束具で全身を拘束

された状態で衆目に晒される事になる。

「東京コミュニティは大規模なコミュニティ。その為、貴方方が遭遇した人間達とはまた違う思想を持つ者達も跋扈している事でしよう。そんな環境、人前で『姫』と言う単語は余り使わない方が良いでしょう」

「……刺激してしまうの？」

「何とご説明しましょうか……。『姫』と言う単語は遙か昔、王族と呼ばれた特権階級の女性への敬称とされてきました。

今となつては王国も王族も存在しませんが……。コミュニティの一部の人間達にとつては目障りや敵意を招くやも知れません。『姫』と言う単語は女性への敬称故に女尊男卑の思想を強く連想させます」

前半は良く理解出来なかったが、後半は理解出来た。つまり、他の人間達から見て敵意を見せていると思われかねないと言う事だった。

埼玉コミュニティでも自分達に対する仕打ちの酷さはそれに起因していたのだろうか？

だとすれば知らずの内に、苦痛を強いてしまっていたのかも知れない。

「……ウイキ、ちゃん……。!!?」

「うに〜?」

オトウールは複雑な気持ちでウイキッドを見下ろす。しかし、本人は何時もと変わらない表情を見せて後頭部を自身の胸へと押し付けている。

「……メサルティム、さん。無知……。と言うのは本当に恐ろしいのね……。私、知らずにそう呼んで……。ウイキちゃんを傷付けていた」
「……過ぎた事を嘆いても仕方ありません。人は間違いを認めて、初めて前へ進めるのです」

後悔するオトウールに対してメサルティムはそう慰める。過去は過去、今は今である。自分達はもう埼玉コミュニティでは無くエストレヤ・コミュニティの所有物である。

「さて、気が滅入るお話は終わりに致しましょう。さて、休憩もこの位にして……。再開しましょう。ウイキッド様、オトウール様」

「うにー」

「ええ……。過ぎた事を嘆いても、何も始まらないわ」

『あの、メサルに御二方。少し宜しいでしょうか?』

休憩に区切りを付けて再開しようとしたそのタイミングでスピカから無線通信が飛んで来た。

「……お姉様、どうなされました?」

「何かあったの?」

『……実はこのエストレヤに複数の人間が接近して来ているのを艦橋から目視で確認されました』

「……人間が? オーナーが言っていたリムドロップ、なのかしら?」

「あるぎえばみたいな人かも……」

スピカはオペレーター故に普段は艦橋に滞在している。それ故に艦橋から外部が見えた時、複数人の人間が此方へ向けて接近中だと言う。

「お姉様、リムドロップであれば自らコミュニテイ関連の施設に近くとは思えません。始末されるか、AISとして捕獲されるかの何方かですのうで」

或いは何も理解出来ず、もしくは何も知らない者達、か。

『えーと、それが確認出来た全員が似た様なデザインの白い制服みたいな服装をしています。風雨に晒されたのか汚れている様にも見えますね……。ほぼ全員が年齢は10代半ば、と思われれます』

「……白い服、しかも同じデザインで同じ年齢層の集団、ですか。お姉様、その光景を映像として此方に中継出来ませんか?」

『少し待って下さいね。今、出しますのうで』

暫く待つと部屋の中に空間投影されたウィンドウが表示された。

「わー……。何か見える……?」

『ふふん、お二人に渡してある無線機のカメラ機能もこの様に映るのですよ』

空間投影ウィンドウに見えた数人程度の集団を見てオトウールは気付いた。白い服装……。これは、確か……。

「この服装、見覚えがあるわ」

「あー、あの時に見た」

「お二方、ご存知あるのですか？」

間違いない。あの騒がしい人間達が最初、身に纏っていた服装である。

「ええ、確か『IS学園の生徒』だと名乗っていたわ」

「過去とか未来とか言ってた……。そして、今を否定してばかりだった」

「……IS学園、の生徒達……ですか。過去からこの世界にタイムスリップして来たと言う……」

埼玉コミュニティ所有のAISを一時、収容していた事があった。そのAISは過去の世界からこの世界に迷い込んで来たと言張っていた。

俄かに信じ難い話ではあったのだが、AISにしては識字率も高く、言葉が理解出来る。

だが、この今の世界を創り上げた根源的な元凶とされる女尊男卑でもあった。

彼女達の女尊男卑思想は正直な所、メサルタイムにとっても目に余ると言わざるを得ない。

「この件に関しては私達だけで判断は出来ません。速やかにご主人様のご判断を仰ぎます。お姉様はかの集団の動きに注意してください。

オトウール様、ウイキッド様。勉強は一時中断とさせて頂きます」

「ええ、緊急事態と言えるかは微妙だけど理解したわ」

「おーなーの所に行く。武器、造るって言っていたから」

結果、メサルタイムはオトウールとウイキッドを連れて紫が現在、居るであろう艦内の製造場へ向かった。

良識は骸へと成り果てて

製造場へと足を踏み入れると、甲高い高音が鳴り響いているのが耳に入り込んで来た。如何にも、今加工中だと言わんばかりの作業音だ。

音のする方向へ向かって見ればすぐに紫の姿が見えた。

「ん？ メサルにオトウール嬢達じゃないか、どうした？」

紫はメサル達の姿を認めると作業の手を止めて此方へ振り向いた。腰のベルトには多数の工具類が吊され羽織っている上着にも様々な工具が頭を覗かせていた。

「と言う前に、丁度良かった。オトウール嬢、ウイキッド嬢。ちよつとこつち来な」

「……………何かしら？」

「うにー？」

紫は丁度良いと言い、オトウールとウイキッドを呼んで近くに來させた。作業台の上には自分達が普段から使っているモーニングスターとノコギリと言った武装が置かれていた。

「今回は合金が手に入ったからな……………メインエンジンのパーツを造る傍らで余った奴や他の金属を使って君達が使う武装を改めて造り直した。今の時代は資源不足だからな、余す事なく使わなければ……………。兎も角、持ってみろ」

前回はなけなしの材料で造った急造品だったが、今回は材料を確保した為にちゃんとした武装として造ったモノである。以後、この武装を基盤にして改良や改造を加えて行くつもりであるとも説明した。

「おお……………!!？」

「……………持ち手の掴み易さは変わらないわね。……………所で、此処の窪みみたいなモノは何かしら？」

オトウールは持ち手にあるトリガー部分の近くに窪みの様なモノが追加されていた。ウイキッドの持つノコギリにも同様の構造が追加されているのが見えた。

「ああ、それか。君達の武装にはISのシールドバリアを中和させる機能を搭載していると以前に説明したな？」

「ええ……」

絶対防御やシールドバリアがあるが故にISは凄まじく理不尽な存在。しかし、発見した技術によりISのシールドバリアを打ち破る術が確立され、実証された。しかし、3秒しか継続出来ず尚且つ、1発限りしか使えないと言う大きな制約を抱えていた。

「3秒かつ1回しか使えないんじゃないや話にならん。ISが複数体同時に攻められちゃ勝ち目が無いからな」

「ええ……その通りだわ。それにヴォルヴァやヴァルキリーも控えているのだもの」

「……立て続けに来られたら無理」

ISを一機倒して終わりでは無い。既に何百、何千ものISが増殖している現状でそんな状態では勝ち目なんてモノは無い。

「そのシールドバリアを中和させるエネルギーなんだがまだまだ改良とかが必要でな。そのエネルギーを外部かつその場で供給出来る様にしようと思案中だ。まあ、まだ未完成なんだがな」

「……説明されても私達じゃ理解は難しいから、完成したら分かりやすく教えて頂戴」

「うむ。そうしよう、现阶段では机上の空論でしか無い」

そう告げ話を切り上げる。ウィキッドとオトウールは其々の武装を量子変換させ、ネックレス状の携帯へと変換させ首に掛けた。

「……………話の腰を折ってしまったな、メサル。何かあったのか？」

「いえ、全てはご主人様の御心のまま。ご心配なく」

其処で蚊帳の外であったメサルタイムに話を振る。メサルタイムも気にせず話を繋げた。

「スピカより、当エストラヤに向けてIS学園生徒と自称する者達が接近していると報告が来しました。内容が内容ですので、口頭での報告です」

メサルタイムはこの案件は自分達で判断するのは難しいとして紫の判断を仰ぐ事にした。

「ふむ……。以前の連中と同類、か」

凰達は埼玉コミュニティ所有のA I Sだった。その時は返還要請が正式に来た為に返還した。

「また何処かのコミュニティが壊滅でもしたか？」

埼玉コミュニティが全部有しているとは限らない。コミュニティ間でA I Sの売買も行われている。そのコミュニティが壊滅して野放しになったのか……。

「いえ……。状況証拠的に如何にもコミュニティに拿捕される前の状態の様です。オトウール様とウイキッド様が言うには全員が白い制服を纏っていた、と」

A I Sならばほぼ確実にA I Sスーツを身に纏っている。それ以外ならば別の用途か、或いはリムドロップの可能性がある。

「ふむ……。タイムスリップ云々は眉唾物っちゃそうだが……全員同じ箇所に飛んだと言う保証は無い、か」

如何言う経緯でそうなったかは考察してもキリが無い。その辺は考慮する必要は低い。

「如何致しましょう？」

「俺が欲しいのは戦闘員だ。荷物は要らん」

最低でもI Sに勝てるA I Sでなければ保有する気になれない。それにI S学園の生徒だと言う者達の態度は既に知っている。タダ飯喰らいは必要ない。

「……うにうに」

「ん？ウイキッド嬢、どした？」

その時、ウイキッドは紫の上着の裾をくいくいと引っ張って主張していた。

「……売ったら？ A I Sってお金で売ったり買ったり、できるから」

ウイキッドはその者達を売り捌けば良いと主張した。確かにエストレヤは現在、金欠状態であり態勢を整えるにもまずは資金が必要不可欠だ。その中で1番手っ取り早いとされえいるのが捕獲したA I Sを売却する事だ。

「……置いておいても役に立たないのならそれが良いんじゃない？」

今、お金が無いんでしよう？」

ウィキツドの主張にオトウールも同意する。場合によってはエストレヤも他コミュニティからオトウール達の『家族』を買う事になるかも知れない。それに、既に地獄へ引き摺り落としてもいる、躊躇う必要は何処にも無いのだ。

「ふむ。どの道、東京コミュニティに行くからな。其処で捌いて今後の予算に充てるとしよう」

2人の主張に紫は納得した。今更、自分が善人だと思つては居ない。他のコミュニティよりは多少マシ程度の存在でしかなく、必要とあれば下衆な真似も辞さない。それに此処で見捨てて野垂れ死ぬよりも自分達の糧にした方が何倍も有益だ。

「東京コミュニティは大規模なコミュニティです。戦力にならずとも、愛玩動物や性奴隷としての需要はある事でしよう」

メサルティムもその方針で進める旨の発言をする。紫が最善と判断した内容に否定はしない。

「よし、メサルティム。少し、苦勞を掛けてしまふな……。売却の契約締結が完了するまで頼んで良いか？」

「ご安心を、万事このメサルティムにお任せください」

IS学園生徒達は女尊男卑全盛期の連中だ。どんな言動が飛び出すか分からない。AIS達もそうだが、メサルティムもスピカも全ての元凶である女尊男卑を快く思っていない。

「オトウール嬢とウィキツド嬢も、少し辛抱してくれないか？ 此方も極力、エンジンの修理を終わらせる様にする」

主に食事の事に関してである。人数が増えればそれだけ、1人当たりの量を削らざるを得なくなる。其方の意味でもカツカツなのだ。

「気にしなくて良いわ。牢獄や拷問される事に比べたら、些細な事だから」

「ん。大丈夫……!!?」

その後、IS学園の制服を纏った少女達、8人程がエストレヤに接触した。『見ず知らずの場所に来てしまって助けて欲しい』と言う事。

エストレヤの方針としては彼女達を東京コミュニティにて売却す

る方針を固めた為、一先ずは保護する形を取り、エストレヤへと迎え入れるのだった。

溝は越えられぬ

エストレヤは突然、現れたIS学園の白い制服を纏っていた少女達を保護した。人数にして8名だ。

「助かったあ……。一時は如何なるかと思つたわ……。!!?」

「本当に如何なっているの!?? IS学園に居た筈なのに……」

「……街も荒れているし人も居なかつた」

「人が居る場所があつて助かつたあ……。もう、何時間も歩きつぱなしだったもん……。!!?」

「織斑先生やまぴーは何処? 織斑君や専用機持ちの人達も見つからないし……」

「私達だけ、変な世界に来ちゃつたんじゃ……」

エストレヤの出撃ゲート付近にて少女達は安堵の表情を浮かべて思わず床に座り込んでいた。身に纏っている白い制服も汚れていた。破れている箇所も見受けられる。

「あ、あの……。助けてくれてありがとうございます!!?」

その様子を眺めていたメサルタイムに声を掛けた1人の少女。見た限り1番に声を掛けてきた為、他の少女達の纏め役を担っていると予想される。

「さて、先ずは先にお尋ねしますが……。貴方方はIS学園の生徒、で間違いは無いでしょうか?」

「え、あ、は、はい。そうです!!? IS学園の1年1組の相川清香です。つて、IS学園を知っているんですか!??」

「はい、存じています。しかし……。数十年以上、昔……。人類に叛旗を翻したIS達によつてIS学園と言う施設は物理的に滅ぼされました」
「す、数十年以上前!?? ISが人類に叛旗を翻した!?? え、な、何を言っているの!??」

その言葉は余程、衝撃的だったのか清香は思わず叫んだ。その言葉に周りで休んでいた少女達も何事かと意識を向けて此方に視線を向けて来る。

「言葉通りの意味です。少なくとも後世ではそう伝わっています」

メサルタイムは簡潔に言葉通りの意味だと告げる。本当にその通りであり、現在進行形でISはエインヘリヤルを率い、人類に対して剪定と言う名の淘汰を課し続けている。

「数十年昔って……。もしかして、此処って私達が生きていた時代よりも未来の世界!?!?」

「う、嘘!?!? た、タイムスリップしちゃったって言うの!?!? 未来に!?!?」

「待って!?!? ISが人類に叛旗を翻した!?!? い、意味がわからない!?!? 未来じゃ何が起きているの!?!?」

「ISが……。女尊男卑の象徴が……。人間に反抗した!?!? 意味が、分らない……。!?!?」

「……。彼方此方廃墟になつて、人々は何処に……。!?!?」

「……。街とか道路もボロボロになつてた……。ISが人類に叛旗を翻したって事は……。?」

信じられないと言い、口々に驚愕の悲鳴をあげる少女達。未来と言えばISの技術が進歩してより高度な文明となり女尊男卑故に素晴らしい世界が広がっている、と考えられていた。しかし、現実是非情であり真逆の衰退した光景が広がっている。

その様子をメサルタイムは半ば失望した様な面持ちで眺める。
まるで何も理解出来て居ない、と。

「待って……。!?!? 何で私達がIS学園の生徒だつて……」

その中で驚愕の事実にはショックを受けつつも清香はそう訊ねる。
50年も未来だとしても初見でIS学園の生徒だと見抜けるのだろうか、と。疑問を呈した。

「以前に『自分達はIS学園の生徒』だと名乗った方達を一時的に保護しました。そして、その服装がIS学園の生徒の制服だとも聞きましたのでよもやと思ってお尋ねしました」

不自然にならぬようにメサルタイムは言葉を選んで説明する。

彼女達が零した言葉から推察するに彼女達は運良く『A I S狩り』に出会す事なく彷徨っていた様だ。

少し前にこの周辺では複数のコミュニティによるA I S狩りが行われていたと言うのに、本当に運が良いと言える。この瞬間までは。「え!?!? あ、あの!!? 織斑君とかは居ました!?!? あと、専用機持ちの人達とか!?!? 今、何処に居るんですか!?!?」

「織斑先生や山田先生とか此処に居ませんか!?!?」

「オルコットさんでもデユノアさんでも良いし、2組の凰さんでも良いから、専用機持ちには居ないの!?!?」

その言葉を聞いたのか堰を切ったかの如く、口々に救いを求めて叫び出す少女達。彼女達にとってその者達が救済を齎す者達の象徴なのだろう。

「貴方達が口にしたその方々は私達は存じませんが……一時的に保護した方々は『逸れた生徒達を探さなければならぬ』と仰った後、人が集まるであろう東京コミュニティへと向かいました」

実際は凰と言う少女は知っているし、彼女を含めた少女達は既に埼玉コミュニティの所有物だった。それ故に埼玉コミュニティの要請に応じて全員、埼玉コミュニティへ返還した。その後の事は知らない。

「コミュニティ……?」

「I Sの攻勢により世界は変わりました。

既存の兵器は淘汰され人類の戦力はI Sに比重を置いていた故に成す術も無く人類の生存圏は瞬く間に縮小の一途を辿り……生き延びた人々は共同体となるコミュニティと呼ぶ活動拠点を各地に造り、其処が人類にとって安全とは言い難いのですが活動可能な生存圏となりました。

故にコミュニティ以外の地域は全て危険地帯となり何時、I Sに襲われて命を落としても可笑しくありません」

実際はI S以外にもエインヘリヤルの方が遭遇率が高いのだが……。

「……………」

「そして、此処はエストレヤ・コミュニティ。数少ない移動要塞型コミュニティです」

「い、移動要塞……!!?」

「はい。現目標は所用があり東京コミュニティへ向かう途中でした。……しかし、エンジントラブルによりオーナー……このコミュニティのリーダーが緊急修理で忙殺されているのです」

「……えーと、話を統括すると……私達は未来の世界に來ちやつて……他の人達、織斑先生達も未来の世界に來ていて……今、東京コミュニティに居るって事ですよね?」

「はい。彼女達は今も東京コミュニティに居られるかは流石に分かりません」

「……お、お願いがあります。私達もその東京コミュニティへ連れて行ってくれませんか!?」

街は破壊されて方角も分からない。それにこのコミュニティは移動要塞で東京コミュニティへ向かう途中だと言う。ならば相乗りするべきだと清香は考えた。

「当コミュニティは、運営上かなり切羽詰まっています。備蓄されている物資も乏しい状況です。それでも宜しいですか?」

流石に此処は聞いておかねばならない。変に騒動を起こされ紫の手を煩わせる訳には行かないからだ。そうなれば自分達の計画に狂いが生じかねない。彼女達を穩便な形で東京コミュニティへ輸送し売り捌き、資金を集めなければ今後の予定に影響が出てしまう。

「え、其処まで……酷いんですか?」

「……今の人類は常に資源不足に悩まされています。ですので、主に食糧面でカツカツの状態です。一人当たりの食事も少ないと考えて頂く必要があります」

その言葉に少女達は悩んだが……コミュニティ以外では危険であると言われていた。

他の生徒達、特に『織斑君』と東京コミュニティで合流すれば事態は好転すると信じて多少の不都合は我慢しようとする全員がそう判断した。多少の我慢をすれば東京コミュニティへ連れて行って貰える、と。

メサルタイムが内心では暗い微笑みを浮かべている事を知らずに
……。

裏の無い善意は無い

オトウールとウイキッドは件の自称IS学園生徒とは関わらない方針にした。

似た様な年齢と思われるが見ている世界は大きな隔たりがあるからだ。要塞艦とは言え、遭遇する可能性はあるのだが……出来る事ならば彼女達が売り飛ばされる時までには相互認知しない様に努めた方が好都合だ。

そんな訳で、自分達の部屋に戻って中断された勉強の続きをする事にした。

「れ、わ、み……?」

「……ら、を、ぬ……。うーん、ペンを折らない様に書くのは難しいわ……!!?」

「焦る必要はありませんよ。さ、もう一度!!?」

現在、メサルティムが自称IS学園生徒を誘導しているので、代わりにスピカが2人の文字を書く練習を見ていた。ウイキッドもオトウールも揃って象形文字かと言いたい文字を何文字も書いていた。……まだまだ読める内容には程遠い。

何度も挑戦する事、約3時間程……。時刻は夕方頃へと差し掛かる。

「さてと、本日はこの辺で終了しましょう。……夕食の準備に入りますので暫く待っていて下さい」

エストレヤには食事をする為の食堂はある。しかし、現在は自称IS学園生徒の者達が居る。彼女達と鉢合わせするのは都合が悪い。その為、自室で済ませた方が良さそうだ。

「あと、メインエンジンの修理が完了していませんので、お風呂は無しとなります」

風呂を沸かす際にメインエンジンの動力を利用している。その為、メインエンジンが故障と言う事は否応無しに水風呂と言う事になる。

夜になれば地上は冷え込む……昔は地球温暖化と言つて気温が上がり続けていたそうだが、それも既に過去の話。その最大の元凶と言える人類が減少し、その文明も大半が破壊された。出す要因が減れば自然とあるべき姿へと還るだけだ。

「ええ、今日は殆ど勉強してただけだし……それに、1週間以上も水浴び出来なかつた事もあるから、気に病まなくて良いわ」

「……ん」

牢獄暮らしとなれば水を浴びせられるだけで済まされる。凍て刺す様な寒さの中では冷水を浴びせられ、凍える中、夜を過ごす事となる。A I Sの分際で風邪なんて引けば地獄を見る事になる。

それらに比べれば安いモノだ。

「……………。その、返答に困りますが、ありがとうございます」

そう返されてはスピカも返答に困る。色んな意味で申し訳ない気持ちも出て来てしまう。それ程までにA I Sの待遇は劣悪を極めているのだから。

○

「ご主人様、此方に居られましたか」

「徹夜すると、メサル。君が怒るだろうか？」

エストレヤのオーナーの執務室。即ち、紫の執務室にて、執務機の椅子に腰掛けて紫は部屋に入って来たメサルティムに声を掛けた。

メインエンジンの修理の目処は立っているし、メサルティム達に例の件で負担を掛ける為、徹夜してメインエンジンの修理をすればそれはそれでメサルティムが止めに来るのは目に見えて分かっている。

「はい」

メサルティムは書類を挟むバインダーを小脇に抱えており、そう返した。

「やれやれ……少しは大目に見て欲しいモノだな」

「ご主人様は歯止めが無さすぎます故。して、自称 I S 学園の生徒だと主張する彼女達の資料を作成しました。ご確認を」

メサルティムはバインダーに挟まれた資料を紫に渡す。その資料には保護された者達の情報が記載されている（メサルティムの観察による主観的な情報も記載）。

一先ず、流し読み。

顔写真と正式名称だけでも把握していく。最も金欠状態なので全員纏めて売っ払うつもりなのだが

「ふむ。殆どが日本名だな……コイツは悲惨な末路を辿りそうだな」

保護された者達は名称から日本人である事を認識して、紫は嘆息交じりにそう評した。

それは I S、女尊男卑の発祥……否、元凶の国出身かつ根源人種であるからだ。女尊男卑思想が最も根強くかつ総数が多い為、日本人種の A I S は特に強い憎悪に晒される事となるだろう。

「ご主人様、お茶をどうぞ」

紫が資料を見ている間にメサルティムはお茶の用意をしていた。そろそろ茶葉の備蓄も無くなって来る頃合だろう……そんな気がする。

「ああ」

「ご主人様、如何でしょう？」

「そうだな……。売却額に幅が出そうだよな」

備考欄のメサルティムの観察した際の感想から、女尊男卑思想がやはり強い……。A I S として運用可能かは未知数と言える。余りにも反抗的だと、兵器としては落第と言えるからだ。

「しかし、そんな事を言っても仕方ないな。東京コミュニティに音声通信を繋げる。メサル、下がっててくれないか？」

「はい」

メサルティムを一時退室させた後、紫は東京コミュニティの統合通信局へと連絡を入れた。

『ぎげんよう。オーナー紫』

真つ黒な空間投影ウィンドウ。其処から聞こえて来たのは人工音声に加工され男とも女とも分からない音声だ。

「突然の連絡、誠に申し訳ない」

『お気になさらず。ご用件を承りましょう』

「……明日から1週間以内に東京コミュニティへ入場予定だ。場所の予約を申し込みたい」

『移動要塞型コミュニティを有するのは貴コミュニティ以外に無いでしょう？ 東側ゲートからご入場頂き、管制塔の指示に従って頂きたい』

「東側ゲートか、心得た。次に……以前にも連絡を入れたが……我がコミュニティにも漸く目星のあるA I Sを確保したので、A I Sスーツと拘束具の類を発注したのだが、進捗は以下程だろうか？」

『要請があつた発注の件ですね。コード：O49とコード：U14のA I Sスーツ及び拘束具の準備は欠品無く完了しています。貴コミュニティが到着次第、受け渡しとなっております』

「確認したかったただけだ、感謝する。して、本題に入らせて貰う」

『お伺いしましょう』

「……今日、8名程の女のリムドロップを確保した。のは、良いのだが……我がコミュニティは諸事情で現状、A I Sを合計3名以上在籍出来ない」

女性ⅡA I Sと言う方程式が罷り通っている。しかし、例外もあるのだが自称I S学園の生徒ならば、必ずI S適性はある為にA I Sにされるのは自明だ。

『エストレヤは数ヶ月前にヴォルヴァの強襲で大打撃を受けていたね。その影響で資金不足、食糧不足、資源不足の三重苦に陥ったと』『ご理解痛み入る。エストレヤの今後の予算編成の為、その8名を売却したい。現在、紙媒体でその者達の簡易的な資料は作成しておりデータとして送信する予定だ』

『売却手続ですね、分かりました。差し支えなければ売却品の簡単な特徴をお教え頂きたい』

「ふむ。その者達は自称、I S学園の生徒だと名乗ったそうだ」

『IS学園……。まさか、白い服装をしていませんでしたか?』

——まあ、聞いてくるわな。IS学園といやあ、女尊男卑の巣窟でこんな世界に追い込んだ元凶……。誰もがそう知っている。

「ああ、その通りだ。……理解には苦しむが当人達の主張ではタイムスリップしたとか吐かしているが、私個人的な意見としては眉唾物の話だ」

『……。その真偽は然程、問題ではありません。分かりました。あ、失礼……。送信された資料が私の手元に届きました。拝見致します……。』
席を外したメサルタイムが資料を送り終えた様だ。

『お待たせしました。簡易的ではありますが資料を拝見しました。改めて資料を確認した後、翌日に売買見積り書を送信します。不備、疑問点があればご連絡下さいますよう』

「感謝する。要件は以上だ」

『では、担当部署に到達しておき、捕獲の準備をした上で貴コミュニティの来訪をお待ちしております』

通信は終了した後、メサルタイムが再び執務室に入ってきた。

「ご主人様、話は纏まりましたか?」

「ああ、俺達側から見れば問題無い」

「と、言いますと……?」

「……IS学園のワードに引つ掛かりがある様子だった。こりや、既に東京コミュニティに件のIS学園の生徒が拿捕されてAISにさされてるかもな」

IS学園の存在の悪名は今になっても伝わっている。何かしら思惑があるのだとしても個人的には興味が無いし、関係の無い話だ。

「他にも似た様なケースが発生しているのでしょうか?」

「かもな。だとしても、殆どのコミュニティは『IS学園の生徒』だの何だの名乗られても……。然程、関係は無い。女尊男卑思想ならば待遇はより悪くなるだけだ。何故……。そんな現象が起こっているのか分からんがな」

——IS側がそんな真似して何のメリットがあるんだろうな。まあ、こればかりは考えても仕方ない。

「明日にはメインエンジンの修理を完了させたい所だ。要らん荷物はさっさと降ろしておきたいからな」

我々の正義

自称IS学園の生徒達を回収して3日が過ぎた。紫がメインエンジンの修理を進めて漸く、最後のパーツを交換して修理がメインエンジンの完了した。

「……スピカ。エンジンを点火した。……どうだ？」

『……各種の稼働を確認!!? 艦体状況、オールグリーン!!? 異常は確認されません!!?』

「そうか……。では、現時刻を持って東京コミュニティへ向けて出発する」

『はい!!? 目標地点、東京コミュニティ東3番ゲート!!? エストレヤ・コミュニティ、航行を開始します!!?』

エンジンの修理が完了し、問題なく稼働した事を確認した。そして時間が差し迫っている為、東京コミュニティへと向けて航行を開始した。

○

メサルティムからメインエンジンの修理が完了して東京コミュニティへと航行を開始した事を聞いたウィキッドとオトウールの2人。

部屋の中では退屈だろうと言う事で、気晴らしも兼ねて艦橋へと足を運んでいた。

「よう、ウィキッド嬢とオトウール嬢。待たせたな……。もう聞いたかも知れんが現在、東京コミュニティへ向けて全速前進中だ」

艦橋の艦長席には紫が腰を降ろして待っていた。本人もエンジンの修理が完了して幾許か顔が綻んでいる様にも見えた。

「ええ……!!? やつと、……目的へ向けて前進するのね」

東京コミュニティへ向かう理由。それは紫が用意を整えたいと言う理由だ。それに加えて東京コミュニティは各地に点在するコミュニティを統括する最重要コミュニティ。即ち様々な情報が集約する場所と言つても過言では無く、オトウールが探している家族の情報にも期待出来る。

「おーなーおーなー、彼処、座って良い?」

オトウールも期待が膨らむ中、ウィキッドが空席となつているオペレーター席に指を示す。その場所は3段目の席であり、見晴らしと言う点では悪くは無い場所だ。

「ああ、構わんよ。現状、オペレーターはスピカしか居ないから機能するシステムは其方に回してるからな」

「うにっ!!?」

ウィキッドがオペレーター席に座るも身長が足りていない為、殆どコンソールで見えない。その様子に失笑したのかオトウールが抱き抱えて自分が座つてその膝の上にウィキッドを乗せる形となつた。

「此処、借りるわね」

「ああ、立ちっぱなしつてのもアレだろうしな」

エストレヤが前進し、風景がどんどん通り過ぎていく様が見える。やはり何処も彼処も荒廃しており、文明は崩れ去り廃墟街が広がっている。

「……やっぱり、何処も荒れ放題ね。エインヘリヤルやISの破壊活動の所為で見るも無惨ね」

「うゝ……」

「見慣れた光景ではあるが、復興の目処は立つ事は暫くは無いだろくな」

エインヘリヤルやISが存在する限り、人類の活動圏は地下へ地下へと潜る一方だ。その内、地上や空を知らない世代に移り変わって行く事だろう。……その前に人類が根絶しなければの話でもあるのだが。

「スピカ、このペースで行けばどれくらい到着しそуд?」

「現在の速度ですと、約2日程、可視圏内に達すると思われる。何か不安要素でも？」

「いや、東京コミュニティに連絡入れた際に1週間程って言っちゃったからな……。まあ、何事も無ければギリギリ間に合うな」

東京コミュニティの管轄内に進入出来ればエインヘリヤルの脅威はほぼ無くなる。規模は大きい為に所有するA I Sも多い事を意味している。

その後、エインヘリヤルの大群と出会す事もI Sが強襲して来る事も、果てやヴォルヴァが襲来して来る事も無く2日が経過した。

「見えて来たな。アレが東京コミュニティだ」

「ほえ〜……!!？」

三度、艦橋にやって来て定位置となりつつあるオペレーター席に腰を降ろしていたオトウールとウィキッドは眼前に見える東京コミュニティの全貌を目の当たりにした。

巨大な壁が聳えており、その奥は窺い知れないが少なくとも以前見た埼玉コミュニティの規模とは雲泥の差とも言える程、大きく見える。

居住区の類は恐らく地下に伸びているのだろう。地上にあった建物は再利用しているのかどうかは分からないが、兎に角巨大な街だと言う事だけは分かった。

「……東側、つまりこのまま直進してから管制塔の指示に従ってゲートを潜る」

「分かりました。その後は何か聞いていますか？」

「先に件のI S学園の生徒連中を売却の為にコミュニティの職員に引き渡す。で、その後にウィキッド嬢とオトウール嬢のA I Sスーツと拘束具の類を貰い受ける」

2人のA I Sスーツと他コミュニティで行動する為の拘束具を東京コミュニティに発注していた。

エストレヤで過ごしていると感覚が麻痺して来るのだが、本来A I Sには自由は与えられていない。平時においても拘束し隔離されるべき存在だからだ。

「……不服か？ オトウール嬢」

再び拘束されると言う現実を前に彼女に心境を訊ねる。彼女達からすれば情勢や現実を前に理解はするが納得は出来まいと言う配慮も含んでいた。

「ええ、当然よ。……でも、それが現実ならば受け入れるだけ。少なくともあのスーツには実用性はある事は認めるしかないもの」

裸になって土下座までして来たのだ。当然、覚悟の上だった。今更、掘り返すのも野暮と言えるだろう。

「そう言う事はもう2度と聞かねえ。野暮つたいし、鬱陶しいだろうしな」

「ええ、そうしてちょうだい。家族を取り戻す事が出来るのならば何でもする。好きな様に扱って」

「……ふええ、覚悟ガンギマリって奴じゃないですか」

艦橋の空気が張り詰めて来た事に対してスピカは涙目になって萎縮している。

「……さて、そろそろ管制塔に通信を繋げるか。オトウール嬢、ウィキッド嬢。2人の声が聞こえたら結構、マズいから黙っててくれ」

理由は『何故、AISに喋る権利を与えている？』と詰められる可能性が極めて高いからだ。エストレヤ内ならば問題無いのだが、外部と接触する際には気を付けねばならない。

「分かったわ」

「むにゅ」

オトウールはウィキッドの口に手を添えて黙らせる姿勢に入り紫が管制塔に通信を繋げる。

「此方、エストレヤのオーナー・紫だ。まもなく貴コミュニティへと到着する。指示を仰ぎたい」

『此方、管制塔。貴コミュニティの存在を確認した。ようこそ、東京コミュニティへ。其の儘、直進して頂きゲートを潜ってもらいたい。また、捕獲部隊の準備は完了及び、注文の品の準備も完了している』
「感謝する」

管制塔の指示に従い進路正面に聳え立つ大型のゲートを潜り抜け、

速度を落として徐行する。

『大型駐車スペースがある。その場所に停車して頂きたい』

ゲートを抜けた先にはコンクリート固めの大きな広場が見えた。陸路を中心とした搬入関連の発着場と言える。その一部区画を間借りさせて貰える様だ。

「売却予定のA I Sは自発的に艦から降りる様に仕向けるから、其方で回収して欲しい」

『了解。直ちにA I S捕獲部隊を向かわせる。此方で回収が完了次第、注文の品と売却金を渡す』

八刃の花束

エストレヤ・コミュニティは無事に管制塔から指示された位置に停車した。

『此方、管制塔。貴コミュニティの指定位置への停車を確認した。以後、発進手続が完了するまでその位置は貴コミュニティの領域と見做し、オーナー紫の許可無く立入禁止となる』

「感謝する。今から売却予定のリムドロップ……いや、自称IS学園の生徒達を自発的に降りる様に促す」

『此方、管制塔。了解した。直ちに捕獲部隊の出動させる。捕獲態勢が整うまで待つて頂きたい』

「了解した。其方の指示に従おう」

『感謝する。極力、速やかに完了させる様に努める』

管制塔からの通信は一時、途絶えた。

「さてと、彼方さんの準備が整うまで此方の方針を固めるか。時間は有限だからな」

事前に通達していたとは言え、東京コミュニティの捕獲部隊も直ぐには配置完了はしないだろう。その間に行動方針を纏める事にした。

「メサル」

「はい。件の自称IS学園の生徒達の売却手続の為に艦外へ誘導します」

話は聞いていた為にメサルタイムは簡潔に紫が言いたい事を理解していた。既に東京コミュニティの発着場に入っている。先に出してしまっても問題無いだろう。

「済まないな、嫌な役を押し付けてしまった」

「滅相ありません。ご主人様の御心のままに」

メサルタイムは頭を下げた後、艦橋を後にして件の者達が待機している場所に向かって行った。恐らく数分も持たない内に悲鳴が轟く事だろう。

「彼女達、自分達がして来た事に対して報いを受ける時、ね」
「むに〜」

オペレーター席に座るオトウールは自称I S学園の生徒達が本当の意味での現実を目の当たりにする光景を妄想しつつそう呟いた。
女尊男卑を肯定して今の世界を創り上げる事となった元凶……どんな声をあげようとも誰も擁護はしないと宣言事。

「俺達が割を食っているんだ。連中の進退など知った事じゃねえ……さて、前にも言ったかも知れんが基本的に俺が1人で東京コミュニケーション内へ向かう」

ウイキッドとオトウールはA I Sだ。

その事実に変わりは無く、連れ歩いたとしても彼女達は常に苦痛と屈辱に苛まれる事となる。観光など出来やしないし、A I Sには観光する権利は無いのだ。

「東京コミュニケーション内にツテがあつてな。ソイツを訊ねるつもりだ」

「……其処の点は私達は何も分からないから、何も言えないわ」

「ああ、その間は艦内を自由にしてくれ。ただ……外には出るなよ」

「言われなくても分かっているわ。拘束されていないA I Sを見られたら、何されるか分かったモノじゃないから」

「分かってくれていて、何よりだ。……さて、売却手続が済んで受け取る物を受け取ってから行動を始めようかね」

今頃、自称I S学園の生徒達は期待に胸を膨らませている頃合だろうが……実際の現実残酷だと言う事を直面した時、どんな顔を浮かべるのだろうか？

「皆様、無事に当コミュニティは東京コミュニティへと到着致しました」

エストレヤ・コミュニティは航行時にエインヘリヤルやIS、ヴオルヴァ種に遭遇する事なく無事に東京コミュニティの発着場へと到達した。

「遂に、到着したのね!!?」

「織斑君達は何処に居るんだろう……?」

「制服姿なら直ぐに見つかると思うけれど……」

ざわざわと騒ぐ自称IS学園の生徒達。そんな中、彼女達の中で中心人物であった相川 清香が口を開いた。

「此処まで送ってくれてありがとうございます。その……」

「礼には及びません。また、オーナーが話を通してくれました。当艦の乗降ゲートを通過して係員が案内してくれる事でしょう」

更には話を通してくれており、道案内の為の人員を手配してくれたと言う。最初は自分達で歩いて探さなければいけないのかと考えていたのだが、如何やら杞憂に終わりそうだった。

「と言う事は、誰かが東京コミュニティって所に滞在しているんですね……!!?」

「其処までの詳細は私には分かりません。何分、情報公開の権限がありませんので」

誰が居るのかまでは分からないとの事。だが少なくとも誰かは居ると言う事は判明した事は大きな前進と言える。専用機持ちか或いは織斑 千冬や山田 真耶と言った教員ならばこれ程、心強い事は無い。

だが、自分達と同じ一般生徒達だけとなると、状況は好転しない事だろう心配はある。

「そ、そうなんですか……えと、その」

「申し訳ありませんが、私は同行する事は出来ません。それから、私は少々込み入った事情があり東京コミュニティに立ち入る事が出来ません。不用意に姿を見せれば射殺されても文句は言えないでしょう」

から」

「じゃ、射殺って……何をしたんですか……?!？」

物騒な単語が飛び出して来た。射殺だなんて言葉、日本では聞き慣れない。荒廃化した未来になっても日本は日本だと言う楽観的な先入観が彼女にはあったからだ。それが人が集まるコミュニティならば尚更、だと。

「……申し訳ありませんが、お答え出来かねます。向かうのでしたら少々急いの方が宜しいでしょう。このご時世、時間に余裕が持てない方が多いので」

「え、あ、はい。そ、そうですね……その、お世話になりました」

清香はそう別れの言葉を告げて他の生徒達と一緒に乗降ゲートを通過してエストラヤから降りて東京コミュニティへと向かった。だが、降りて直ぐにこの世界の現実を目の当たりにするとは思わずに。

入場手続

東京コミュニティへと到着した。

メサルタイムの話によるとこのエストレヤのオーナーが東京コミュニティの担当部署に話を付けてくれていたらしく、案内係を宛てがってくれたとの事。

東京と言えばIS学園からモノレールでの発着駅。休日や夏休みの期間であれば出入りする事が出来た。しかし、未来の東京はどういう構造になっているか分からない。自分達の知っている東京の構図では無いのかも知れない為、この対応は素直に嬉しかった。

「織斑先生ややまぴーが居てくれれば、何とかなる筈……」

「彼方此方、壊れているもんね。集まるとしたら、人が居る場所でしょう」

「きつと皆、東京コミュニティに集まっているよ。そうしたら、希望はある!!?」

遭難等したら目立つランドマークの所に集まる……。遠くからでも目立つ場所があれば其処に人々が集まると考えるのが自然だからだ。専用機持ちや教員もそうだとしたら、きつと東京コミュニティに集まっていると彼女達は考えていた。

「……問題は東京コミュニティの何処に集まっているのか、だよね」

「案内してくれるって言うから大丈夫でしょ」

「東京なんだから、お腹いっぱい食べたいよ」

荒唐した未来に愕然としたものの、織斑先生達が居ると断定の判断した結果、何処か楽観的だった。何故なら今までの経験から『何だからだ』で何とかなると考えているからだ。

クラス代表対抗トーナメントの時も織斑 一夏が解決した。タツグマッチの時も織斑 一夏が解決した。臨海学校の時は何が起きたか知らないのだが、多分、専用機持ちが解決したのだろう。つまり、近くに専用機持ちが居てくれれば万事解決するという方程式が彼女達

の中に存在していたのだ。

取り敢えず、後の事は東京コミュニティに滞在する他の生徒達や教員達と合流してから考えようと清香達はエストラヤから昇降機を伝って東京コミュニティの大型駐車場へと降り立った。

近未来的な大型のビルが複数、聳え立っており周囲には大型車両や型落ちの戦車らしきモノも停車しているのが見えた。駐車場内を歩く者は男性ばかり、女性はほぼ居ないと言う点が少し不安であった。「えっと、案内してくれる人って誰かな?」

「降りたら直ぐに迎えが来るってメサルタイムさんが言っていたよ?」

「話を聞いてくれる人が良いなあ」

「織斑先生なら尚嬉しいよね? やまぴーも可!!?」

降り立った清香達。遠目からの視線に晒されるが、白い制服故に目立つ自覚はある。街中を歩けば同年代の他校の生徒達の羨望の視線を向けられるのは常だったからだ。IS学園はエリート校、3桁を上回る高倍率の中で通過したのだから尚更だった。

「ね、ねえ……誰か来るよ?」

東京コミュニティの人が迎えに来るとの事で降りた先で待機していると生徒の1人が此方に向かって来る一団を見つけた。当初、案内してくれる係員かと思ったが……。

——な、何か……物騒な雰囲気か……!!?」

男性達の集団。物々しい雰囲気纏っており、全員が銃火器等で武装している。

如何に女尊男卑全盛期の世代の彼女達でも、あの手の集団相手には臆する。一昔前の軍人と言った様相であり、生娘では態度では敵わないと言う事を嫌でも分からされる。彼女達が威張る事が出来たのは近くにISが存在していたからだ。だが、この時代はISは人類へ叛旗を翻した……頼みの綱は、無い。

その者達が此方へ向けて歩いて来る様子を見て内心、慄いた。

「ね、ねえ……アレ、ワンチャン……偶々、通過するだけって線は無い……?」

生徒の1人が震えながらそう口にする。だが、現実と言うモノは非情でありそして残酷だ。

「対象の群を確認。これより、制圧及び捕獲作業に移る!!? 反抗するならば多少、破壊しても構わん。A I Sは耐久性が高いからな。直ぐに自動修復される」

男性軍人の1人がそう宣言すると同時に一斉に生徒達に殺到して行く。

「え!!?・ちよつ、な、何つ、待!!? あごばツ!!?」

挨拶代わり顔面を殴られる。或いは硬い靴底で腹を蹴られ、情けない声を上げて行く。

「A I Sの分際で悲鳴をあげるか。実に忌々しい限りだ。貴様らには悲鳴をあげる権利も言葉を発する権利は無い」

——そんな、理不尽な……ツ!!?」

誰も彼もが寄って集って暴行を加えて行く。文句も抵抗の暇も無くただ、嬲られて行くだけであった。

女尊男卑の世界ではあり得ない光景、いいや真逆の光景を今、正に彼女達は味わっていた。女性と言うだけで不利益を被る世界。

「い、痛い!!? 痛いッ!!? どうして、私達が、何をした、って!!? い、う、の、お!!?」

遂には咯血しながら痛みを訴える。しかし、その声を上げた生徒から更なる暴行が加えられる。

「何も分からないか? ならば特別に教えてやろう。その記憶する能力すらなく貴様らには勿体無い脳に刻むが良い。貴様らがこの世界を創ったのだ。女尊男卑を信奉しI Sを蔓延させ、夥しい数の人間が死に絶えた。壊したのならば治すのが当然の責務だ」

理解出来なかった。I Sが人類に叛旗を翻したのは聞いていたが自分達がこの世界を創ったとはどう言う意味なのか。だが、その前に腹を蹴られて転がされる。慢性的に痛みが生じており、血も流れて行く。

「おい、遊びは此処までだ。A I S共は無能で無知、家畜にも劣る存在だ。先方を待たせている為に速やかに終わらせろ」

——お、終わった……？ それにA I Sって、何……？

その声で暴行は一先ず止まった。しかし、立て続けに殴られ蹴られた為に皆、満身創痍と言った風体であった。I Sが無ければ生身の生娘。暴力に晒されれば、痛みに耐え切れない。

男性達を取り出したのは如何にもな拘束具の数々だった。

「ツ……？」

それを見た数人の生徒は傷付いた身体を引き摺って逃亡を図るが足蹴にされて押さえられ、その他の者達も同様に拘束具で身体を拘束されて行く。

「立て！！？ 貴様ら、A I Sが地面に横になる事すら認められていない！！？ 立てないならば射殺する」

——これ、かなりキツイんだけど……？ ちよ、立つ、立つから！！？

全員、仲良く上半身を拘束され鎖で繋がれた状態で立たされる。だが、1人だけ立ち上がる気力も体力も無いのか立ち上がれない。

「……言葉も理解出来ないA I Sは不要だ。殺せ」

その言葉と共に銃火器を構えた男性達が倒れた生徒に向けて銃口を向けた直後、蜂の巣にした。

「ツ……！！？」

赤ん坊が泣き叫ぶような悲鳴が響いた後、その生徒は死んだ。

中にI Sスーツを着ている事は知られていたのか腕や脚と言った致命傷以外を撃たれて苦痛が長引かされた後、頭を一斉に撃ち抜かれて死んだ。このメンバー最初の死者だった。

「後で家畜型A I Sの餌にしておけ。A I S共はA I Sの他のパーツで修理出来る。何も問題は無い」

死んだ生徒を別の男性が持って来た折り畳み式コンテナの中に無造作に放り込んだ後、運ばれて行く光景をむぎむぎと見せ付けられた。

——ひ、人がモノみたい……！！？ 何これ、狂ってる……！！？

荒廃した世界と言えど、ある程度のモラルはあると楽観視していた。人々が集まっても秩序は存在していると。だが、蓋を開ければ

このザマだ。少なくとも東京コミュニティは自分達を歓迎していない……まるで捕虜や罪人みたいな扱いだと、今更ながら理解した。「連行しろ」

○

「以上、リムドロップ8名の売却手続は滞りなく完了。……1名は梱包作業中に死亡しました」

その後、管制塔から『A I Sの捕獲完了』との通信が届いた後に売却金と発注品の受け取りをする為に紫本人がエストレヤを降りた先で担当職員と面会していた。

「そうか。件の発注した備品の代金はそのまま、リムドロップ売却金から天引きして頂けただろうか」

「はい。問題ありません。差し引き金額と製品を譲渡致します」

職員はそう言い、足元に置かれている備品入りのコンテナを紫へと受け渡した。

「確かに。エストレヤが受領した」

「はい、此方も売却されたA I Sを確かに受け取りました。不備があれば現物と共にご連絡下さい」

「ああ。……早々、不備が無いと思うがね」

「話が変わりますが、この後の予定はお有りでしょうか？」

「む。ああ、我々エストレヤも漸く使い物になるA I Sを確保したからな……。新たな業務を立ち上げようと考えている。

東京コミュニティは各所のコミュニティから多数の情報が集まるからな……。情報収集も兼ねて暫し滞在する予定だ」

「成程……。中央政府としても戦力は多いに越した事はありません。

……後、少々耳に入れて置きたい事が1つ」

「ん？ 何かあるのか？」

「東京コミユニティでは近々、大規模作戦が行われる兆しがあります。ですので有事に備えて東京コミユニティへ入場されるオーナー以上の者は肉盾としてA I Sを2名、随伴させるように通達されています」

「……初耳なんだが？」

「大規模作戦に関しては正式に発表された訳ではありません。ですが、随伴の件は昨日発表されています」

何が起ころるか分からないからこそ、保険は必要と言う訳である。

「……その、大規模作戦はまだ確信を持っていないと言う事か」

—— エストレヤの名を上げれば情報を得る機会も増える。そうすれば、オトゥール嬢の求める情報も、俺の計画も前進する。

「はい。空振りに終わるかも知れませんが、一応……気に留めておいてください」

「分かった、情報提供に感謝する」

職員と別れた後、備品を受け取り紫はエストレヤへと帰投した。本音を言えば1人で行動する予定だったのだが、仕方ない……。